

山梨県笛吹市

# 車地蔵遺跡・石動遺跡 北中原遺跡・中新居遺跡

一宮町末木地区畑総事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

山梨県峡東農務事務所  
笛吹市教育委員会

# 序

笛吹市は、平成16年10月に石和町・御坂町・一宮町・八代町・境川村の合併によって誕生し、さらに平成18年8月に芦川村が編入合併して現在に至ります。当市は、豊かな自然と歴史・文化の息づくまちです。数多くの埋蔵文化財包蔵地が所在する本市では、国指定史跡甲斐国分寺跡・国分尼寺跡をはじめとする遺跡が約730箇所も存在します。遺跡・社寺・古民家建造物、天然記念物等の保護・保存に誠心誠意努めております。

このたび刊行の運びとなりました本書は、山梨県営担い手育成畑地帯総合整備事業一宮末木地区支線道路改良工事に伴って実施した、一宮町内に所在する車地藏遺跡・石動遺跡・北中原遺跡・中新居遺跡発掘調査の成果を記したものです。平成9年から12年にかけて旧一宮町教育委員会、平成17年に笛吹市教育委員会が発掘調査を実施しました。

調査の結果、奈良から平安時代にかけての住居跡をはじめ、土坑墓、溝、鋳造関連遺構等を発見しました。なかでも古代から中世にかけての鋳造関連遺構の発見は、県内初の事例であり、廃棄された鉄鍋鋳型などが多量に出土しました。国分寺周辺域の生業と鋳物師集団の動向の一端を示す貴重なものでもあります。

調査終了後は他の市内遺跡発掘調査との調整を図りつつ、報告書作成のための整理作業を順次進めて参りました。調査実施から10年という歳月を経ましたが、本書が笛吹市ひいては山梨県の歴史研究の一助となれば幸いです。

末筆となりましたが、発掘調査から報告書刊行までご指導・ご鞭撻をいただきました関係諸機関・関係各位に、厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

笛吹市教育委員会  
教育長 山田 武人

## 例 言

1. 本書は、山梨県笛吹市・宮町末木地内に所在する、車池蔵遺跡・石動遺跡・北中原遺跡・中新館に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、山梨県宮町いずみ成塚地帯総合整備事業・宮町末木地区支線道路3・4・6・9・13・14号改良工事に伴うもので、宮町教育委員会及び笛吹市教育委員会が山梨県成東農務事務所からの委託を受けて実施した。調査年月はすべて事業者負担によるものである。
3. 発掘調査は1997～2000、2005年に実施した。調査体制は「第1章1. 調査に平る経緯・調査経過」で示した。
4. 整理・報告書作成は平成10・12・14・18・19年度に実施した。本書に係る出土遺物及び記録類は、笛吹市教育委員会で保管している。
5. 本書の執筆は、瀬田正剛、野崎進、望月秀和が分担し、各報告文末に担当を明記した。編集は、望月がおこなった。なお、附編1の金属分析はJFEテクノリサーチ株式会社に、附編2・3の植物遺体及び骨の同定・分析は中山誠二氏・植月学氏(山梨県立博物館)に寄稿して頂いた。
6. 本書に使用した地図は、宮町役場発行の都市計画基本図、国土地理院発行「石和、1/200,000を加工・加筆して作成した。
7. 出土した金属製品の保存処理は、(財)帝京大学山梨文化財研究所に委託した。
8. 発掘調査及び報告書作成にあたり、以下の方々・機関からご教示、ご高配を賜った。記して厚く感謝申し上げる所である。

穴澤義功・白川洋文・今福利志・佐野俊明・岡野秀典・齊名貴彦・小野正文・藤原功一  
坂本美夫・佐々木謙・末木 健・鈴木 稔・谷口一夫・長沢宏昌・中山誠二・新津 健  
畑 大介・林 郎 光・平江 南・平野 修・保坂康夫・宮沢公雄・室伏 徹・森原明廣  
八巻与志夫・山下孝司

(財)帝京大学山梨文化財研究所 山梨県教育委員会学術文化財課 山梨県埋蔵文化財センター  
山梨県立考古博物館 山梨県立博物館

## 凡 例

1. 本書中の遺構・調査坑等の表記については、以下の通りである。  
SI 住居跡 SK - 土坑 SD - 溝 SX - 不明遺構 Pit ビット Tr - トレンチ  
S - 石 K - 掘乱
2. 遺構・遺物図版の縮尺は、原則下記の通りだが、各図版中に示したスケールを参照されたい。  
遺構 住居跡 1/60 カマド 1/30 土坑・Pit 1/40 溝 1/60・1/80  
遺物 1/4(小形品は1/3・1/2・原寸)
3. 遺構図中の方位は、国家座標(日本地系)を示し、標高は海拔高で表している。
4. 遺構番号及びトレンチ名は、原則調査時に付したものをそのまま使用しており、調査や整理時の検討で欠番とした。
5. 調査時の情報欠落により、一部不備点があるがそのまま掲載している。
6. 本書における時期については、『山梨県史資料編2 原始・古代』と森原明廣1994「山梨県地域における古代末期の土器探検」(『丘壘』第14号)掲載の編年から比定した。
7. 石材については『標準原色図鑑全集6 岩石鉱物』保育社を参照した。
8. 本書の図版中に示したトーン・網等、土層及び遺物観察表の表記については、以下の通り。

### 遺物図版

黒・黒変：やや薄い黒塗り 施輪ライン：一点破線 擦痕(転圧等)範囲：破線

### <新画>

須臾器：ベタ塗り 陶器(灰釉・綠釉等)：濃い網目 磁器(青磁・染付等)：薄い点線

#### 土層観察表

締まり

◎：非常に締まりあり ○：締まりあり △：やや締まりにかける

亞人物

◎：多量に含む ○含む △：少量含む □：微量含む

#### 遺物観察表（胎上表記）

赤：赤色粒子（スコリア等） 白：白色粒子（長石・石英等） 黒：黒色粒子（角閃石等） 金：金雲母

# 目次

序	
例言	
凡例	
目次	
<b>第一章 調査の概要</b>	
1. 調査に至る経緯と調査経過	1
2. 地理的環境と周辺の道跡	3
3. グリッドの設定と座標	9
<b>第二章 車地蔵道跡支線6号地(1997年度調査)</b>	
1. 調査概要	11
2. 調査トレンチ	11
3. 発見した遺構・遺物	45
4. まとめ	48
<b>第三章 石動遺跡支線4・6・9号地区 北中原道跡(第3次) [1998年度調査]</b>	
I. 1998年度調査について	49
II. 支線4号地区調査(石動遺跡)	50
1. 調査トレンチ	50
2. 発見した遺構・遺物	50
III. 支線6号地区調査(石動遺跡)	58
1. 調査トレンチ	58
2. 発見した遺構・遺物	61
IV. 支線9号地区調査(石動・北中原道跡)	79
1. 調査トレンチ	79
2. 発見した遺構・遺物	83
V. まとめ	118
<b>第四章 石動遺跡支線3号地区(1999年度調査)</b>	
1. 調査概要	119
2. 調査トレンチ	119
3. 発見した遺構・遺物	123
4. まとめ	148
<b>第五章 石動・中新居遺跡支線13号地区(2000年度調査)</b>	
1. 調査概要	159
2. 調査トレンチ	159
3. 発見した遺構・遺物	162
4. まとめ	172
<b>第六章 北中原道跡(第4次)支線14号地区 [2005年度調査]</b>	
1. 2005年度調査について	183
2. 基本層序	183
3. 道構	183
4. 遺物	186
<b>附編</b>	
附編1 笛吹市・宮畑総木木地区(北中原道跡) 金属分析調査	228
附編2 笛吹市石動遺跡出土の動物遺体 について	243
附編3 北中原道跡(第4次)出土の植物遺体 について	247
附編4 石動遺跡南西農業地区発掘調査報告	252
報告書抄録	

奥付

# 挿図目次

第1図 道跡位置図	2
第2図 道路建設範囲図	3
第3図 末木地区周辺字名図	6
第4図 周辺道跡図	8
第5図 調査地区グリッド範囲図	9
<b>車地蔵道跡支線6号地区 [1997年度調査]</b>	
第6図 グリッド図及びトレンチ位置図	11
第7図 遺構位置図(1)	12
第8図 遺構位置図(2)	13
第9図 SI1	16
第10図 SI2	17
第11図 SI3・SI4(1)	18
第12図 SI3・SI4(2)	19
第13図 SI5(1)	20
第14図 SI5(2)	21
第15図 SI6・SI8	23
第16図 SI9(1)	25
第17図 SI9(2)・SI10	26
第18図 SK1～3	27
第19図 SK4	29
第20図 SK5～8	30
第21図 道路状道構、SK1・2	31
第22図 遺構外遺物	32
第23図 上製品・金属製品・瓦・石製品	33
<b>石動遺跡・北中原道跡 [1998年度調査]</b>	
第24図 トレンチ位置図	49
(支線4号地区)	
第25図 調査区・遺構実測図	51
第26図 出土遺物(1)	52
第27図 出土遺物(2)	53
(支線6号地区)	
第28図 遺構位置図(1)	59
第29図 遺構位置図(2)	60
第30図 SI1(1)・2	62
第31図 SI1(2)	63
第32図 SI3・4	65
第33図 SI5・6	66
第34図 SI7	67
第35図 SD1・3	69
第36図 SD2・SD4、1号石列	70
第37図 SD2～3・遺構外、出土遺物	71
(支線9号地区)	
第38図 遺構位置図(1)	80
第39図 遺構位置図(2)	81
第40図 SI1・2(1)	84
第41図 SI2(2)	85
第42図 SI3・SK4、SI4(1)	87
第43図 SI4(2)、SI5	88
第44図 SI6・7	89
第45図 SK1～3・6、Pit、道路状道構	90
第46図 1～3号瓦石	92

第47回	鋳造関連遺構(1).....	93
第48回	鋳造関連遺構(2).....	94
第49回	鋳造関連遺構(3).....	95
第50回	鋳造関連遺構(4).....	96
第51回	鋳造関連遺構(5).....	97
第52回	鋳造関連遺構(6).....	98
第53回	鋳造関連遺構(7).....	99
第54回	鋳造関連遺構(8).....	100
第55回	SD1~3.....	102
第56回	遺構外遺物.....	103
第57回	金属製品・瓦.....	104
第58回	石製品.....	105

石動遺跡支線3号地区〔1999年度調査〕

第59回	トレンチ配置図.....	119
第60回	遺構位置図(1).....	121
第61回	遺構位置図(2).....	122
第62回	SI1・2.....	124
第63回	SI3(1).....	125
第64回	SI4(1)・SK5.....	126
第65回	SI3(2)・SI4(2).....	127
第66回	SI5・6.....	128
第67回	SI7.....	130
第68回	SK2(配管埋葬土壌).....	131
第69回	SK3、3号集石.....	132
第70回	SK4・6~8、Pit.....	134
第71回	1・2号集石.....	135
第72回	4号集石.....	136
第73回	SD6、5~7号集石.....	138
第74回	8号集石(土坑蓋).....	139
第75回	9・12号集石、SD(1).....	141
第76回	SK1、SD2~4.....	142
第77回	SD3、Pit、遺構外(1).....	143
第78回	遺構外(2).....	144
第79回	金属製品・石製品.....	145

石動遺跡・中新居遺跡支線13号地区〔2000年度調査〕

第80回	トレンチ配置図.....	159
第81回	遺構位置図(1).....	160
第82回	遺構位置図(2).....	161
第83回	SI1~3、SD1・2.....	164
第84回	SI4・SD11、SI5.....	165
第85回	SI4(2).....	166
第86回	SI6(1)、SD3.....	167
第87回	SI6(2).....	168
第88回	SK1・埋裏・1~3号集石.....	170
第89回	4~6号集石.....	171
第90回	SD4~8.....	173
第91回	SD1(2)、遺構外、縄文土器、 上製品、金属製品.....	174

北中原遺跡〔第4次〕〔2005年調査〕

第92回	基本層序.....	183
第93回	第4次調査の調査区と遺構分布図 .....	195
第94回	SI1、SK3~5実測図.....	196

第95回	SI1カマド実測図.....	197
第96回	SI2実測図、同カマド実測図.....	198
第97回	SI2個体別分布図.....	199
第98回	SI3実測図、同カマド実測図.....	200
第99回	SI3個体別分布図.....	201
第100回	SI4実測図.....	202
第101回	SI5、P14実測図、瓦個体別分布図① .....	203
第102回	SI5個体別分布図②.....	204
第103回	SI5カマド実測図.....	205
第104回	SK6、SK10~13実測図、同カマド実測図.....	206
第105回	SI6個体別分布図.....	207
第106回	SI7、SK14~24実測図.....	208
第107回	SI7カマド実測図.....	209
第108回	SD1、SK2、P1~3実測図.....	210
第109回	地下式坑実測図.....	211
第110回	抜根板、SK5・6、P4~7実測図 .....	212
第111回	土器(1)SI1・2①.....	213
第112回	土器(2)SI2②・3①.....	214
第113回	土器(3)SI3②・4.....	215
第114回	土器(4)SI5①.....	216
第115回	土器(5)SI5②・6①.....	217
第116回	土器(6)SI6②・7①.....	218
第117回	土器(7)SI7②、SD1、SK、 遺構外①.....	219
第118回	上製品遺構外②、瓦、土製品.....	220
第119回	石製品.....	221

〔附編4〕石動遺跡南西副業地区

第1回	調査区位置図.....	252
第2回	トレンチ位置図.....	252
第3回	遺構位置図.....	252
第2回	SI1・2・3.....	254
第3回	SK・Pitおよび遺構外.....	255

表目次

表1	周辺遺跡一覧.....	7
車地蔵遺跡支線6号地区〔1997年度調査〕		
表2	トレンチ一覧.....	34
表3	遺構一覧.....	34
表4	遺物観察表.....	34
表6	土器品観察表.....	38
表7	金属製品観察表.....	38
表8	瓦観察表.....	38
表9	石製品観察表.....	38

石動遺跡・北中原遺跡〔1998年度調査〕

(支線4号地区)		
表10	辺物観察表.....	54
表11	瓦観察表.....	54
(支線6号地区)		
表12	トレンチ一覧.....	68
表13	遺構一覧.....	68
表14	遺物観察表.....	72
表15	金属製品観察表.....	73

表 16	瓦観察表	73
〔支線 9 号地区〕		
表 17	トレンチャー一覧	82
表 18	遺構一覧	82
表 19	築造関連遺物観察表	101
表 20	遺物観察表	106
表 21	土製品観察表	108
表 22	金属製品観察表	108
表 23	瓦観察表	108
表 24	石製品観察表	108
石動遺跡支線 3 号地区〔1999 年度調査〕		
表 25	トレンチャー一覧	140
表 26	遺構一覧	140
表 27	遺物観察表	146
表 28	土製品観察表	147
表 29	金属製品観察表	147
表 30	石製品観察表	147
石動・中新居遺跡支線 13 号地区〔2000 年度調査〕		
表 31	トレンチャー一覧	162
表 32	遺構一覧	162
表 33	遺物観察表	175
表 34	縄文土器観察表	176
表 35	土製品観察表	176
表 36	金属製品観察表	176
北中原遺跡〔第 4 次〕〔2005 年調査〕		
表 37	土坑一覧	187
表 38	ピット一覧	187
表 39	遺物観察表	187
表 40	縄文土器観察表	194
表 41	瓦観察表	194
〔附編 4〕石動遺跡南西興業地区		
表 1	土器観察表	256
表 2	金属製品観察表	256
<b>写真目次</b>		
車地費遺跡支線 6 号地区〔1997 年度調査〕		
PL1 ~ PL9		39 ~ 47
石動遺跡・北中原遺跡〔1998 年度調査〕		
PL10 ~ PL12	〔支線 4 号地区〕	55 ~ 57
PL13 ~ PL17	〔支線 6 号地区〕	74 ~ 98
PL18 ~ PL26	〔支線 9 号地区〕	108 ~ 117
石動遺跡支線 3 号地区〔1999 年度調査〕		
PL27 ~ PL36		148 ~ 158
石動・中新居遺跡支線 13 号地区〔2000 年度調査〕		
PL37 ~ PL42		177 ~ 182
北中原遺跡〔第 4 次〕〔2005 年調査〕		
PL43 ~ PL49		220 ~ 226

## 第一章 調査の経緯と地理的・歴史的環境

### 1. 調査に至る経緯と調査経過

平成8年度、畑地帯総合整備事業（担い手育成型）一宮末木地区が新規採択された。

本地区は、モモ・ブドウ等を中心とした果樹地帯であり、盛んに果樹の栽培が行われているが、農業従事者の高齢化、輸入自由化等の影響により、将来の農業経営に不安が抱かれていた。中核農家は十分な農地面積を有しておらず、経営は不安定な状況であった。

本事業は農道及び農業用排水路を改良・新設し、経営規模の拡大や生産性を向上させることによって、計画的な栽培による経営の安定化・合理化と作物の品質向上を図ることを目的とした。

事業は平成19年3月まで行われ、改良・新設された農道は6533m（延長）、排水路3543m（同）、受益面積は116haとなった。

事業開始にあたって、文化財保護法による通知が必要であることを回答した。

この結果を踏まえ、事業者と教育委員会とで協議を行い、包蔵地に該当する農道・排水路については工事着手前に法による通知を行い、工事により包蔵地に影響が出る場合は教育委員会が主体となって記録保存のための発掘調査を行うことになった。

年度ごとの調査経過は以下のとおりである。

・平成9年度 支線6号道路地区の北半分を対象として平地蔵遺跡の発掘調査を行った。

調査期間 平成10年1月19日～3月16日

・平成10年度 支線6号道路の南半分と支線4・9号道路を対象として石動遺跡・北中原遺跡の発掘調査を行った。

調査期間 平成10年8月25日～平成11年3月13日

・平成11年度 支線3号道路を対象として石動遺跡の発掘調査を行った。

調査期間 平成11年11月15日～平成12年1月19日

・平成12年度 支線13号道路を対象として石動遺跡・中新居遺跡の発掘調査を行った。

調査期間 平成12年10月17日～12月26日

・平成13年度 排水路3号が雨宮氏屋敷跡に該当し、工事立会いを行った。

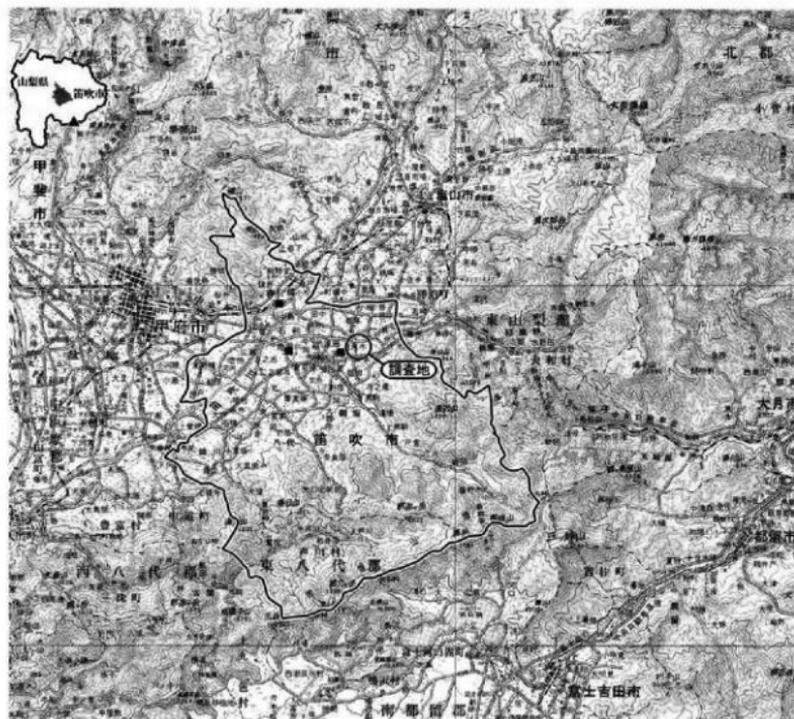
・平成14年度 排水路2号が国分寺南遺跡に該当し、工事立会いを行った。

・平成16年度 支線14号道路を対象として北中原遺跡の発掘調査を行った。

調査期間 平成17年1月17日～4月27日

・平成17年度 支線12号道路が薬師堂遺跡に該当し、試掘調査を行ったが、遺構・遺物は発見されなかった。

（瀬田）



(S=1/500,000 国土地理院発行20万分の1を加工・加筆)

第1図 笛吹市位置図

〈調査体制〉 北中原遺跡 第4次調査

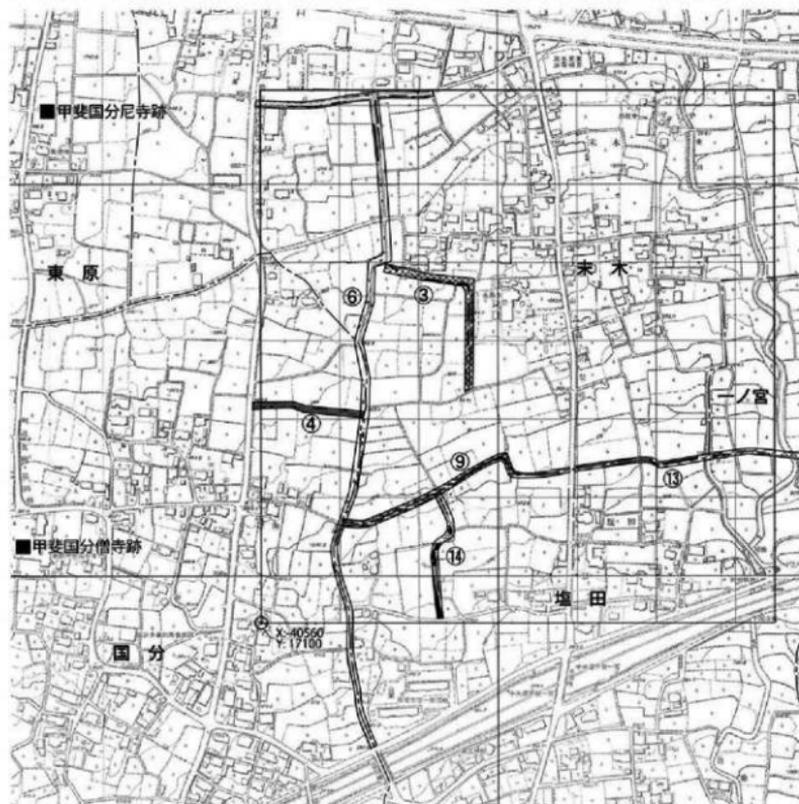
調査担当	野崎 進		
調査員	津田 元栄		
調査作業員	久保田明義	古屋製駿夫	山口英雄
整理作業員	雨宮 ゆり	大久保房子	宮川菊江

## 2. 地理的環境と周辺の遺跡

## (1) 地理的環境

**笛吹市の地理** 今回報告する車地藏遺跡・石動遺跡・北中原遺跡・中新居遺跡は、山梨県笛吹市一宮町末木字車地藏、字石動、字北中原、字中新居（以下、末木地区）に所在する。山梨県のほぼ中央に位置する笛吹市は、平成16年10月12日に、笛吹川流域の6町村（東八代郡石和町・御坂町・一宮町・八代町・境川村、東山梨郡春日居町）の合併により発足した。平成18年8月1日には、東八代郡芦川村が編入し、総面積201.92km<sup>2</sup>（山梨県の面積の約4.5%）、標高は256m（石和町井戸周辺）～1,793m（御坂黒岳）を測るに至った。

本市は、甲府盆地の東端に位置する。北方の秩父山地と大菩薩嶺、南東の御坂山塊へと連なる急峻な丘陵山岳地帯と、河川によって形成された扇状地帯および沖積平地帯から構成されている。地形としては西方の盆地低部へ向けて広がりを見せており、市域における標高の最高値は黒岳（御坂黒岳）で



第2図 道路建設範囲(支線位置)図

1,793m、最低値は笛吹川流域の沖積平地部（石和町井戸周辺）で約256mを測る。本市における平成18年の土地利用状況は、宅地14.9km<sup>2</sup>（7.4%）、農用地41.6km<sup>2</sup>（20.6%）、森林等118.1km<sup>2</sup>（58.5%）であり、約2割を占める農用地の大半は、盆地特有の扇状地帯に広がる桃・ブドウを中心とした果樹畑である。本市では昭和30年代頃から扇状地に適した果樹栽培が広まり、今日に至っては国内有数の一大果樹生産地帯となった。また、春には桃の花で彩られ、観光スポットとしても生産出荷量に劣らず注目を浴び、賑わいをみせている。

市名の由来となった笛吹川の本流は、秩父山地より発する延長46.5km、流域面積1,040km<sup>2</sup>を測る。本市域を西流した後は、盆地南辺を流れて南巨摩郡鵜沢町で釜無川と合流し、富士川となって最後は駿河湾へ注いでいる。境川・鼓川・兄川・重川・日川・金川など複数の支流があり、本市域を特徴づける扇状地形の形成要因となっている。

なお、扇状地上には多数の遺跡が存在し、特に古代には国分二寺、国府、国衙といった甲斐国の中核機関が置かれ、その周辺は遺構・遺物が極めて濃密に分布する。県内有数の数を誇る埋蔵文化財包蔵地をもつ市として周知されている。さらに笛吹川流域の扇状地扇端部、沖積地では、発掘調査によって微高地の掘削や谷部の埋め立てた痕跡、表層条里と看取できる条里型土地区画が認められる。金川以西では、永井・増田条里（八代町）・埋没条里（御坂町）等があり、金川以东には、坪井条里・中尾条里・金田本塚条里などが表層条里として認識されている。国府（春日厨町）や国分二寺周辺においても条里型土地区画がみられ、国分二寺周辺の方形区画は、南北軸の傾きが国分二寺の主軸と一致していることから、計画的に配置されたことがうかがえる。調査遺跡周辺では、御手洗川右岸の亀沢遺跡及び今宮遺跡で水田跡を検出しており、調査成果等から、これら条里の施工時期は9世紀前半と推定される。しかしながら、河川の氾濫は土地の形成要因である一方、発掘調査で明らかとなった居住域の盛衰や耕地の消滅・開墾など、この地での生活に多大な影響を及ぼした要因の一つでもある。

**調査遺跡周辺の地理** 笛吹川以南の一带は、金川・大石川・京戸川・日川等によって形成された重畳扇状地帯となっている。笛吹市一宮町字末木地区（以下、末木地区）は、この重畳扇状地帯のなかでも最大規模である金川扇状地扇央部に位置し、標高は約290～500m、北西方向に下る比較的緩やかな傾斜地に集落が展開している。末木地区は金川右岸にあたるものの、流路からは約800～900mほど離れているため、農業用水としては旭山山麓から発し、黒駒から金川の水を引く高渠が注いでいる出垂川が利用されてきている。出垂川は、末木地区の東端を流れ、一宮宮・神沢地区とのほぼ境を成し、古くから用水として利用されてきた河川である。利水によるものなのか、この流路は人為的に変移させた可能性が窺え、現在も慈眼寺（一宮町末木336所在）や、御手洗川へ合流する手前の車居遺跡第1・2次調査地点（笛吹市2006）の付近で特異的に流曲した地形がみられる。また、「多々禮川」と称され、タタラに由来すると指摘されており、今回報告する石動遺跡から出土した鉄滓・製鉄炉壁・鋳型など鋳造に関連した遺物は、その傍証となっている。

本地区の西には、国分二寺が置かれた国分・東原地区、北には御手洗川の

以南を境にして木都塚・北都塚地区、東には先述の通り一ノ宮・神沢地区、南には支線9号線・13号線あたりを境にして塩田地区と隣接している（第2図参照）。

## （2）歴史的環境

『倭名類聚抄』の記載では、古代の山梨（甲斐国）は4郡（巨摩郡・山梨郡・八代郡・都瑠郡）に分けられており、木市域は八代郡及び山梨郡比定地にあたり、末木地区は山梨郡林部郷に含まれるとされている。

**甲斐国分二寺と周辺遺跡** 末木地区は、末木遺跡（国道20号線建設工事に伴う調査）において、県内で最も早い時期にあたる1970年代から発掘調査が行われている地域である。前述の通り、甲斐国分二寺が造営された国分・東原地区に隣接している。二寺周辺一帯では、座標軸より5度余り東偏する一定の方面地割が認められ、本地区もその地割内に位置している。今回調査した遺跡は、甲斐国分二寺の創建期にあわせて出現する集落遺跡で、二寺の造営・維持に関連して出現した新興集落地として「国分寺集落」または「国分寺間遺跡群」と呼称されている。なお、周辺地域一帯は遺構・遺物が濃密に分布するため、遺跡分布範囲（第3図）は、字名や寺院地範囲等で区切っている。以下、国分二寺の盛衰とあわせ、調査遺跡および周辺遺跡の様相についてふれておきたい。

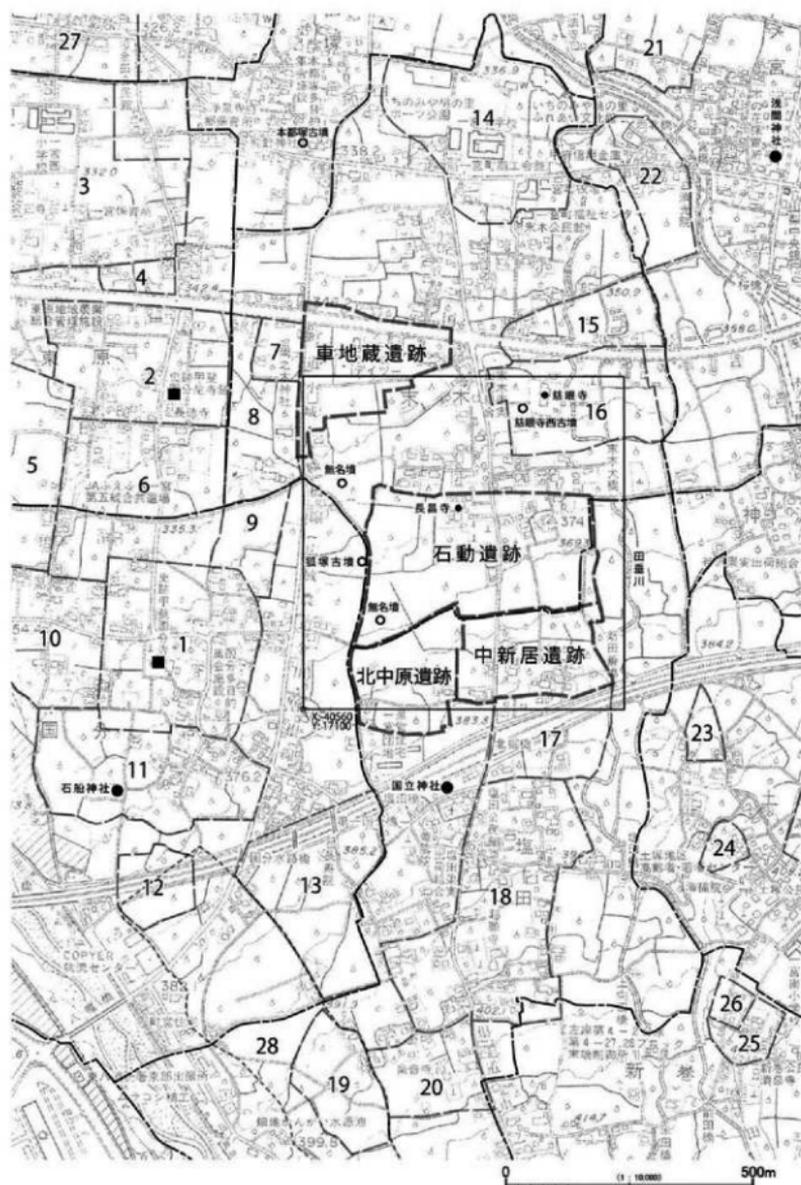
二寺創建以前 遺構は希薄、もしくは明確に確認できていないが、国分寺周辺において、縄文時代中期頃の土器片、土偶などが出土している。弥生時代になると、筑前原遺跡で住居跡を検出しているほか、塩田地区では塩田の壺と称されている前期の遺物がされている。松原遺跡・金山遺跡等で古墳時代前期段階の集落が確認されている。古墳時代後期には笛吹川以南の地域で、金川や京戸川の流域において小規模古墳が集中し、末木地区周辺では国分古墳群が形成されている。しかしながら、古墳時代中期以降の二寺周辺域において、創建時まで遺構・遺物がほとんど確認できない空白地帯となっており、聖武天皇の詔通り、在地の人々の迷惑にならない土地選定が実施されたことが窺える。

創建期（奈良時代）平安時代は、古代甲斐国の中心地域の様相を示す濃密な遺構・遺物の分布が窺えるものの、遺構としては、廃材の活用、もしくは国分寺廃退の表れなのか、カマドの構築材として瓦を転用する事例が多く確認されている。10世紀後半～11世紀頃までは、住居使用期間については明確ではないが、遺構数については最盛となり、広範囲で遺構・遺物が分布する。以降、国分寺集落は居住域としては衰退傾向となるが、西田町遺跡、大原遺跡などでは中世にいたるまで系統的な変遷がみられる。

**古代の交通路** 甲斐路ルート上の黒駒付近（笛吹市御坂町）から、国分二寺付近を通り鞍掛遺跡の西方を北上する道は、富士山と金峰山を結ぶ修験者の通用道路であることから道者街道と呼ばれ、山岳信仰の盛行に伴い、重要度を増したと思われる。

古代において本遺跡付近は、山梨郡の東部、林部郷（一宮町東原付近）に属していたと推定されている。さらに、塩田には飛鳥時代創建と言われる染音寺や、橋立には甲斐国の惣社とも言われる甲斐奈神社が残る。

中世には、当地域は一宮庄に属していたと推定される。一宮庄は、末木にある長昌寺所蔵の大般若經の奥書で、明応5年（1497）書写のものに「山梨



第3図 遺跡の位置および周辺遺跡分布図

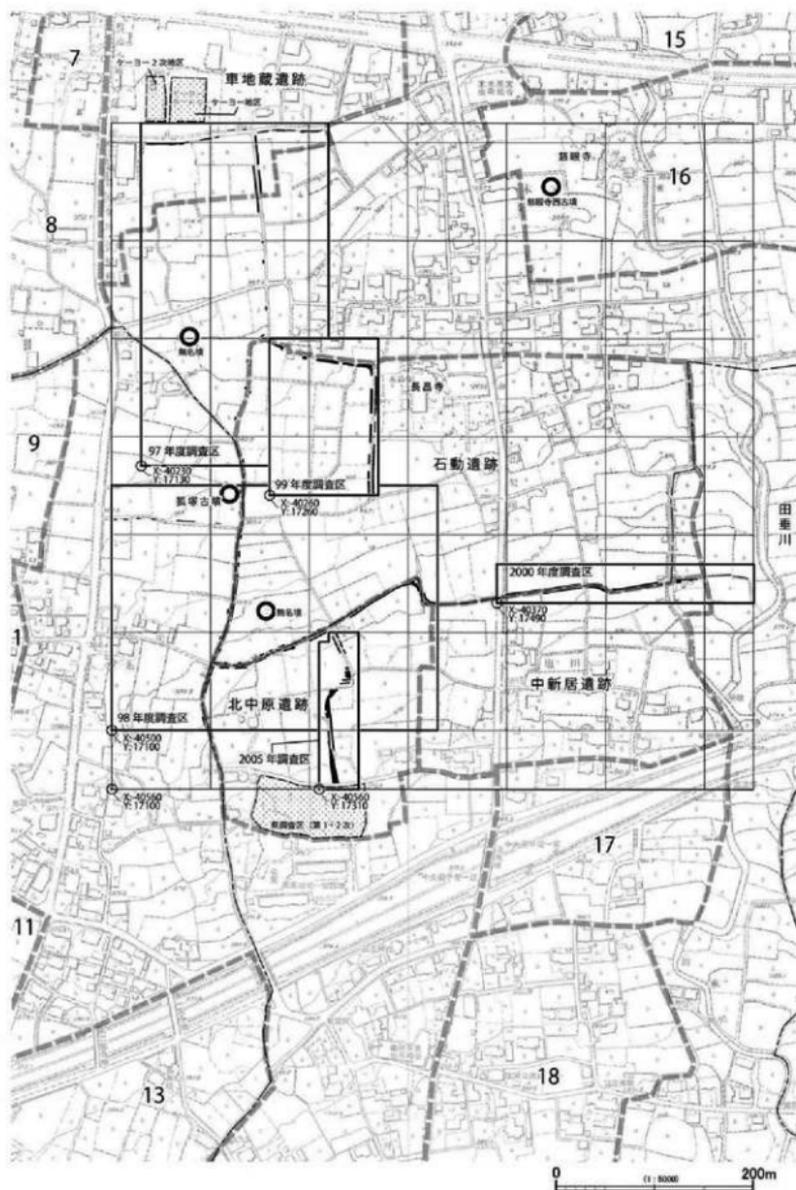
第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時代
1	甲斐国分寺跡	奈良・平安・中世
2	甲斐国分尼寺跡	奈良・平安・中世
3	筑前原遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
4	甲斐国分尼寺跡北遺跡	奈良・平安・中世
5	矢倉遺跡	古墳・奈良・平安・中世
6	松原遺跡	古墳・奈良・平安・中世
7	虎ノ木神社遺跡	奈良・平安
8	庵ノ木遺跡	古墳・奈良・平安・中世
9	倉山遺跡	古墳・奈良・平安・中世
10	国分寺内遺跡	縄文・奈良・平安
11	国分寺南遺跡	縄文・奈良・平安・近世
12	豆塚遺跡	縄文・古墳・平安
13	宮木地蔵遺跡	縄文・古墳・奈良・平安・中世
14	飯杖遺跡	弥生・古墳・奈良・平安
15	藤原寺北遺跡	古墳・平安
16	薬師寺遺跡	奈良・平安・中世
17	北塚遺跡	縄文・古墳・奈良・平安
18	天神原遺跡	弥生・奈良・平安
19	木地蔵遺跡	縄文・古墳・奈良・平安・中世
20	茶臼寺遺跡	縄文・奈良・平安・中世
21	今宮遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世
22	東屋遺跡	古墳・奈良・平安・中世
23	天神堂遺跡	縄文・奈良・平安
24	古厩氏塚	中世
25	新巻屋敷	中世
26	新巻本村遺跡	中世
27	筑前北遺跡	弥生・奈良・平安
28	国分古墳群	古墳

郡一宮庄牟木村瑞光山長円禪寺」（牟木は木木の当て字）とあるのが初見である。尚、当地域が山梨郡から八代郡になるのは、慶長年間以降とする説もある。

甲斐国一宮とされる浅間神社は、貞観6（864）年の富士山の噴火を契機に摂社である山内神社（伝垂仁天皇8年建立）から遷宮されたと言われている。この浅間神社の祭祀で最も重要な神事が「御幸祭」である。二宮美和神社（笛吹市御坂町）、三宮玉清神社（甲府市）の三社合同で行われる夏・冬2回の公祭で、現在も「おみゆきさん」と呼称され受け継がれている。「御幸祭」が初めておこなわれたのは、諸国一宮制の成立時期である11世紀までさかのぼると考えられている。御幸祭が通る道が「御幸道（みゆきみち）」と呼ばれ（一宮とも言う）、かつては浅間神社から国分尼寺付近を通り、そのまま西側の金川に向かったと言われている。尚、この一帯はしばしば洪水に見舞われた地域である。明治40年8月の水害では京戸川と大石川の合流地点から下流（御手洗川沿岸）で大規模な氾濫が生じた。その状況を伝える「一宮町誌」に掲載された浅間神社罹災状況写真からは、惨状とともにこの地域における土地様相の変容を窺うことができる。

本市域は、かつて国分二寺、国府、国衙といった甲斐国の中枢機関が置かれ、さらには国中（甲府盆地地域）と郡内（大月・都留・富士五湖地域）、及び官道（東海道）を結ぶルートが通る要衝地であり、古代甲斐国の中心地域であったことは推測できよう。しかしながら、今日に至るまでの環境変化の影響か、未だ国分二寺以外の明確な官衙遺構、御坂山地から盆地へ降りてきた後の道路遺構の確認ができていない。複雑な環境変化が認められる本市域ではあるものの、郡・官衙・寺院を繋いでいた古代ルートの発見は、国府・



第4図 調査区範囲図

国衙の位置、遺構の発見につながる可能性があることから、古代甲斐国の研究及び今後の市内遺跡調査の課題のひとつとなっている。

### 3. グリッドの設定と座標

旧一宮町では、甲斐国分寺・尼寺の周辺の調査に対応するため、国家座標値を基にグリッドを設定している。基本的に一宮町内における調査記録は国家座標(旧日本測地系)上で行ってきた。2000年より、世界測地系(日本測地系2000)で表示するようになったが、甲斐国分二寺周辺はまだ世界測地系に対応していない。また、本書掲載の調査記録についても、調査時には旧測地系でグリッドを設定したことや、国分二寺周辺調査との整合性を保つことを考慮し、旧測地系のまま報告した。なお、調査区はすべて国家座標に準じてグリッドを設定しているものの、グリッドの名称は調査単位で任意に付していることをご留意いただきたい。(望月)



第5図 調査グリッド図

参考文献

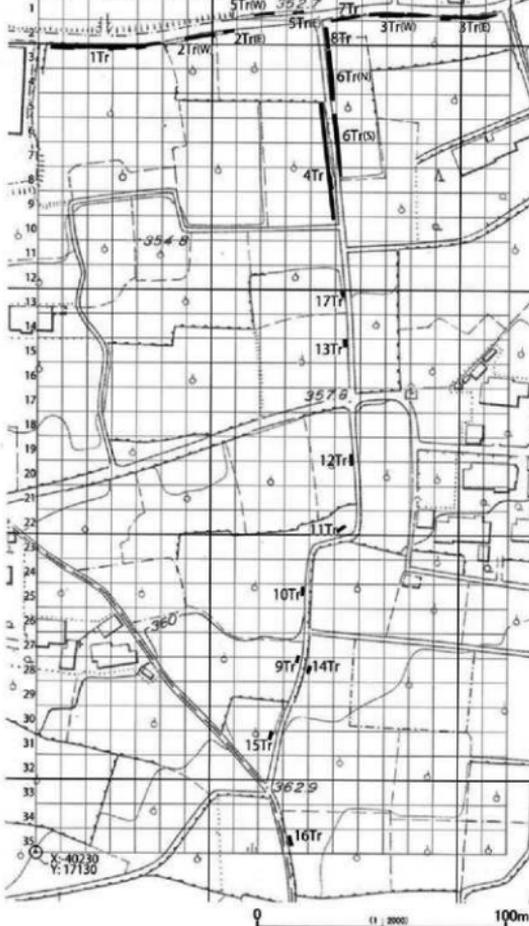
- 浅間神社 2005 『甲斐国一之宮 浅間神社誌』  
芦川村村誌編纂委員会 1992 『芦川村誌』 上巻  
一宮町 1965 『一宮町誌』  
一宮町教育委員会 1996 『一宮町埋蔵文化財発掘調査概要報告書—平成6年度—』  
猪股喜彦 1996 「金川扇状地の土地開発—甲斐国分寺周辺の集落—」  
『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』 第7集  
猪股喜彦 2002 「甲斐国分寺地域における集落構造と展開に関する若干の考察」  
『山梨県考古学協会誌』 第13号  
春日居町誌編纂委員会 1988 『春日居町誌』
- 角川書店 1984 『角川日本地名大辞典 19 山梨県』  
弦間耕一 2002 「笛吹川の砂鉄と武藤半三郎」『甲斐路』100  
斉藤享治 1998 『大学テキスト 日本の扇状地』 古今書院
- 平凡社 1995 『山梨県の地名』  
山梨県 1984 『土地分類基本調査 甲府 5万分の1』  
山梨県教育委員会 1973 『甲斐国埋没条里遺構等の調査』  
山梨県埋蔵文化財センター 1994 『年報』10

## 第二章 車地蔵遺跡支線6号地区〔97年度調査区〕

## 1. 調査概要

この調査は、車地蔵遺跡地内における畑地帯総合整備事業・一般農道支線6号建設に先立ち、平成9年(1997)に一宮町教育委員会が実施した。建設予定地の既存道路(T字状に東西約200m、南北約350m)の拡幅部分に、17トレンチを設定し、約376㎡を調査した。なお、対象地は北に下る傾斜地であり、調査範囲北端(5Tr)と南端(16Tr)では、約12mの標高差があった。

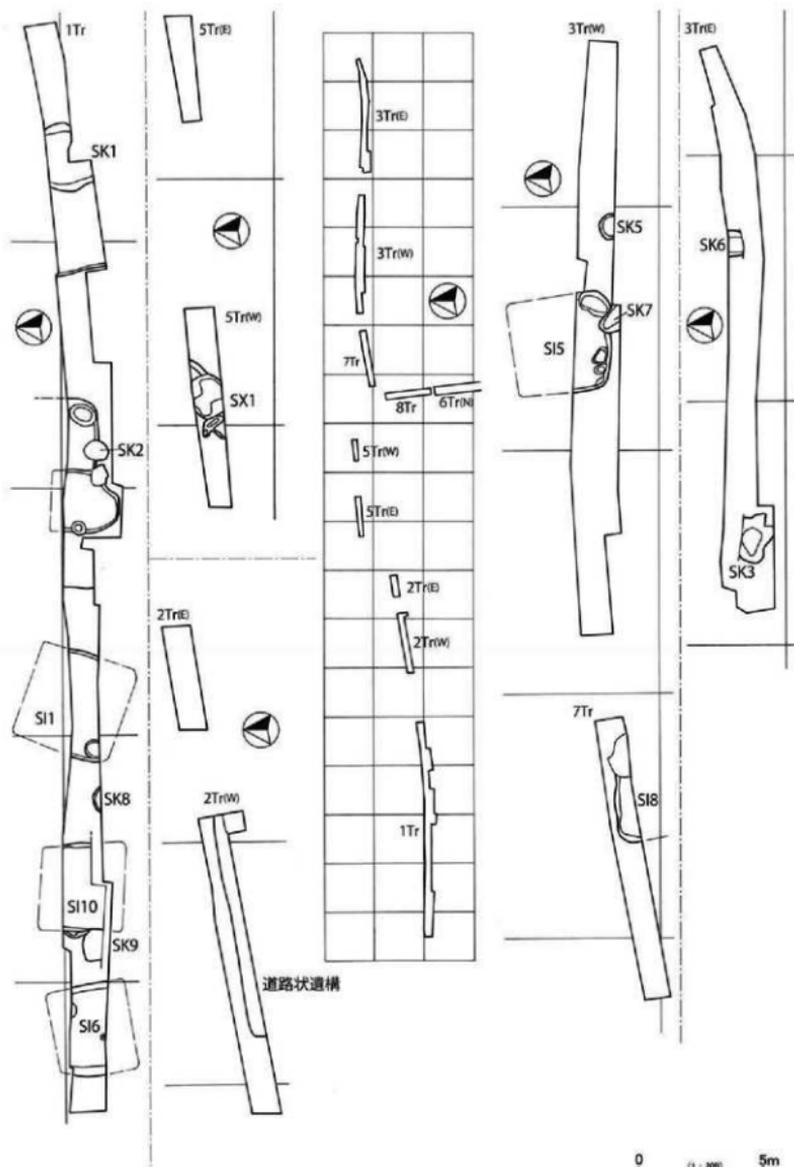
## 2. 調査トレンチ〔第7・8図〕



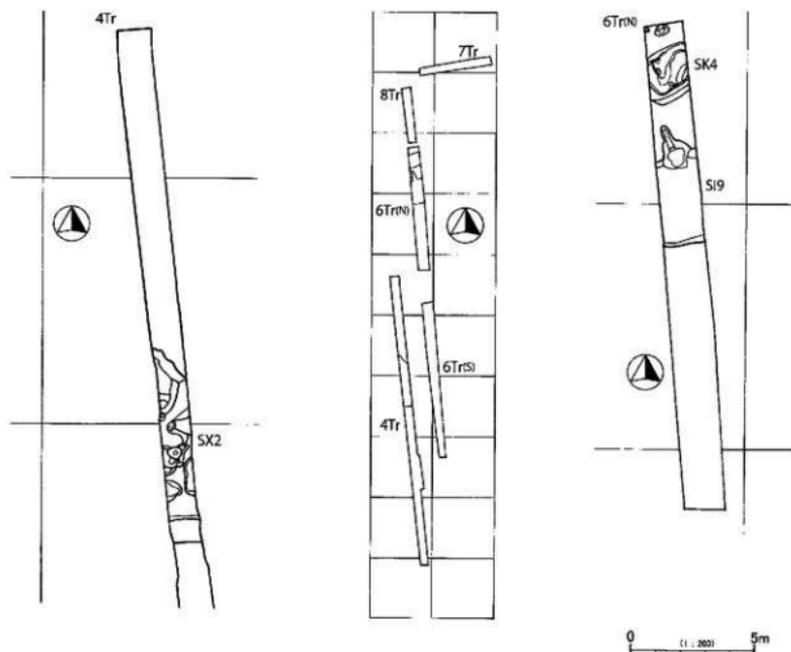
第6図 グリッド及びトレンチ位置図

**1Tr** A-3～E-3・E-2グリッド、東西に延びる既存道路南側に位置する。東西方向約45m、幅約2mの範囲を調査し、必要に応じて部分的に拡張を行った。掘削は地表面から最深120cmを測った。地表面からの深さ約80cmで暗褐色土または黒褐色土の遺構確認面となり、住居跡6軒(SI1・2・3・4・6・10)、土坑3基(SK1・2・8)を検出した。他、遺構外遺物として土師器環(95～100・103～104)、土師器皿(105)、須恵器甕(102)、灰釉陶器(101)が出土した。なお、103～105は墨書土器であり、判読はできないが103・104は体部、105は底部に墨筆が確認できた。

**2Tr** F-2～H-2グリッド、東西に延びる既存道路南側に位置する。東西約20mの範囲を2Trとしたが、畑境(石垣)は崩壊しなかったため、これを境に西側を2Tr(W)(約12.5m×1m)、東側を2Tr(E)(約4.5m×1m)とした。掘削は地表面から最深134cmを測った。明確な遺構



第7図 遺構位置圖(1)



第8図 遺構位置図(2)

は少なく、地表面から約70cmの深さで黒褐色土及び礫を含む暗褐色土層となり、2Tr(W)で道路跡を確認した。他、遺構外遺物として須惠器甕(106)が出した。

**3Tr** N-1～S-1グリッド、東西道路に位置する。既存道路南側約53mの範囲を3Trとしたが、畑進入路部分は耕作の都合上調査できず、これを境に西側を3Tr(W)(約24.5m×1.5m)、東側を3Tr(E)(約23m×1.5m)とした。掘削は地表面から最深66cmを測った。地表面から約40cmの深さで黒褐色土及び礫を含む暗褐色土の遺構確認面となり、住居跡1軒(SI5)、土坑4基(SK3・5・6・7)を検出した。また、農業用水管(以下、畑管)の埋設によって、遺構の一部が壊されていた。他、遺構外遺物として土師器環(107～109)、陶器片(110)などが出出した。

**4Tr** L-5～L-9グリッド、南北に延びる既存道路西側に位置する。南北約48m、幅約1.5mの範囲を調査した。掘削は地表面から最深164cmを測った。明確な遺構は検出できなかったが、地表面から約50cmの深さで暗褐色土層となり、不明遺構(SX1)とした落ち込みを確認した。

**5Tr** I-1～K-1グリッド、東西に延びる既存道路北側に位置する。東西約40m、幅約2mの範囲を5Trとしたが、畑進入路部分工作の都合上調査できず、これを境に西側を5Tr(W)(約8m×2m)、東側5Tr(E)(約4.5m×2m)とした。掘削は地表面から最深122cmを測った。明確な遺構は検出できなかったが、地表面から約50cmの深さで黒褐色土層となり、5Tr(W)で不明遺構(SX2)とした落ち込

- みを確認した。他、5Tr(W)から灰釉陶器壺(111)、石英(127)などが出土した。
- 6Tr** L-3～M-8グリッド、南北に延びる既存道路東側に位置する。南北約53m、幅約2mの範囲を6Trとしたが、畑進入路部分は耕作の都合上調査できず、これを境に北側を6Tr(N)(約21m×2m)、南側を6Tr(S)(約26m×2m)とした。掘削は地表面から最深2m、6Tr(S)で最深1mを測った。地表面から約70cmの深さで、黒褐色土の遺構確認面となり、6Tr(N)から住居跡1軒(S19)・土坑1基(SK4)を検出した。他、灯明皿(112)、仏飯具(113)、釘(120・121)などが出土した。
- 7Tr** L-1・2～M-1グリッド、東西に延びる既存道路南側に位置する。東西約12m、幅2mの範囲を調査し、掘削は地表面から最深1mを測った。地表面から約45cmの深さで、暗褐色土の遺構確認面となり、調査範囲の大半が掘乱を受けていた。住居跡1軒(S18)を検出した。
- 8Tr** L-2～3グリッド、南北に延びる既存道路東側に位置する。南北約9m、幅2mの範囲を調査し、掘削は地表面から最深144cmを測った。地表面から約80cmの深さで褐色土層となったが、遺構は確認できなかった。
- 9Tr** K27～28グリッド、南北に延びる既存道路西側に位置する。南北約3.3m、幅1.5mの範囲を調査し、地表面から最深48cmまで掘削した。地表面からの深さ約40cmで褐色土層となったが、遺構は確認できなかった。
- 10Tr** K-25グリッド、南北に延びる既存道路西側に位置する。南北約3.7m、幅1.5mの範囲を調査し、地表面から最深40cmまで掘削した。地表面から約34cmの深さで褐色土層となったが、遺構は確認できなかった。他、小片であるが、土師器坏底部に墨筆が確認された墨書土器(114)、金属製品(122・124)が出土した。
- 11Tr** M-22グリッド、東西に延びる既存道路北側に位置する。東西約4m、幅1mの範囲を調査した。地表面から最深60cmまで掘削した。地表面から約50cmの深さで褐色土層となったが、遺構・遺物は確認できなかった。
- 12Tr** M-19～20グリッド、南北に延びる既存道路西側に位置する。南北約4.5m、幅1.2mの範囲を調査し、掘削は地表面から最深60cmまで掘削した。地表面から約30cmの深さで褐色土層となったが、遺構・遺物は確認できなかった。
- 13Tr** M-15グリッド、南北に延びる既存道路西側に位置する。3.3m、幅1.5mの範囲を調査した。地表面から最深56cmまで掘削した。地表面から約40cmの深さで褐色土層となったが、遺構は確認できず、かわらけ(115)が出土した。
- 14Tr** I-28～29グリッド、南北に延びる既存道路東側に位置する。南北約3m、幅約1.3mの範囲を調査し、地表面から最深54cmまで掘削した。地表面から約40cmの深さで褐色土層となったが、遺構は確認できなかった。
- 15Tr** J-31グリッド、南北に延びる既存道路西側に位置する。南北約3m、幅約1.5mの範囲を調査し、地表面から最深56cmまで掘削した。地表面から約40cmの深さであり褐色土層となったが、遺構・遺物は確認できなかった。
- 16Tr** K-35グリッド、東西に延びる既存道路南側に位置する。南北約4m、幅約1.5mの範囲を調査し、地表面からは最深100cmまで掘削した。地表面から約75cmの深さであり褐色土層となったが、遺構確認はできなかった。他、小片であるが土師器坏(116)と不明金属製品(123)が出土した。
- 17Tr** L-13グリッド、東西に延びる既存道路南側に位置する。南北約3.3m、幅約1.5mの範囲を調査し、地表面から最深60cmまで掘削した。地表面から約34cmの深さであり褐色土層となったが、遺構は確認できなかった。

## 3. 発見した遺構・遺物

## ・SI1〔第9図〕

**位置と検出状況** B・C3グリッド、1Trの中央からやや西に位置する。重複する遺構はなく、東壁と西壁を確認した。規模は不明だが、東西の壁間は約4.2m、確認面から床面までの深さは約25cmを測った。**遺構の特徴** 褐色ブロックを少量含む床面を確認した。カマドは西壁に位置し、炭化物和焼土、及び構築材と思われる礫を確認した。また、カマドの南側では土坑を確認した。**出土遺物** 須恵器蓋(1)、土師器皿(2)・甕(7)、灰釉陶器碗(3～5)、脚高台付環(6)などが出土した。本遺構からは灰釉陶器碗は3点出土したが、いずれも成形が粗く、歪みがある。また4は内面に転用痕(内面見込み部の磨滅)や、内面口縁付近に煤もしくは漆の付着がみられた。**遺構の時期** カマド出土遺物の時期から、10C後半～11Cとしておく。

## ・SI2〔第10図〕

**位置と検出状況** D-3グリッド、1Trの中央からやや東に位置する。西側は重複するSI3、南壁中央付近はSK2に壊されており、南壁・東壁・西壁を確認した。規模は不明だが、方形を呈すと思われる、東西の壁間は約3.6mを測った。確認面から床面までの深さは、約25cmを測った。**遺構の特徴** 検出した範囲にはカマド施設はなかった。東隅で土坑を検出した。**出土遺物** 土師器環(8～10)・高台付環(11～13)・羽釜(15)、灰釉陶器皿(14)、などが出土した。11は内外面に暗文状のヘラ描き模様があり、外面は雲または風、内面には鳥・羽を模しているようなモチーフが窺える。**遺構の時期** 出土遺物の時期から、11C頃としておく。

## ・SI3〔第11・12図〕

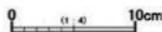
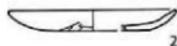
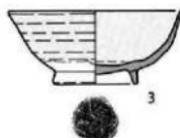
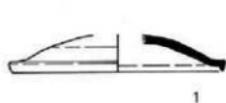
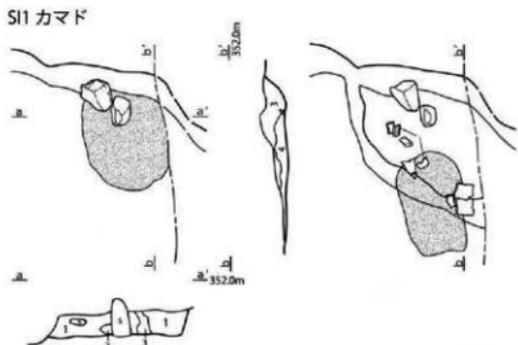
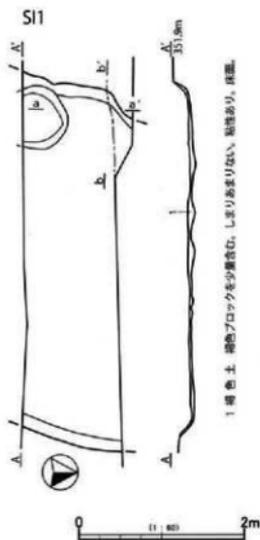
**位置と検出状況** C・D3グリッド、1Trの中央に位置する。重複するSI2を壊していた。規模は不明であるが、東西2.5m、南北は確認範囲で2.2mを測った。確認面から床面までの深さは、約10cmを測った。**遺構の特徴** カマドは南西隅に位置し、焼土と多数の礫の堆積を確認した。平瓦(126)も出土しており、礫とともにカマド構築材に用いられたものと考えられる。他、床下から土坑と少量の焼土・炭化物を検出した。**出土遺物** 土師器環(16～20)・高台付環(23・24)・甕(25～29)・羽釜(29～31)、緑釉陶器碗(21)、灰釉陶器碗(22)、平瓦(126)などが出土した。**遺構の時期** 出土遺物から、11C前半～中頃としておく。

## ・SI4〔第11・12図〕

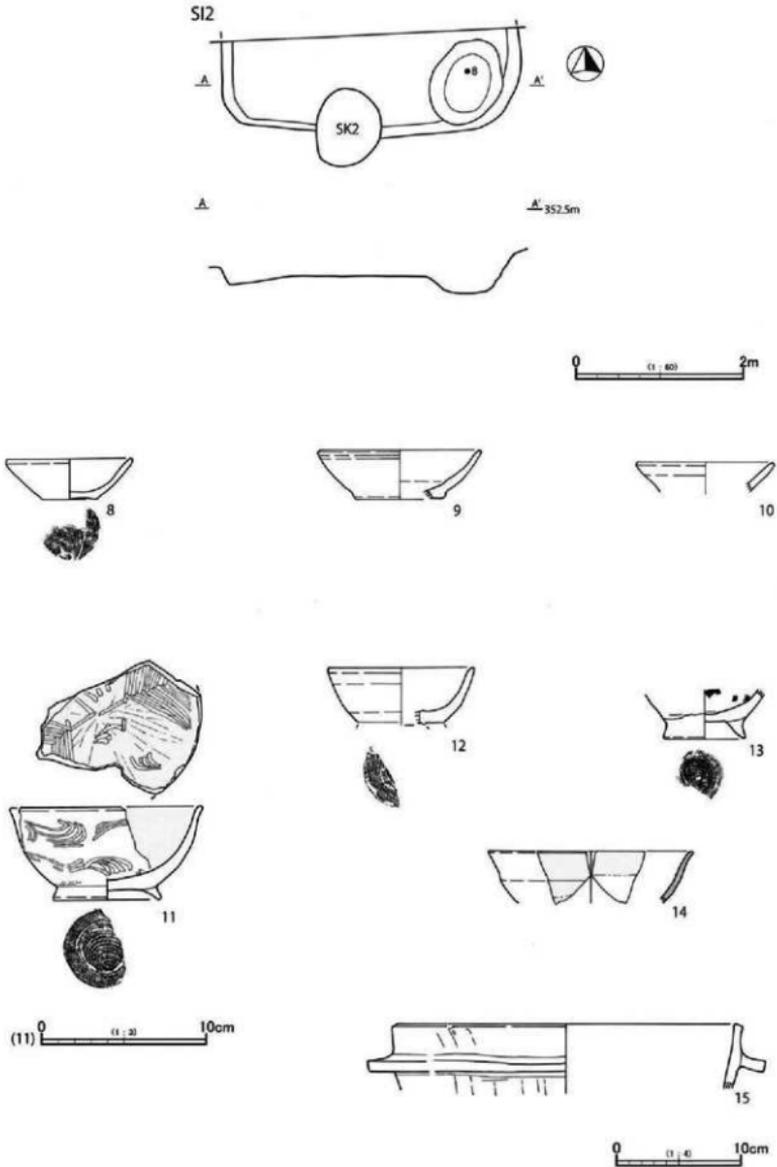
**位置と検出状況** D-2・3～E-2・3グリッド、1Trの東側に位置する。重複するSK1に壊されていた。確認範囲では西壁のみを確認し、遺構遺存部分は東西約3.5mを測った。確認面から床面までの深さは、約15cmを測る。**遺構の特徴** 確認範囲にカマドはなかったが、焼土を少量検出している。また、中央部には多数の礫が確認されている。**出土遺物** 土師器環(32)・脚高台付環(34)、灰釉陶器碗(33)、鉄滓(125)などが出土した。**遺構の時期** 遺存状況が悪く、明確ではないが、出土遺物の時期から11C後半頃としておく。

## ・SI5〔第13・14図〕

**位置と検出状況** O-1グリッド、3Tr(W)の中央に位置する。重複するSK7に南壁の一部を壊されており、東壁・西壁・南壁を確認した。方形を呈すと考えられ、東西の壁間は約4m、南北は確認範囲で1.5mを測った。明確な貼り床は確認できなかったが、確認面からの深さは約25cmを測った。



第9図 S11



第10図 S12

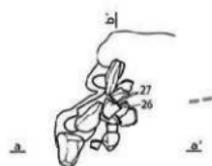
S13



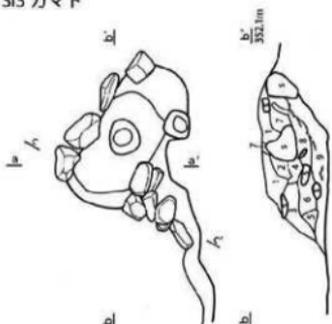
351.0m



352.1m

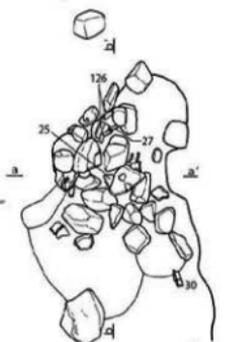


S13 カマド



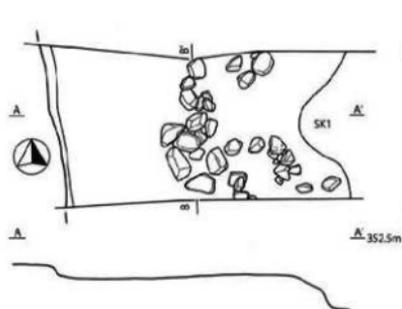
352.1m

352.1m



- 1 陶器土 灰化物類、粘土質少量含む、しまりやゆあり、粘りやゆあり。
- 2 陶器土 粘土ブロックを含む、しまりはあまりない、粘りやゆあり。
- 3 陶器土 粘土ブロック少量含む、しまりはあまりない、粘りやゆあり。
- 4 陶器土 粘土ブロック少量含む、しまりはあまりない、粘りやゆあり。
- 5 陶器土 ブロック状、しまりはあまりない、粘りはあまりない。
- 6 陶器土 陶器破片少量含む、粘土質少量含む。
- 7 陶器土 しまりやゆあり、粘りやゆあり、硬質あり。
- 8 陶器土 粘土質少量含む、しまりやゆあり、粘りやゆあり。
- 9 陶器土 粘土質少量含む、しまりやゆあり、粘りやゆあり。

S14



352.4m

352.5m

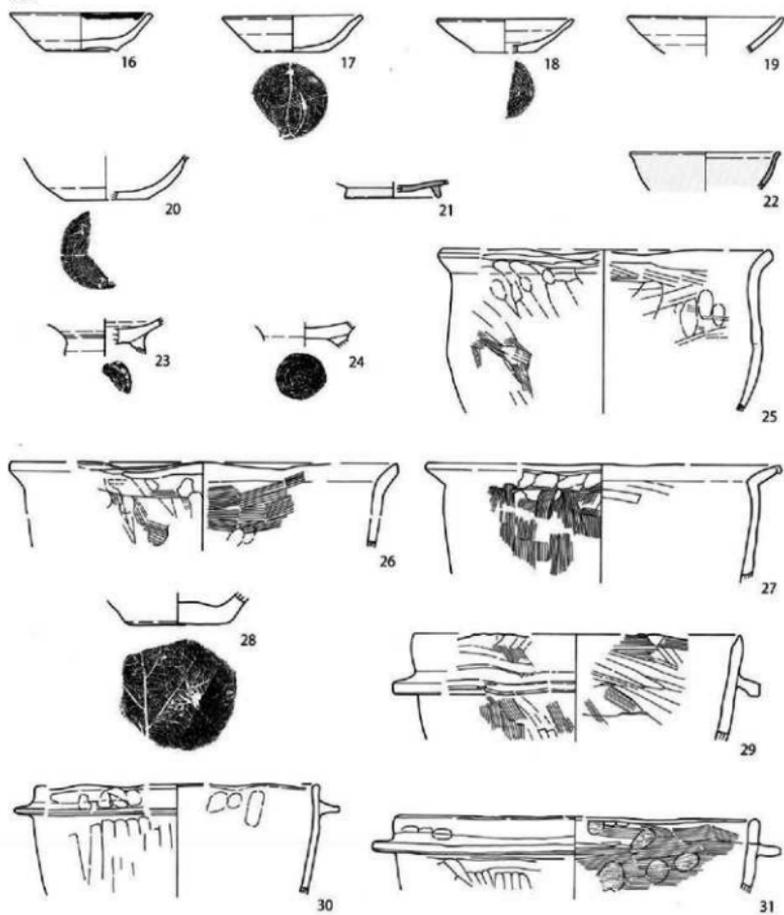


- 1 陶器土 塊 (0.5cm 大) の粘土混じり、粘土質少量含む、しまりやゆあり、粘りやゆあり。
- 2 陶器土 塊 (0.5cm 大) 少量含む、しまりやゆあり、粘りやゆあり。



第11図 S13・4(1)

S13

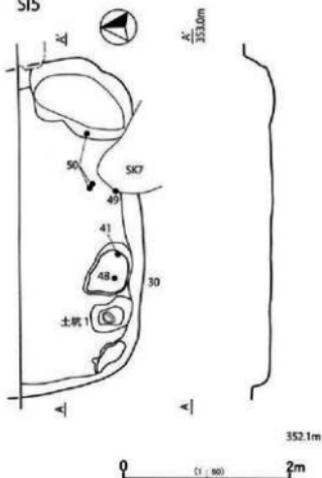


S14

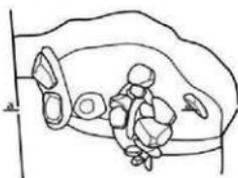


第12図 S13-4(2)

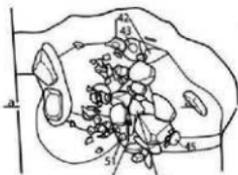
S15



S15 カマド

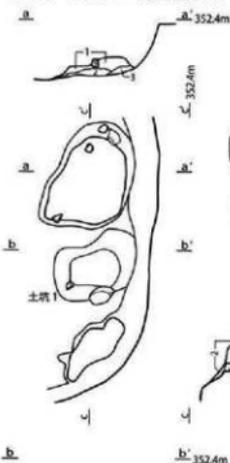


a. 352.5m



b.

S15内 土坑1・粘土溜まり



a. 352.4m

b. 352.4m

- 1 暗褐色土 炭化物 (0.5mm 大) と黒褐色粒を少量含む。
- 2 褐色土 黒褐色粒を少量含む。しまりややあり。粘性あり。
- 3 暗褐色土 黒褐色粒を少量含む。しまりややあり。粘性あり。
- 4 暗褐色土 炭化物 (0.5mm 大) と黒褐色粒を少量含む。しまりはあまりない。粘性あり。Pt 覆土。
- 5 暗褐色土 5層の粘土をブロック状で含む。しまりはあまりない。粘性あり。Pt 覆土。
- 6 褐色土 黒褐色粒を少量含む。しまりややあり。粘性あり。
- 7 褐色土 炭化物を少量含む。土坑3層と同じ。

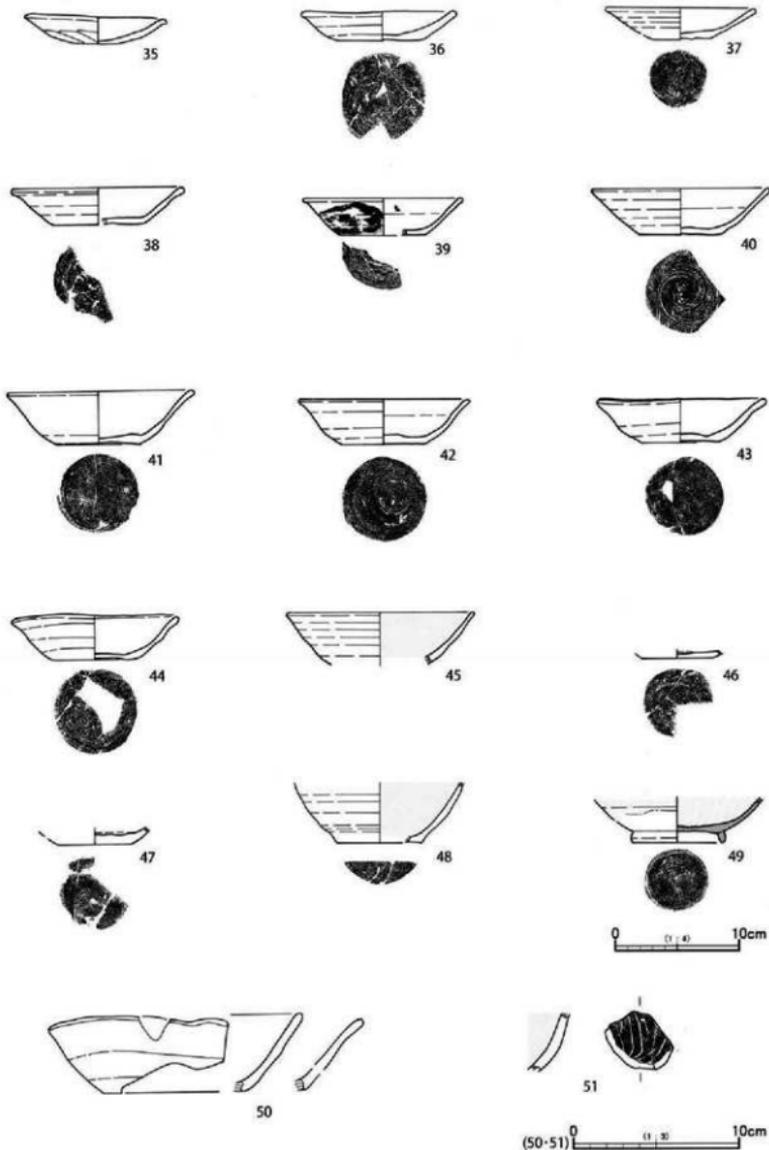
- 1 暗褐色土 褐色粒 (0.5mm 大) を少量含む。しまりはあまりない。粘性ややあり。
- 2 灰黄褐色土 粘土ブロック。しまりあり。粘性あり。
- 3 褐色土 2層の粘土をブロック状に含む (0.1cm 大)。炭化物粒 (0.5mm 以下) を少量含む。しまりはあまりない。粘性ややあり。

S15内 土坑2



0 (1:50) 1m

第13図 S15(1)



第14図 S15(2)

**遺構の特徴** カマドは東南隅に位置し、礎と焼土の堆積を確認した。袖部には石と粘土を用いており、燃焼部では支柱石の痕跡と思われる凹みを確認した。遺構南西では粘土の集積および覆土に炭化物粒と粘土ブロックを含むビットを検出した。**出土遺物** 土師器環・皿類(35～48・50・51)、灰釉陶器塊(49)などが出土した。土師器はカマド部分からの出土が多く、器面が黒変しているものや煤けていた。50の土師器環はやや片口状、51の土師器片は黒色処理された内面に線刻がみられた。**遺構の時期** 伴出関係は明確ではないが、カマド付近の出土遺物から、10C後半頃としておく。

・S16〔第15図〕

**位置と検出状況** A-3グリッド、1Trの西側に位置する。重複はなく、東壁・西壁を確認した。規模は不明であるが、東西壁間は約3.8mを測った。明確な貼り床ではないが、暗褐色土の床面を検出し、確認面からの深さは約15cmを測った。**遺構の特徴** 検出した範囲にカマド施設はなく、性格については不明であるが、遺構内でビット1基と、溝状の落ち込みを検出した。**出土遺物** 土師器蓋(52)・環(53～59)・甕(60)などが出土した。52の土師器蓋は、外面に暗文があり、口縁部の曲はほぼ垂直で端部が面をなしている。54～58の土師器環は、全体的な器面の劣化と灯明痕と思われる黒変があるものがみられた。なお、11C代の遺物に9C代の遺物が混在したが、確認範囲が狭小であったため、別遺構との重複などについては不明である。**遺構の時期** 8C後半～9C代の遺物が混在したものの、11C後半頃としておく。

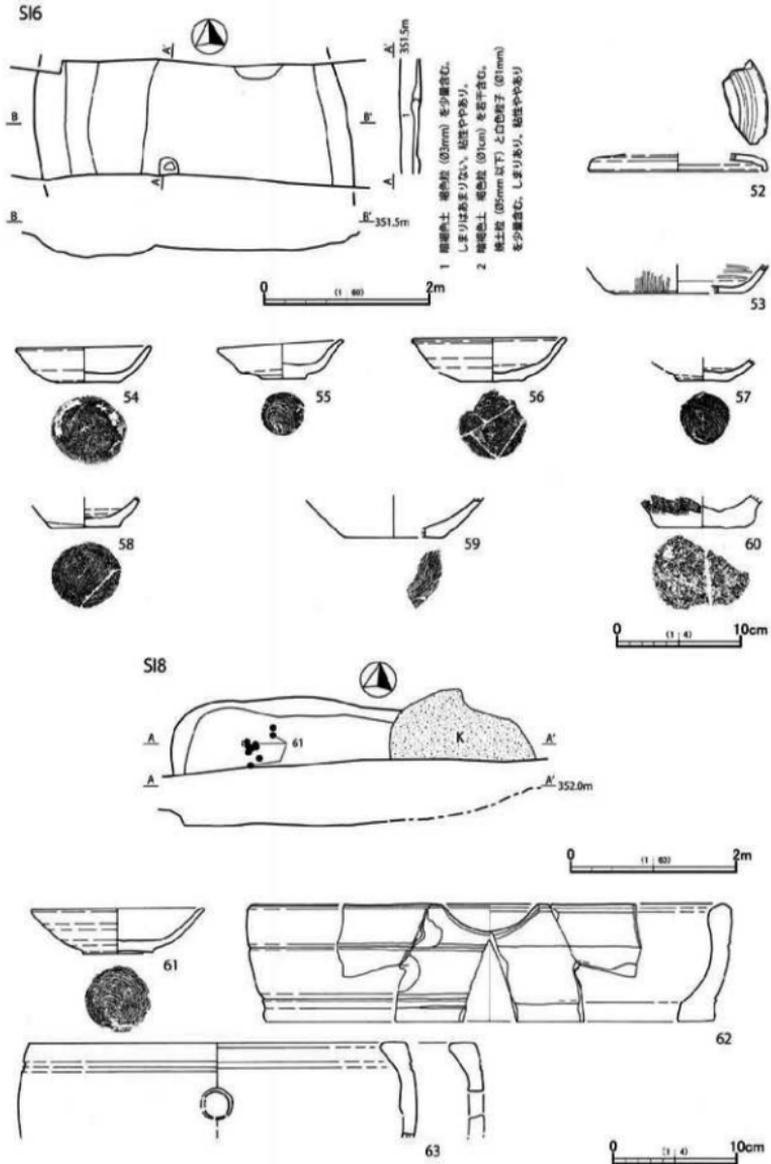
・S17〔第18図〕 調査時には住居跡としていたが、調査終了後に土坑と断定したため、SK3とした。

・S18〔第15図〕

**位置と検出状況** M-1グリッド、7Trの東側に位置する。重複する遺構はないが、攪乱により東側が壊されていた。規模は不明であるが西壁と北壁を確認し、確認範囲では東西約2.7m、南北85cm、確認面からの深さは約20cmを測った。**遺構の特徴** 検出した範囲にはカマド施設はなく、出土遺物も少なかった。**出土遺物** 土師器環(61)が出土した。また後世の混入物であるが、器台形土製品と称されるもの(62・63)が出土した。これらは瓦質で外面が黒変しており、63の胴部には通器孔、62は口縁部がU字状に開いている。敷輪(シキワ)と呼ばれる焔炉や七輪の上において釜などをかける補助的な道具であり、五徳の一種として熱源の口径と鍋蓋の底径や底の丸みを合わせ、胴部の通器孔により熱効率をよくする機能をもつもので、大正時代以降、戦後までの遺物とされている。**遺構の時期** 遺物が少なく明確ではないが、11C後半頃としておく。

・S19〔第16・17図〕

**位置と検出状況** L-3・4グリッド、6Tr(N)の中央から北側にかけて位置する。重複する遺構はなく、確認範囲では北壁のカマド部分と南壁を検出した。規模は不明であるが、南北の壁間は約3.5m、確認面から床面の深さ80cmまで掘削した。**遺構の特徴** カマドは北壁に位置し、袖部・支柱石・煙道部と焼土・炭化物の堆積を確認した。袖部の構築材には粘土と礎が用いられており、その他天井石等に用いられたと推測する礎の堆積を確認した。**出土遺物** 須恵器環(64・65)、土師器環(66)・甕(67・69)・柱状高台環(68)などが出土した。**遺構の時期** 11C前半頃の遺物が混在したが、カマド出土遺物の時期から、



第15図 S16-8

8C 中頃としておく。

・SI10〔第17回〕

**位置と検出状況** B-3グリッド、1Trの西側に位置する。部分的に攪乱を受け、重複するSK9に西壁の一部を壊されていた。規模は不明だが東壁・西壁を確認し、東西の壁間は約3.8mを測った。明確な貼り床ではないが、ややしまりがあり黒褐色土ブロックを含む褐色土層を確認し、確認面からの深さは約20cmを測った。**遺構の特徴** 検出した範囲にカマド施設はなく、西壁にやや段差が確認できたが、性格については不明である。**出土遺物** 土師器環(70～79)・甕(80)などが出土した。70・71の土師器環には墨書があり、79は墨痕が確認できた。墨書については磨滅や破損部で判読できなかったが、いずれも10C前半頃の土師器環体部に書かれている。76の内面口縁部に灯明痕を確認した。**遺構の時期** 出土遺物の時期から、10C前半頃としておく。

・SK1〔第18回〕

**位置と検出状況** E-2・3グリッド、1Trの東側に位置する。重複するSI4を壊していた。不整であるが円形を呈すと思われ、確認範囲で直径2.1mを測った。確認面からの深さは約65cmを測る。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

・SK2〔第18回〕

**位置と検出状況** D-3グリッド、1Trの中央よりやや東側に位置する。重複するSI2を壊していた。楕円形を呈し、長形1.5m、短径1.1mを測った。確認面からの深さは約20cmを測る。**遺構の特徴** 覆土に礫を含んでいたが、性格については不明である。**出土遺物** 脚高台環が1点出土したが、小片のため図化しなかった。**遺構の時期** 出土遺物が少なく明確ではないが、11C代以降としておく。

・SK3〔第18回〕

**位置と検出状況** Q-1グリッド、3Tr(E)の西側に位置する。重複する遺構はなかった。プランは不整形で、北側は煙管で壊されていた。確認範囲では直径3mほどの規模で、確認面からの深さは約1mを測った。**遺構の特徴** 内部は部分的にフラスコ状になっており、覆土には多量の礫や、炭化物や焼土ブロックが包含されていた。なお、プラン確認段階ではカマドと想定してSI7と遺構番号を付したが、調査進展により土坑と断定し、SK3とした。和し、甕や羽釜が出土し、焼土や炭化物も確認されていることから、住居跡のカマド施設を壊していた可能性も窺える。**出土遺物** 土師器環(81・82)・甕(83)・羽釜(84)が出土した。**遺構の時期** 出土遺物から、11C前半頃としておく。

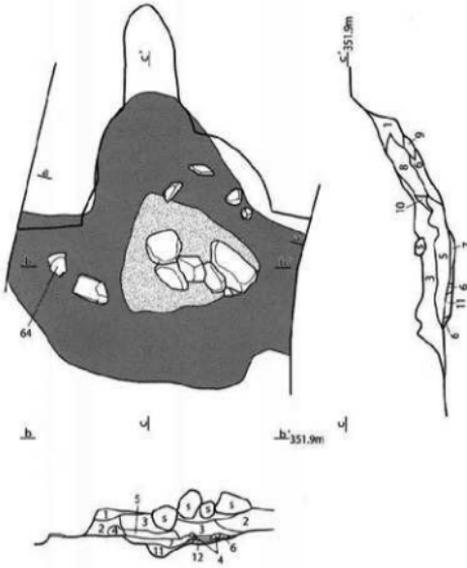
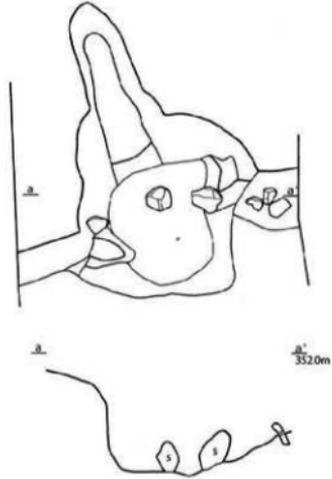
・SK4〔第19回〕

**位置と検出状況** L-3グリッド、6Tr(W)の北側に位置する。重複する遺構はなかった。楕円形を呈すと思われ、確認範囲では東西約2m、確認面からの深さは1.2mを測った。**遺構の特徴** 遺構の断面観察により、覆土が南から北側へ自然埋没している状況が窺えることと、覆土中にかわらけ(85・88)、陶器(89)、青磁(90)、石臼(128)などを含んでいることから、中世の廃棄坑と推測される。**出土遺物** 前述のかわらけ・陶磁器類・石臼の他、土師器環(86・87)、須恵器壺(91)・環(92)が出土した。陶磁器類は、15C末～16C前半頃に比定される。**遺構の時期** 若干10C後半～11C代の遺物が混在するが、かわらけと陶磁器類の出土から、近世としておく。

S19



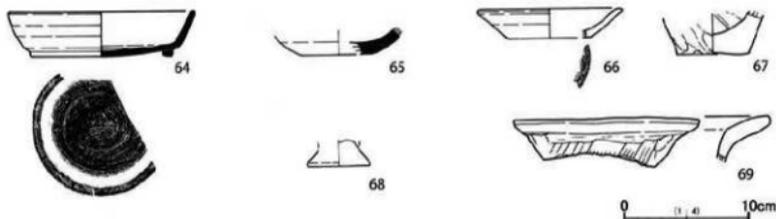
S19 カマド



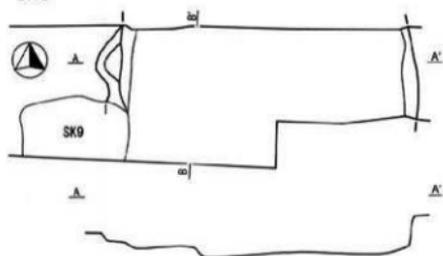
- 1 暗褐色土 埴土粒 (Ø1mm 以下)、炭化植物 (Ø1mm 以下) を少量含む。しまりややあり、粘性ややあり。
- 2 暗褐色土 埴土粒 (Ø7mm 以下)、炭化植物 (Ø1mm 以下) を少量含む。しまりややあり、粘性ややあり。
- 3 暗褐色土 埴土粒 (Ø1mm 以下)、炭化植物 (Ø1mm 以下) を含む。
- 4 暗褐色土 埴土粒 (Ø1mm 以下)、炭化植物 (Ø1mm 以下) を含む。
- 5 黒褐色土 埴土粒 (Ø1mm 以下)、炭化植物 (Ø1mm 以下) を若干含む。
- 6 黒褐色土 埴土粒 (Ø5mm 以下)、炭化植物 (Ø3mm 以下) を含む。しまりあり、粘性ややあり。
- 7 焼土層
- 8 暗褐色土 埴土粒 (Ø20mm 以下)、炭化植物 (Ø3mm 以下) を多量に含む。しまりなし、粘性ややあり。
- 9 暗褐色土 8層と類似、暗褐色土、埴土粒 (Ø1cm)
- 10 暗褐色土 埴土粒 (Ø1cm)
- 11 黒色土 炭化植物、しまりなし、粘性ややあり。
- 12 暗褐色土 炭化植物 (Ø20mm 以下) を少量含む。しまりはあまりない、粘性ややあり。

第16図 S19(1)

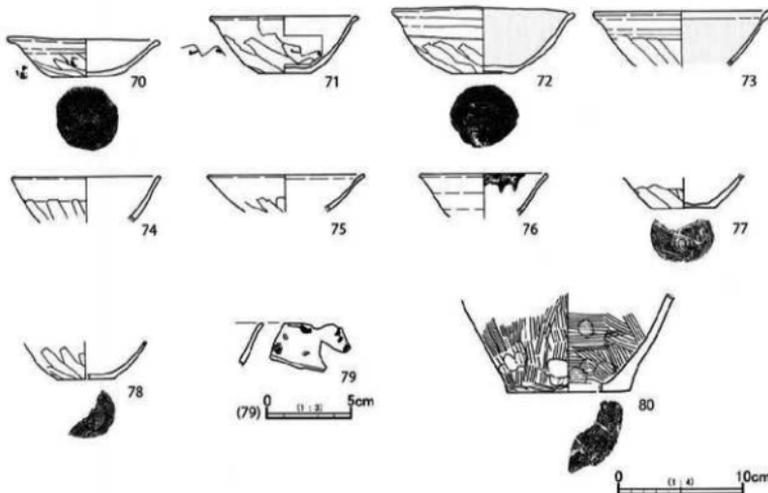
S19



S110

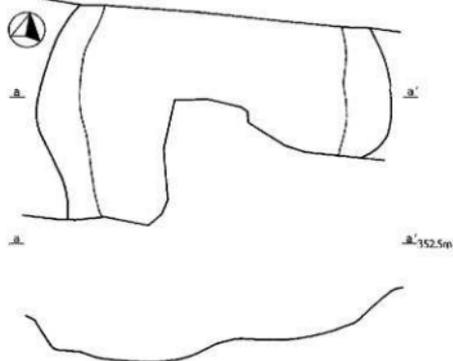


- 1 黄褐色土 褐色ブロック (0.5cm)、面化地盤 (0.5cm) 多少を含む。しまりはあまりない。
- 2 黄褐色土 黄褐色地 (0.1cm以下)、面化地盤 (0.5cm) を若干含む。しまりあり。粗面あり。
- 3 褐色土 黄褐色ブロック (0.5cm) を若干含む。しまりあり。粗面ややあり。
- 4 黄褐色土 黄褐色砂 (0.5cm) を若干含む。しまりあり。粗面あり。

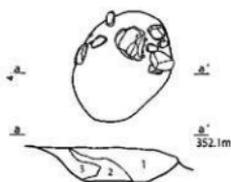


第17図 S19(2)・10

SK1

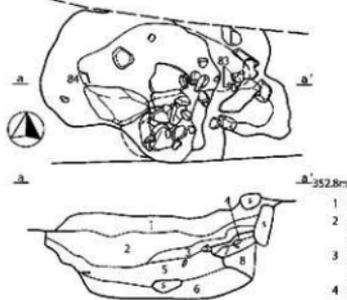


SK2



- 1 暗褐色土 礫 (Ø3cm 大) を含む。しまりややあり。粘性ややあり。
- 2 褐色土 礫 (Ø4cm 大) を含む。しまりなし。粘性はあまりない。
- 3 黒褐色土 埴土粒 (Ø1cm 以下) と礫 (Ø2cm 大) を含む。しまりあり。粘性ややあり。

SK3



- 1 黒褐色土 しまりはあまりない。粘性ややあり。
- 2 暗褐色土 ロームブロック (Ø5cm 以下) を少量含む。しまりはあまりない。粘性ややあり。
- 3 暗褐色土 ロームブロック (Ø3cm 以下) と炭化物粒 (Ø1mm 大) が少量混入。しまりはあまりない。粘性ややあり。
- 4 暗褐色土 粘土ブロック、炭化物を多量に含む。しまりはあまりない。粘性あり。
- 5 黒褐色土 ロームブロック、炭化物を多量に含む。しまりはあまりない。粘性あり。
- 6 黒褐色土 炭化物は少なく、炭層がしる。
- 7 黒褐色土 埴土ブロックを含む。火鉢面。
- 8 暗褐色土 砂質土。地山。

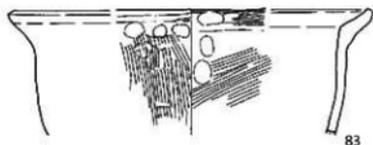
0 (1.40) 1m



81



82



83



84

0 (1.40) 10cm

第18図 SK1~3

・SK5〔第20図〕

**位置と検出状況** Q-1 グリッド、3Tr(W)の中央からやや東に位置する。重複する遺構はなかった。トレンチの南壁際で検出し、円形を呈す土坑と思われる。確認範囲では直径80cm、確認面からの深さは12cmを測った。**出土遺物** 土器器裏片(93)が出土した。**遺構の時期** 出土遺物が少なく、時期は明確ではないため、9～10C頃としておく。

・SK6〔第20図〕

**位置と検出状況** R-1 グリッド、3Tr(E)の中央からやや東に位置する。重複する遺構はなかった。トレンチの北壁際で検出し、南側は烟管により壊されていた。確認範囲では東西約1m、確認面からの深さは12cmを測った。**出土遺物** 須恵器裏片(94)が出土した。内外面が磨耗しており、転用硯や石皿など用途に使用された可能性が窺える。**遺構の時期** 出土遺物が少なく、時期は明確ではないため、9～10C頃としておく。

・SK7〔第20図〕

**位置と検出状況** O-1 グリッド、3Tr(W)の中央からやや東に位置する。重複するSI5の南壁の一部を壊している。平面形は不整形で、確認範囲では最長約1.2m、確認面からの深さは26cmを測った。遺構の性格は不明である。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

・SK8〔第20図〕

**位置と検出状況** B3 グリッド、1Trの西側に位置する。規模は不明であるが、円形を呈すと思われる。確認範囲では最長約75cm、確認面からの深さは約20cmを測った。遺構の性格は不明である。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

・SK9

**位置と検出状況** B-3 グリッド、1Trの西側に位置する。SI10の西壁の一部を壊していた。確認範囲では最長約1.3mを測ったが、規模や遺構の性格は不明である。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

・道路跡〔第21図〕

**位置と検出状況** G-2・3 グリッド、2Tr(W)に位置する。トレンチ南壁際で確認し、確認範囲では長さ約9.3m、幅5cmを測った。**遺構の特徴** 深がなく、ややしまった面が確認でき、かつての畑地に伴う道路の一部と推測される。**遺構の時期** 出土遺物がなく、明確な時期は不明であるが、近世・近代まで下る可能性が窺える。

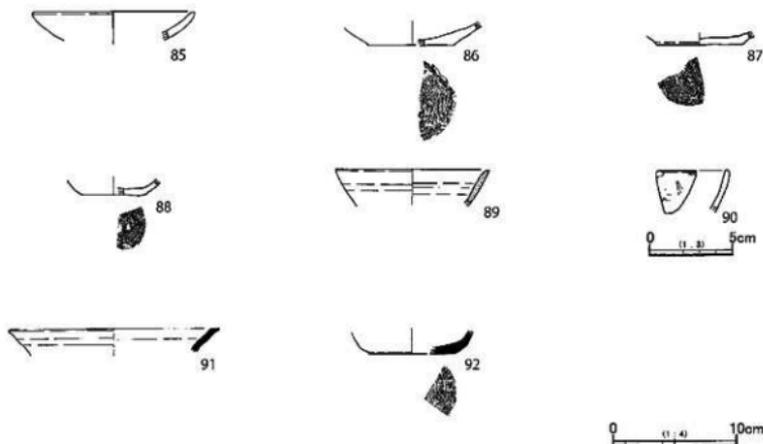
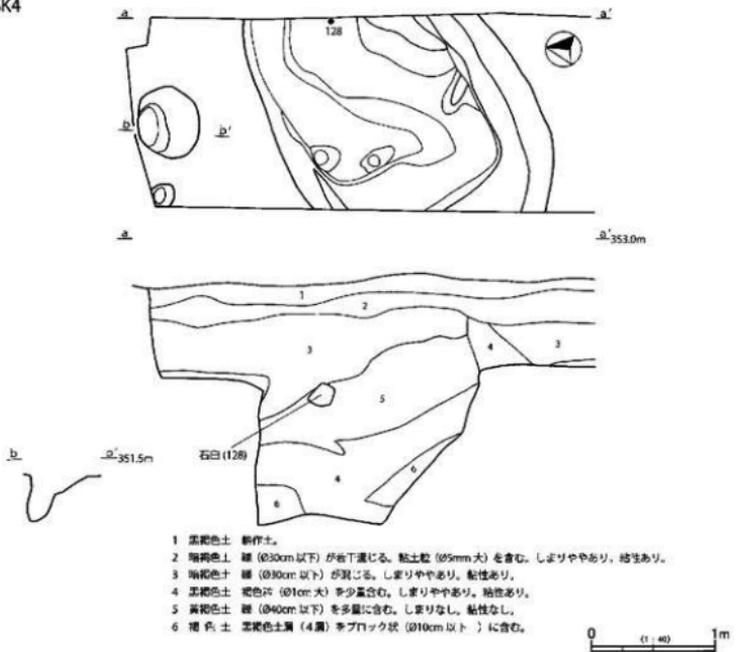
・不明遺構1〔第21図〕

**位置と検出状況** I-1 グリッド、5Tr(W)の中央に位置する。遺構単位が明確ではなく、確認面からの深さは約20cmと浅い。遺構の性格は不明である。また、自然地形や耕作痕であった可能性もある。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

・不明遺構2〔第21図〕

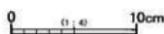
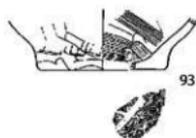
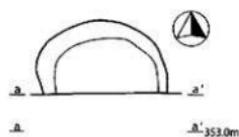
**位置と検出状況** L-6・7 グリッド、4Trの中央からやや北に位置する。南北約8mの範囲に複数の掘り込み、または落ち込みがあり、確認面からの深さは約50cmを測った。遺構の性格は不明である。**遺構の時期** 出土遺物がなく、時期は不明である。

SK4

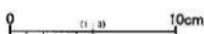
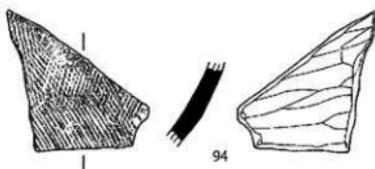
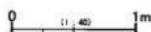
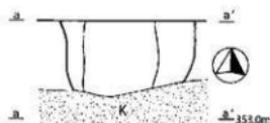


第19図 SK4

SK5



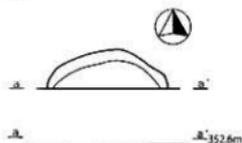
SK6



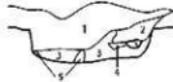
SK7



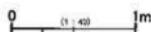
SK8



352.6m

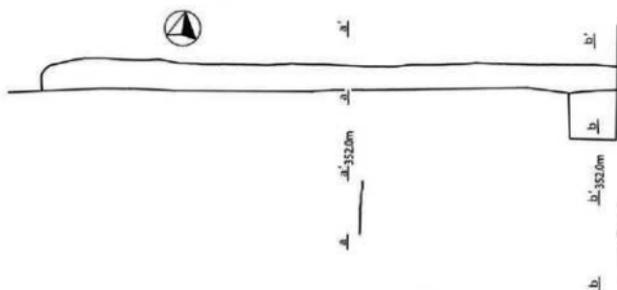


- 1 暗褐色土 礫 (Ø10cm 以下) を含む。黏土粒 (Ø5mm 以下) と明褐色粒 (Ø1mm 大) を多量に含む。黏土粒 (Ø5mm 以下) を少量含む。しまりやあり。粘性やあり。
- 2 暗褐色土 礫 (Ø1cm 以下) が少量混じる。黏土粒 (Ø5mm 以下) と明褐色粒 (Ø1mm 大) を多量に含む。濃土粒 (Ø5mm 以下) を少量含む。しまりやあり。粘性やあり。
- 3 黒褐色土 礫 (Ø3cm 大) が若干混じる。炭化物粒 (Ø2mm 以下) を多量に含む。しまりはあまりない。粘性やあり。
- 4 暗褐色土 礫 (Ø2cm 大) が少量混じる。しまりはあまりない。粘性あり。
- 5 黄褐色土 ブロック状。しまりなし。粘性はあまりない。

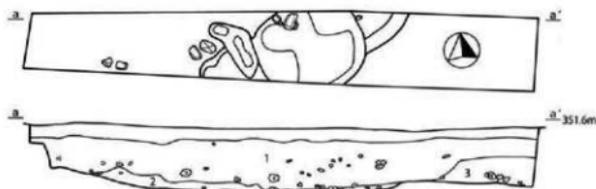


第20図 SK5~8

## 道路状遺構

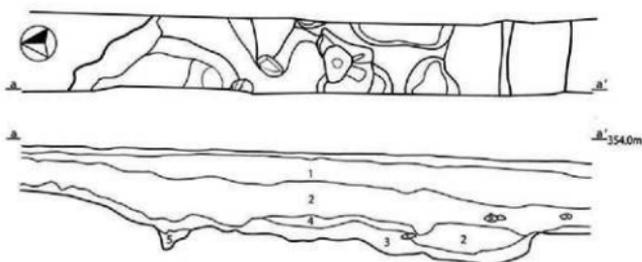


SX1

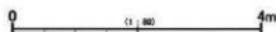


- 1 黒褐色土 礫 (Ø15cm 以下) が混じる。しまりあり。粘性ややあり。
- 2 暗褐色土 礫 (Ø20cm 以下) が混じる。褐色ブロック (Ø10cm 大) しまりあり。粘性あり。
- 3 黒褐色土 礫 (Ø15cm 以下) が混じる。酸化鉄粒 (Ø5mm 大) を若干含む。しまりあり。粘性あり。

SX2



- 1 暗褐色土 褐色粒 (Ø2cm 大) を若干含む。しまりあり。粘性ややあり。
- 2 暗褐色土 褐色粒 (Ø1cm 大) を少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
- 3 黒褐色土 黒褐色粘土ブロック、褐色ブロックを含む。しまりややあり。粘性あり。
- 4 暗褐色土 褐色ブロック (10×4×6、Ø2cm 大) を若干含む。粘性が強い。
- 5 暗褐色土 黄褐色ブロック (Ø3cm 大) を若干含む。しまりややあり。粘性ややあり。

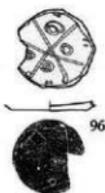


第21図 道路状遺構SX1・2

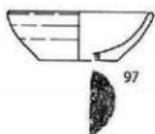
遺構外



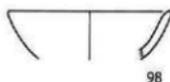
95



96



97



98



99



100



101



102



103

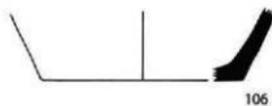


104



105

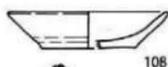
(102 ~ 105) 0 10cm



106



107



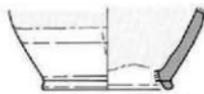
108



109



110



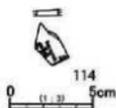
111



112



113



114

0 10cm



115

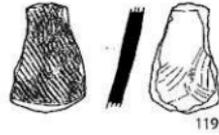
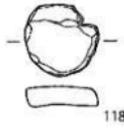
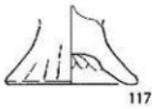


116

0 10cm

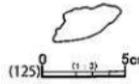
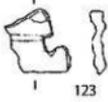
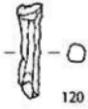
第22圖 遺構外

土製品・転用品



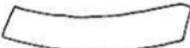
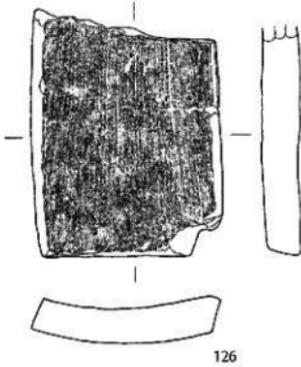
(117~119) 0 10cm

金属製品



(120~124) 0 5cm

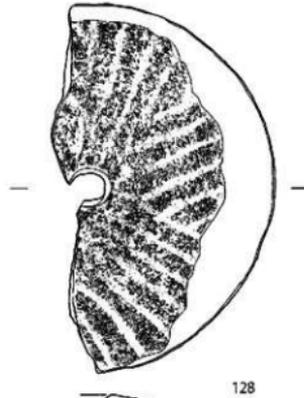
瓦



石製品



0 5cm



(126・128) 0 10cm

第23図 土製品・転用品・金属製品・瓦・石製品

表2 車地蔵遺跡支線6号地区 トレンチー寛

1F	SR1	4・9・10, SK1・2・8・9
1F	SR2	遺跡なし
2F	SR3	200跡跡
3F	SR4	4
4F	SR5	5, 6, 7
5F	SR6	
6F	SR7	SR9, SR4
6F	SR8	遺跡なし
7F	SR9	
8F	SR10	遺跡なし
9F	SR11	遺跡なし
10F	SR12	遺跡なし
11F	SR13	遺跡なし
12F	SR14	遺跡なし
13F	SR15	遺跡なし
14F	SR16	遺跡なし
15F	SR17	遺跡なし
16F	SR18	遺跡なし
17F	SR19	遺跡なし

表3 車地蔵遺跡支線6号地区 遺構 探

遺構名	位置	特徴
SR1	7F	10C後半～11C
SR2	17F	11C遺
SR3	2F	11C前半～中頃
SR4	17F	11C後半
SR5	37F(W)	10C前半
SR6	17F	11C後半
SR7	7F	11C後半
SR9	6F	8C中頃
SR10	17F	10C前半
SR11	17F	不明
SR12	17F	11C代以降
SR13	3・8F	11C前半
SR14	6F	中頃
SR15	37F(W)	9～10C頃
SR16	31F	9～10C頃
SR7	31F(W)	不明
SR18	17F	不明
SR19	17F	不明
SR1	5F	不明
SR2	6F	不明
記測跡	27F	不明

表4 車地蔵遺跡支線6号地区 遺物観察表

列	番号	遺構	層別	階別	口徑 (cm) 深さ (cm)	種類	出土	撮影技法	色調	備考
1	1	SR1	瓦葺	裏	(17.0)	瓦	瓦、白	(原) ロクロナデ、脚輪ナデ (内) ロクロナデ	灰キリブ	表土出土
2	2	SR1	土葺	裏	(13.6) (1.7)	瓦	瓦、赤	(原) ロクロナデ (内) ロクロナデ、同心円取文 (底) へら跡	褐色	
3	3	SR1	瓦葺	裏	14.0 8.0 6.0	瓦	瓦、黒	(原) ロクロナデ、脚輪、上を取りが (内) ロクロナデ、半脚輪 (底) 瓦取跡	灰白色	赤みが強い 半脚輪は赤い
4	4	SR1	瓦葺	裏	(13.0) (5.3) (9.0)	瓦	瓦、黒	(原) ロクロナデ、脚輪 (内) ロクロナデ、半脚輪 (底) 瓦取跡	灰白色	赤みが強い、内周込み半脚輪 瓦取跡あり 11C代以降
5	5	SR1	瓦葺	裏	(1.4)	瓦	瓦、黒、白・黒	(原) ロクロナデ、脚輪 (内) ロクロナデ、瓦取	灰白色	
6	6	SR1	土葺	裏裏面内坪	-	瓦	瓦、赤	(原) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 瓦取跡	灰褐色	瓦取跡で断面が中心部 瓦取跡、二次利用か
7	7	SR1	土葺	裏	(30.0)	瓦	瓦、白・黒	(原) 脚輪、ナデ (内) ハウス、ナデ	褐色	
8	8	SR2	土葺	坪	(10.2) (3.3) (4.2)	瓦	瓦、赤・白・黒	(原) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 瓦取跡、スノコ目瓦	褐色	
9	9	SR2	土葺	坪	(13.2) (4.0)	瓦	瓦、赤・白・赤	(原) ロクロナデ (内) ロクロナデ	灰褐色	
10	10	SR2	土葺	坪	(11.2)	瓦	瓦、赤・黒	(原) ロクロナデ (内) ロクロナデ	褐色	内周風乾、灯明跡
11	11	SR2	土葺	山台付坪	(1.1) (5.5) (5.6)	瓦	瓦、白・黒	(原) ロクロナデ、瓦取、脚輪跡 (内) ロクロナデ、瓦取、半脚輪取文 (底) 瓦取跡、竹取	褐色	内周風乾 内周瓦のみ取が強く風乾 灯明跡か
12	12	SR2	土葺	山台付坪	(1.4)	瓦	瓦、赤・黒	(原) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 瓦取跡	褐色	瓦取跡 内周や瓦取、 灯明跡か
13	13	SR2	土葺	山台付坪	0.5	瓦	瓦、赤・黒	(原) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) ロクロナデ	褐色	内周瓦取跡、 外周・瓦取の一部が空
14	14	SR2	瓦葺	裏	(16.4)	瓦	瓦、黒・黒	(原) ロクロナデ、脚輪 (内) ロクロナデ、脚輪	灰白色	内周土葺下土は瓦取 跡も取ら
15	15	SR2	土葺	坪	(9.5)	瓦	瓦、白・金	(原) ナデ、ハケズ (内) ナデ	褐色	
16	16	SR3	土葺	坪	1.8 2.1 3.8	瓦	瓦、赤・白	(原) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 瓦取、瓦取跡取	灰褐色	灯明跡 瓦取跡より内周の劣化
17	17	SR3	土葺	坪	(11.2) (3.1) 3.8	瓦	瓦、赤・黒	(原) ナデ (内) ナデ (底) 瓦取跡、スノコ目瓦	褐色	
18	18	SR3	土葺	坪	(11.0) (2.8) (4.8)	瓦	瓦、赤・白	(原) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 瓦取跡	褐色	全体の劣化 瓦取跡は母土
19	19	SR3	土葺	坪	(12.0)	瓦	瓦、赤・白・金	(原) ナデ (内) ナデ	褐色	内・外周の一部が瓦取 跡
20	20	SR3	土葺	坪	0.9	瓦	瓦、赤・白	(原) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 瓦取跡	褐色	
21	21	SR3	瓦葺	裏	-	瓦	瓦、黒、白	(原) ロクロナデ、脚輪 (内) ロクロナデ、脚輪 (底) 瓦取跡、瓦取	灰キリブ色	全瓦取跡
22	22	SR3	瓦葺	裏	(12.0)	瓦	瓦、黒、黒	(原) ロクロナデ、脚輪 (内) ロクロナデ、瓦取	灰色	瓦取跡、外周を瓦取りが
23	23	SR3	土葺	脚取山台坪	-	瓦	瓦、白・黒	(原) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) ロクロナデ、山台	褐色	
24	24	SR3	土葺	脚取山台坪	-	瓦	瓦、赤・黒	(原) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) ロクロナデ、山台	褐色	

国	番号	遺跡	種類	築期	門柱(南) 高さ(cm) 礎石(cm)	構成	敷上	塗料	色調	備考
12	25	S13	土塚部	溝	(25.6)		良 赤・白・金	(外) ナデ、ハクメ、割断面 (内) ナデ、ハクメ、割断面	明褐色	
12	26	S13	土塚部	溝	(31.2)		良 赤・白・金	(外) ナデ、ハクメ、割断面 (内) ナデ、ハクメ、割断面	明褐色	外壁が若干傾いている
12	27	S13	土塚部	溝	(28.6)		良 赤・白・金	(外) ナデ、ハクメ、割断面 (内) ナデ、ハクメ	明褐色	
12	28	S13	土塚部	溝	- 8.6		良 赤・白・金	(外) ナデ (内) ナデ (礎) 木腐葉	暗褐色	内壁が若干傾いている
12	29	S13	土塚部	溝	(28.0)		良 赤・白・金	(外) ハクメ、ナデ (内) ハクメ、ナデ、ヘラナデ	褐色	
12	30	S13	土塚部	溝	(22.3)		良 赤・白・金	(外) ハクメ、割断面、ナデ (内) 木腐葉	明褐色	内面が若干傾いている
12	31	S13	土塚部	溝	(23.0)		良 赤・白・金	(外) ハクメ、割断面、ナデ (内) ハクメ、木腐葉	明褐色	外壁が傾いている
12	32	S14	土塚部	坪	(12.4) (3.7) 3.6		良 赤・白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (礎) 割断面切取、スノコ状切取	灰色	
12	33	S14	土塚部	坪	(16.0) (6.1) (7.4)		良 赤・白	(外) ロクロナデ、焼土 (内) ロクロナデ、焼土 (礎) ナデ、柱残存	灰白色	つたけが内面中央より数センチある
12	34	S14	土塚部	溝	-		良 赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (礎) ナデ、柱残存	褐色	内面一般中央より数センチある外壁及び基礎がやや傾いている
14	35	S15	土塚部	溝	(11.5) (2.4) 3.6		良 赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラナデ (内) ロクロナデ (礎) ヘラナデ	暗褐色	赤みあり 全体がやや傾いている
14	36	S15	土塚部	溝	12.8 2.4 6.8		良 赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (礎) 割断面切取	褐色	赤みあり 全体がやや傾いている
14	37	S15	土塚部	坪	(12.2) (2.0) 3.0		良 赤・白・黒・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (礎) 割断面切取、スノコ状切取	明褐色	
14	38	S15	土塚部	坪	(1.0) (3.0) (7.5)		良 赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (礎) 割断面切取、スノコ状切取	暗褐色	赤みあり 全体がやや傾いている
14	39	S15	土塚部	坪	(13.0) (3.0) (6.3)		良 赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (礎) 割断面切取	褐色	外壁の大半が黒色 内面は部分的に傾いている
14	40	S15	土塚部	坪	(14.6) (3.8) 5.6		良 赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (礎) 割断面切取、スノコ状切取	(内) 褐色 (外) 黄褐色	黒色あり 全体がやや傾いている
14	41	S15	土塚部	坪	15.3 4.3 6.7		良 赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (礎) 割断面切取	暗褐色	黒色あり 内面中央より数センチある 全体がやや傾いている
14	42	S15	土塚部	溝	13.9 2.7 6.8		良 赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (礎) 割断面切取	褐色	黒色あり 全体がやや傾いている
14	43	S15	土塚部	坪	13.0 3.0 6.5		良 赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (礎) 割断面切取	褐色	黒色あり 外壁中央より数センチある 全体がやや傾いている
14	44	S15	土塚部	坪	13.5 3.5 6.7		良 赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラナデ (内) ロクロナデ (礎) 割断面切取、スノコ状切取	明褐色	赤みあり
14	45	S15	土塚部	坪	(7.5)		良 赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ、内証	褐色	黒色あり 全体がやや傾いている
14	46	S15	土塚部	坪	- (5.8)		良 赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (礎) 割断面切取、スノコ状切取	褐色	
14	47	S15	土塚部	溝	(6.0)	赤・白・黒	良 赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (礎) 割断面切取、スノコ状切取	褐色	黒色あり
14	48	S15	土塚部	坪	- (3.5)		良 赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (礎) 割断面切取	褐色	内面が傾いている
14	49	S15	土塚部	溝	7.6		良 赤・白	(外) ロクロナデ、割断面切取、焼土 (内) ロクロナデ、割断面切取 (礎) 柱石、柱石切取	灰白色	黒色あり 内面中央より数センチある 全体がやや傾いている
14	50	S15	土塚部	坪	(4.7)		良 赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (礎) ナデ	明褐色	片門 外壁が傾いている
14	51	S16	土塚部	坪	-		良 赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラナデ (内) 焼土、内証	褐色	黒色あり 内面が傾いている
15	52	S16	土塚部	溝	(14.0)		良 赤・白	(外) ロクロナデ、ヘラナデ、焼土 (内) ロクロナデ	褐色	赤みあり 内面が若干傾いている
15	53	S16	土塚部	坪	(10.4)		良 赤・白	(外) ロクロナデ、焼土 (内) ロクロナデ、焼土 (礎) ナデ、柱石	褐色	内面が傾いている 外壁が傾いている

圃番	圃名	種別	品種	口徑 (cm) 葉径 (cm) 根径 (cm)	構成	圃主	使用技法	色調	備考
15 54	S18	上耕型	坪	10.9 2.1 3.8	良	福、赤、白	(株) ロタロナデ (株) ロタロナデ (株) 日本赤松	緑茶褐色	全体的に劣化している
15 55	S18	上耕型	坪	10.2 3.1 3.7	良	黒、白、赤	(株) ロタロナデ (株) ロタロナデ (株) 鳴尾赤松	緑色	赤みあり 葉脈が若干粗軟をとり
15 56	S18	上耕型	坪	(12.2) (3.4) (5.4)	良	赤、白、赤、白、黒	(株) ロタロナデ (株) ロタロナデ (株) 鳴尾赤松	緑色	葉脈外周、葉脈間 葉脈が劣化している
15 57	S18	上耕型	坪	- - 4.1	良	赤、赤、白、黒	(株) ロタロナデ (株) ロタロナデ (株) 鳴尾赤松	(株) 鳴尾赤松 (株) 赤松	
15 58	S18	上耕型	坪	- - 5.6	良	赤、赤、赤、白	(株) ロタロナデ (株) ロタロナデ (株) 鳴尾赤松	緑色	内周が若干劣化している 葉脈が粗
15 59	S18	上耕型	坪	- - (8.2)	良	赤、赤、白、黒	(株) ロタロナデ (株) ロタロナデ (株) 鳴尾赤松	緑色	
15 60	S18	上耕型	坪	- - (8.0)	良	黒、赤、白、黒	(株) ハナメ、ナデ (株) ハナメ、ナデ (株) 本松	緑茶褐色	劣化なし
15 61	S18	上耕型	坪	(14.2) (3.6) 5.6	良	赤、赤、赤、白、赤	(株) ロタロナデ (株) ロタロナデ (株) 鳴尾赤松	緑色	赤、内周の、葉脈が 粗軟をとり、 葉脈が劣化している
15 62	S18	紅葉上耕	シケウ	(9.0) (9.0) (9.0)	良	赤、赤	(株) ロタロナデ (株) ロタロナデ (株) ロタロナデ	緑色	紅葉、葉脈 (シケウ) 紅葉の上で粗軟をとり 劣化している
15 63	S18	紅葉上耕	シケウ	(8.4) - -	良	赤、赤、白、赤	(株) ナデ (株) ロタロナデ	赤茶褐色	紅葉、葉脈 (シケウ) 紅葉の上で粗軟をとり 劣化している
17 54	S29	上耕型	坪	(15.2) (2.7) (11.4)	良	赤、白	(株) ロタロナデ (株) ロタロナデ (株) 鳴尾赤松、(株) ハナメ、ナデ	灰白色	粗軟、赤、白 葉脈より粗軟が粗軟に向
17 65	S19	上耕型	坪	- - (5.6)	不良	赤、赤、赤、赤、赤、赤	(株) ロタロナデ (株) ナデ	灰白色	粗軟による劣化
17 66	S19	上耕型	坪	(11.0) (2.4) (6.6)	良	赤、赤	(株) ロタロナデ (株) ロタロナデ (株) 鳴尾赤松	赤褐色	全周粗軟 赤、粗軟が粗軟をとり
17 67	S19	上耕型	小葉	- - (5.8)	良	赤、赤、白、赤	(株) ナデ、赤松 (株) ナデ	赤褐色	ナデ、赤松
17 68	S19	上耕型	紅葉上耕坪	(6.0)	中劣	赤、赤、赤、白、赤	(株) ナデ (株) ナデ (株) ナデ	緑色	
17 69	S19	上耕型	坪	- - -	良	赤、白	(株) ハナメ、ナデ (株) ハナメ、ナデ	赤褐色	内周粗軟、葉脈による劣化
17 70	S10	上耕型	坪	12.4 3.3 5.4	良	赤、白、赤、赤	(株) ヘチマ、赤松、目、目、目 (株) ロタロナデ (株) 鳴尾赤松、ヘチマ	緑色	粗軟粗軟、粗軟が 劣化している、粗軟が 粗軟が粗軟している
17 71	S10	上耕型	坪	(11.0) (4.6) (4.2)	良	赤、赤、赤、赤	(株) ヘチマ、赤松、目、目 (株) ロタロナデ (株) ヘチマ	緑茶褐色	
17 72	S10	上耕型	坪	14.7 5.4 5.2	良	赤、赤、赤、赤、赤	(株) ヘチマ (株) ロタロナデ、内周 (株) 鳴尾赤松、ヘチマ	緑色	内周粗軟粗軟
17 73	S10	上耕型	坪	(14.2) - -	良	赤、赤、赤	(株) ヘチマ (株) ロタロナデ、内周	赤茶褐色	
17 74	S10	上耕型	坪	(12.8) - -	良	赤、赤、赤、赤	(株) ロタロナデ、ヘチマ (株) ロタロナデ	緑色	粗軟あり
17 75	S10	上耕型	坪	(12.6) - -	良	赤、赤、白	(株) ロタロナデ、ヘチマ (株) ロタロナデ	緑色	
17 76	S10	上耕型	坪	(10.4) - -	良	赤、赤、赤、赤	(株) ロタロナデ (株) ロタロナデ	緑色	内周粗軟に劣化 外周の一部が粗軟 粗軟
17 77	S10	上耕型	坪	- - (6.0)	良	赤、赤、赤	(株) ロタロナデ、ヘチマ (株) ロタロナデ (株) 鳴尾赤松、ヘチマ	赤茶褐色	
17 78	S10	上耕型	坪	- - (4.4)	良	赤、赤、赤	(株) ロタロナデ、ヘチマ (株) ロタロナデ (株) 鳴尾赤松、ヘチマ	赤褐色	
17 79	S10	上耕型	坪	- - -	良	赤、白、赤	(株) ロタロナデ (株) ロタロナデ、粗軟粗軟	赤褐色	
17 80	S10	上耕型	坪	- - (9.6)	良	赤、赤、赤、赤	(株) ハナメ、赤松 (株) ハナメ、赤松 (株) 本松	赤茶褐色	内、外周が中劣
18 81	SK1	上耕型	坪	(11.6) (2.3) (6.4)	良	赤、赤、赤	(株) ロタロナデ (株) ロタロナデ (株) 鳴尾赤松	緑色	
18 82	SK3	上耕型	坪	- - (7.0)	良	赤、赤、赤、赤	(株) ナデ (株) ナデ (株) 鳴尾赤松、粗軟	緑色	粗軟に劣化粗軟か?
18 83	SK3	上耕型	坪	(9.4) - -	良	赤、赤、赤、赤	(株) ハナメ、赤松、粗軟 (株) ハナメ、赤松、粗軟	緑色	内周が中劣

## 第二章 車地蔵遺跡 7 年度調査区

区	番号	遺構	種別	基層	1層(6m) 深高(cm) 層位(cm)	構成	出土	整理方法	色調	備考
14	84	SK3	土塚区	羽蓋	(22.2)	瓦	赤・赤・白・金	(9) ハケム、餅ナデ	明赤褐色	
16	85	SK4	十層区	木柱	(13.0)	良	黒・黒・赤	(9) コクロナデ (9) コクロナデ (9) コクロナデ	灰褐色	1512スー-1612 地下部分
19	86	SK4	十層区	井	- 17.0	良	黒・白・赤	(9) レクロナデ (9) コクロナデ (9) コクロナデ (9) 同地蔵の遺	灰褐色	外壁一面白色 底面内側の壁をよろか
19	87	SK4	十層区	井	- 17.0	良	赤・赤・白・金	(9) レクロナデ (9) コクロナデ (9) 同地蔵の遺	灰色	
19	88	SK4	十層区	井	- 15.0	良	赤・赤・黒	(9) コクロナデ (9) レクロナデ (9) 同地蔵の遺	灰褐色	
19	89	SK4	十層区	堀	(12.4)	良	赤・赤	(9) コクロナデ (9) レクロナデ	褐色	
19	90	SK4	十層区	堀	-	良	赤・白	(9) 黒土、鉄粉か (9) 黒土	褐色	遺構番号が 1512スー
19	91	SK4	十層区	礎石	(15.2)	良	赤・白・黒	(9) コクロナデ (9) コクロナデ	灰色	
19	92	SK4	十層区	礎石	(17.0)	良	赤・赤・白	(9) レクロナデ、火葬 (9) コクロナデ、火葬 (9) 同地蔵の遺	灰色	内面壁面に黒い電通線あり
20	93	SK5	十層区	堀	(10.5)	良	赤・赤・赤・金	(9) ハケム、ナデ (9) ハケム (9) 木炭、1馬か	灰色	
20	94	SK5	十層区	堀	-	良	赤・白・赤	(9) タタキ (9) ヘラナデ	灰褐色	外壁及び内側に塗られている 電通線か
22	95	1Tr	十層区	井	(13.6) (4.5) (8.0)	良	赤・白・赤・黒・金	(9) レクロナデ、ヘウ割り (9) コクロナデ、隙文 (9) ハケム	明赤褐色	
22	96	1Tr	十層区	井	8.0	良	赤・白・赤・黒・金	(9) コクロナデ (9) コクロナデ、隙文、内面 (9) 同地蔵の遺、ヘウ割り	灰褐色	瓦片の間に隙文状ヘウ塗
22	97	1Tr	十層区	井	(11.8) (4.0) (6.4)	良	赤・白・金	(9) コクロナデ (9) コクロナデ (9) 同地蔵の遺	明赤褐色	表部赤土が濃い 外側が今塗られている
22	98	1Tr	十層区	井	(13.2)	良	赤・白	(9) コクロナデ (9) レクロナデ	褐色	外側面成
22	99	2Tr	十層区	井	(11.6)	良	赤・赤・黒	(9) レクロナデ、ヘウ割り、隙文 (9) コクロナデ、隙文	灰色	縁部外側に5枚の瓦片あり
22	100	1Tr	十層区	井	- 15.0	良	赤・赤・黒・金	(9) レクロナデ、ヘウ割り、隙文 (9) コクロナデ (9) 同地蔵の遺、同地蔵 (9) コクロナデ、同地蔵へウ割り (9) コクロナデ、同地蔵 (9) 同地蔵の遺	灰色	付け置き瓦 見込みの瓦片 縁部あり、私取柄か
22	102	1Tr	十層区	井	-	良	赤・白・黒	(9) タタキ、炭粉 (9) ナデ、ヘウナデ	灰色	
22	103	1Tr	十層区	井	-	良	赤・赤・黒	(9) コクロナデ、黒土、瓦 (9) コクロナデ	灰色	縁部外側に瓦片あり
22	104	1Tr	十層区	井	-	良	赤・赤	(9) レクロナデ、黒土、瓦 (9) コクロナデ	褐色	縁部外側に黒土
22	105	1Tr	十層区	井	-	良	赤・赤・黒	(9) ハケム (9) コクロナデ (9) ハケム、ナデ (9) 同地蔵の遺	褐色	表部外側に黒土
22	106	2Tr	十層区	井	(16.4)	良	赤・白	(9) 同地蔵の遺 (9) ナデ、餅ナデ (9) 同地蔵の遺	灰色	
22	107	3Tr	十層区	井	(11.9)	良	赤・白・赤	(9) コクロナデ (9) レクロナデ、ミガキ、内面	明赤褐色	内面褐色
22	108	3Tr	十層区	井	(12.0) (3.0) (7.6)	良	赤・白・赤	(9) ナデ (9) ナデ (9) 同地蔵の遺	明赤褐色	瓦片が今半壁
22	109	3Tr	十層区	井	- 17.0	良	赤・赤・黒・白・金	(9) ナデ (9) ナデ (9) 同地蔵の遺、スノコ目瓦	明赤褐色	
22	110	3Tr	十層区	井	(12.2)	良	赤・白	(9) コクロナデ、黒土 (9) コクロナデ、黒土	灰色	近代か
22	111	5Tr	十層区	井	- (10.8)	良	赤・白	(9) 同地蔵の遺、瓦片 (9) コクロナデ (9) 同地蔵の遺	灰褐色	
22	112	6Tr	十層区	井	(9.5) (2.2) (4.4)	良	赤・赤	(9) コクロナデ、黒土 (9) コクロナデ、黒土 (9) 同地蔵の遺	褐色	近代
22	113	6Tr	十層区	井	- 4.6	良	赤・白	(9) レクロナデ、黒土 (9) コクロナデ、黒土 (9) ナデ	灰色	遺構番号が 1512スー
22	114	10Tr	十層区	井	-	良	赤・赤	(9) コクロナデ (9) ハケム	褐色	
22	115	13Tr	十層区	井	(13.4)	良	赤・白・金	(9) レクロナデ (9) コクロナデ	明赤褐色	がらみ
22	116	16Tr	十層区	井	(16.4) (2.7) (2.8)	良	赤・白・赤・黒・金	(9) レクロナデ (9) コクロナデ (9) 同地蔵の遺	明赤褐色	外壁一面白色

調 査 号	道 路 種 別	種 別	厚 さ	口径 (mm) 縦高 (mm) 縦厚 (mm)	塊 成	面 土	製 作 技 法	色 調	備 考
23 117	SI1	土間舗	高床か	- (7.6)	-	瓦、赤・白	(外) ヘルナデ、ナデ (内) ナデ (敷) 和の巻、ナデ	洋陶色	てびくぬか

表5 車道成道跡支線6号地区 瓦 観察表

調 査 号	道 路 種 別	種 別	重 量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	製 作 技 法	色 調	備 考
23 126	SI3	瓦	1160.0	20.4	15.3	3.0	(内面) 鳴りき目 (外面) 鳥目肌、へつくり	複色赤、赤・白・小磯	

表6 車道成道跡支線6号地区 土製品等 観察表

調 査 号	道 路 種 別	種 別	重 量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	製 作 技 法	色 調	備 考
23 118	SI3	土間舗	23.96	4.9	4.3	1.1	(外) ナデ (内) ナデ		瓦面が割れている 工は均一・均厚か
23 119	SI6	転写版	29.36	6.0	4.1	0.7	(外) タタキ目 (内) 赤て丸肌、ナデ		内外目肌異、割れ 残部でも均一、厚み均一

表7 車道成道跡支線6号地区 石製品等 観察表

調 査 号	道 路 種 別	種 別	重 量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	石 質	備 考
23 127	SI1	-	30.49	5.2	2.4	2.9	石質	
23 128	SI4	石白	85.40	30.1	17.3	12.9	石灰岩	

表8 車道成道跡支線6号地区 金属品等 観察表

調 査 号	道 路 種 別	種 別	重 量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	材 質	備 考
23 120	SI1	釘	4.91	縦3.8	1.0	0.7		
23 121	SI1	釘	48.49	(15.6)	1.9	1.0		
23 122	SI10	不明	53.82	2.7	8.1	3.9		板か?
23 123	SI11	不明	5.63	2.6	2.3	0.5		
23 124	SI10	不明	5.14	2.9	3.6	0.3		
23 125	SI1	鉄釘	62.23	5.8	4.3	2.0		



SI1 東から



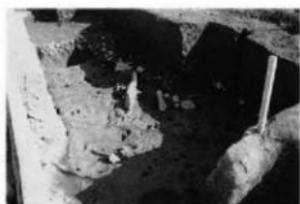
SI1 カマド 東から



SI2-3 北西から



SI3 カマド 北西から



SI2-3 完掘状況 北西から



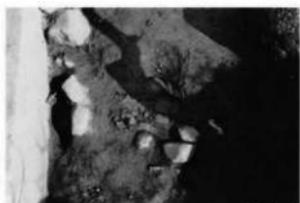
SI4 東から



SI5 北から



SI5 遺物出土状況 北から



SI5 カマド 西から



SI5 粘土 北から

PL2 車地蔵遺跡 支線6号地区



SI6 西から



SI8 東から



SI9 南から



SI9 カマド 南から



SI10 西から



SK1 東から



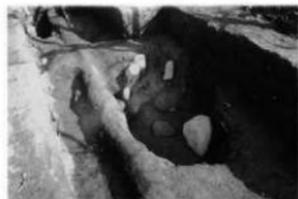
SK3 北西から



SK3 北から



SK3 北西から



SK3 完掘状況 北西から



SK4

西から



SK4

西から



1Tr

東から



1Tr

西から



3Tr

西から



2Tr(E)

東から



3Tr

西から



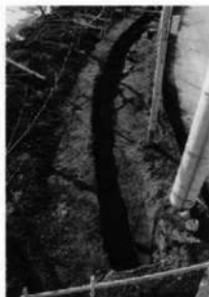
2Tr(W)

東から



2Tr(W)

西から



3Tr

東から

P L 4 車地蔵遺跡 支線6号地区



4Tr 北から



4Tr 北から



4Tr 北から



5Tr 東から



1Tr 北から



6Tr(S) 北から



8Tr 北西から



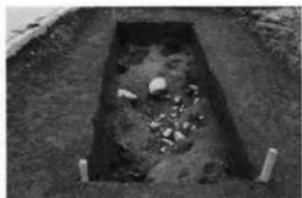
8Tr 南西から



9Tr 北から



10Tr 北から



11Tr 北東から



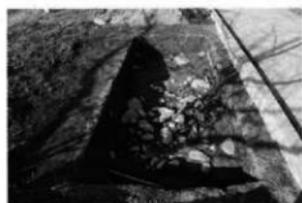
12Tr 南から



13Tr 北から



14Tr 南から



15Tr 南から



16Tr 南から



17Tr 北から



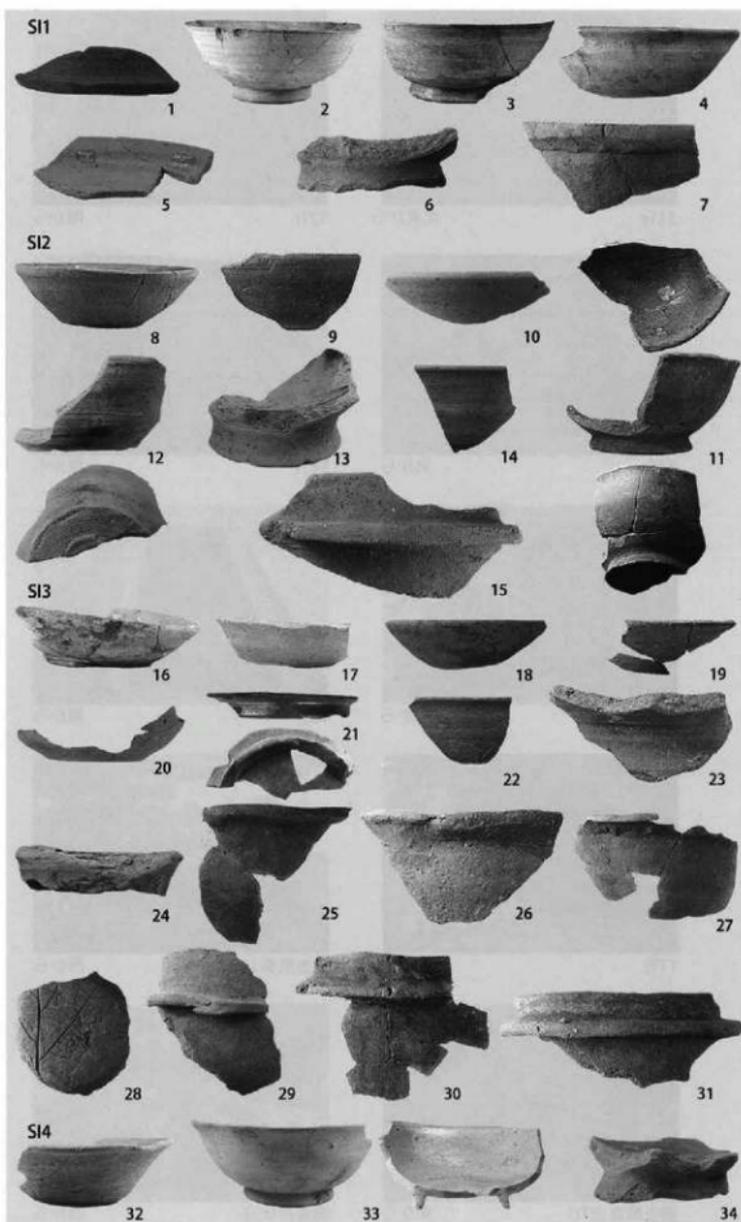
調査風景 (2Tr) 西から

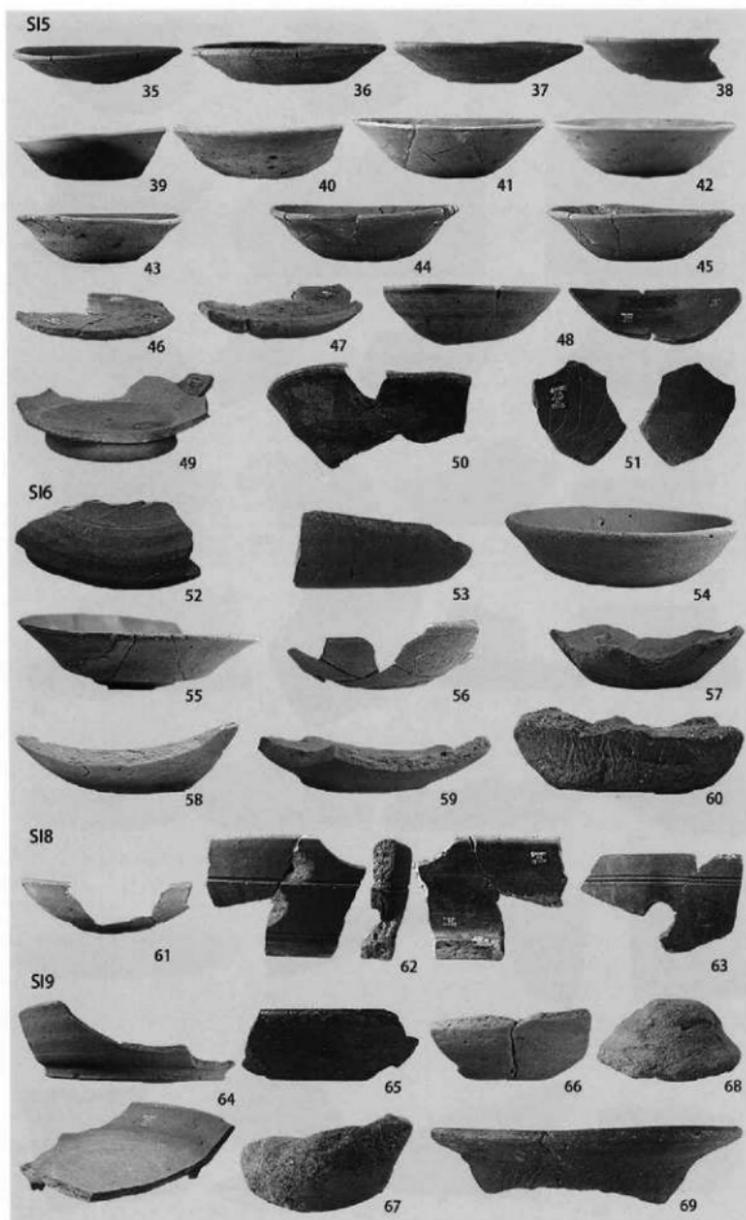


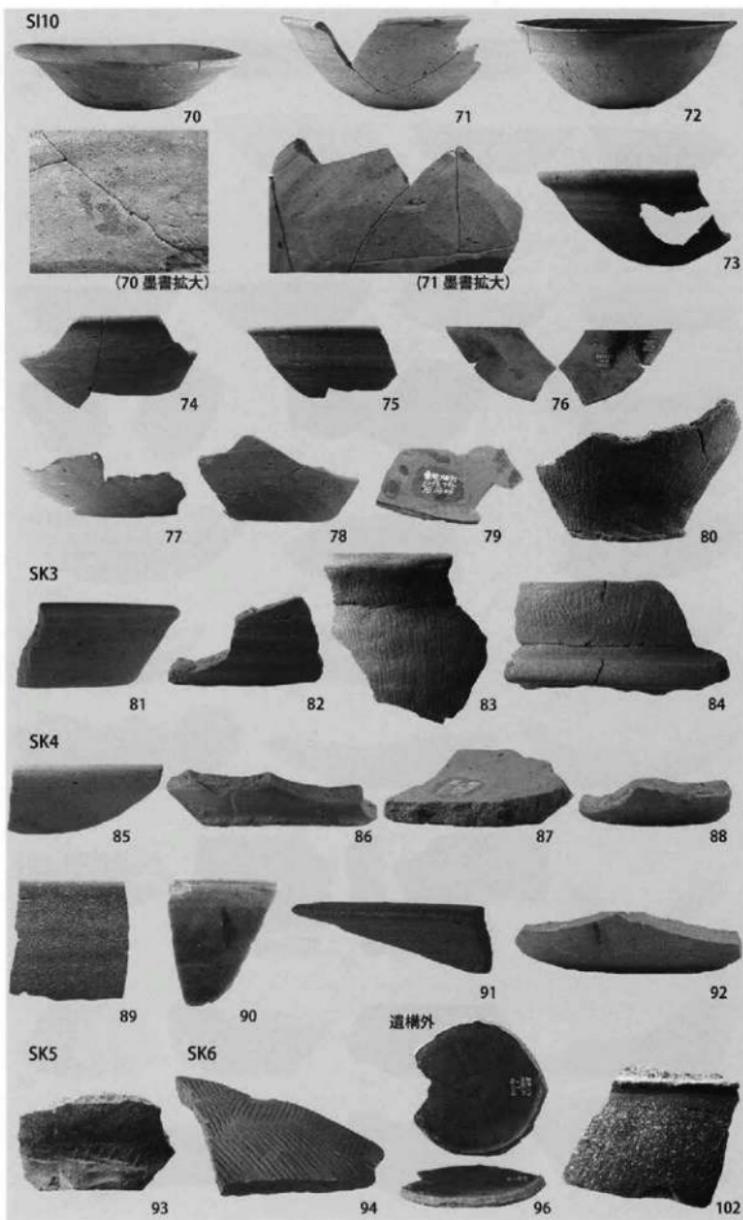
調査風景 (3Tr) 東から



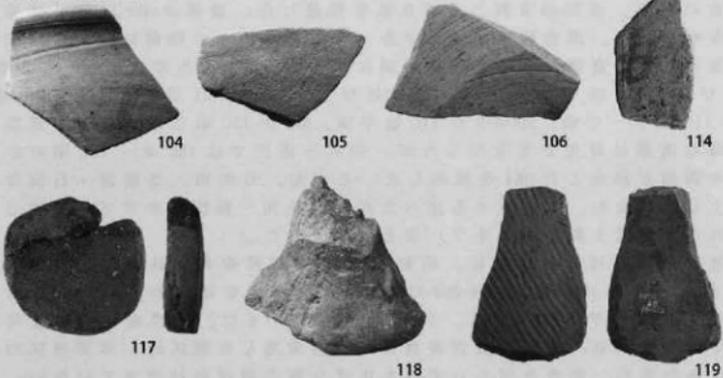
調査前状況 西から



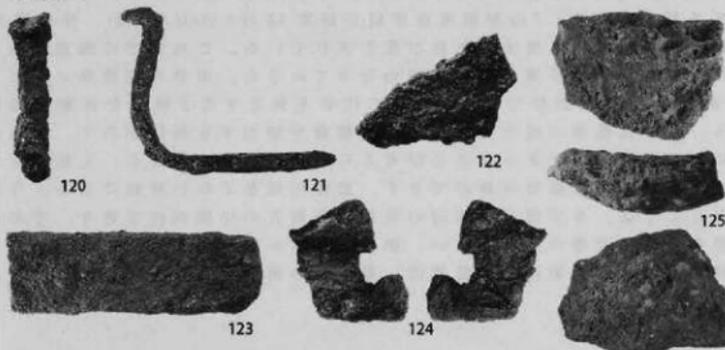




## 遺構外・墨書土器



## 金属製品



## 瓦



## 石製品



#### 4. まとめ

調査の結果、住居跡9軒、土坑9基を発見した。遺構は4Tr以南では確認できなかったが、調査範囲が狭小であったため、分布の範囲については明確ではない。出土遺物からの年代観の順にまとめると、古代ではSI9が8C中頃、SK5-6が9～10C頃、SI10が10C前半頃、SI5が10C後半頃、SI1が10C後半～11C頃、SI3が11C前半～中頃、SI4・6・8が11C後半頃、SI2が11C頃であった。中世段階の明確な遺構は発見できなかったが、中世～近代では15C末～16C頃のものかわらけや陶器が出土したSK4を検出した。その他、灯明皿・仏飯器・石臼などが出土した。また、報文中でも述べたが、大正期～戦後にかけての遺物と考えられる瓦質状土製品（シキワ）などが出土した。

車地蔵遺跡ではこれまでに、昭和49年の山梨県教育委員会による現国道20号部分（勝沼バイパス274・269・259地点）の調査をはじめ、一宮町教育委員会が実施したケーヨー地区、ケーヨー2次W・E区、向洋産業地区で発掘調査を行っている。一宮町教育委員会が調査実施した地区は、本調査区の隣接地にあたるが、残念ながらいずれも正式な報告書が刊行できていない。調査概要については、猪股善彦氏（「甲斐国分寺地域における集落構造と展開に関する若干の考察」『山梨県考古学協会誌第13号』2002等）が、住居跡9軒、掘立柱建物4棟を検出した旨が報告されている。これまでの調査成果から車地蔵遺跡における遺構の分布傾向をみてみると、国分寺創建期にあたる8C中頃から9C頃にかけてと、10～11C代を主体とする2時期を両期と推察できる。前者は集落の成立期、後者は遺構数が増加する傾向があり、集落の構造に何らかの変化があったことが考えられる。しかしながら、正規報告がされていないため詳細な分析ができず、想像の域をでない状況にある。今後の課題としては、まず国分寺周辺の発掘調査報告の早期刊行であり、その上で遺構の分布・変遷の分析を行い、掘立柱建物が存在する遺跡の性格についての検討や、集落の範囲的（位置的）単位での検討から、国分二寺との関連性を考えていきたい。

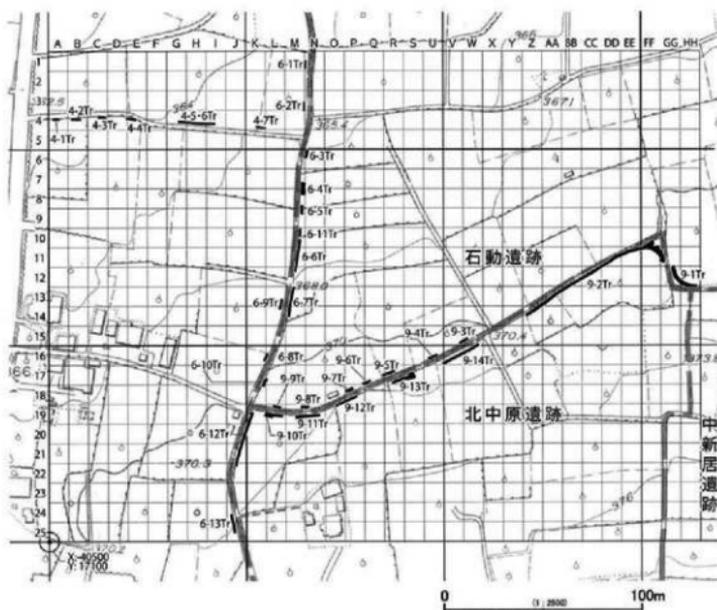
（望月）

### 第三章 石動遺跡支線4・6・9号地区、 北中原遺跡 (第3次) [98年度調査区]

#### I. 1998年度調査について

本調査は、石動遺跡及び北中原遺跡地内における畑地帯総合整備事業・一般農道支線4・6・9号建設に先立ち、平成10年(1998)度に一宮町教育委員会が実施した。調査は支線ごとに4号地区、支線6号地区、支線9号地区と区分し、工期と調整しながら順次進め、98年度調査全体では、奈良時代から中近世に至るまでの遺構を確認し、住居跡15軒、土坑6基、ピット4基、溝8条、石列3条、鋳造関連遺構等を検出した。本書では整理の都合上、調査当時に付番した番号は変更せず報告した。トレンチ名については各地区の支線番号を付し、4-1～7Tr・6-1～13Tr・9-1～14Trとした。遺構名については略記を使用し、調査地区ごとにSI1・SK1～とした。

なお、支線9号線は、石動遺跡・北中原遺跡の境界にあたり、道路南側に設定したトレンチ分は、北中原遺跡(第3次)となる。本書中の北中原遺跡(第3次)に該当する部分については、同調査名を付して示した。また、各調査区については遺構一覧表(表12・17)・トレンチ一覧表(表11・16)をご参照の上、ご留意いただきたい。



第24図 トレンチ位置図

## II. 支線4号地区

建設範囲の既存道路(東西約140m間)の拡幅部分に7箇所のトレンチを設定し、約46㎡を調査した。本書で報告するなかでは甲斐国分僧寺跡に最も近い位置にあたり、標高は約364mを測る。調査の結果、溝1条と瓦の出土を確認した。

### 1. 調査トレンチ

**4-1Tr** A-4グリッド、既存道路の南側に位置する。東西約4m、幅約1.1mの範囲を調査し、地表面から最深120cm掘削した。遺構は、東西方向の溝1条(SD1)を確認した。遺物はSD1以外では土師器環(4)・甕(5)、陶器塊(6)・灰釉陶器壺(7)など、10C代の遺物が出土した。

**4-2Tr** B-4グリッド、既存道路の南側に位置する。東西約5m、幅約1.1mの範囲を調査し、地表面から最深100cm掘削した。明確な遺構の痕跡は確認できなかったが、調査時の所見や出土遺物から、4-1・3Trで確認したSD1の延長部分の内であると推定した。遺物は土師器蓋(8・9)・坏(10～16)・高台付坏(20)、須恵器坏(17)・甕(18)など、8C後半～9C頃の遺物が出土した。なお、15は墨書土器で、欠損部により文字は判読できなかったが、底部に「[[ ]?」を確認した。その他、軒平瓦(26)・平瓦(27)・丸瓦(28)など四分寺に関連する遺物が出土した。

**4-3Tr** C-4グリッド、既存道路の南側に位置する。東西約4m、幅約1.1mの範囲を調査し、地表面から最深110cmまで掘削した。遺構は、東西溝1条(SD1)を確認した。調査時の所見から、4-1Trより延長するSD1と推定しており、遺物は須恵器坏(21)・甕(22・23)、中世の埴(24)が出土している。23の須恵器甕は、頸部に凸帯があり、群馬県等で確認されている頸部凸帯文付甕に類似する。

**4-4Tr** D-E4グリッド、既存道路の東側に位置する。東西約5m、幅約1.1mの範囲を調査し、地表面から最深100cmまで掘削した。溝が多く、明確な遺構はなかった。遺物は、灰釉陶器塊(25)が出土した。

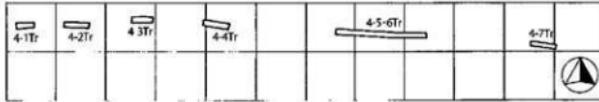
**4-5・6Tr** G・H-I-4グリッド、既存道路の北側に位置する。トレンチ設定後に両端を拡張し、あわせて東西約19m、幅1.1mの範囲を調査した。地表面から最深45cmまで掘削したが、耕作による攪乱以外は確認できなかった。

**4-7Tr** K-L-4グリッド、既存道路の北側に位置する。東西約5m、幅約1.1mの範囲を調査し、地表面から最深45cm掘削した。遺構・遺物は確認できず、地山面には人頭大の礫が混在した。

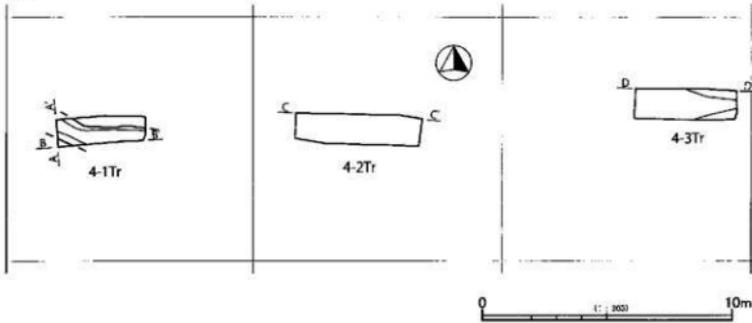
### 2. 発見した遺構・遺物

#### ・SD1〔第25・26頁〕

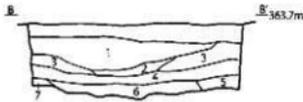
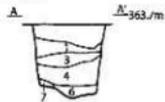
**位置と検出状況** A～C-4グリッド、4-1Tr、4-2Tr(内部にあたと推定)、4-3Trで確認した。東西方向に延びる遺構と推定されるが、規模は不明である。  
**出土遺物** いずれも小片で時期差が認められるが、土師器環(1～3)が出土した。1は内面見込み部まで咩文が施されている。2は咩文はなく、底部ヘラ削りしている。3は口縁部が玉縁状に肥厚している。また、溝内部と推定した4-2Trからは、墨書土器(15)や瓦(26～28)なども出土した。遺構の時期出土遺物を考慮し、幅をもたせて8C末～9C頃としておく。



SD1



4-1Tr



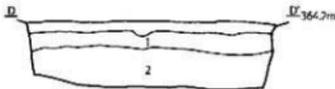
- 1 暗褐色土 しまりなし。
- 2 黒褐色土 しまりなし。
- 3 黒褐色土 ややしまりあり。
- 4 褐色土 ややしまりあり。
- 5 褐色土 黒色土を含む。
- 6 褐色土 黒色土を含む。
- 7 黄色土 砂質。

4-2Tr

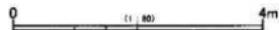


- 1 暗褐色土
- 2 褐色土 ややしまりあり。
- 3 褐色土 黄色土、黒色土砂を含む。

4-3Tr

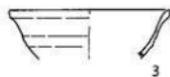
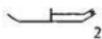
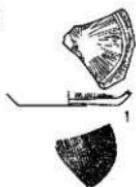


- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 人糞大の殻を多量に含む。

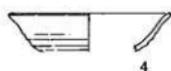


第25図 調査区・遺構実測図

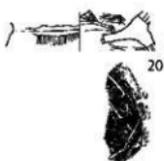
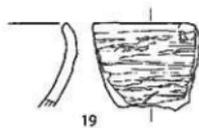
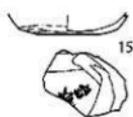
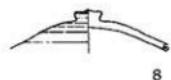
SD1



4-1Tr



4-2Tr

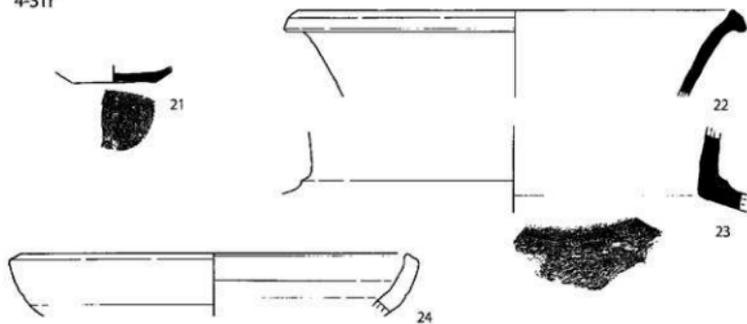


0 10cm

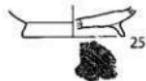
0 10cm

第26圖 出土遺物(1)

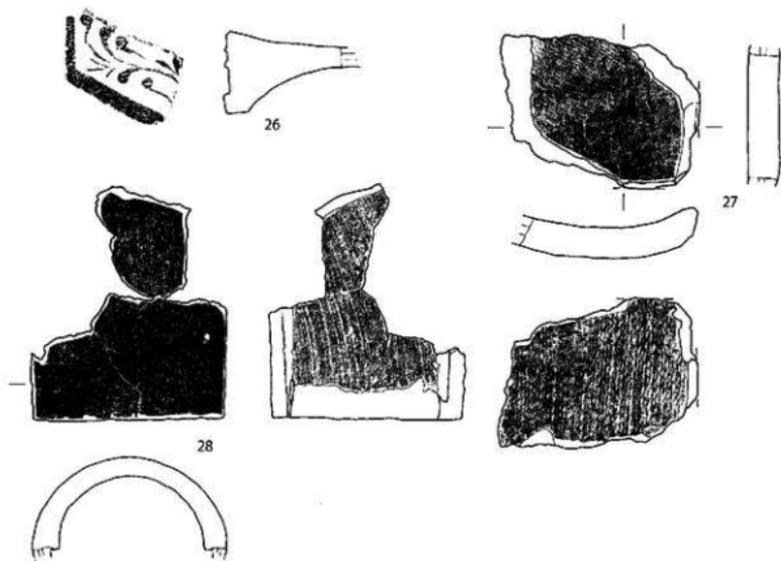
4-3Tr



4-4Tr



瓦



0 10cm

第27圖 出土遺物(2)

表9 石鳥追跡支線4号地区 遺物観察表

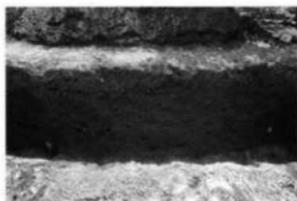
順 号	遺 跡	形 状	器 種	口径 (cm) 底径 (cm)	底 径	胎 土	製作技法	色 調	備 考				
26	1	4	1	酒	十部型	灰	-	(8.0)	良	西出、赤・白	(内) ヘラ削り (外) ロクロナデ、埴文 (底) 漆土肌、ヘラ削り	褐色	底面は中央が窪み、 ヘラ削り痕も表面が見える
26	2	4	1	酒	十部型	灰	-	(14.0)	良	西出、赤・白	(内) ヘラ削り (外) ロクロナデ (底) ヘラ削り	黄褐色	
26	3	4	1	酒	十部型	灰	-	(13.0)	良	西、赤・白	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	褐色	口縁部は窪み、先端がやや尖る 外面下部に深いシワが見える
26	4	4	1	酒	十部型	灰	-	(13.0)	良	西、白	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ	褐色	外面下部に深いシワが見える
26	5	4	1	酒	十部型	灰	(25.6)	-	良	西、白・金	(内) ハケム (外) ハケム、ナデ	褐色褐色	ハケム跡は細かく、 口縁部が見える
26	6	4	1	酒	十部型	灰	(5.0)	-	良	中・中出、白	(内) ロクロナデ、火車 (外) ロクロナデ、火車 (底) 漆土肌	黄褐色	底面は窪み、上部のようき色調 をしている
26	7	4	1	酒	十部型	灰	(9.0)	-	良	東、黒	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ (底) 漆土肌	灰褐色	
26	8	4	2	酒	十部型	灰	-	-	良	東、赤・白	(内) ロクロナデ、埴文、ナデ (外) ロクロナデ、埴文	褐色	内外面に口心凹状 又は溝状凹状あり
26	9	4	2	酒	十部型	灰	(16.0)	-	良	東、赤・白・黒	(内) ロクロナデ、ヘラ削り (外) ロクロナデ、埴文	褐色	内外面に口心凹状 又は溝状凹状あり 縁部が小さく盛りあがっている
26	10	4	2	酒	十部型	灰	(17.0)	-	良	東、赤・白	(内) ロクロナデ、ミガキ (外) ロクロナデ、埴文	褐色	
26	11	4	2	酒	十部型	灰	-	(7.0)	良	東、赤・白	(内) ヘラ削り、ミガキ (外) ロクロナデ、埴文	褐色	内面、縁部凹状あり
26	12	4	2	酒	十部型	灰	(6.0)	-	良	東、白・金	(内) ヘラ削り、ミガキ (外) ロクロナデ、埴文	褐色褐色	底面が凹状化している
26	13	4	2	酒	十部型	灰	(8.0)	-	良	東、赤・白	(内) ロクロナデ、ヘラ削り (外) ロクロナデ、埴文 (底) ヘラ削り	褐色	底面はヘラ削り・ミガキ後も
26	14	4	2	酒	十部型	灰	(11.4) (8.0)	-	良	中・中出、赤・白	(内) ロクロナデ、ヘラ削り (外) ロクロナデ、埴文	褐色	底面の窪みが少ない 内面に一部窪み、凹状あり
26	15	4	2	酒	十部型	灰	(8.0)	-	良	西、赤・白・金・ 黒	(内) ヘラ削り (外) 埴文 (底) ヘラ削り、ミガキ、 漆土肌、打門(ツギ)	褐色	底面は中や丸みあり また中央がやや凹む
26	16	4	2	酒	十部型	灰	(10.0)	-	良	中・中出、赤・白	(内) ヘラ削り (外) ナデ、有線 (底) ヘラ削り	褐色	
26	17	4	2	酒	十部型	灰	(8.0)	-	良	中・中出、白	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ、漆土肌	灰白色	底面が凹状化している
26	18	4	2	酒	十部型	灰	(10.2)	-	良	中・中出、白	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ (底) 刷毛削り	灰白色	
26	19	4	2	酒	十部型	灰	-	-	良	西、白	(内) ロクロナデ、ミガキ (外) ロクロナデ、ミガキ、内黒	褐色	底面は 中央部凹状 外周の一部が窪んでいる
26	20	4	2	酒	十部型	灰	-	-	良	西、白・金	(内) 刷毛削り (外) 刷毛削り (底) 漆土肌、刷毛削り	褐色褐色	底面により劣化 部分的に窪んでいる
26	21	4	2	酒	十部型	灰	(6.0)	-	良	西、白	(内) ロクロナデ (外) ロクロナデ (底) 刷毛削り	褐色褐色	
26	22	4	2	酒	十部型	灰	(37.0)	-	良	西、白	(内) ロクロナデ、内黒 (外) ロクロナデ	褐色	内面凹状 (黄色のまだら状)
26	23	4	2	酒	十部型	灰	-	-	良	中・中出、白・黒	(内) ナデ (外) 刷毛削り、漆土肌、刷毛削り	褐色	縁部凹状 刷毛削り
26	24	4	2	酒	十部型	灰	(3.0)	-	良	中・中出、白	(内) ナデ、刷毛削り (外) ナデ	黄褐色	内面上部が
26	25	4	2	酒	十部型	灰	(8.0)	-	良	西、白	(内) ナデ (外) ナデ (底) 刷毛削り、漆土肌	褐色褐色	

表10 石鳥追跡支線4号地区 瓦観察表

順 号	遺 跡	形 状	重量 (g)	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	焼 成	胎 土	製作技法	色 調	備 考			
27	26	4	2	瓦	半平瓦	560	10.0	10.4	6.7	良	中・中出、白・金	(外面) ヘラ削り (内面) ハケム	黄褐色	
27	27	4	2	瓦	平瓦	590	11.4	14.8	2.5	良	東、白・黒	(外面) 刷毛削り (内面) 赤土肌、ヘラ削り	灰褐色	
27	28	4	2	瓦	瓦	720	18.9	15.6	1.6	良	西、白	(外面) ヘラ削り (内面) 刷毛削り	黄褐色	



4-1Tr 東から



4-1Tr 北から



4-1Tr-SD1 東から



4-2Tr 東から



4-3Tr 西から



4-4Tr 西から



4-5Tr 西から



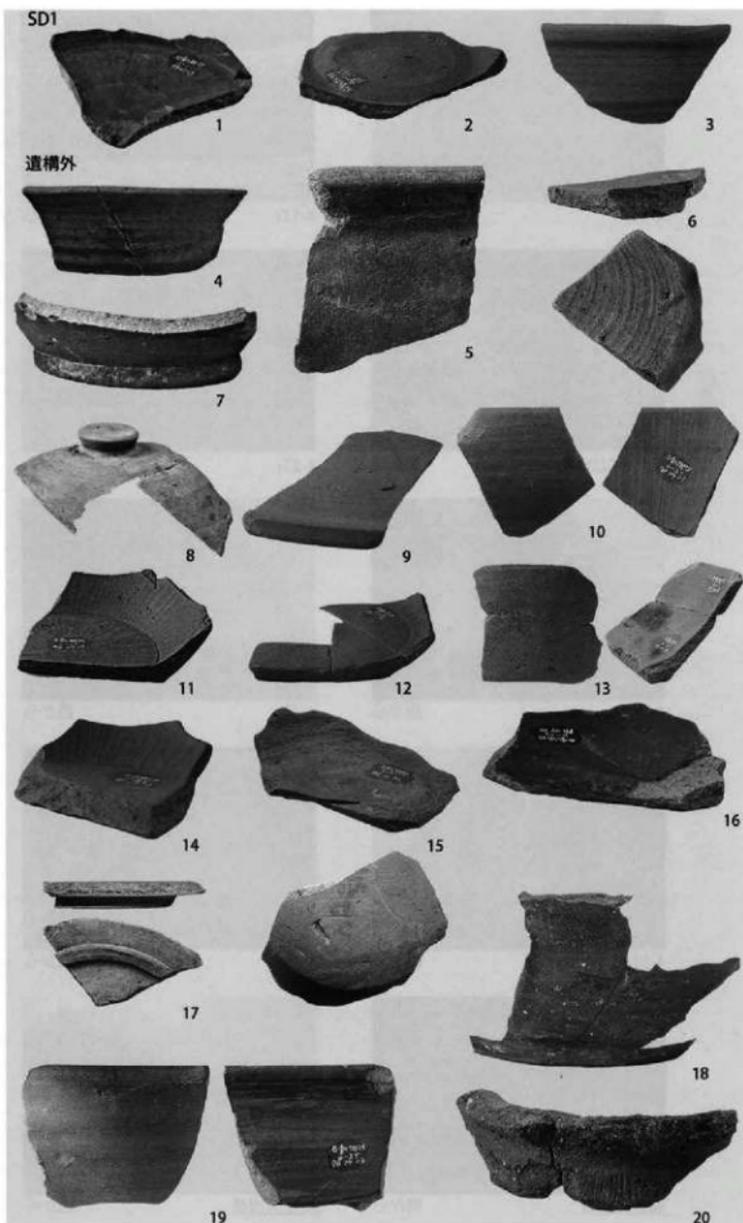
4-7Tr 西から



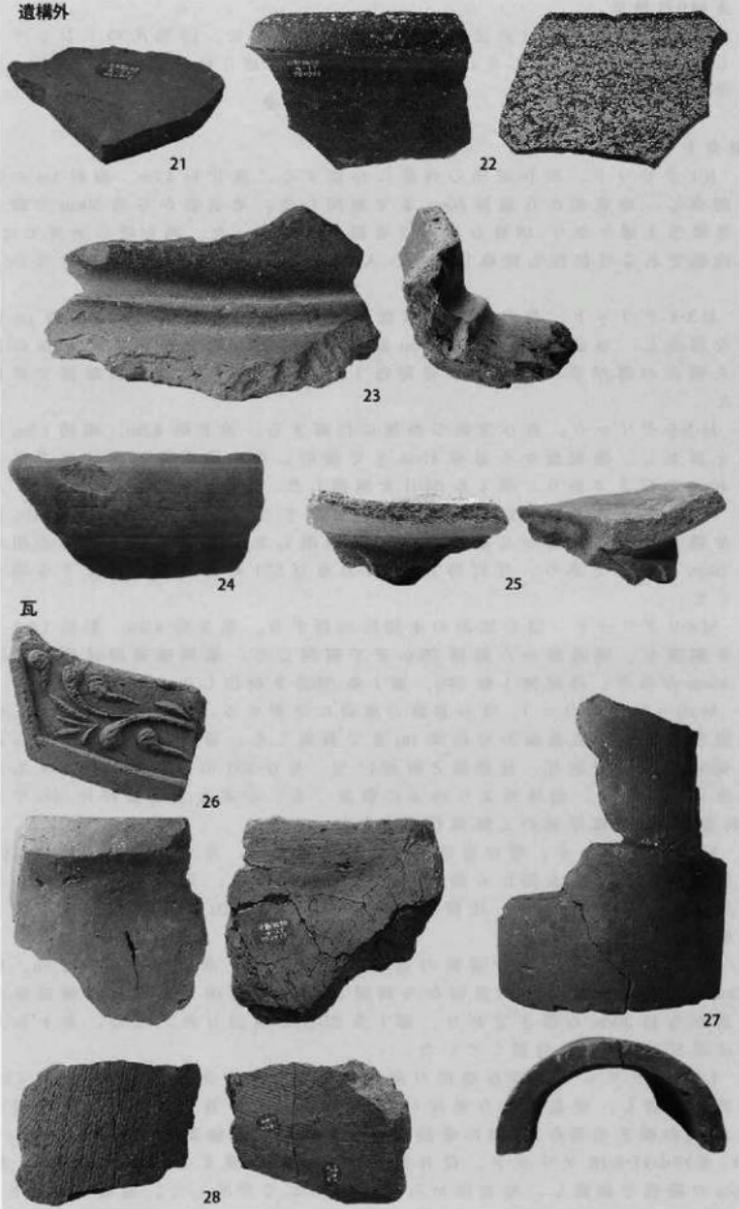
調査区遠景 東から



調査区遠景 西から



遺構外



## Ⅲ. 支線6号地区

建設範囲の既存道路（南北約200m間）の拡張部に、13箇所のトレンチを設定し、約162㎡を調査した。調査の結果、住居跡9軒、溝4条、石列1条を検出した。

### 1. 調査トレンチ

**6-1Tr** N-1 グリッド、既存道路の西側に位置する。南北約4.7m、幅約1mの範囲を調査し、地表面から最深80cmまで掘削した。地表面から約50cmで礫を含む暗褐色土層となり、明確な遺構は確認できなかった。調査時の所見では、溝の内部である可能性も推察したが、人為的な遺構の存在は確認できなかった。

**6-2Tr** M-3・4 グリッド、既存道路の西側に位置する。南北約4.5m、幅約1mの範囲を調査し、地表面から最深45cmまで掘削した。地表面から約30cmの深さで人頭大の礫が多く混在する暗褐色土となり、明確な遺構は確認できなかった。

**6-3Tr** M・N-6 グリッド、既存道路の西側に位置する。南北約4.2m、幅約1.3mの範囲を調査し、地表面から最深45cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約40cmの深さであり、溝1条(SD1)を確認した。

**6-4Tr** M-7・8 グリッド、既存道路の東側に位置する。南北約6.5m、幅約2mの範囲を調査し、地表面から最深60cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約30cmの深さであり、住居跡2軒(SI1・2)及びSD1の延長部と推定する溝を検出した。

**6-5Tr** M-8・9 グリッド、既存道路の東側に位置する。南北約4.5m、幅約1.5mの範囲を調査し、地表面から最深75cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約45cmの深さ、住居跡1軒(SI6)、溝1条(SD3)を検出した。

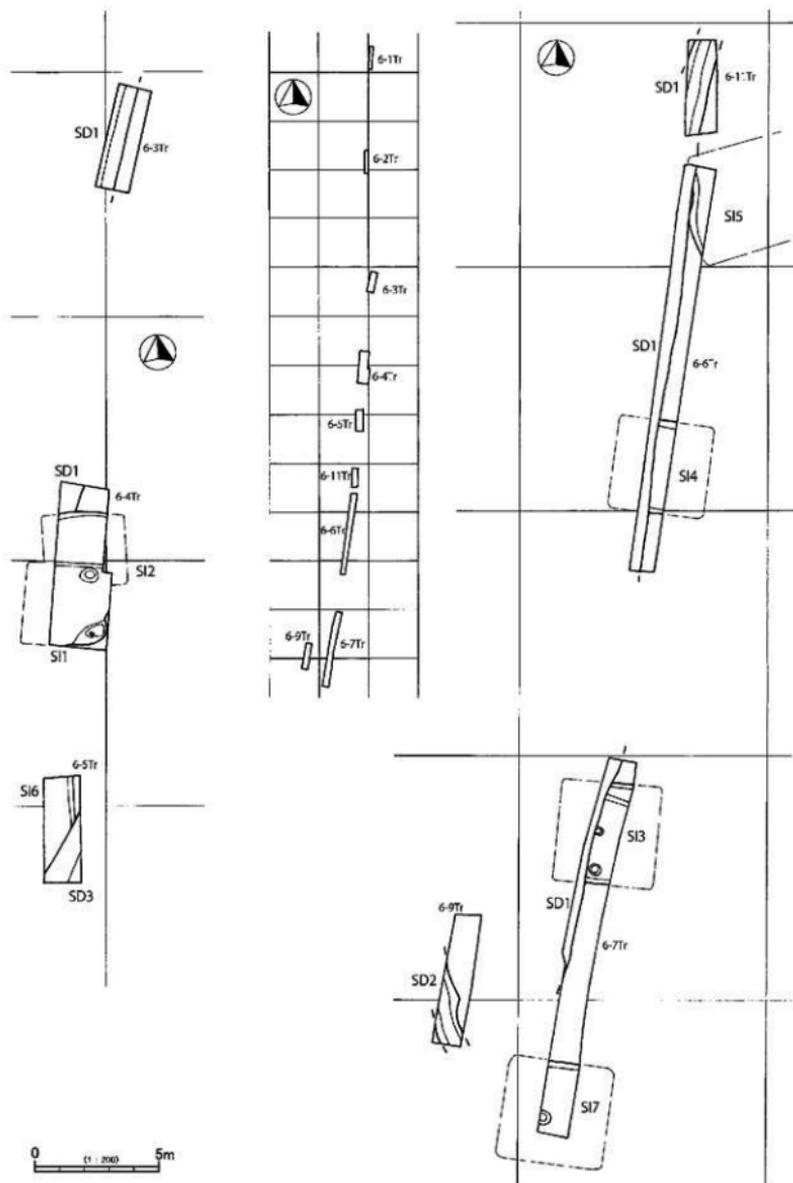
**6-6Tr** M-10～M-12 グリッド、既存道路の東側に位置する。南北約16.5m、幅約1.2mの範囲を調査し、地表面から最深1mまで掘削した。遺構確認面は地表面から約60cmの深さであり、住居跡2軒(SI4・5)、及びSD1の延長部と推定する溝を検出した。また、遺構外より内面に刻書「大」がある土師器坏片(47)や羽釜(48)など、10C後半頃の土師器が出土した。

**6-7Tr** M-13・14 グリッド、既存道路の東側に位置する。南北約15.5m、幅約1.1mの範囲を調査し、地表面から最深65cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約20cmの深さであり、住居跡2軒(SI3・7)、及びSD1の延長部と推定する溝を検出した。

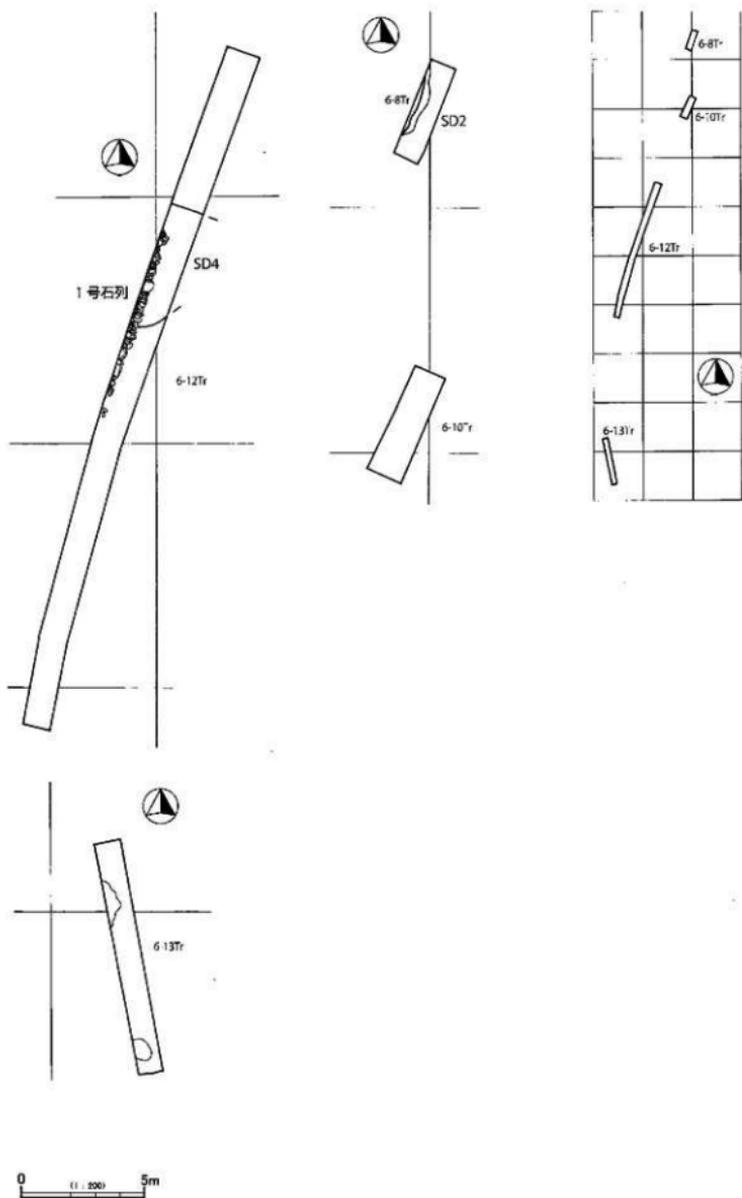
**6-8Tr** K-L-16 グリッド、既存道路の東側に位置する。南北方向に約4.3m、幅約1.3mの範囲を調査し、地表面から最深90cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約30cmの深さであり、溝1条(SD2)を検出した。なお、本トレンチはほぼSD2の内部に位置していた。

**6-9Tr** L-13・14 グリッド、既存道路の東側に位置する。南北約5.4m、幅約1.1mの範囲を調査し、地表面から最深1mまで掘削した。遺構確認面は地表面から約50cmの深さであり、SD2の延長部と推定する溝を確認した。

**6-10Tr** K-17-L-17-K-18 グリッド、既存道路の東側に位置する。南北約4.6m、幅約1.5mの範囲を調査し、地表面から最深65cmまで掘削した。遺構は確認できなかった。



第28図 遺構位置図(1)



第29图 透槽位置图(2)

**6-11Tr** M-10 グリッド、既存道路の東側に位置する。南北約 3.7m、幅約 1m の範囲を調査し、地表面から最深 60cm まで掘削した。遺構確認面は明確ではないが、地表面から約 40cm の深さで SD1 の延長部と推定する溝を検出した。他、土師器片 (49) が出土した。

**6-12Tr** K-19-20・J-20～22 グリッド、既存道路の東側に位置する。南北約 29m、幅約 2m の範囲を調査し、地表面から最深 150cm まで掘削した。遺構確認面は地表面から約 1m の深さであり、溝 1 条 (SD4) と石列を検出した。他、土師器片 (50)、リング状の不明金属製品 (52) などが出上した。

**6-13Tr** J-24・25 グリッド、既存道路の東側に位置する。南北約 9.5m、幅約 1.1m の範囲を調査し、地表面から最深 55cm まで掘削した。明確な遺構はなかったが、地表面から約 20cm の深さで硬化面を確認した。他、丸瓦 (53) が出土した。

## 2. 発見した遺構・遺物

### ・SI1〔第30・31回〕

**位置と検出状況** M-8 グリッド、6-4Tr、に位置する。重複する SI2 を壊していた。調査範囲においては北壁を確認し、カマド位置から南壁ラインを推定すると、南北壁間は約 3.5m を測った。確認面から床面までの深さは、約 35cm であった。**遺構の特徴** カマドは南西隅に位置し、炭化物と焼土及び構築材の一部と考えられる礫を確認した。**出土遺物** 土師器皿 (1～3・8)・杯 (4～7・9～16) 鉢 (17)・脚高台 (18)・甕 (19・20)・羽釜 (21) などが出上した。主にカマド周辺でまとまって出土しており、土師器片は口縁が玉縁化しており、器面が黒変したり、煤けていたりした。**遺構の時期** 出土遺物の時期から、10C 後半頃に位置付けておきたい。

### ・SI2〔第30回〕

**位置と検出状況** M-7 グリッド、6-4Tr に位置する。調査範囲においては、重複する SI1 に壊されていた。ほぼ床面のみであり、遺存部分は南北約 2m を測った。**遺構の特徴** 検出した範囲には、カマド施設等はなかった。SI1 に伴う棚状施設などの可能性も考えられる。**遺構の時期** SI1 とは別遺構とすれば、出土遺物がないため明確ではないが、重複関係から SI1 構築以前としておきたい。

### ・SI3〔第32回〕

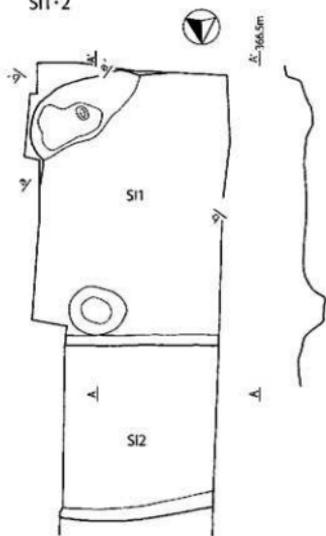
**位置と検出状況** M-13 グリッド、6-7Tr の北側に位置する。重複する SD1 に西側を壊されており、調査範囲では北壁と南壁を確認した。検出した範囲では南北の壁間は約 3.5m、確認面から床面までの深さは約 30cm を測った。

**遺構の特徴** 検出した範囲にカマド施設はなかった。中央と南端でピットを確認したが、いずれも床面からの深さは 30cm 未満と浅く、性格は明確ではない。北側では棚状施設的な約 10cm 程度の段差が確認できた。**出土遺物** 灰釉陶器塊 (22)、土師器甕 (23) が出土した。やや厚みのある付高台で、外面残存部には釉を確認できないが、内面は刷毛塗られており、見込み部は無釉となっている。23 の土師器甕は外面だけでなく、底部にヘラ状またはハケ状の調整痕がみられる。**遺構の時期** 出土遺物が少なく、明確ではないが、10C 末頃としておく。

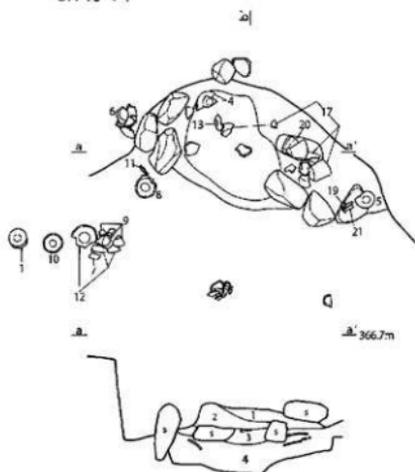
### ・SI4〔第32回〕

**位置と検出状況** M-11 グリッド、6-6Tr の南側に位置する。重複する SD1 に

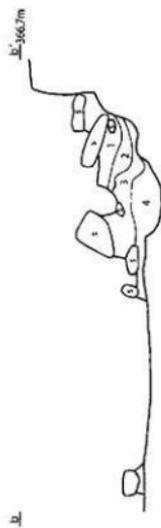
S11・2



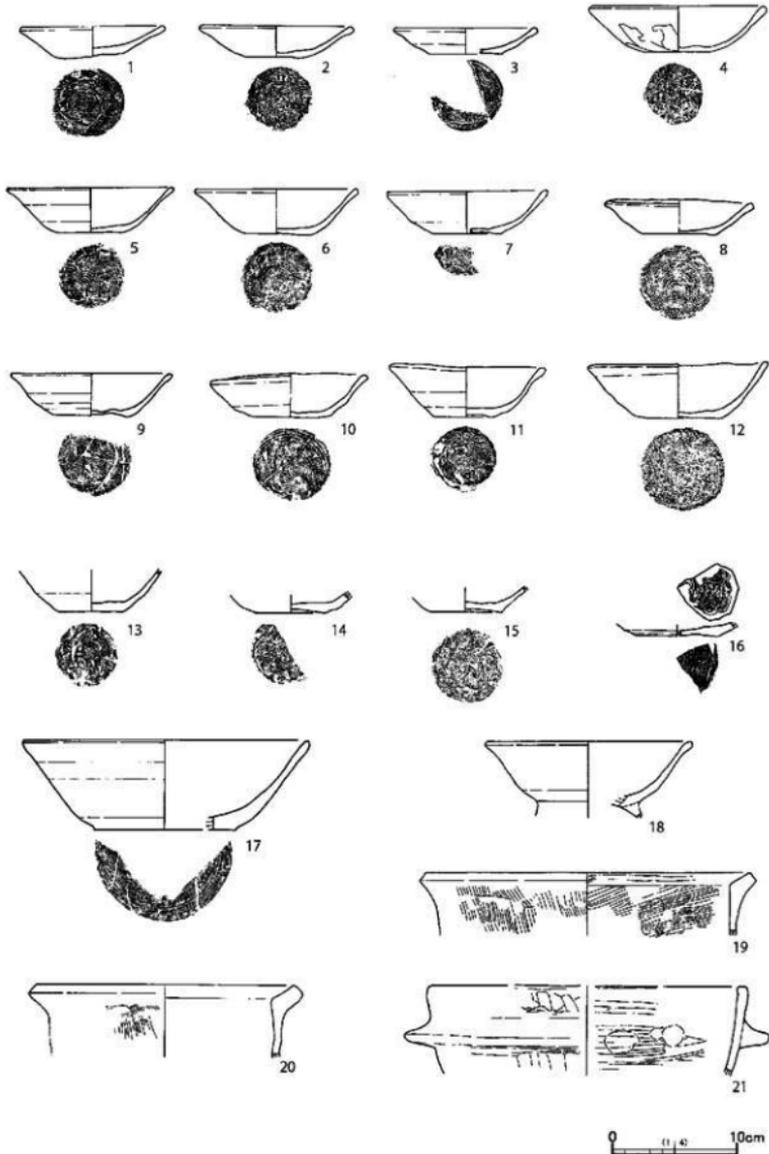
S11 カマド



- 1 黄褐色土 粘土ブロックを含む、天井礫層土。
- 2 海緑色土 褐色粘土ブロックを含む。
- 3 黄褐色土
- 4 塩黄褐色土 黄色土粒、カーボンを多く含む。



第30図 S11(1)・S12



第31圖 S11(2)

西側を壊されており、調査範囲では北壁と南壁を確認した。検出した範囲では、南北の間隔は約3.7m、確認面から床面までの深さは、約50cmを測った。**遺構の特徴** 検出した範囲にカマド等の施設はなかった。**出土遺物** いずれも小片であったが、脚高台(24)・甕(26)、灰釉陶器壺(25)、などが出土した。**遺構の時期** 出土遺物が少なく明確ではないが、10C後半頃としておく。

・SI5〔第33図〕

**位置と検出状況** M-10グリッド、6-6Trの北側に位置する。SD1に西側を壊されており、調査範囲では西壁を確認した。確認面から床面までの深さは約30cmを測った。**遺構の特徴** 検出した範囲にはカマド等の施設はなかった。**出土遺物** 土師器皿(27)・灰釉陶器壺(28)、甕(29)などが出土した。27は墨書七器であり、外面底部に墨筆が確認できるが破片のため判読できなかった。三日月状の短い付高台で、底部は回転系切痕を残している。**遺構の時期** 出土遺物の時期から、10C後半頃に位置付けておきたい。

・SI6〔第33図〕

**位置と検出状況** M-8-9グリッド、6-5Trに位置する。両側は重複するSD3に壊されていた。調査範囲においては東壁を確認した。**遺構の特徴** 検出した範囲では、カマド等の施設はなかった。**出土遺物** 土師器皿(30)・環(31・32)・灰釉陶器壺(33)などが出土した。土師器環はいずれも底部には回転系切痕が残る。器面はやや劣化していた。33の灰釉陶器は口縁部で小さく外反する器形で、内外面を付け掛け施釉されている。また、トチンの跡や別個体の口縁部が外面に付着していることから、重ね焼されたものと推測される。**遺構の時期** 出土遺物から、11C中頃としておきたい。

・SI7〔第34図〕

**位置と検出状況** M-14グリッド、6-7Trの南側に位置する。重複する遺構はなく、調査範囲では北壁を確認した。検出した範囲では確認面から床面までの深さは約15cmを測ったが、土層観察から地表面から約10cmの深さから一部覆土が確認され、床面までは約35cmを測る。**遺構の特徴** 検出した範囲にはカマド施設はなかった。トレンチの西壁にかかる位置でピット1基を確認したが、性格については不明である。**出土遺物** 土師器皿(34)・環(35～37)・脚高台付環(38)・甕(39)などが出土した。土師器皿は底部には回転系切痕がみられ、口縁部が玉縁化している。体部へラ削り調整されたものと、ロクロナデだけしか見られないものが伴出している。また、器面に黒変したものと煤けたものがあり、灯明に使用されていたことが推測される。**遺構の時期** 出土遺物の時期から、10C中～末頃としておく。

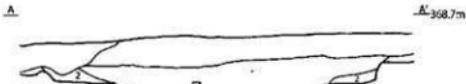
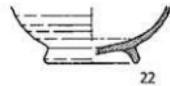
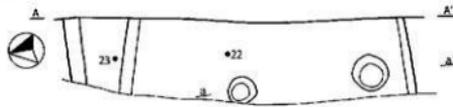
・SD1〔第35図〕

**位置と検出状況** N-6・7・M-7・10・11・12・13グリッド、6-3・4・6・7・11Trで確認した。南北方向に並び、重複するSI1・2・3・4・5を壊していた。なお、調査範囲ではSI1・2・6との重複関係は明確ではないが、SD1は上層に位置するため、他遺構への影響は少なかったと思われる。**遺構の特徴** 検出状況から、旧道に伴う側溝と推定した。**遺構の時期** 出土遺物はないが、検出した遺構の中で最も新しい時期に位置付けられ、近世・近代まで下る可能性がある。

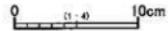
・SD2〔第36・37図〕

**位置と検出状況** L13・14・16・K16グリッド、6-8・9Trで確認した。南北方向に延びる溝で、検出した範囲では南北約3mを測った。**遺構の特徴** SD1の西側

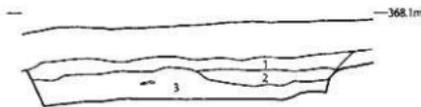
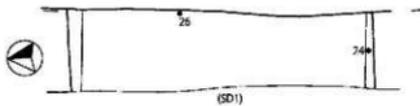
S13



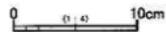
- 1 暗黄褐色土 黄色土粒を多く含む。
- 2 暗黄褐色土 黄色土ブロックを含む。



S14

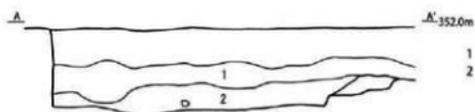
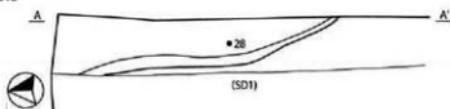


- 1 暗褐色土 黄色土粒を少量含む。
- 2 暗黄褐色土 黄色土ブロックを少量含む。
- 3 暗黄褐色土 黄色土粒を含む。

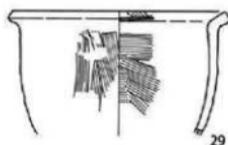


第32図 S13・4

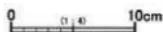
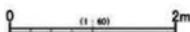
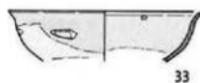
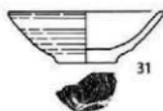
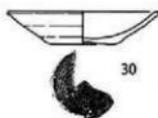
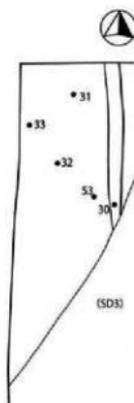
S15



- 1 暗褐色土 黄色土粒を含む。
- 2 暗黄褐色土 黄色土粒を多く含む。

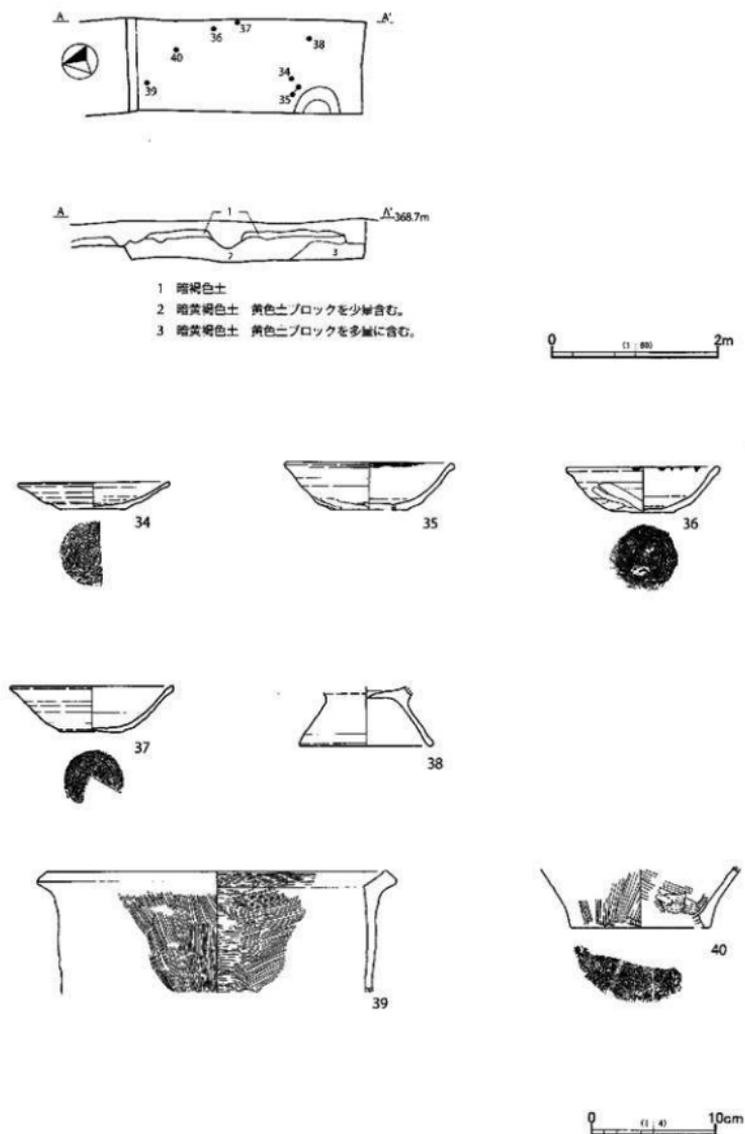


S16



第33図 S15・6

S17



第34図 S17

に位置したが、軸方向や検出レベルが異なり、旧道に伴う溝ではないと思われる、性格は不明である。出土遺物 6-9Tr 確認部から、柱状高台環 (41・42)、釘 (51) などが出土した。遺構の時期 出土遺物が少なく明確ではないが、11C 代としておきたい。

・SD3〔第35・37図〕

位置と検出状況 M-9 グリッド、6-5Tr で確認した。重複する S16 を破していた。検出した範囲では南北約 3.5m、確認面からの深さは約 20cm を測った。遺構の特徴 遺構の性格は不明である。出土遺物 土師器壺 (43)、陶器壺 (44) など、10C 後半頃の遺物が出土している。遺構の時期 出土遺物は S16 からの流れ込みである可能性が考えられ、重複関係から段階的な位置付けとして S16 廃絶後としておきたい。

・SD4〔第36図〕

位置と検出状況 J-20-K-20 グリッド、6-12Tr で確認した。上層に 1号石列が位置する。東西方向に延びる溝と推測し、検出した範囲では最大幅約 5m、確認面からの深さは約 60cm を測った。遺構の特徴 性格については不明であるが、断面観察から南側から自然埋没した状況が窺える。

・1号石列〔第36図〕

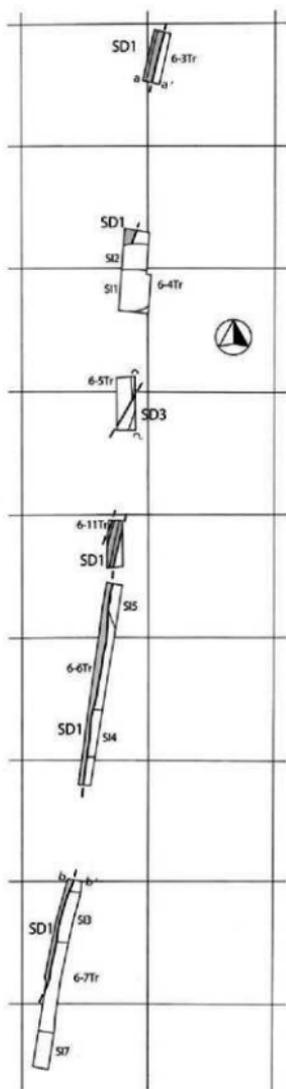
位置と検出状況 J-20-K-20 グリッド、6-12Tr の中央に位置する。SD4 の上層に位置するが、重複はしていない。検出した範囲では、南北約 3.5m を測った。遺構の特徴 調査時の所見から、古い畑境の石垣の一部であり、畑の拡張によって埋没したと推察している。遺構の時期 出土遺物はないが、近世・近代まで下る可能性がある。

表 11 石動道路支線 6号地区 トレンチ一覧

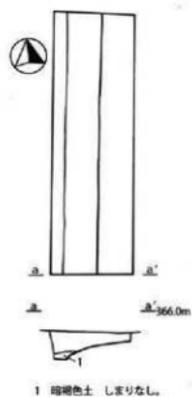
段 差	遺構名
1Tr	遺構なし
2Tr	遺構なし
3Tr	SD1
4Tr	S11・2, 304
5Tr	S18, SD3
6Tr	S14・5, SD1
7Tr	S13・7, 304
8Tr	SD2
9Tr	SD2
10Tr	遺構なし
11Tr	SD1
12Tr	SD4, 1号石列
13Tr	現在面

表 12 石動道路支線 6号地区 遺構一覧

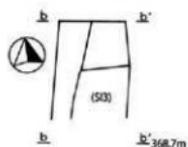
遺構名	位置	時期
S11	4Tr	10C 後半頃
S14	6Tr	10C 後半頃
S15	6Tr	10C 後半頃
S17	7Tr	10C 中～末頃
S18	7Tr	10C 末頃
SD2	8・9Tr	11C 代
S19	5Tr	11C 中頃
S21	4Tr	S11 埋没以前
S23	5Tr	S11 埋没後
SD4	12Tr	不明
現在面	13Tr	不明
SD1	3・4・6・7・11Tr	近世・近代か
1号石列	12Tr	近世・近代か



SD1

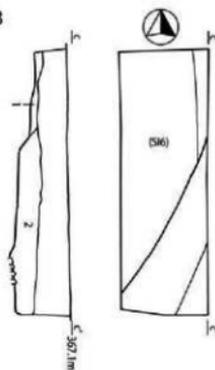


1 暗褐色土 しまりなし。

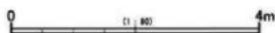


- 1 暗褐色土 黄色土ブロックを含む。
- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 黄色土ブロックを含む。

SD3



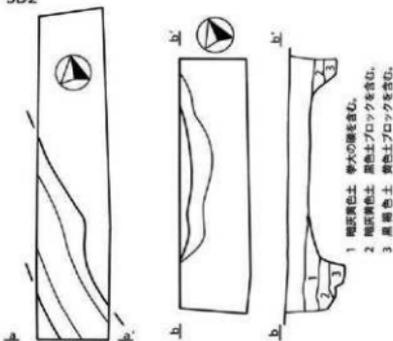
- 1 暗褐色土 黄色土ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 黄色土ブロックを含む。SD3 暗褐色土



第35図 SD1・3



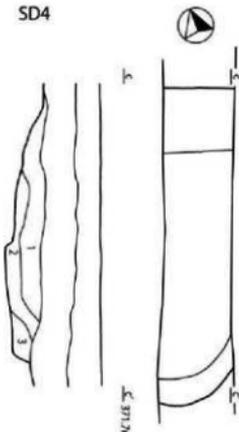
SD2



- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土 砂礫層, SD2埋積土。

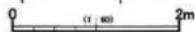
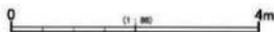
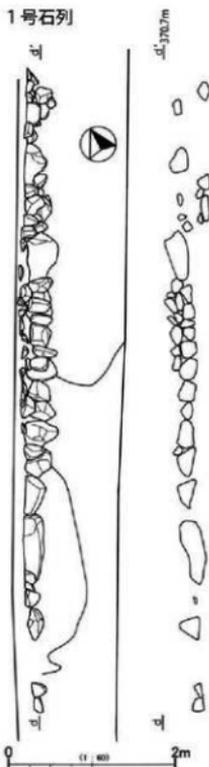
- 1 暗赤褐色土 赤木の葉を食む。
- 2 暗赤褐色土 黒色土ブロックを食む。
- 3 黄褐色土 褐色土ブロックを食む。

SD4

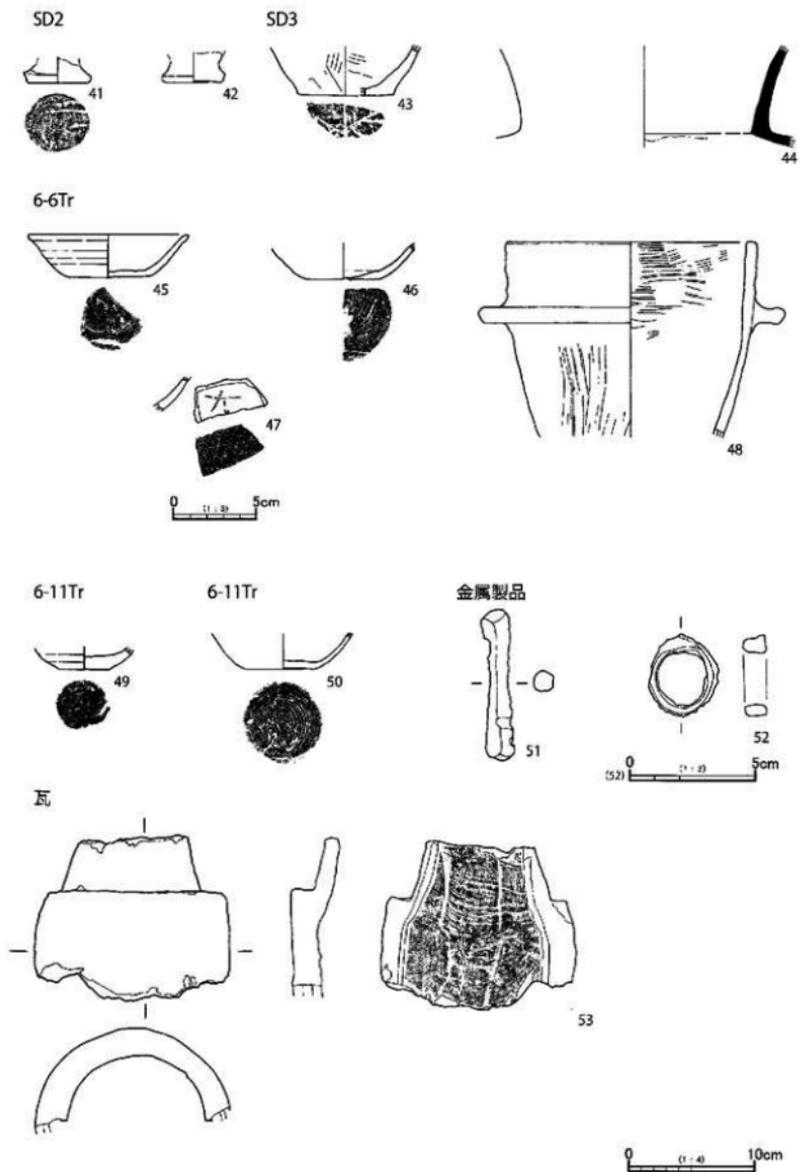


- 1 暗褐色土 やや暗い、しまりあり。
- 2 暗褐色土 やや暗い、黄色土粒を食む。
- 3 黄褐色土 砂質土。

1号石列



第36図 SD2-4、1号石列



第37圖 SD2-3、遺構外 出土遺物

表 13 石倉遺跡支線 6号地区 遺物調査表

調査点	遺構	種類	遺層	口幅 (cm) 高さ (cm) 底幅 (cm)	状況	出土	観察技法	色澤	備考
31-1	S1	土塀	坪	11.6 2.6 6.5	良	赤・赤・白・金	(F) ロタリナ (P) ロタリナ (E) 磁器糸切盛	黄褐色	土壁の一部を打ち壊す 片断がやや露出している 打石盛
31-2	S1	土塀	坪	12.7 2.5 4.9	良	赤・赤・黒・金	(F) ロタリナ (P) ロタリナ (E) 磁器糸切盛	赤褐色	黒瓦あり 内面がやや露出している
31-3	S1	土塀	坪	(11.0) (2.1) (6.0)	良	赤・赤・白	(F) ロタリナ (P) ロタリナ (E) 磁器糸切盛	赤褐色	黒瓦あり
31-4	S1	土塀	坪	(14.2) (5.0) 5.0	良	赤・赤・白	(F) ロタリナ、ヘラ柄り (P) ロタリナ (E) 磁器糸切盛、ヘラ柄り	黄褐色	全体がやや露出、破けている
31-b	S1	土塀	坪	(13.3) (3.8) 5.2	良	赤・赤・白	(F) ロタリナ (P) ロタリナ (E) 磁器糸切盛、スノコ状瓦葺	黄褐色	内面がやや露出している
31-6	S1	土塀	坪	13.0 3.6 5.2	良	赤・赤・白	(F) ロタリナ (P) ロタリナ (E) 磁器糸切盛、スノコ状瓦葺	黄褐色	黒瓦あり 内面及び外周の一部が露出 土壁の一部分を打ち壊す、打石あり
31-7	S1	土塀	坪	(13.0) (3.8) (5.0)	良	赤・赤・白	(F) ロタリナ (P) ロタリナ (E) 磁器糸切盛	黄褐色	内面の一部及び 打石口縁部がやや露出
31-8	S1	土塀	坪	11.9 2.6 6.0	良	赤・赤・白	(F) ロタリナ (P) ロタリナ (E) 磁器糸切盛	黄褐色	内面の一部を打ち壊す 内面がやや露出している 打石あり
31-9	S1	土塀	坪	13.0 3.5 6.0	良	赤・赤・白	(F) ロタリナ (P) ロタリナ (E) 磁器糸切盛	黄褐色	内面がやや露出している
31-10	S1	土塀	坪	12.5 3.6 6.2	良	赤・赤・白	(F) ロタリナ (P) ロタリナ (E) 磁器糸切盛	黄褐色	内面の一部を打ち壊す
31-11	S1	土塀	坪	12.5 4.1 4.9	良	赤・赤・白	(F) ロタリナ (P) ロタリナ (E) 磁器糸切盛、スノコ状瓦葺	黄褐色	全壊しあり
31-12	S1	土塀	坪	14.4 4.4 6.7	良	赤・赤・白	(F) ロタリナ (P) ロタリナ (E) 磁器糸切盛	黄褐色	内面及び外周部の一部、 及び内面口縁部が露出
31-13	S1	土塀	坪	5.4 5.4	良	赤・赤・白	(F) ロタリナ (P) ロタリナ (E) 磁器糸切盛、スノコ状瓦葺	黄褐色	内面が露出、破けている
31-14	S1	土塀	坪	15.0	良	赤・赤・白	(F) ロタリナ (P) ロタリナ (E) 磁器糸切盛	黄褐色	外周一部露出
31-15	S1	土塀	坪	8.2	良	赤・赤・白	(F) ロタリナ (P) ロタリナ (E) 磁器糸切盛 (2回)	黄褐色	内・外面がやや露出 黒瓦と重なり 補修あり
31-16	S1	土塀	坪	16.7 (5.7)	良	赤・赤・白・金	(F) ロタリナ (P) ロタリナ (E) 磁器糸切盛	黄褐色	内面及び外周部が露出あり
31-17	S1	土塀	坪	25.0 (7.3) 11.0	良	赤・赤・白	(F) ロタリナ (P) ロタリナ (E) 磁器糸切盛、スノコ状瓦葺	黄褐色	黒瓦あり 外周露出 (露出部分) 内面が露出している
31-18	S1	土塀	踏石 高台坪	(16.0)	中々	赤・赤・白	(F) ロタリナ (P) ロタリナ (E) ロタリナ	黄褐色	内面露出部分から体部下が露出 瓦葺により、全体が露出している
31-19	S1	土塀	壁	(27.0)	良	赤・赤・白・金	(F) タタハク (P) タタハク、新築瓦	黄褐色	部分に露出している
31-20	S1	土塀	壁	(32.0)	良	赤・赤・白・金・黒	(F) ロタリナ、タタハク (P) ロタリナ	赤褐色	土灰口縁
31-21	S1	土塀	踏石	(25.0)	良	赤・赤・白・金	(F) ハツメ、花柄瓦 (E) ハツメ、花柄瓦	黄褐色	
31-22	S1	土塀	踏石	(7.0)	良	赤・赤・白・金	(F) ロタリナ (P) ロタリナ、傷損 (E) ロタリナ、打石	黄褐色	内面及び外周部が露出 やや露出あり
31-23	S1	土塀	踏石	(7.5)	良	赤・赤・白・黒・金	(F) ハツメ、花柄瓦 (P) 赤い割石 (E) ハツメ	黄褐色	内面露出 表面は瓦葺で隠れている 瓦葺露出
31-24	S1	土塀	踏石 高台坪	-	良	赤・赤・白・赤・黒	(F) ロタリナ、ヘラ柄り (P) ロタリナ (E) ロタリナ、付台	黄褐色	内面が露出している
31-25	S1	土塀	踏石	(5.2)	良	赤・赤・白・黒	(F) ロタリナ (P) ロタリナ (E) 磁器糸切盛、付台	黄褐色	
31-26	S1	土塀	壁	(27.4)	良	赤・赤・白・黒・金	(F) タタハク、新築瓦 (E) ココハク<新築瓦	赤褐色	内・外周に露出あり
31-27	S1	土塀	踏石	-	良	赤・赤・白・赤・黒	(F) ヘラ柄り (E) 磁器糸切盛	黄褐色	
31-28	S1	土塀	踏石	0.8	良	赤・赤・白・赤・黒	(F) ロタリナ、黒瓦 (P) ロタリナ、黒瓦 (E) 磁器糸切盛、瓦葺	黄褐色	内面露出部分露出、黒瓦 体下部露出 打石

図番	図号	遺構	種類	基層	1層(㎝) 2層(㎝) 3層(㎝)	焼成	胎土	造形技法	色調	備考
33	29	S6	十部器	罎	(14.0)	煎	中やね、白・金	(伊) タチハケ (伊) ココハケ	赤褐色	部分的に中やね塗
33	30	S6	十部器	罎	(12.2) (2.7) (5.2)	煎	中やね、赤・白・黒・金	(伊) ロクロナデ (伊) ロクロナデ (伊) 押形糸切造	褐色	内面がやや削れている
33	31	S6	十部器	罎	(12.0) (4.2) (5.0)	煎	赤、赤・白・黒	(伊) ロクロナデ (伊) ロクロナデ (伊) 押形糸切造	褐色	
33	32	S6	土器器	罎	(5.0)	中やね	中やね、赤・白	(伊) ロクロナデ (伊) 押形糸切造	褐色	全身的に劣化している
33	33	S6	灰釉陶器	罎	(15.0) -	煎	無装、赤・白・黒	(伊) レクリナデ、蓋縁 (伊) ロクロナデ、蓋縁	灰青色	つばがわずかに外側に内面体の土層破片が付着している様子を覗き、磨耗したものか
34	34	S7	十部器	罎	(12.2) (2.2) (5.4)	煎	赤、赤・白・黒	(伊) ロクロナデ (伊) ロクロナデ、厚み中やね土層充分 (伊) 押形糸切造	褐色	蓋縁あり。蓋縁中にやや削れている。厚み中やねに若干の削り傷あり
34	35	S7	土器器	罎	(13.0) (3.4) (6.4)	煎	赤、赤・白・黒	(伊) ロクロナデ、ヘラ削り (伊) ロクロナデ (伊) 押形糸切造、ヘラ削り	褐色	口縁部に打痕
34	36	S7	土器器	罎	12.4 3.8 5.0	煎	中やね、赤・白・黒	(伊) ロクロナデ、ヘラ削り (伊) ロクロナデ (伊) 押形糸切造、ヘラ削り	褐色	小さい取崩あり。表面口縁部の一部が灰青色。内面の一部が割線、打痕あり
34	37	S7	土器器	罎	13.1 3.8 5.1	煎	赤、赤・白・黒	(伊) ロクロナデ (伊) レクリナデ (伊) 押形糸切造	褐色灰色	
34	38	S7	土器器	解毒 茶臼罎	- - 10.7	煎	中やね、赤・白・黒	(伊) ロクロナデ (伊) レクリナデ (伊) ロクロナデ	褐色	
34	39	S7	土器器	罎	(9.0) -	煎	赤、白・金	(伊) タチハケ (伊) ココハケ	赤色	全身的に劣化している
34	40	S7	土器器	罎	- (1.0)	煎	中やね、赤・白・金	(伊) タチハケ (伊) ココハケ (伊) 水蓋造	赤褐色	全身的に劣化している
37	41	S02	土器器	解毒 茶臼蓋	- 5.0	煎	中やね、赤・白・金	(伊) ロクロナデ (伊) 押形糸切造	褐色	蓋縁磨耗
37	42	S02	土器器	解毒 茶臼蓋	- 4.8	煎	中やね、赤・白・金	(伊) ロクロナデ (伊) 押形糸切造	褐色	蓋縁磨耗
37	43	S03	土器器	罎	- 7.0	煎	中やね、白・金	(伊) ハナメ (伊) ハナメ、ナデ (伊) 水蓋造	赤色	
37	44	S03	陶器	罎	- -	煎	赤、白	(伊) ロクロナデ (伊) ロクロナデ、赤・黒・黄	灰色	外周及び内面（蓋縁など）磨耗あり
37	45	6・61	土器器	罎	(12.0) (5.3) (9.0)	煎	赤、赤・白・黒	(伊) ロクロナデ (伊) ロクロナデ (伊) 押形糸切造	褐色	
37	46	6・61	土器器	罎	- (5.5)	煎	赤、赤・白・黒・金	(伊) ロクロナデ (伊) 押形糸切造	褐色	
37	47	6・61	土器器	罎	- -	煎	赤、赤・白・黒	(伊) ロクロナデ (伊) ロクロナデ、磨削「火」？または「火」か	褐色	内面磨耗あり
37	48	6・61	土器器	解毒 茶臼蓋	(2.0) 3.2	煎	赤、赤・白・黒・金	(伊) タチハケ (伊) ココハケ	赤褐色	内面劣化・磨耗。外周は口縁部以下が黄褐色
37	49	6・112	土器器	罎	- 4.0	煎	中やね、赤・白・黒	(伊) ロクロナデ (伊) ロクロナデ (伊) 押形糸切造	赤褐色	全身的に劣化が著しい
37	50	6・121	土器器	罎	- 3.5	煎	赤、赤・白・黒	(伊) ロクロナデ (伊) 押形糸切造、スノコ取付造	褐色	

表 14 石動遺跡支線 6号地区 金属製品 観察表

図番	図号	遺構	種類	重量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	材質	備考
37	51	S02	釘	12.21	0.1	1.2	0.8		
37	52	6・121	貫金具	6.71	2.6	3.4	0.8		

表 15 石動遺跡支線 6号地区 瓦 観察表

図番	図号	遺構	種類	重量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	焼成	胎土	製作技法	色調	備考
37	53	6・121	瓦	700	18.9	12.7	2.2	煎	中やね、赤・白	(△) 陶器 (△) 陶器、ヘラ削り	褐色	



S11-2(6-4Tr)

北から



S11

西から



S11 カマド

西から



S11 遺物出土状況

西から



S11 カマド

西から



S11 ビット

西から



S13

北西から



S14

北から



S15

北から



S16

南から



S16 遺物出土状況

西から



S17

南から



6-1Tr

南から



6-2Tr

北から



6-3Tr

北から



6-5Tr

南から



6-6Tr

南から



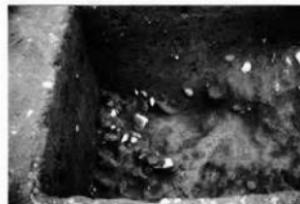
6-7Tr

南から



6-9Tr・SD2

南から



6-8Tr

東から

PL15  
石動遺跡98年度調査  
支線6号地区



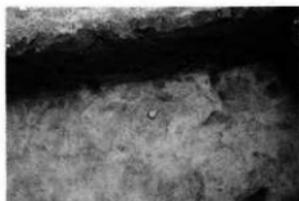
6-9Tr 南から



6-10Tr 南から



6-11Tr 南から



6-11Tr 西から



6-12Tr 北から



6-12Tr 北西から



6-12Tr 北から



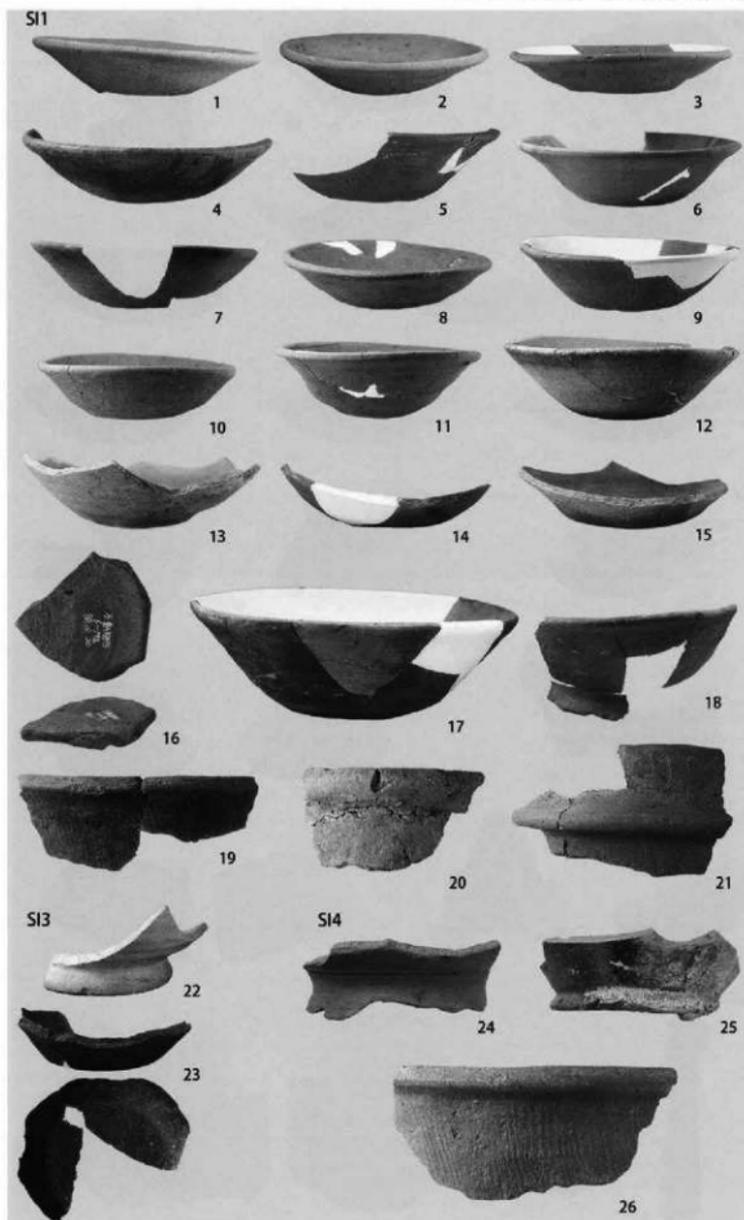
6-12Tr 1号石列 北から

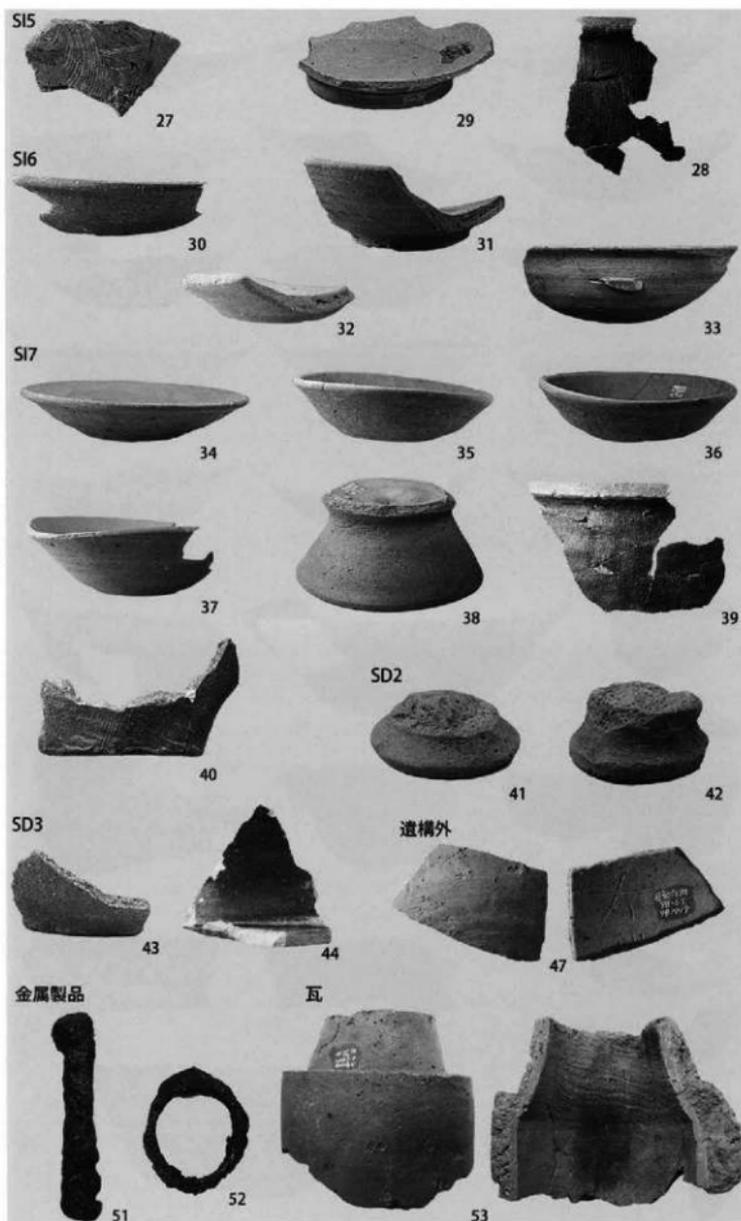


6-13Tr 北から



6-13Tr 東から





## IV. 支線9号地区

建設範囲の既存道路(北東方向約230m間)の拡幅部分に、14箇所のトレンチを設定し、約290㎡を調査した。調査の結果、住居跡7軒、土坑6基、ピット4基、集石3基、溝3条、鑄造関連遺構を検出した他、旧河道を確認した。

前述のとおり、支線9号は石動遺跡・北中原遺跡の境界にあたるため、道路を境に北側は石動遺跡支線9号地区、南側に設定したトレンチ分は、北中原遺跡(第3次)となる。

本書では北中原遺跡(第3次)地区から検出した遺構は、同調査名を付している。また、下記に遺構一覧表(表17)・トレンチ一覧表(表16)を示したのであわせてご参照のうえ、ご留意いただきたい。

## 1. 調査トレンチ

## ～石動遺跡支線9号地区～

**9-1Tr** GG-12・HH-12グリッドに位置する。既存道路に沿って、幅約2mの弧状のトレンチを設定した。約40㎡の範囲を調査し、地表面から最深60cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約20cmの深さであり、住居跡1軒(S11)、土坑1基(SK1)、溝2条(SD1・2)、旧河道を確認した。

**9-3Tr** V-15・W-15グリッドに位置する。既存道路に沿って約5m、幅1mの範囲を調査し、地表面から最深45cm掘削した。地山には礫が混在しており、遺構は確認できなかった。土師器坏・甕が僅かに出土したが、小片のため、図化しなかった。

**9-4Tr** V-16グリッドに位置する。既存道路に沿って約5.3m、幅1.3mの範囲を調査し、地表面から最深85cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約20cmの深さであり、住居跡1軒(S13)、土坑1基(SK)を検出した。他、遺構外遺物として土師器坏(76)などが出土した。

**9-5Tr** R-17・S-17グリッドに位置する。既存道路に沿って約6.5m、幅1.3mの範囲を調査し、地表面から最深22cmまで掘削した。部分的に硬化面が確認でき、道路状遺構と推定した。

**9-6Tr** Q-17・R-17グリッドに位置する。既存道路に沿って約4m、幅1.5mの範囲を調査し、地表面から最深34cmまで掘削した。トレンチ西半分は礫層で、遺構はなかったが、焙烙埴(77)、砥石(100)が出土した。

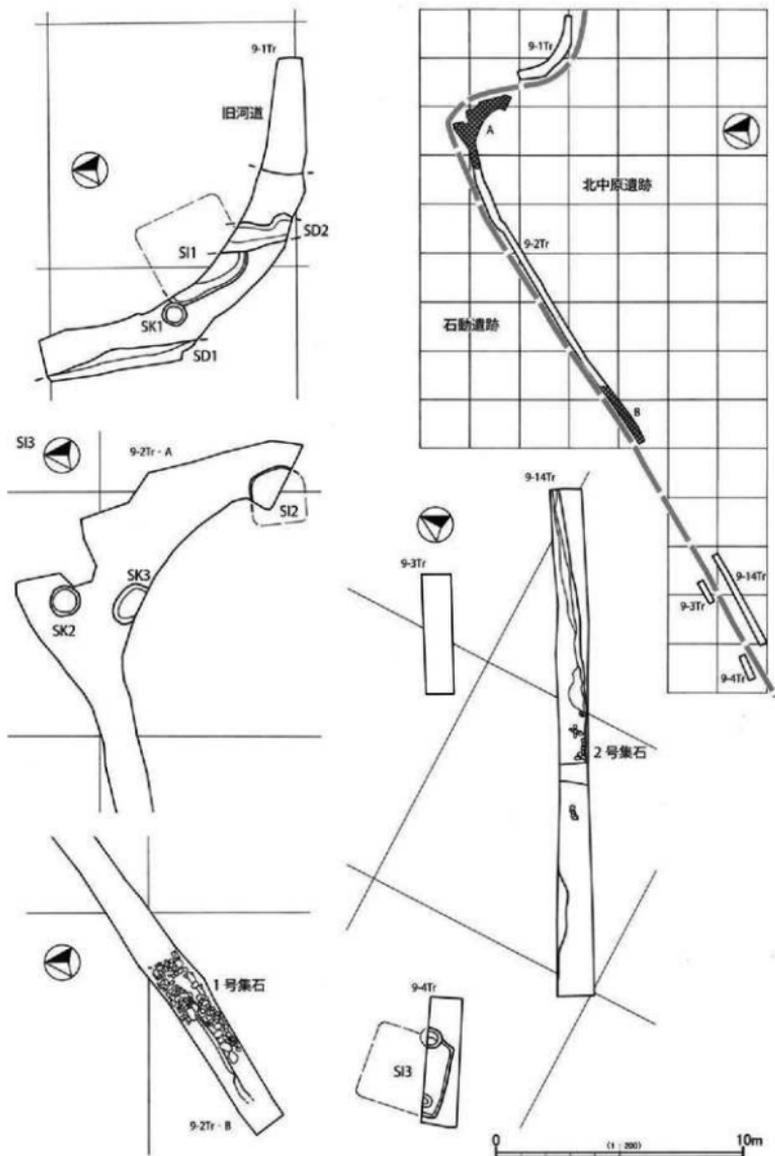
**9-7Tr** Q-18グリッドに位置する。既存道路に沿って約4m、幅1.5mの範囲を調査し、地表面から最深38cmを測った。遺構はなく、地山に多量の礫が混在していた。

**9-8Tr** N-19・O-19グリッドに位置する。既存道路に沿って約4.3m、幅1.4mの範囲を調査し、地表面から最深65cm掘削した。遺構はなく、全面的に礫が多く混在していた。

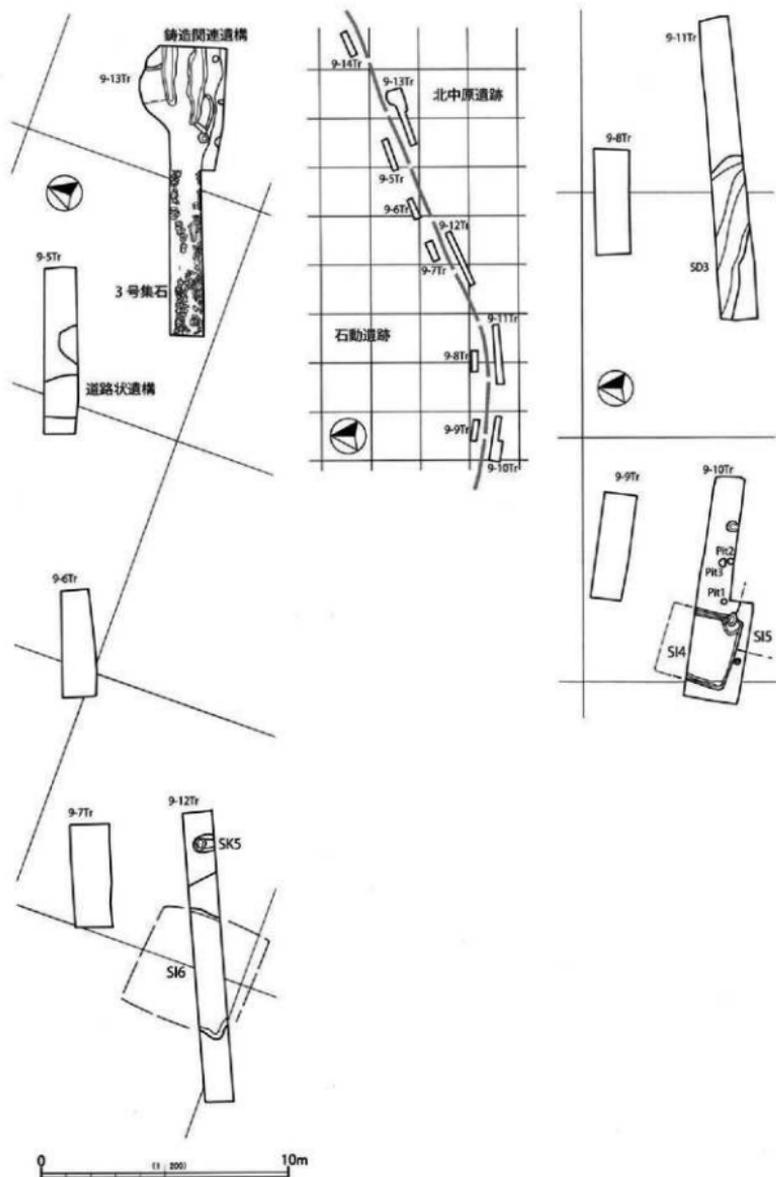
**9-9Tr** M-19グリッドに位置する。既存道路に沿って約4.3m、幅1.3mの範囲を調査し、地表面から約50cmまでを掘削した。遺構は確認できなかった。内耳場と思われる土器片(78)、釘(89)が出土した。

## ～北中原遺跡(第3次)～

**9-2Tr** Z-13・14・AA-13・BB-12・13・CC-12・DD-11・12・EE-11・FF-10・11・GG-11グリッドに位置する。既存道路に沿って約90m、幅約1.3～2mのトレンチを設定した。調査面積は約130㎡、地表面から最深70cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から



第38图 遺構位置図(1)



第39図 遺構位置図(2)

約45cmの深さで、住居跡1軒(SI2)、土坑2基(SK2・3)、集石遺構1基(1号集石)を確認した。SI2出土の炉壁片や、遺構外遺物に銅が付着した須恵器小皿(73)・土師器環(74)などがあることから、鋳造に関連する遺構の存在が推測される。他、遺構外遺物として土師器製の胴部片を使用した土製円盤(75)などが出土した。

**9-10Tr** L・M-19グリッドに位置する。既存道路に沿って約9m、幅1mのトレンチ設定を行い、地表面から最深106cmまで掘削した。なお、検出した遺構については一部拡張を行った調査した。遺構確認面は地表面から約40cmの深さであり、住居跡2軒(SI4・5)を検出した。他、天聖元寶(96)、鉄滓(86)が出土した。

**9-11Tr** N・O-19グリッドに位置する。既存道路に沿って約12m、幅1.4mの範囲を調査し、地表面から最深120cm掘削した。遺構確認面は地表面から約40cmで、溝1条(SD3)を検出した。他、遺構外遺物として香炉片(80)などが出土した。

**9-12Tr** P-18・19・Q-18グリッドに位置する。既存道路に沿って約12m、幅2mの範囲を調査し、地表面から最深120cm掘削した。遺構確認面は、地表面から約80cmの深さで、住居跡2軒(SI6・7)、土坑1基(SK6)を検出した。他、遺構外遺物として須恵器蓋(81)、緑釉陶器碗(82)、焰烙埴(83)などが出土した。

**9-13Tr** S・T-17グリッドに位置する。既存道路に沿って約12m、幅1.4mのトレンチを設定し、部分的に拡張を行った。掘削深度は地表面から最深150cmを測った。地表面から約40cmの深さで石列(1号石列)を確認し、約1mの深さで鋳造関連遺構を確認した。他、遺構外遺物として土師器環(61～63・67・68)、高台付環(64)、柱状高台環(65)、須恵器蓋(66)・甕(69)、釘(90)、永楽通寶(97)、鉄滓(93)、銅製品(94)、丸瓦(98)などが出土した。

**9-14Tr** V-16グリッドに位置する。既存道路に沿って約21m、幅1mの範囲を調査し、地表面から最深165cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約60cmの深さで、石列1箇所を検出した。溝1条(SD4)を検出した。他、遺構外遺物として、土師器環(84)、釘(87)が出土した。

表16 石巻遺跡支線9号地区 トレンチ一覧

位 置	遺構名	遺跡名
1Tr	SI1, SK1, SD1・2, 日野道	石 動
2Tr	SI2, SK2・SK3, 1号集石	北中原
3Tr	遺構なし	仁 前
4Tr	SI3, SK4	仁 前
5Tr	道路状遺構	石 動
6Tr	遺構なし	石 動
7Tr	遺構なし	仁 前
8Tr	遺構なし	仁 前
9Tr	遺構なし	石 動
10Tr	SI4・5, PII1～4	北中原
11Tr	SD3	北中原
12Tr	SI6・7, SK5	北中原
13Tr	鋳造関連遺構, 3号集石	北中原
14Tr	2号集石	北中原

表17 石巻遺跡支線9号地区 遺構一覧

遺構名	位 置	時 期	遺跡名
SI1	1Tr	9C後半～10C代	石 動
SI2	2Tr	不明	北中原
SI3	4Tr	10C後半頃	石 動
SI4	10Tr	10C前半頃	北中原
SI5	10Tr	SI4竪地以降	北中原
SI6	12Tr	11C中頃	北中原
SI7	12Tr	SI6表絶縁跡	北中原
SK1	1Tr	不明	石 動
SK2	2Tr	不明	石 動
SK3	2Tr	不明	石 動
SK4	4Tr	不明	石 動
SK5	10Tr	不明	北中原
SK6	12Tr	不明	石 動
鋳造関連遺構	13Tr	中目段	北中原
SD1	1Tr	10C後半頃	石 動
SD2	1Tr	10C中頃	石 動
SD3	11Tr	不明	北中原
1号集石	2Tr	不明	北中原
2号集石	14Tr	不明	北中原
3号集石	13Tr	近世・近代頃	北中原
PII1～4	10Tr	不明	北中原
日野道	1Tr	不明	石 動
道路状遺構	5Tr	不明	石 動

## 2. 発見した遺構・遺物

## ・SI1 [第40図]

**位置と検出状況** GG-III-12 グリッド、9-1Trに位置する。重複するSK1に北西側、SD2に南壁の一部を壊されていた。調査範囲においては南壁と西壁を確認した。規模は不明であるが、西壁の長さは約3.5m、確認面から床面までの深さは約25cmを測った。**遺構の特徴** 検出した範囲ではカマド等の施設はなく、周溝状の落ち込み確認できた。**出土遺物** 粟(1・2)が出土した。1の粟はハケメがなく、成形後内外面に横ナデ調整が施されている。県北西部で出土するロクロ粟とは異なり、成形後に回転台に乗せ、回転横ナデを施したものと考えられる。**遺構の時期** 出土遺物から、9C後半～10C代としておく。

## ・SI2 [第40・41図] 北中原遺跡(第3次)

**位置と検出状況** FF-GG-11 グリッド、9-2Tr東端に位置する。調査範囲では重複はなく、北壁から東壁までを確認した。検出した範囲では西壁1.7m、確認面からの深さ約30cmを測った。**遺構の特徴** 調査時の所見から住居としたが、検出した範囲ではカマド施設等はなく、明確な貼り床等も確認できなかった。覆土中から炉壁片が出土しており、遺構の性格としては築造に関連する捨て場遺構、または少量ではあるが板状の金属片の出土や焼土炭化物が散在している状況から、鋳込み場の一画にあたる可能性も考えられる。**出土遺物** 9C中頃の上師器皿(8)と、炉壁(3～7)、用途不明鉄製品(91・92)、古銭(95)が出土した。3～5・7の内表面は指ナデや指頭痕等が確認できた。還元により胎上が灰色化し、表面に細かい発泡がみられた。6は炉底に近い部分であり、内面は発泡と溶融物の付着がみられた。95の古銭は元祐通寶である。初鋳年は1086年とされており、出土品は篆書の小平銭であった。なお、トレンチ出土であるが、73・74の土師器には溶解した銅の付着があり、トリベなどの用途で築造に関連した遺物と考えられる。**遺構の時期** 年代を示す出土遺物は少なく、遺構の年代は時期不明である。

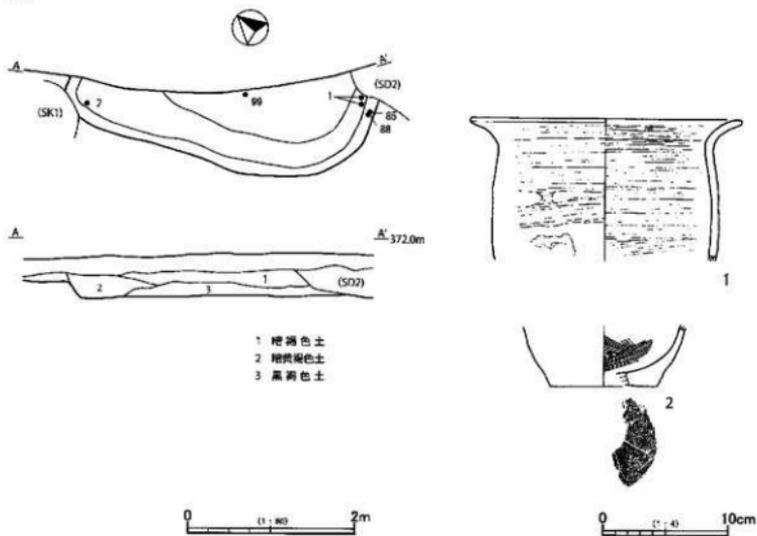
## ・SI3 [第42図]

**位置と検出状況** V-16 グリッド、9-4Trに位置する。重複するSK4に東壁の一部を壊されていた。調査範囲においては東壁・西壁・南壁を確認し、南北の壁間は約3.5m、確認面から床面までの深さは、約35cmを測った。**遺構の特徴** 検出した範囲にカマド施設等は無かった。遺構西端で深さは20cmのピットを検出したが、性格は明確ではない。**出土遺物** 上師器皿(9)・環(10・11)・脚高台(12・13)・小型粟(14)が出土した。全体的に灯明痕や煤けた遺物が多くみられた。**遺構の時期** 出土遺物から、10C後半頃としておく。

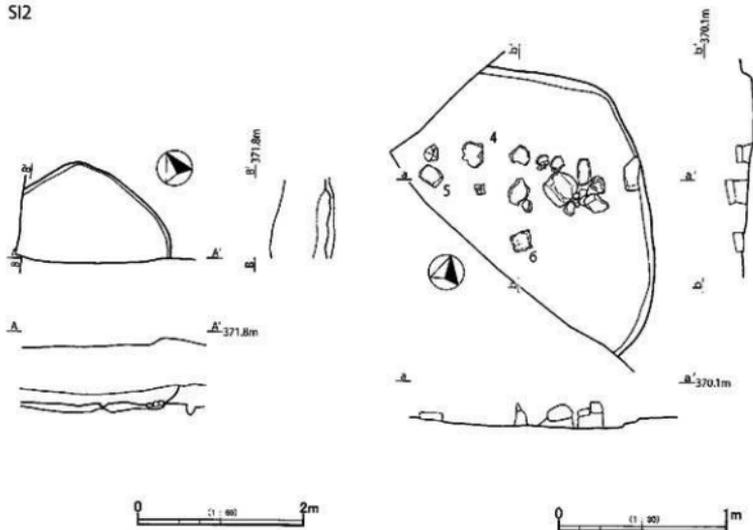
## ・SI4 [第42・43図] 北中原遺跡(第3次)

**位置と検出状況** L-M-19 グリッド、9-10Trの西側に位置する。重複するSI5がカマド上部を壊したと推定する。調査範囲では東壁・西壁・南壁を確認し、東西の壁間は約3m、確認面から床面までの深さは約30cmを測った。**遺構の特徴** カマド施設は南東隅に位置する。重複するSI5の影響はほとんどみられなかった。土・炭化物と多数の礫が堆積しており、袖・東壁にかかる煙道部を確認した。**出土遺物** 遺物は少なく、土師器環(18)、須恵器甕(19)などが出土した。18には灯明痕があり、19は両面が磨耗していた。**遺構の時期** 出土遺物の時期から、10C前半頃としておく。

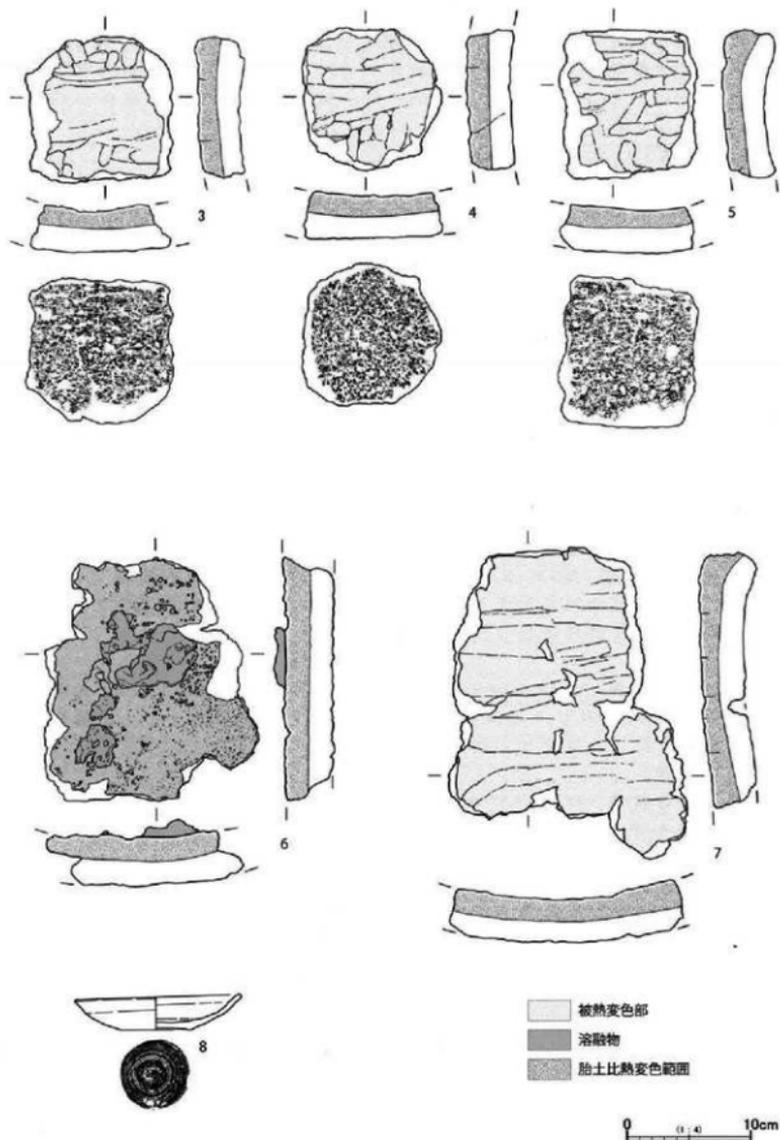
S11



S12



第40圖 S11・2(1)



第41図 S12(2)

・SI5〔第43回〕 北中原遺跡(第3次)

位置と検出状況 M-19グリッド、9-10Trに位置する。明確な壁面は確認できず、トレンチ壁面でSI4の上層に位置することを確認した。規模は不明であるが、確認範囲では南辺約2m、西辺約0.7mを測った。遺構の特徴 検出した範囲では、カマド施設等はなかった。遺構の時期 重複関係から、SI4廃絶以降としておく。

・SI6〔第44回〕 北中原遺跡(第3次)

位置と検出状況 P-Q-18グリッド、9-12Trに位置する。調査範囲では西壁と東壁を確認し、調査範囲における東西の壁間は約5.5m、確認面から床面までの深さは約18cmを測った。重複するSI7に上部を壊されていた。遺構の特徴 検出した範囲ではカマド施設等はなかった。出土遺物 灰釉陶器(20・21)が出土した。20は口縁部が僅かに外反しており、内外面は付け掛け施釉している。21は付高台で、底部には糸切痕がみられた。遺構の時期 出土遺物の時期から、11C中頃に位置付けておきたい。

・SI7〔第44回〕 北中原遺跡(第3次)

位置と検出状況 Q-18グリッド、9-12Trに位置する。重複するSI6の上部を壊していた。トレンチ壁面で確認した遺構であり、調査範囲では東西約4.7mを測った。遺構の特徴 検出した範囲ではカマド施設等はなかった。遺構の時期 出土遺物がなく、明確な時期は不明である。SI6との重複関係から、SI6廃絶以降としておく。

・道路状遺構〔第45回〕

位置と検出状況 R-S-17グリッド、9-5Trに位置する。調査範囲において、黄色土ブロックを含む硬化面が部分的に確認できた。規模は明確でない。遺構の時期 出土遺物はなく、不明である。

・SK1〔第45回〕

位置と検出状況 GG-12グリッド、9-1Trに位置する。重複するSI1を壊していた。径約48cm円形で、確認面からの深さは約25cmを測った。遺構の時期 出土遺物はなく、時期は不明である。

・SK2〔第45回〕

位置と検出状況 FF-10グリッド、9-2Trに位置する。重複する遺構はなく、径約60cm円形を呈し、確認面からの深さは17cmを測った。遺構の時期 出土遺物はなく、時期は不明である。

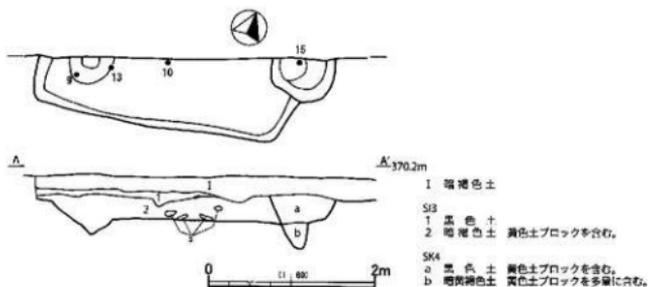
・SK3〔第45回〕

位置と検出状況 FF-11グリッド、9-2Trに位置する。楕円形を呈すと推定し、検出した範囲では長径約90cmを測った。遺構の時期 出土遺物はなく、時期は不明である。

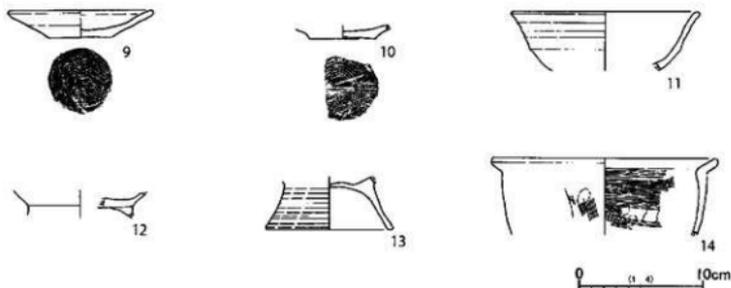
・SK4〔第42回〕

位置と検出状況 V-16グリッド、9-4Trに位置する。重複するSI3を壊していた。北側はトレンチ外となるため規模は明確ではないが、検出した範囲では径約75cm、確認面からの深さは約65cmを測った。出土遺物 土師器環(15・16)・竈(17)が出土した。出土遺物の時期は10C後半頃であり、SI3からの混入と考えられる。遺構の時期 11C代としておく。段階的に、SI3廃絶後としておく。

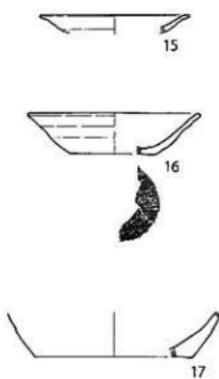
SI3・SK4



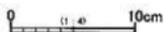
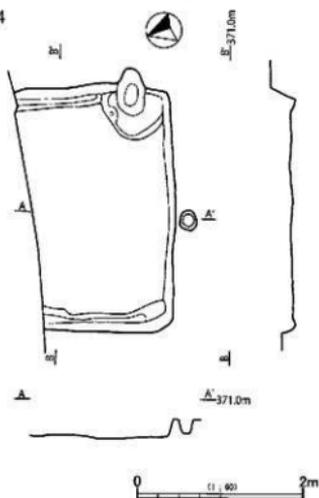
SI3



SK4

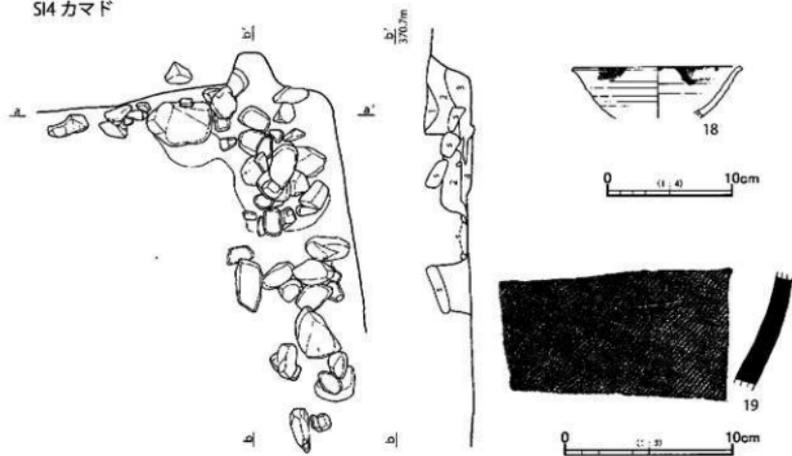


SI4



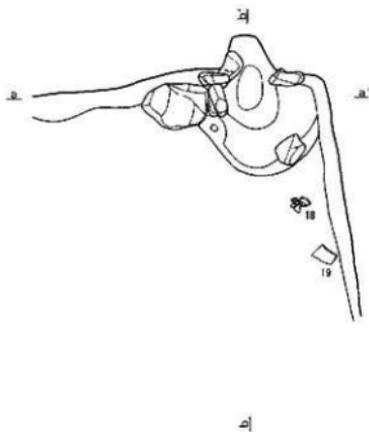
第42図 SI3-4、SK4

S14 カマド



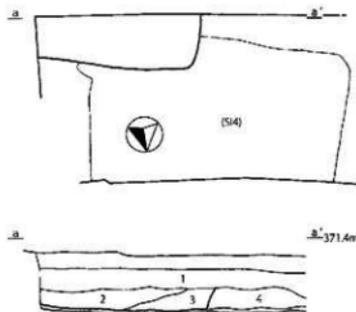
370.7m

- 1 褐色土 粘土粒を含む。
- 2 褐色土 焼土ブロック。
- 3 暗褐色土 黄褐色土、炭化物、黒土ブロックを含む。
- 4 黒褐色土 焼土ブロック、炭化物を含む。



371.4m

S15

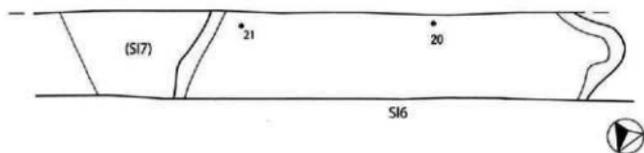


0 (1:300) m

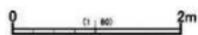
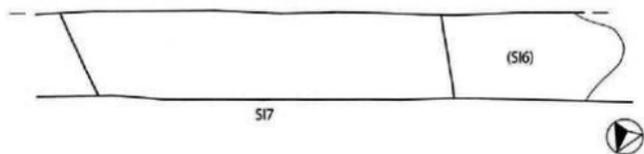
0 (1:400) 2m

第43図 S14(2)、S15

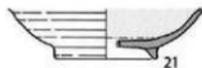
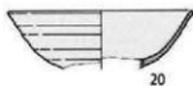
S16・7



- 1 暗褐色土 黄色土粒を少量含む, S17 覆土。
- 2 暗褐色土 礫大の礫を含む, S16 覆土。
- 3 暗褐色土 黄色土粒を含む, S16 覆土。

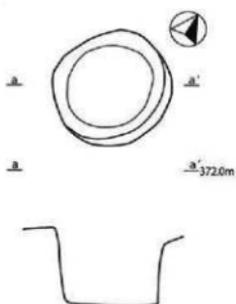


S16

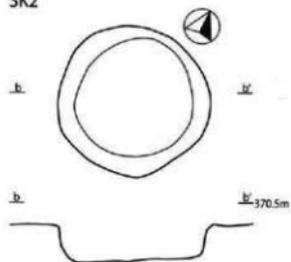


第44図 S16・7

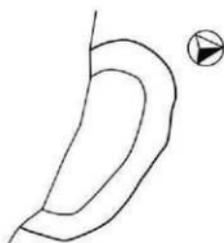
SK1



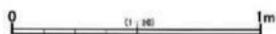
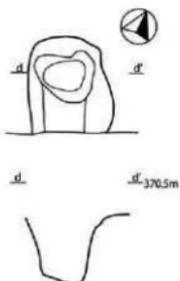
SK2



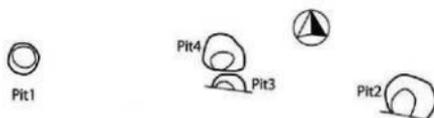
SK3



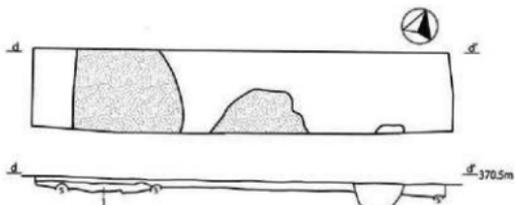
SK5



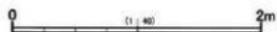
Pit



道路状遺構



1 暗褐色土 黄色土ブロックを含む。上面硬化。



第45図 SK1~3・5、Pit、道路状遺構

## ・SK5〔第45図〕北中原遺跡(第3次)

位置と検出状況 Q-18グリッド、9-12Trに位置する。調査範囲では重複はなく、楕円形を呈すと推定した。検出した範囲では短径約34cm、確認面からの深さは約28cmを測った。遺構の時期 出土遺物はなく、時期は不明である。

## ・Pit1~4〔第45図〕北中原遺跡(第3次)

位置と検出状況 M-19グリッド、9-10Trに位置する。いずれも調査範囲では重複はなかった。Pit1は径25cmの円形を呈す。Pit2は径34cmの不整形を呈す。Pit3は検出した範囲で径28cmを測る円形と推定する。Pit4は径41cmを測り、ほぼ円形を呈す。遺構の時期 出土遺物はなく、不明である。

## ・1号集石〔第46図〕北中原遺跡(第3次)

位置と検出状況 Z-14グリッド、9-2Tr西側に位置する。調査範囲において、東西約5mの範囲で礫の堆積を確認した。規模・性格については明確ではない。出土遺物 土師器甕(22)が出土した。遺構の時期 出土遺物は流れ込みと考えられるため、時期は明確ではない。

## ・2号集石〔第46図〕北中原遺跡(第3次)

位置と検出状況 V-16グリッド、9-14Trに位置する。列状にならんだ礫を確認し、規模は明確ではないが、西壁は約3.5m、確認面から床面までの深さは約25cmを測った。遺構の時期 時期は明確ではない。

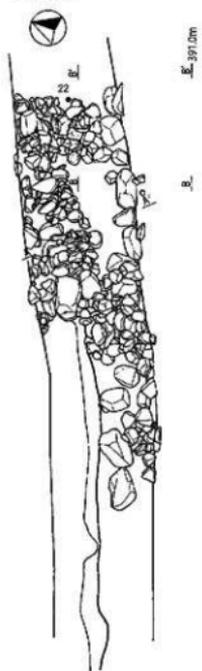
## ・3号集石〔第46図〕北中原遺跡(第3次)

位置と検出状況 S-T-17グリッド、9-13Trに位置する。鋳造関連遺構の上部に位置した遺構で、確認範囲で10.5mを測った。規模は明確ではないが、畑地の石垣と考えられる。遺構の時期 集石に伴う出土遺物はなかったが、時期としては近世・近代頃まで下るものとしておく。

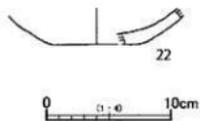
## ・鋳造関連遺構〔第47・48・49・50・51・52・53・54図〕北中原遺跡(第3次)

位置と検出状況 T-17グリッド、9-13Trに位置する。規模は明確ではないが、調査範囲においては東西約5mの範囲に大量の鋳型が廃棄されていた。遺構の特徴 鋳型等の捨て場遺構の一部と考えられる。遺物包含層下には、テラス状の高まりと5基のPitがあり、最下面には2条の溝を確認した。なお、調査範囲狭小であった上、廃棄された鋳型が集積された場所と推察され、遺構範囲は明確にとらえることはできなかった。出土遺物 土師器小皿(23)、土師器杯(24~26)、鋳型(27~43・46・56?)、ジョウウ(43・45)、トリベ(47)、三叉状土製品(48)、煎取(49~54)、羅羽口(58・59)等が出土した。鋳型は調査当時半分以上の形を残していたものが18点あり、内2点はほぼ完形に近い状態であった。27の鉄鋳や28の唐草文が施された鋳型は外型のみで、内子は確認できなかった。遺構の時期 9-13Trの遺構外遺物としては、10C後半から11C代の遺物(61~69)などが出土したが、23の土師器小皿は鋳型の堆積より下層のPitから出土した遺物であることから、少なくとも12C代以降と考えられる。ただし、27の鉄鋳や28の唐草文が施された蓋状製品もしくは茶釜と考えられる鋳型があることから、13~14cと考えられる。

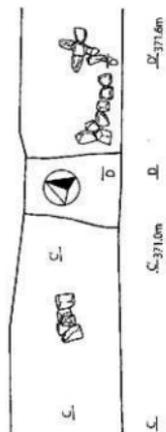
1号集石



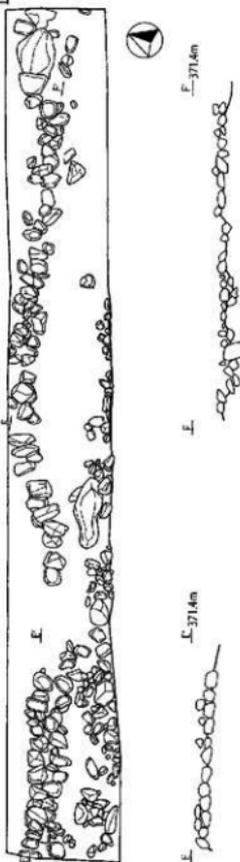
1号集石



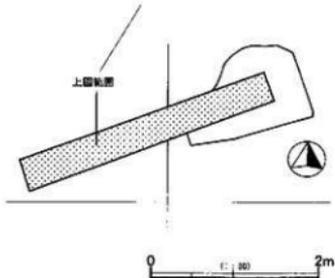
2号集石



3号集石

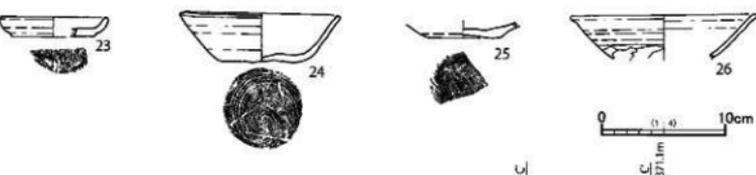
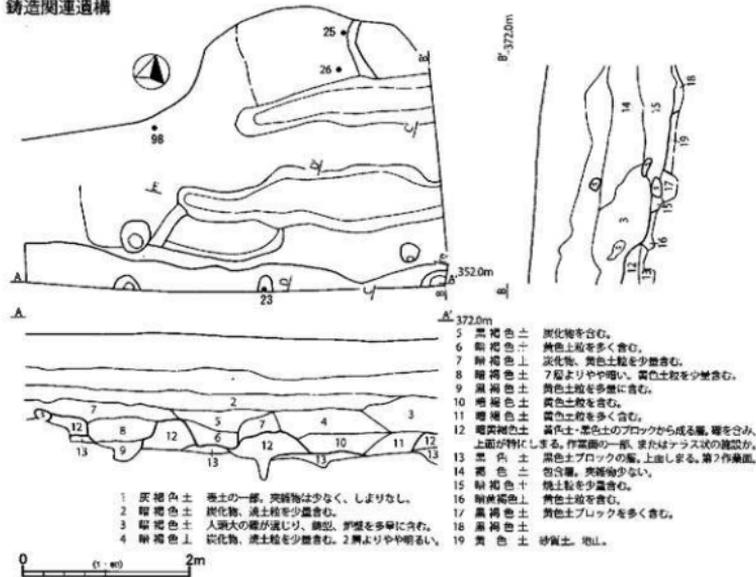


上層断面

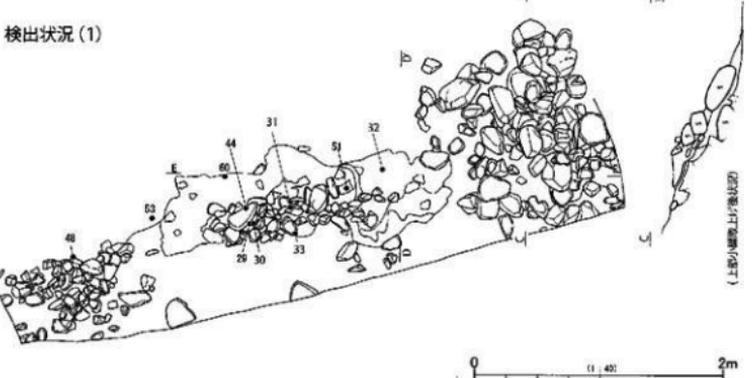


第46图 1~3号集石

鋳造関連遺構

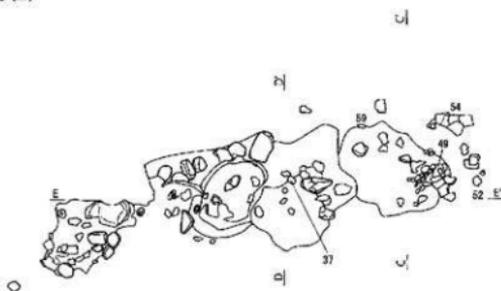


検出状況(1)

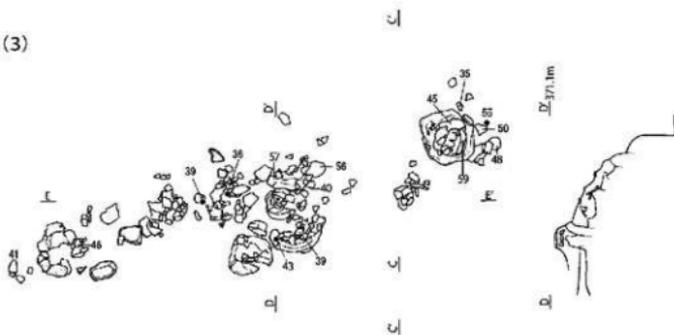


第47図 鋳造関連遺構(1)

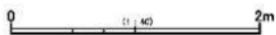
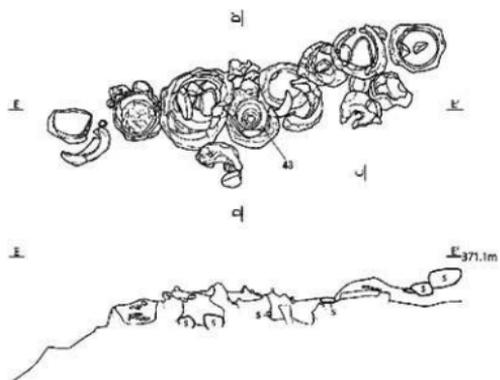
検出状況 (2)



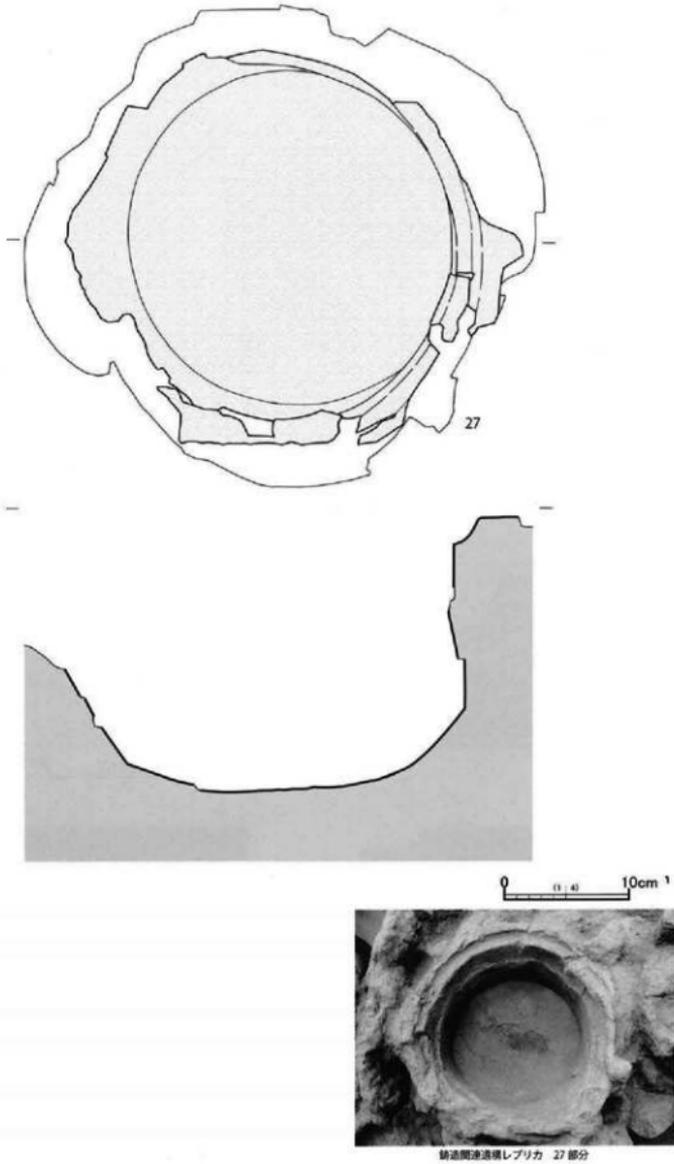
検出状況 (3)



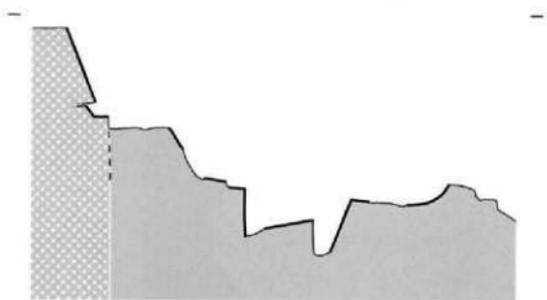
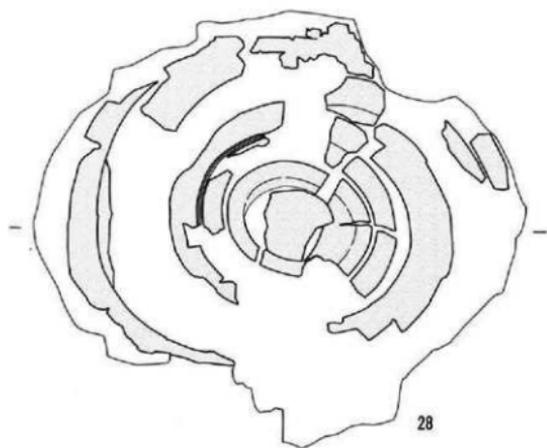
検出状況 (4)



第48図 跡道掘進遺構(2)



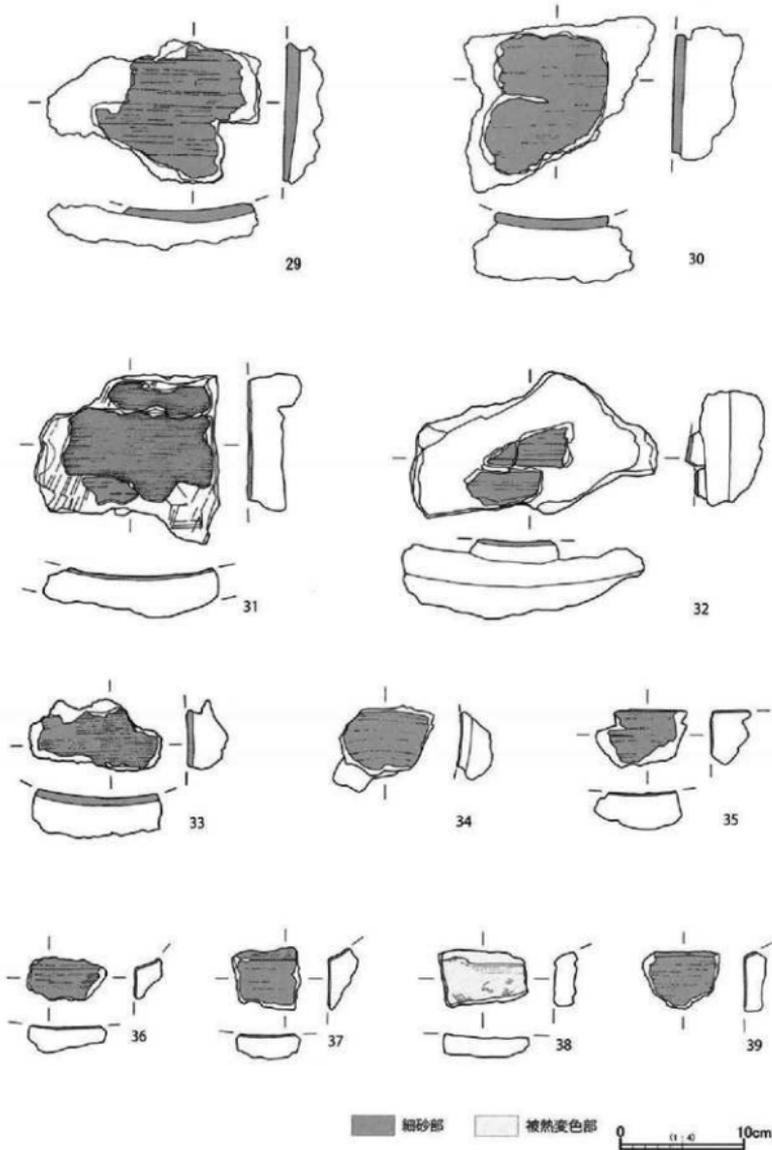
第49図 銅造関連遺構(3)



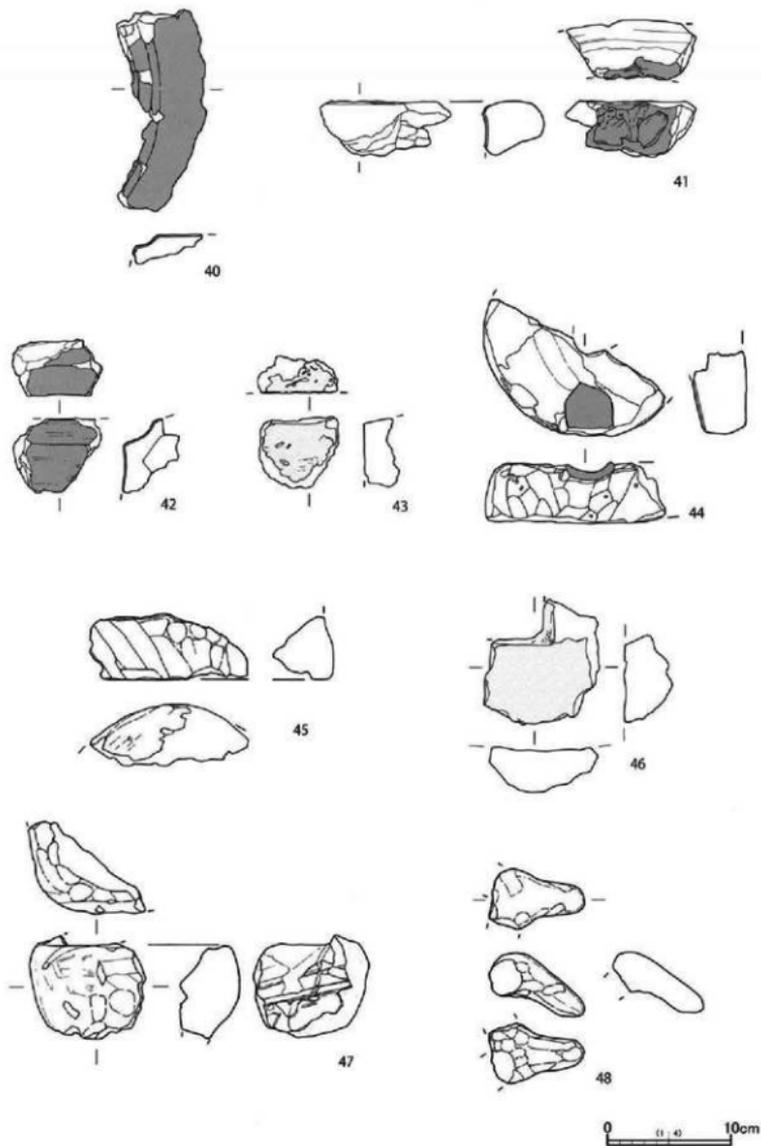
0 10cm



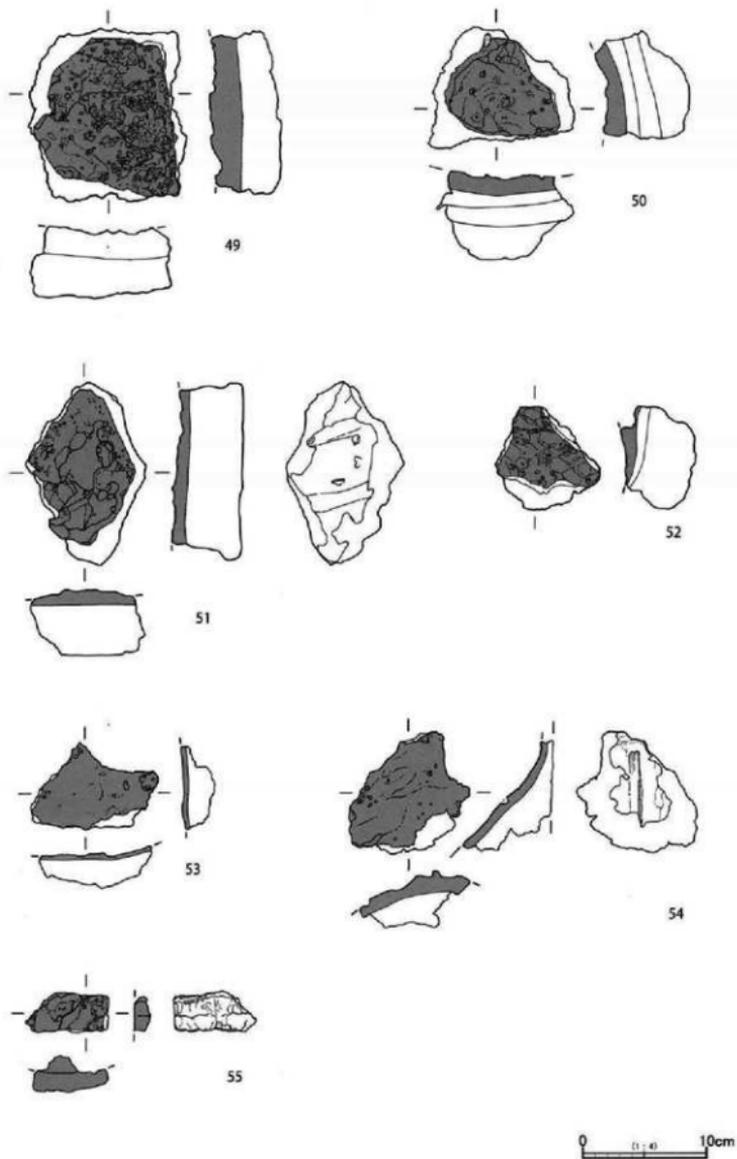
第50図 鍔造開道遺構(4)



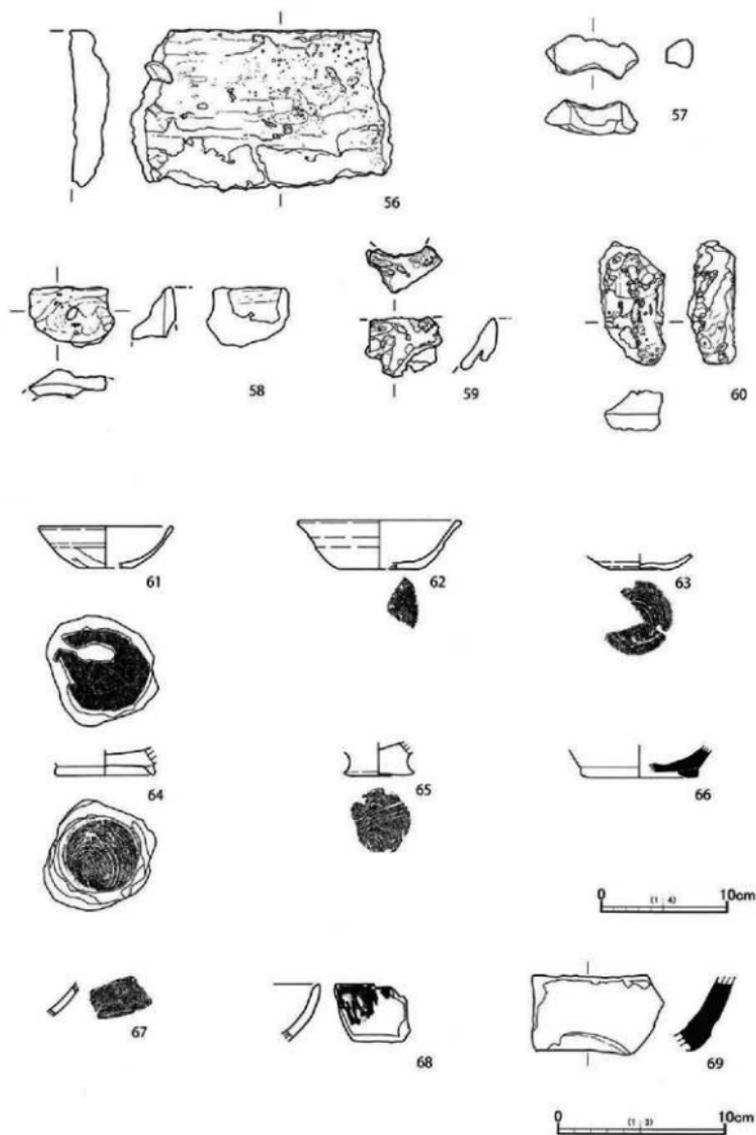
第51図 鑄造関連遺構(5)



第52図 鑄造関連遺構(6)



第53図 鋸造関連遺構(7)



第54図 銅造閩運道構(8、9-13Tr)出土遺物

表 18 築造関連遺物調査表

円	番号	遺 物	種 類	最大径 (cm)	最大径 (cm)	重量 (g)	他の調査	調査番号	備考
41	3	S12	伊壁	11.7	11.7	3.8	040	(円) スワ?種子殻、紫色 (円) 表面凹凸、筋溝痕、筋ノデ	2層(4層)
41	4	S12	伊壁	13.2	11.2	3.9	400	(円) スワ、種子殻、紫色 (円) 表面凹凸、筋溝痕、筋ノデ	2層(5層)
41	5	S12	伊壁	12.1	11.1	4.1	060	(円) スワ?種子殻、紫色 (円) 表面凹凸、筋溝痕、筋ノデ	2層(5層)
41	6	S12	伊壁	10.8	11.3	4.1	1170	(円) スワ、種子殻、紫色 (円) 表面凹凸、筋溝痕	2層(5層)
41	7	S12	伊壁	21.3	19	4.5	1640	(円) スワ、種子殻、紫色 (円) 表面凹凸、筋溝痕、筋ノデ	2層(5層)
49	27	築造関連遺物	調整・焼	30.1	40.9			(円) (円)。	
50	28	築造関連遺物	調整・灰濁か?	35.5	39			(円) (円)。	
51	29	築造関連遺物	調整・焼か	11.5	16.9	3.2	490	(円) スワ、種子殻 (円)。	2層(3層)
51	30	築造関連遺物	調整・焼か	12.5	14.7	3.7	780	(円) スワ、種子殻 (円)。	2層(3層)
51	31	築造関連遺物	調整・焼か	13.8	14.8	4.2	620	(円) スワ、種子殻 (円)。	2層(3層)
51	32	築造関連遺物	調整・焼か	11.5	19.6	6.5	900	(円) スワ、種子殻、炭化付着 (円)。	2層(5層)
51	33	築造関連遺物	調整・焼か	5.6	10.6	3.4	161	(円) スワ、種子殻 (円)。	2層(5層)
51	34	築造関連遺物	調整・焼か	7	7.2	2.7	90	(円) スワ、種子殻、筋ノデ (円)。	2層(3層)
51	35	築造関連遺物	調整・焼か	4.7	7.1	3	79	(円) スワ、種子殻 (円)。	2層(3層)
51	36	築造関連遺物	調整・焼か	3.4	6.4	2.1	35	(円) スワ?種子殻 (円)。	2層(3層)
51	37	築造関連遺物	調整・焼か	3.1	5.2	2.4	44	(円) スワ、種子殻 (円)。	2層(3層)
51	38	築造関連遺物	調整・焼か	4.9	7.2	1.7	59	(円) スワ?種子殻 (円)。	1層(2層)
51	39	築造関連遺物	調整・焼か	4.9	6.2	1.8	46	(円) スワ?種子殻 (円)。	2層(3層)
52	40	築造関連遺物	調整・焼か	16.5	5.8	1.9	146	(円) スワ?種子殻 (円)。	2層(3層)
52	41	築造関連遺物	調整・焼か	4.5	10.4	4.2	150	(円) スワ 種子殻 (円) 表面凹凸、筋溝痕、筋ノデ	2層(5層)
52	42	築造関連遺物	調整・焼か	6	7.1	4.5	100	(円) スワ?種子殻 (円)。	2層(4層)
52	43	築造関連遺物	調整	6.2	5.6	2.3	72	(円) スワ 種子殻 (円)。	2層
52	44	築造関連遺物	調整	7.5	15.9	4.5	490	10.5、R.3 (円) スワ 種子殻 (円)。	2層
52	45	築造関連遺物	調整	5.6	12.8	5.2	210	15.9 (円) スワ?種子殻 (円)。	3層
52	46	築造関連遺物	調整	9.9	8.8	3.8	227	(円) スワ 種子殻 (円)。	2層(3層)
52	47	築造関連遺物	とりべ、もつば?	7.9	9.1	4.9	308	(円) (円) スワ 種子殻	口縁に筋溝痕
52	48	築造関連遺物	三又瓦土版(イサカ)	4.8	7.5	3.6	86	遺跡 5.3 (瓦) スワ?種子殻、調整、灰濁	
53	49	築造関連遺物	調整・焼か	13.5	11.5	6	950	(円) スワ?種子殻 (円) 表面凹凸、筋溝痕付着	2層(3層)
53	50	築造関連遺物	調整・焼か	9	10	7	440	(円) スワ?種子殻 (円) 表面凹凸、筋溝痕付着	4層
53	51	築造関連遺物	伊壁	15.8	9.5	5.6	545	(円) スワ?種子殻、調整 (円) 表面凹凸、筋溝痕付着	2層(5層)
53	52	築造関連遺物	調整・伊壁か?	8.1	8.2	5.8	249	(円) スワ?種子殻、(円) 表面凹凸、筋溝痕付着	2層(5層)
53	53	築造関連遺物	調整	7	9.2	2.9	108	(円) スワ?種子殻、(円) 表面凹凸、筋溝痕付着	2層(3層)
53	54	築造関連遺物	伊壁	9.5	8.9	4	216	(円) スワ?種子殻、丁瓦 (円) 表面凹凸	2層(4層)
53	55	築造関連遺物	調整	5.1	6.6	2.8	35	(円) スワ?種子殻、(円) 表面凹凸、筋溝痕付着	1層(2層)
54	56	築造関連遺物	調整	13.2	20.7	2.6	730	L1層 28 (円) スワ?種子殻、(円) 表面凹凸	1層(3層)
54	57	築造関連遺物	調整	3.1	7.8	2	39	L1層 6.2 (円) (円)。	
54	58	築造関連遺物	調整	4.9	5.7	2.9	73	(円) 調整付着	2層
54	59	築造関連遺物	調整	4.9	5.7	1.7	53	L1層 6 (円) 調整付着 (円)。	2層
54	60	築造関連遺物	調整	9.3	5	3.6	83	(円) スワ?種子殻、(円) 表面凹凸	

## SD1〔第55図〕

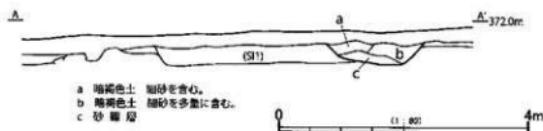
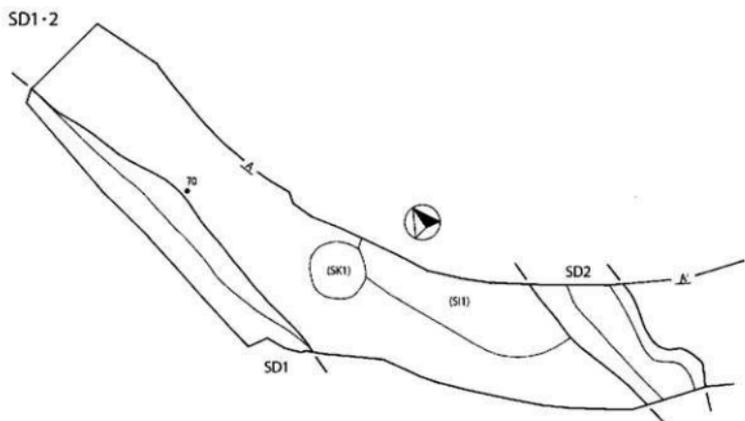
位置と検出状況 GG-12グリッド、9-1Tr 西壁際で確認した。規模は明確ではないが、調査範囲においては南北約6.2mを測った。遺構の特徴 出土遺物は若干時期差が認められるものの、SD2と平行する位置にあることから、旧道路の側溝であった可能性が考えられる。出土遺物 土師器環(70)が出土した。遺構の時期 出土遺物の時期から、10C後半頃としておく。

## SD2〔第55図〕

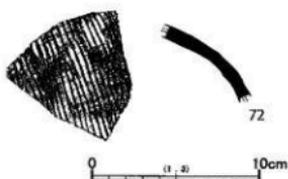
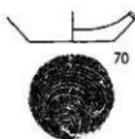
位置と検出状況 IIII-12グリッド、9-1Tr 西壁際で確認した。規模は明確ではない。遺構の特徴 出土遺物は若干時期差が認められるものの、SD1と平行する位置にあり、旧道路の側溝であった可能性が考えられる。出土遺物 土師器環(71)、須恵器甕(72)が出土した。遺構の時期 出土遺物が少なく明確ではないが、10C中頃としておく。

## SD3〔第55図〕北中原遺跡(第3次)

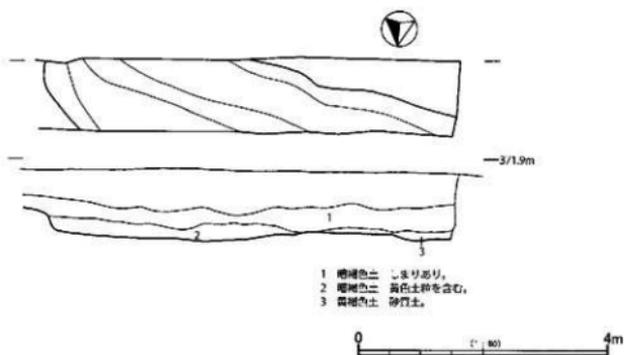
位置と検出状況 N-O-19グリッド、9-11Trで確認した。確認面から床面までの深さは約22cmを測った。遺構の時期 出土遺物はなく、不明である。



- a 暗褐色土 細砂を含む。  
 b 暗褐色土 細砂を多数に含む。  
 c 砂層



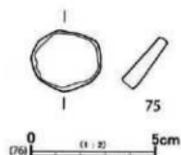
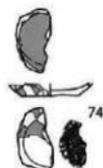
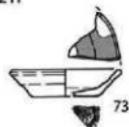
SD3



- 1 暗褐色土 じりり形。  
 2 暗褐色土 黄褐色砂を含む。  
 3 黄褐色土 砂質土。

第55図 SD1~3

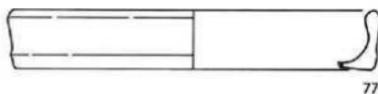
9-2Tr



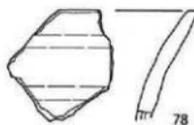
9-4Tr



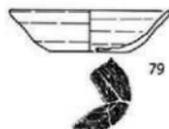
9-6Tr



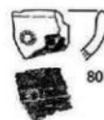
9-2Tr



9-10Tr



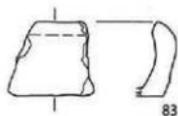
9-11Tr



0 (79) 10cm

0 (81) 5cm

9-12Tr



9-14Tr

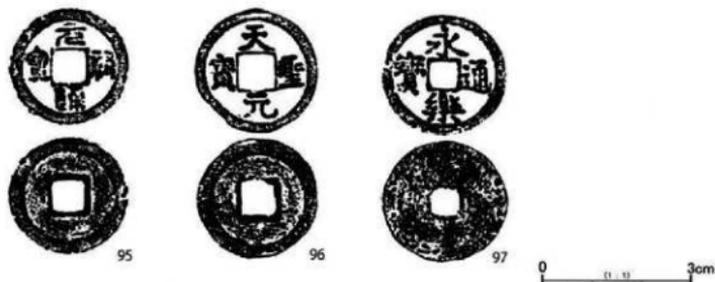
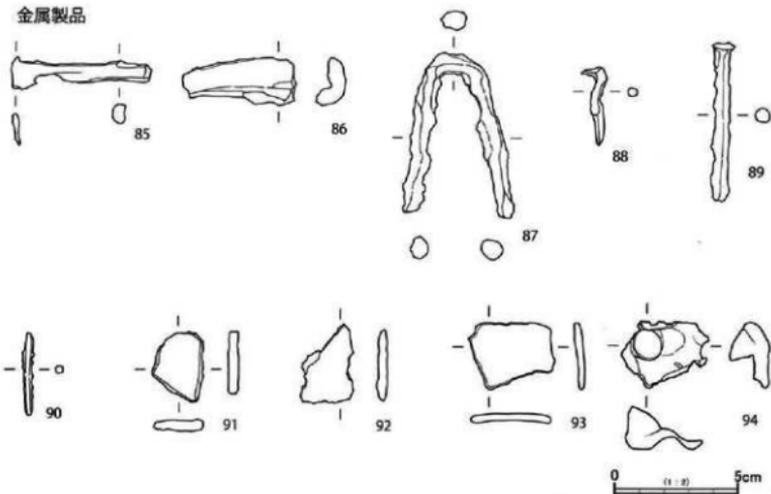


0 (84) 10cm

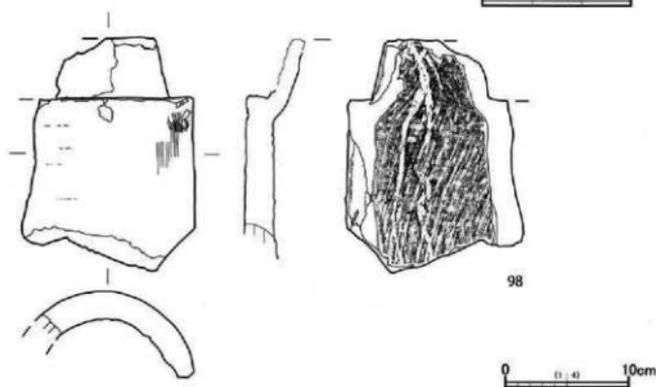
0 (1) 10cm

第56図 遺構外

金属製品

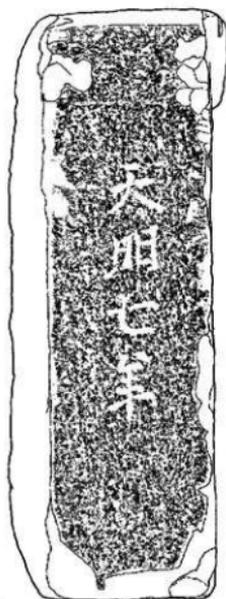
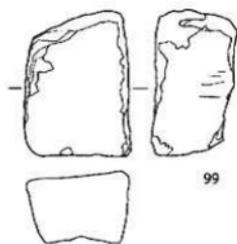


瓦

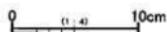


第57図 金属製品・瓦

石製品



101



第58圖 石製品

表 19 石動遺跡支線9号地区 遺物調査表

調査号	遺物	種類	器種	口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	土質	出土	整形技法	色調	備考
40	1	S11	土師器 甕	(21.8)	良	やや黄、白・黒	(外) ロクロナデ、粘土研削 (内) ロクロナデ	明赤褐色	口縁の厚縁 中央凹なし。
40	2	S11	土師器 甕	- (8.4)	良	黄、白・黒	(外) ハケナデ (内) ハケナデ (底) 木槌造	明赤褐色	裾縁やや膨ら 外周は劣化して表面が割断
41	8	S12	土師器 甕	13.2 2.7 5.6	良	やや黄、赤・黒	(外) ロクロナデ、細輪ヘラ研削 (内) ロクロナデ (底) 回転糸切造	明赤褐色	全体的に歪んでいる
42	9	S13	土師器 甕	(11.6) 12.2 5.0	良	黄、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切造、スノコ状圧痕	褐色	裾縁あり 口縁打ち抜き 内面やや歪んでいる 灯明か
42	10	S13	土師器 甕	- 5.4	良	黄、白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切造、スノコ状圧痕	褐色	
42	11	S13	土師器 甕	(15.2) -	良	黄、白	(外) ロクロナデ (内) コクロナデ	褐色	
42	12	S13	土師器 甕高 山心杯	-	良	やや黄、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) ロクロナデ、付高付	褐色	裾縁あり 全体的に歪んでいる
42	13	S13	土師器 甕高 高付杯	- 10.2	良	黄、赤、白	(外) コクロナデ (内) ロクロナデ (底) ロクロナデ、付高付	褐色	裾縁あり 口縁打ち抜き 内面やや歪んでいる 灯明か
42	14	S13	土師器 小笠型	(18.4) -	良	黄、白・黒	(外) タテハ、擦磨造 (内) ナデ、ココハ、擦磨造	明赤褐色	全体的に歪んでいる
42	15	S14	土師器 甕	(12.0) -	良	黄、白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	褐色	内面歪み、灯明か
42	16	S14	土師器 甕	(13.8) (3.3) (7.0)	良	やや黄、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切造、スノコ状圧痕	褐色	裾縁あり
42	17	S14	土師器 甕	(12.6) -	良	やや黄、赤・白	(外) ナデ (内) ナデ	褐色	裾縁あり
43	18	S14	土師器 甕	(13.5) -	良	黄、赤・白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	褐色	口縁の一部分が 灯明造
43	19	S14	土師器 甕	-	良	黄、白	(外) 明金製、板割 (内) ナデ	灰色	外周厚縁
44	20	S16	灰被陶器 甕	(15.0) -	良	黄、白・黒	(外) ロクロナデ、細輪 (内) ロクロナデ、細輪	灰褐色	つばあり 内面に割け痕りか 足込みの痕跡
44	21	S16	灰被陶器 甕	- (8.0)	良	黄、白・黒	(外) ロクロナデ、細輪 (内) ロクロナデ、細輪 (底) ロクロナデ、付高付	灰白色	内面は割け痕りか 足込みの痕跡
46	22	2号5号	土師器 甕	- (7.0)	良	黄、赤・白	(外) ナデ (内) ナデ (底) ナデ	褐色	外周一部が 内面劣化・割断
47	23	9-13T 遺物調査区	土師器土 甕	(8.8) (1.9) (6.5)	良	黄、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切造	褐色	Pt 内周土
47	24	9-13T 遺物調査区	土師器 甕	12.8 3.9 6.4	良	黄、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切造、擦磨造	明赤褐色	歪みが大きい
47	25	9-13T 遺物調査区	土師器 甕	(5.4) -	良	黄、赤・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 回転糸切造、擦磨造	褐色	
47	26	9-13T 遺物調査区	土師器 甕	(15.0) -	良	黄、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、ヘラ研削 (内) ロクロナデ	褐色	
44	91	9-13T 遺物調査区	土師器 甕	(10.8) (3.4) (4.2)	良	やや黄、白	(外) ロクロナデ、ヘラ研削 (内) ロクロナデ (底) ヘラ研削	褐色	内・外周厚縁

## 第三章 石動遺跡・北中原遺跡(98年度調査)

調査号	遺構	種類	形状	口径(cm) 高さ(cm) 底径(cm)	検出	出土	採取技法	色調	備考
54-62	9-13Tr 遺構外	土埴器	杯	(13.2) (4.0) (6.4)	良	中や赤、白・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 同転糸切痕、スノコ状切痕	緑褐色	内面及び外面の一部が埋れている
54-63	9-13Tr 遺構外	土埴器	杯	- 4.8	良	中や赤、白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 同転糸切痕	褐色	
54-64	9-13Tr 穴形	土埴器	高台付杯	- 8.7	中や良	中や赤、赤・白・黒	(外) ロクロナデ、内黒、縞目 (底) 同転糸切痕、付高台、縞目	褐色	内面及び底部及び底面に縞線あり
54-65	9-13米 灰土	土埴器	柱状 高台杯	- 5.4	良	中や赤、白	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 同転糸切痕、スノコ状切痕	褐色	全体的に中や黒炭
54-66	9-13Tr 遺構外	瓦輪器器	盤	- (9.4)	良	赤、白	(外) 同転ヘタ前形 (内) ロクロナデ (底) 同高台	灰白色	
54-67	9-13Tr 遺構外	土埴器	杯	-	良	赤、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ、縞目	褐色	
54-68	9-13Tr 遺構外	土埴器	杯	-	良	赤、赤・金	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	褐色	内面が埋れている 灯明表
54-69	9-13Tr	須恵器	罎	-	良	赤、白・黒	(外) 自然焼 (内) ナデ	緑褐色	
55-70	SD1	土埴器	杯	- 6.8	良	中や赤、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 同転糸切痕	褐色	内面の一部が中や黒炭
55-71	SD2	土埴器	杯	- 4.0	良	中や赤、赤・白	(外) ヘタ前形 (内) ロクロナデ (底) 同転糸切痕、ヘタ前形	褐色	外周及び底面に黒炭
55-72	SD2	須恵器	罎	-	良	赤、白	(外) 町目 (内) ナデ、当て黒炭	灰白色	内、外周が中や黒炭 埋没部あり
56-73	9-2Tr 遺構外	陶器	小皿	(8.8) (2.1) (6.6)	良	赤、白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 同転糸切痕	灰白色	内面に高台付付着 とりこに利用か 15C中葉～後葉か
56-74	9-2Tr	土埴器土 器	皿	- (4.6)	良	赤、白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 同転糸切痕	灰白色	内面から外面に黒炭物(縞) 付着 15C中葉～後葉か
56-70	9-4Tr	土埴器	杯	- 6.4	良	赤、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 同転糸切痕	緑褐色	内面が中や黒炭
56-77	9-6Tr	土埴器土 器	短筒壺	(29.8) (4.6) (28.4)	中や良	中や赤、赤・白・金・黒	(外) ロクロナデ、ヘタ前形 (内) ロクロナデ (底) 同転糸切痕	緑褐色	外面が埋れている 底面に埋没している 遺埋
56-78	9-9Tr	土埴器土 器	内耳壺	-	良	中や赤、白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	褐色	外面が劣化、埋れている 15C末～16C前半頃か
56-79	9-10Tr	土埴器	杯	(12.8) (3.0) (8.2)	良	赤、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 同転糸切痕	褐色	全体的に劣化
56-80	9-11Tr	土埴器土 器	蓋形	- -	良	赤、赤、白、黒	(外) ロクロナデ、埋没部 (内) ロクロナデ	緑褐色	外面が中や埋まっている 中皿
56-81	9-12Tr	須恵器	蓋	- -	良	赤、白	(外) ロクロナデ、同転ヘタ前形 (内) ロクロナデ (底) 同転ヘタ前形	灰白色	
56-82	9-12Tr	須恵器器	罎	- 12.2	良	黒赤、白	(外) ロクロナデ、縞目 (内) ナデ、縞目 (底) 同高台	灰白色	
56-83	9-12Tr	土埴器土 器	短筒壺	-	良	中や赤、白・金・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ	褐色	外面が中や埋まっている 遺埋
56-84	9-14Tr	土埴器	杯	(11.9) (4.4) (6.4)	良	赤、赤・白・黒	(外) ロクロナデ (内) ロクロナデ (底) 同転糸切痕	褐色	

表 20 石動遺跡支線 9 号地区 土製品観察表

図	番号	遺構	種類	重量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	胎土	製作技法	色調	備考
56	75	9 - 4Tr	土製門錠	4.37g	2.4	0.5	2.5	密、赤・白		鈍褐色	

表 21 石動遺跡支線 9 号地区 金属製品観察表

図	番号	遺構	種類	重量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	材質	備考
57	85	SI1	釘	7.65	1.3	0.5	5.7	鉄	
57	86	9 - 10Tr	滓	7.65	2.6	0.8	3.4	-	
57	87	9 - 14Tr	釘	24.9	13.8	0.9	1.0	鉄	
57	88	SI1	釘	1.83	2.2	0.4	0.9	鉄	
57	89	9 - 9Tr	釘	5.69	6.5	0.6	0.9	鉄	
57	90	9 - 13Tr	釘	24.9	3.4	0.3	0.4	鉄	表採
57	91	SI2	板状不明品	7.24	2.8	0.4	2.1	鉄	
57	92	SI2	板状不明品	24.9	2.9	0.4	2.5	鉄	
57	93	9 - 13Tr	滓	10.33	2.8	0.3	3.2		
57	94	9 - 13Tr	板状不明品	20.39	2.8	0.3	3.2	銅	

表 22 石動遺跡支線 9 号地区 瓦観察表

図	番号	遺構	種類	重量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	胎土	製作技法	色調	備考
57	96	9 - 13Tr	大瓦	840	18.9	12.7	2.2	中や密、白・金	( <sup>1</sup> )面 (凹面) 左日取	淡黄色	

表 23 石動遺跡支線 9 号地区 石製品観察表

図	番号	遺構	種類	重量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	材質	備考
58	99	SI1	砥石	420	8.9	6.2	3.7	涙岩	1面 但し割離片
58	100	9 - 6Tr	砥石	25.47	6.6	5.3	0.7	花崗岩	3面(池2面の一部も使用か)
58	101	表採 (石塔基礎埋 没)	基石	25.47	46.5	16.0	23.9	化閏閃緑岩	『藤原比久尼』 「天明七年」(1787年)



SI1 東から



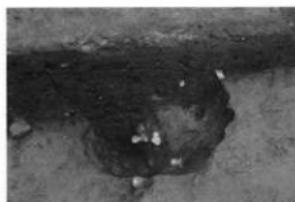
SI1 西から



SI2 東から



SI3-SK4 南から



SK4 南から



9-10Tr-SI4 西から



SI4 カマド 西から



SI5(SI4 重複状況) 西から



SI5 北から



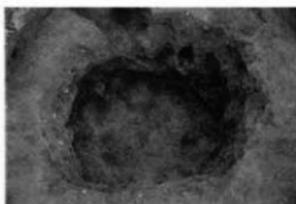
SI5 南から

P L 19 石動遺跡98年度調査支線9号地区 北中原遺跡(第3次)



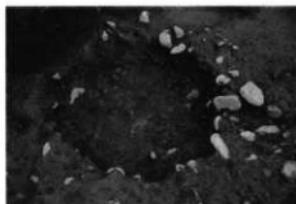
道路状遺構

南から



SK1

西から



SK2

西から



SK3

西から



SD1

南から



SD2

南から



硬化面 (9-14Tr)

南から



硬化面 (9-14Tr)

東から



旧河道 (9-1Tr)

南から

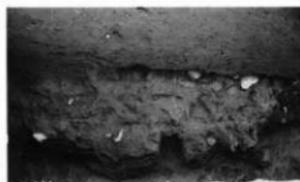


旧河道 (9-1Tr)

西から



鑄造関連遺構 確認状況 東から



鑄造関連遺構 確認状況 北から



拡張後、確認状況 北から



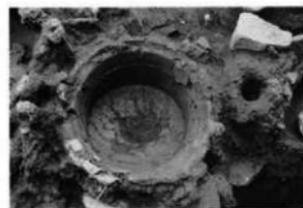
拡張後、確認状況 西から



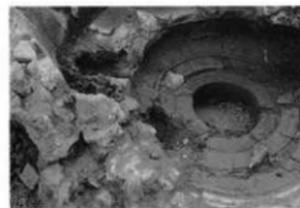
鑄型検出状況 北から



鑄型検出状況 西から



検出状況 (遺物-27 鍋鑄型) 北から



検出状況 (遺物-28 蓋? 鑄型) 北から



検出状況 北から



検出状況 北から

PL21 石動遺跡98年度調査支線9号地区、北中原遺跡(第3次)



9-2Tr

東から



9-2Tr

南西から



9-2Tr

北東から



9-2Tr 集石

南西から



9-3Tr

北東から



9-4Tr

北東から



9-5Tr

北東から



9-6Tr

北東から



9-7Tr

北東から



9-8Tr

東から



9-9Tr

東から



9-11Tr

東から



9-12Tr-SD3

北東から



9-12Tr

西から



9-13Tr

東から



9-13Tr

西から



9-13Tr 上層

東から



9-14Tr

南西から



石碑

北東から



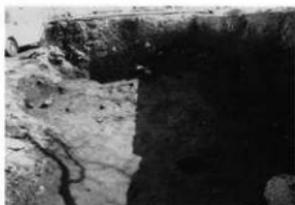
石碑

東から

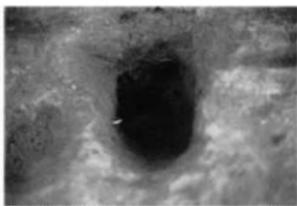
PL23 石動遺跡98年度調査支線9号地区、北中原遺跡(第3次)



鋳造関連遺構 完掘状況 北西から



鋳造関連遺構 完掘状況 西から



鋳造関連遺構内 Pit 北から



調査後近景 西から



レプリカ作成作業状況



遺物取り上げ作業状況



鋳造関連遺構 レプリカ



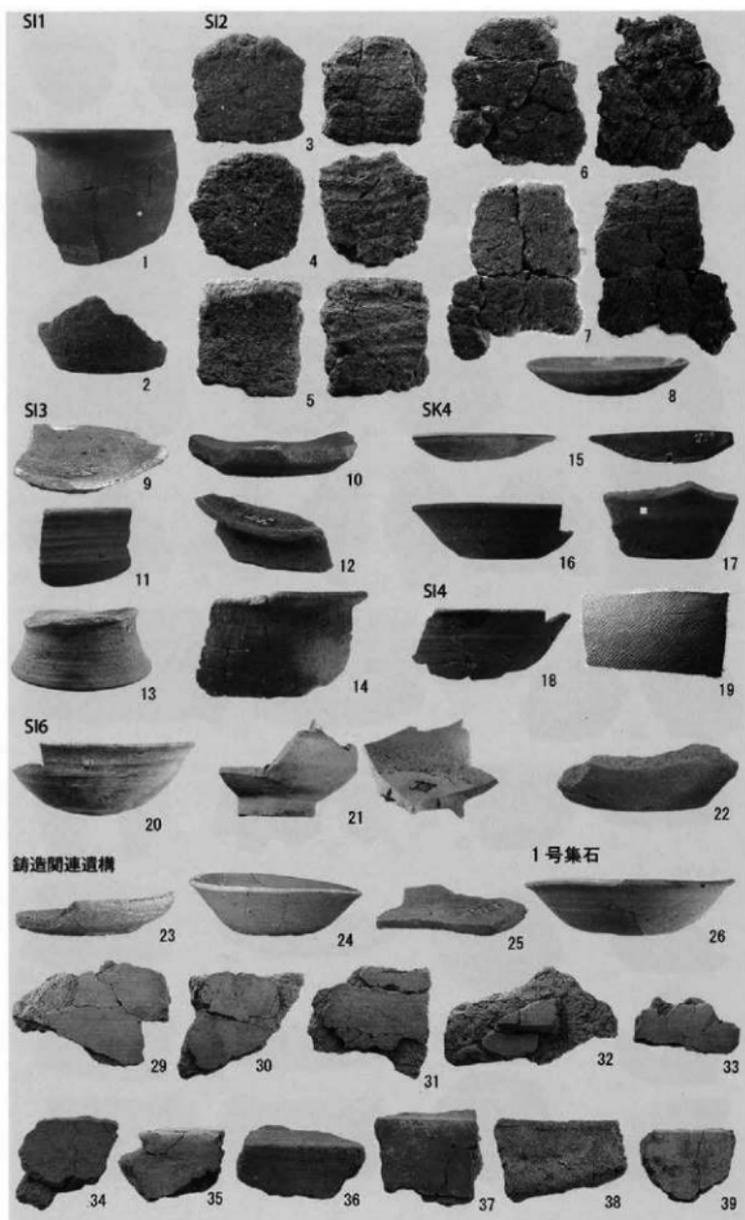
9-1Tr 南東から

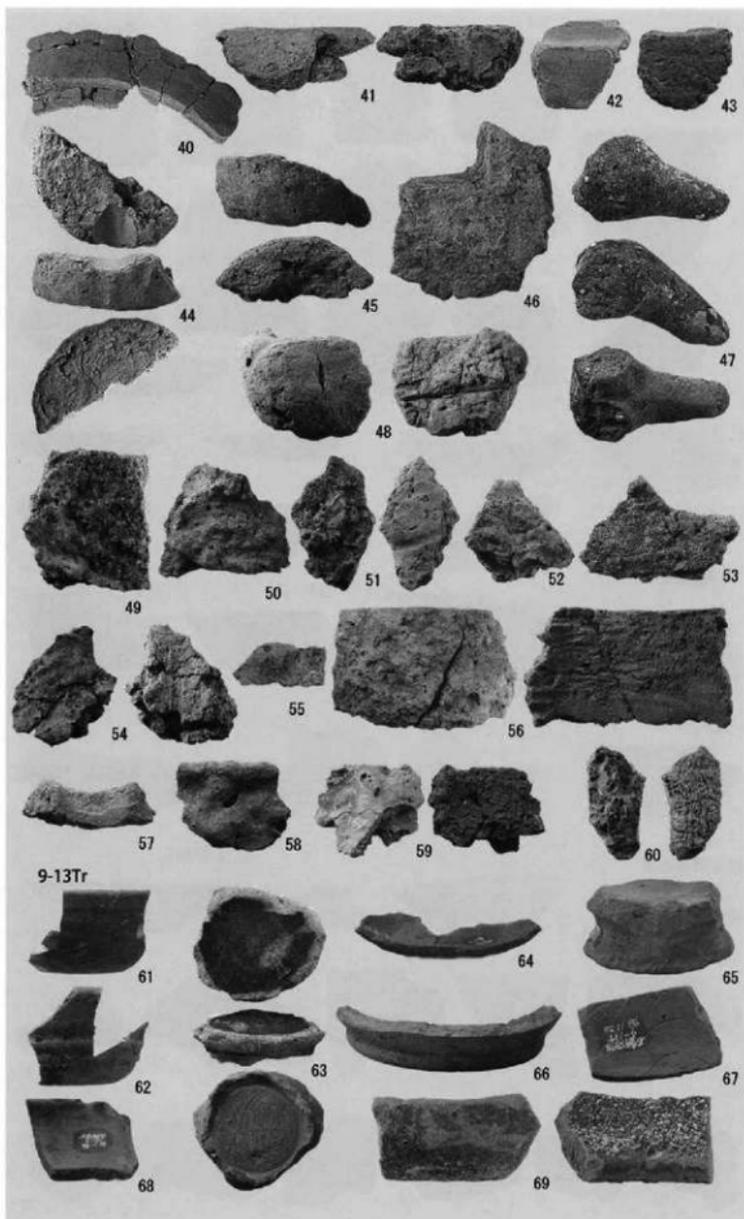


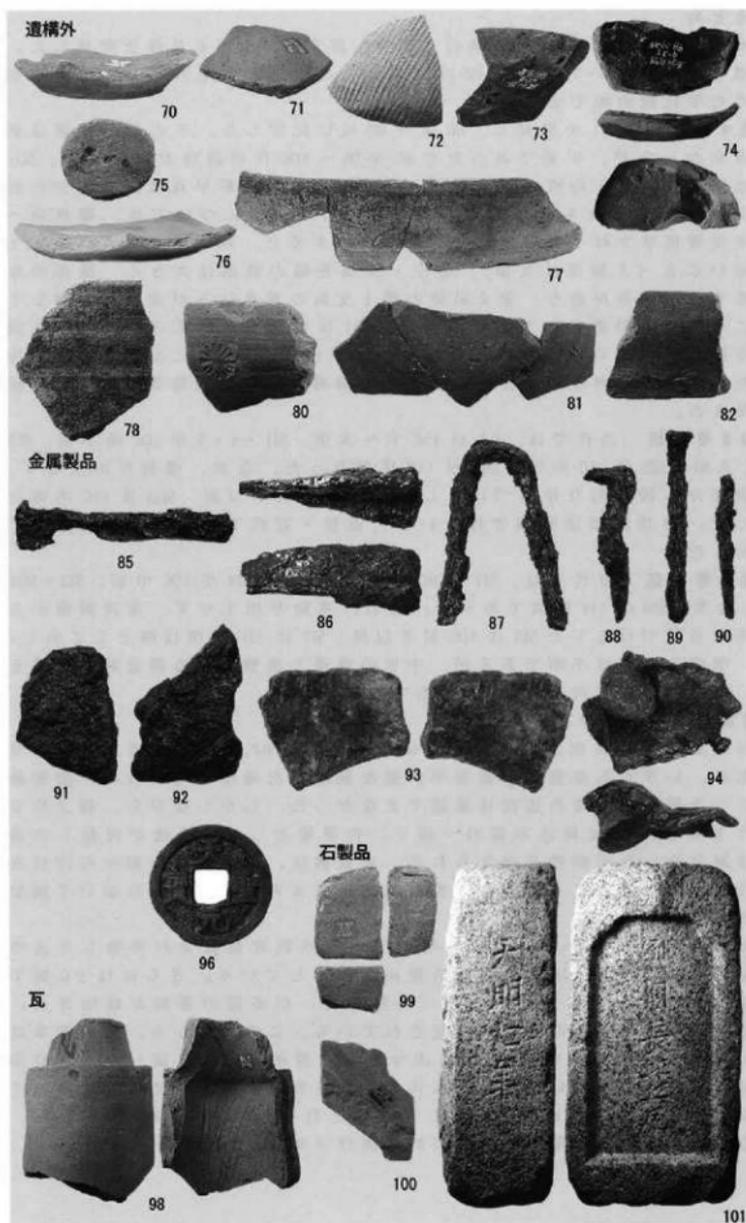
9-2Tr 北西から



9-2Tr 南東から







## V. まとめ

調査の結果、住居跡14軒、集石3箇所、溝8条、土坑6基等を発見した。各遺構の年代については、表12・17で示した。以下、各地区ごとに出土遺物から得た年代順の順でまとめる。

・支線4号地区 SD1を発見し、8C末～9C代に比定した。その他、遺構は確認できなかったが、少量であったが8C中頃～10C代の遺物が出上した。SD1からは平瓦・丸瓦・均整唐草文軒平瓦片が出上した。軒平瓦は、側面から約10cmほどが残存したものである。瓦当面のモチーフについては、榑原功一氏の甲斐型唐草文軒平瓦の型式分類をもとにすると、珠文帯がなく、脇・上幅が短いこと（上縁部は欠損）、各主・支葉先端の珠部は大きく、珠部のない支葉もやや厚みがあり、第2単位の第1支葉の巻き込みが主葉に対向していることなどが特徴としてあげられる。SD1は東西方向に延びて、さらに国分寺寺院地推定域の外にあたるものの、瓦や8C中頃～9Cにかけて遺物が出上したことから、同時期に存在した道路の側溝もしくは地境等であった可能性が窺えた。

・支線6号地区 古代では、SI7が10C中～末頃、SI1・4・5が10C後半頃、SI3が10C末頃、SI6が11C中頃、SD2が11C代であった。なお、遺物が出上せず、重複関係から段階的な位置づけとしたSI2は10C後半以前、SD3は11C中頃以降とした。中世段階は明確ではないが、近世・近代ではSD1、1号石列などを検出した。

・支線9号地区 古代では、SI1が9C後半～10C代、SI4が10C中頃、SI3・SD1が10C後半、SI6は11C中頃であった。なお、遺物が出上せず、重複関係から段階的な位置づけとしたSI5は10C前半以降、SI7は11C中頃以降としておく。また、明確な時期は不明であるが、中世の遺構と推察される鋳造関連遺構を検出した。近世・近代では、3号集石を検出した。

### ・鋳造関連遺構について

今回確認した鋳造関連遺構は、支線9号地区のSI2、9-13Trで検出した廃棄場である。いずれも廃棄後の鋳型や炉壁を廃棄した場所と考えられ、直接鋳造を行った鋳込み場等の施設は確認できなかった。しかしながら、報文中で述べたとおり、SI2は鋳込み場の一面で、作業場としての機能が廃絶した後に廃棄場となった可能性も考えられる。両遺構は、検出した当初から注目され、今回の報告までに『山梨県史資料編7中世4考古資料』等において概要紹介されている。

また、9-13Trから南へ約150mの場所で山梨県教育委員会が実施した北中原遺跡第1・2次調査では、多数の鉄製品が出上している。さらには9C前半代の遺構から、鍛冶に関連したと「被熱土塊」が多量の遺物が検出され、高熱で処理を行う工房の存在が推定されている。このことから、猪股善彦は北中原遺跡の集落について、「他の国分寺関連遺跡と同様、国分寺造営時期に連動しており、造営に関わる鉄主体の金属を製造する工集団として再編され、県管内地区以外に居住を移したと解される」（猪股善彦2002）とし、国分寺の存続と密接に関わった典型的な国分寺集落と位置付けている。

（望月）

## 第四章 石動遺跡支線3号地区 [1999年度調査]

## 1. 調査概要

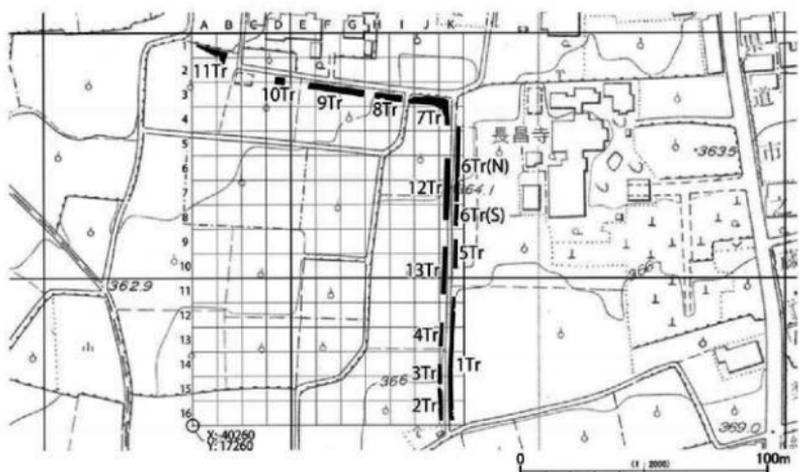
本調査は、石動遺跡地内における畑地帯総合整備事業・一般農道支線3号建設工事に先立ち、平成11年(1999)11月～12年1月に一宮町教育委員会が実施した。調査は既存道路(東西約100m、南北130m)の拡幅部に13箇所のトレンチを設定し、約380㎡を調査した。対象地は、長昌寺の西側に位置しており、緩やかに北へ向かって傾斜する土地で、1・2Trから7Trまでの標高差は約5mを測った。限られた調査範囲のため遺構の規模や性格については不明点を残したものの、奈良時代～江戸時代までの遺構を発見した。

## 2. 調査トレンチ

**1Tr** K-11～16グリッドに位置する。既存道路東側の南北約50m、幅約1.5mを調査範囲とし、地表面から最深230cmまで掘削した。地表面から約68cmの深さで暗褐色土の遺構確認面となり、土坑2基(SK2・SK3)、集石6箇所(1～4・10・11号集石)、溝1条(SD6)を確認した。他、トレンチ出土遺物として焙烙場(35)が出土した。

**2Tr** J-15・16・K-15・16グリッドに位置する。既存道路西側の南北約13m、幅約1.5mを調査範囲とし、最深134cmまで掘削した。地表面から約60cmの深さで暗褐色土(Ⅱ層)の遺構確認面となり、土坑1基(1Trで確認したSK2の一部)を確認した。

**3Tr** J-14・15・K-14・15グリッドに位置する。既存道路西側の南北約8m、幅約1.5mを調査範囲とし、地表面から最深30cmまで掘削した。遺構・遺物の確認はできなかった。



第59図 トレンチ位置図

**4Tr** J-12・13・K-12・13 グリッドに位置する。既存道路西側の南北約10m、幅約1.5mを調査範囲とし、最深100cmまで掘削した。地表面から約50cmの深さで暗褐色土(Ⅱ層)の遺構確認面となり、溝1条(SD3)を確認した。

**5Tr** K-9・10 グリッドに位置する。既存道路東側の南北約11.5m、幅約1.5mを調査範囲とし、地表面から最深110cmまで掘削した。地表面から約28cmの深さで暗褐色土(Ⅰ層)の遺構確認面となり、土坑1基(SK1)、溝1条(SD1)を確認した。

**6Tr** K-4～8 グリッドに位置する。既存道路西側の南北約40.5m、幅約1.5mを調査範囲とし、地表面から最深85cmまで掘削した。なお、地表面から約45cmの深さで遺構確認面となり、住居跡2軒(SI1・2)、集石1箇所(5号集石)、溝2条(SD1・4)、テラス1箇所(テラス2)を検出した。他、トレンチ出土遺物として焙烙鍋(36)・内耳鍋(37)が出土した。

**7Tr** I-3・J-3・4K-3・4 グリッドに位置する。既存道路に沿って南北約10m、東西約14m、幅約2～3.5mを範囲とし、約50㎡を調査した。掘削は地表面から最深120cmを測った。地表面から約40～60cmの深さで遺構確認面となり、住居跡3軒(SI3～5)、土坑1基(SK5)、集石1箇所(9号集石)、ピット2基(Pit19・20)を検出した。他、トレンチ出土遺物として甕(38)が出土した。

**8Tr** I・J-3 グリッドに位置する。既存道路南側の東西約11m、幅約2.5mの範囲を調査し、住居跡1軒(SI6)、ピット1基(Pit18)を検出した。他、トレンチ出土遺物として土師器小皿(39)が出土した。

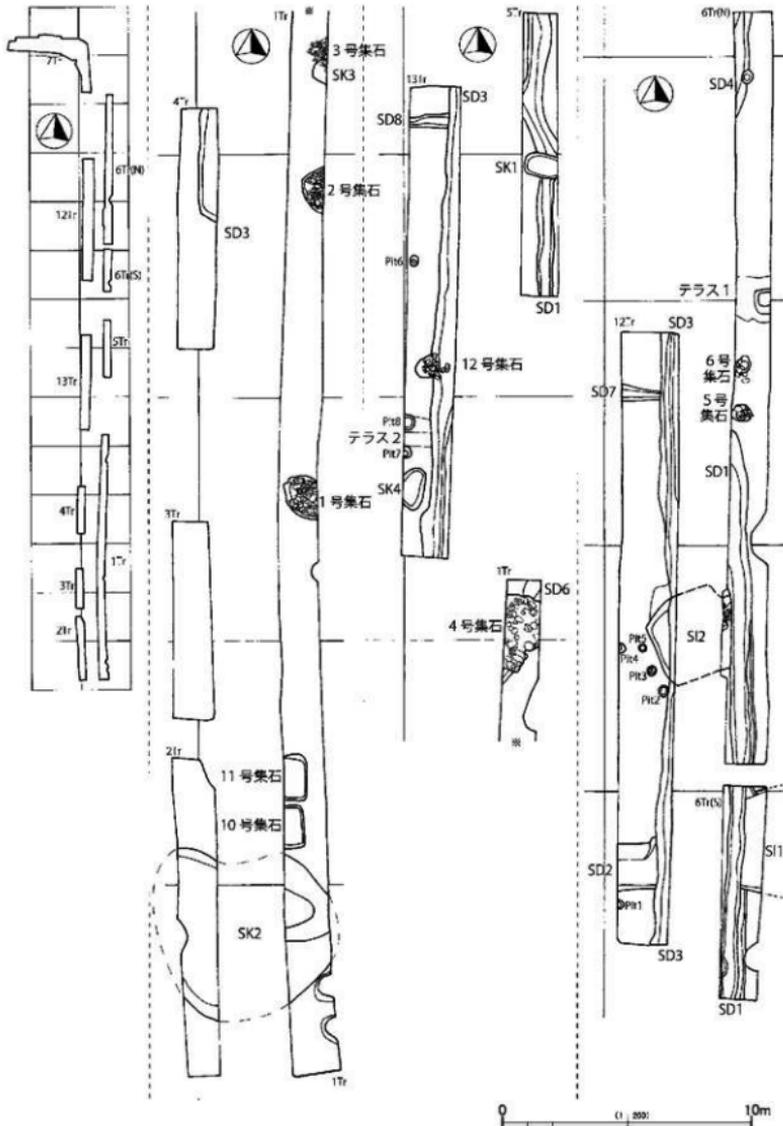
**9Tr** F～H-3 グリッドに位置する。既存道路南側の東西約11m、幅約2.5mの範囲を調査し、地表面から最深110cmまで掘削した。地表面から約42cmの深さで遺構確認面となり、住居跡1軒(SI7)、土坑2基(SK6・7)、ピット9基(Pit9～17)、集石2箇所(7・8号集石)溝1条(SD5)を検出した。他、トレンチ出土遺物として須恵器杯(40)、柱状高台杯(41)が出土した。

**10Tr** E-2・3 グリッドに位置する。既存道路西側の南北約8m、幅約1.5mを調査範囲とし、地表面から最深30cmまで掘削した。遺構は確認できなかったが、土師器杯(42)が出土した。

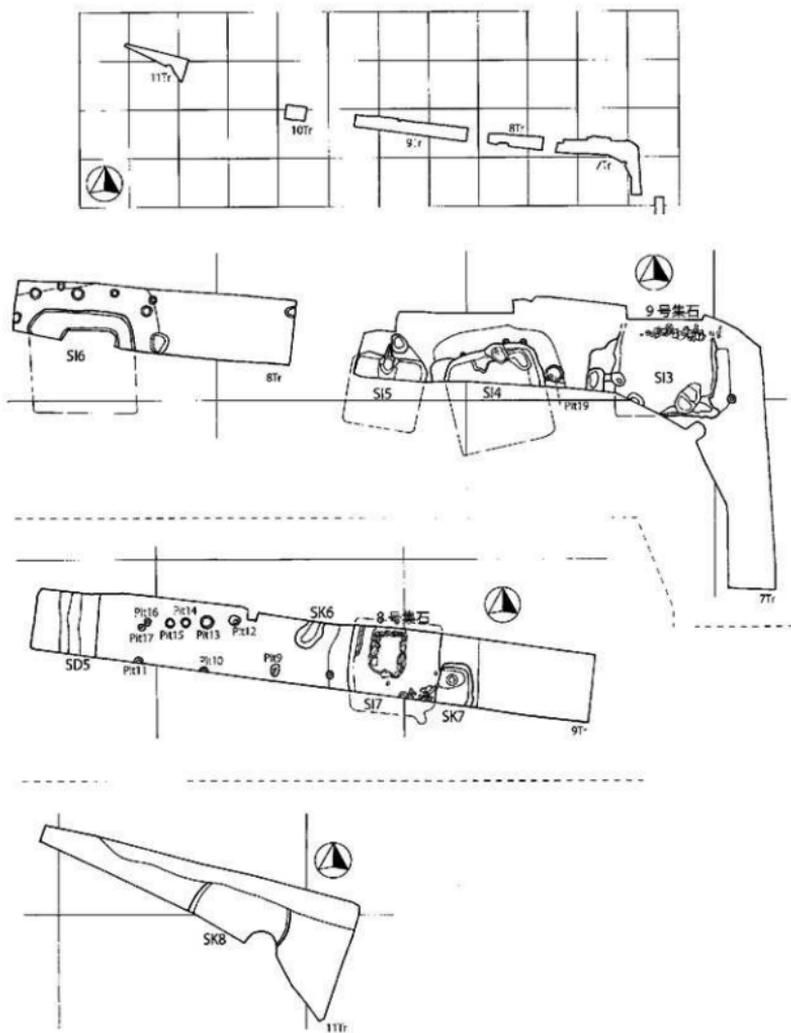
**11Tr** A～C-1・B・C-2 グリッドに位置する。道路新設部分で、約32㎡を調査範囲とし、土坑1基(SK8)を検出した。他、トレンチ出土遺物として土師器杯(43～45)、土製の焙烙鍋(46・47・49)・壺(50)・摺鉢(51)、磁器では染付碗(48)が出土した。

**12Tr** K-6～8 グリッドに位置する。既存道路西側の南北約25m、幅約2mを調査範囲とし、地表面から最深108cmまで掘削した。地表面から約50cmの深さで遺構確認面となり、住居跡1軒(SI2)、ピット4基(Pit1～3)、溝3条(SD2・3・7)を確認した。他、トレンチ出土遺物として土師器小皿(52)、須恵器壺(53)が出土した。

**13Tr** K-9～11・J-11 グリッドに位置する。既存道路西側の東西約19m、幅約2mを調査範囲とし、地表面から最深102cmまで掘削した。やや起伏があったが、地表面から約30cmの深さで遺構確認面となり、土坑1基(SK4)、ピット3基(Pit6～8)、集石1箇所(12号集石)、溝2条(SD3・8)を検出した。他、トレンチ出土遺物として土師器杯(54)が出土した。



第60図 遺構位置図(1)



第61图 遺構位置图(2)

## 3.発見した遺構・遺物

## ・SI1〔第62図〕

**位置と検出状況** K-7・8グリッド、6Tr南側に位置する。調査範囲では重複するSD1に壊されており、北壁、南壁を確認した。なお、断面図では別遺構と重複している可能性も窺えるが、明確ではない。規模は不明だが、検出した範囲では南北の壁間は約4.1m、確認面から床面までの深さは約40cmを測った。**遺構の特徴** 検出した範囲ではカマド施設はなく、褐色ブロックを少量含む床面を確認した。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

## ・SI2〔第62図〕

**位置と検出状況** K-7グリッドに位置する。6Trと12Trで確認し、重複するSD1(6Tr)・SD3(12Tr)に壊されていた。検出した範囲では西壁・北壁、南壁、カマドの一部を確認し、カマドの位置から推定した東壁と西壁との間は約4.2m、確認面から床面までの深さは約30cmを測った。**遺構の特徴** カマド施設は北東隅の位置(6Tr側)で焼土と灰黄褐色の構築土(粘土)を確認した。西壁から約30cm外側にほぼ等間隔で並ぶPit2～4を検出したが、住居との関係については不明である。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

## ・SI3〔第63・65図〕

**位置と検出状況** K-3・4・L-3・4グリッド、7Tr東側に位置する。重複する9号集石に北側を壊されており、東壁・西壁・南壁の一部を確認した。検出した範囲では東西の壁間は約4.2m、確認面から床面までの深さは、約30cmを測った。**遺構の特徴** カマド施設は北西隅に位置した。炭化物・焼土と構築材と思われる礫の堆積を確認した。他、褐色ブロックを少量含む床面を確認した。**出土遺物** 土師器小皿(1・2・3)・坏(4・5)などが出土した。**遺構の時期** 出土遺物の時期から、11C後半頃としておく。

## ・SI4〔第64・65図〕

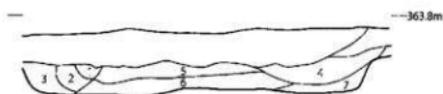
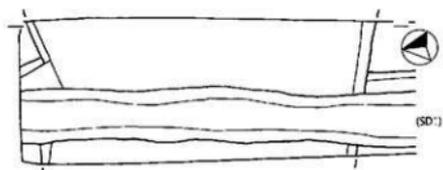
**位置と検出状況** J-K-3グリッド、7Tr西側に位置する。重複するSK5に上部を壊されていた。調査範囲では西壁・東壁・北壁を確認し、東西の壁間は約3.8m、確認面から床面までの深さは、約50cmを測った。**遺構の特徴** カマドは北壁のほぼ中央に位置し、炭化物と焼土、支柱石、袖部の構築材に用いられた礫を確認した。他、壁外周で約50～90cm幅の硬化面とPit19を確認できた。**出土遺物** 土師器坏(6～9)・皿(10)・陶器(11)・甕(12・13)・甕形土器(14・15)、須恵器甕(16)などが出土した。12は口径が大きく、甕系の鉢と称される器形に近い。14・15は甕形土器としたが、ハケメ調整がみられず、ナデや指痕のみが確認できる。14に関しては、縄文土器で浅鉢の一部である可能性も示唆されたが、カマドからの出土で胴部に穿孔があることから、ここでは甕形土器とした。**遺構の時期** 出土遺物の時期から、8C後半頃としておく。

## ・SI5〔第66図〕

**位置と検出状況** J-3グリッド、7Tr西側に位置する。重複はなく、調査範囲では北壁・東壁を確認し、東西約2.9m、確認面から床面までの深さは、約60cmを測った。**遺構の特徴** カマド施設が北壁のほぼ中央に位置し、炭化物・焼土粒を確認している。黄色土を含む貼床面を確認した。

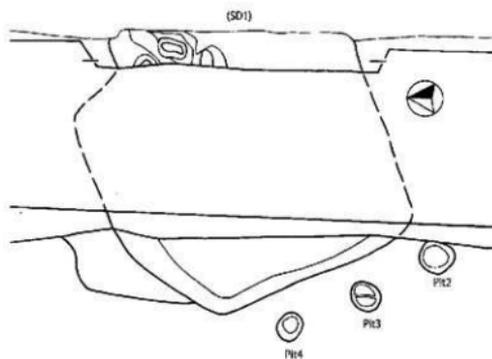
**出土遺物** かわらけ(17)・甕(18・19)などが出土した。**遺構の時期** 出土遺物から、8C中頃としておく。

S11

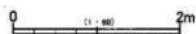


- 1 黄褐色土 黄色土ブロックを多量に含む。
- 2 黄褐色土 黄色土ブロックを多量に含む。
- 3 暗褐色土 栗色方向の溝が切っている。
- 4 黒色土 栗色方向の溝が切っている。
- 5 暗栗褐色土 黄色土粒を含む。
- 6 暗栗褐色土 黄色土粒を含む。
- 7 暗栗褐色土 黄土ブロック、黒色土ブロックを含む。

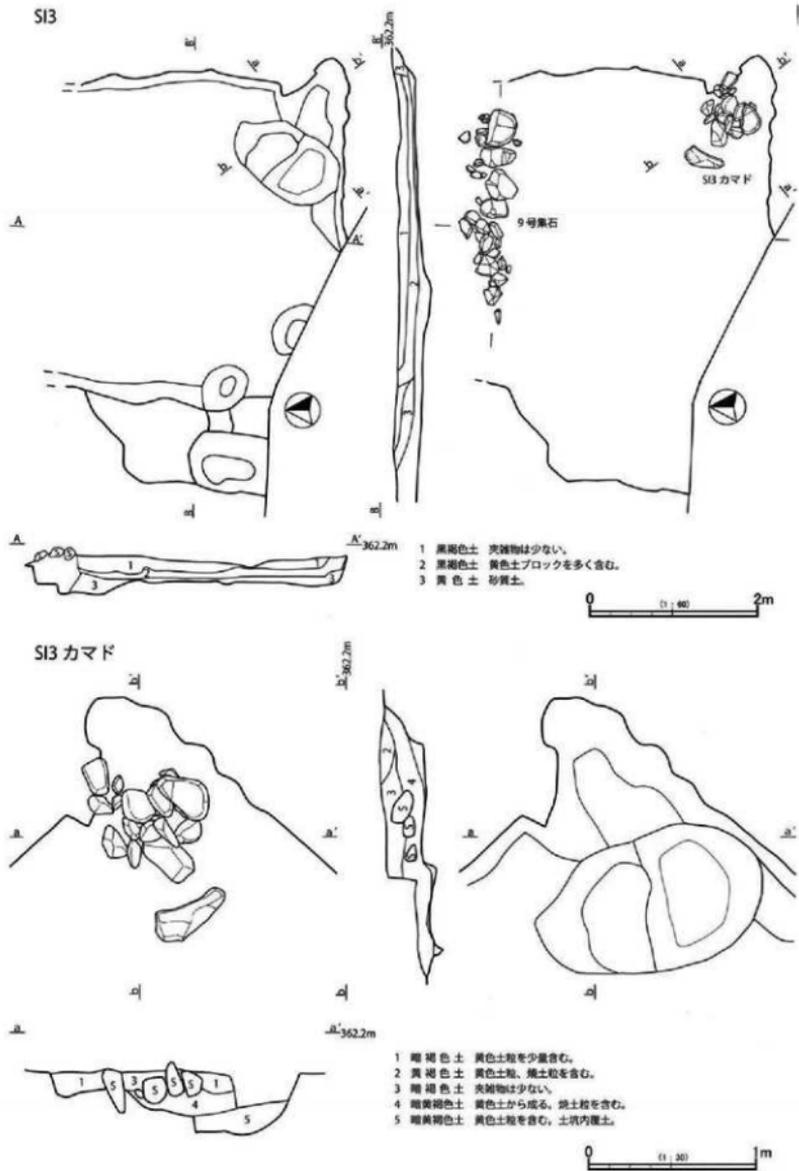
S12



- 1 暗褐色土 黄色土粒を含む。
- 2 黒褐色土 炭化物粒を少量含む。S01に伴うPitの可塑性あり。
- 3 暗栗褐色土 黄色土粒を含む。
- 4 黒褐色土 黄色土ブロックを含む。
- 5 灰褐色土 粘土。カマド構築土。下面が構土化。
- 6 暗褐色土 炭土を多量に含む。
- 7 暗褐色土 炭土粒、炭化物を含む。

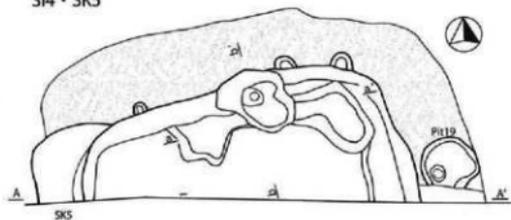


第62図 S11・2

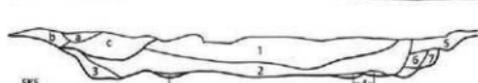


第63図 S13(1)

S14・SK5



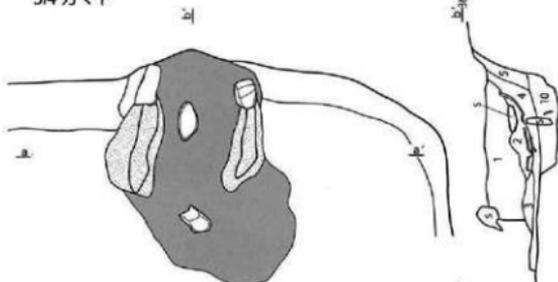
A A' SK5 Δ 362.3m



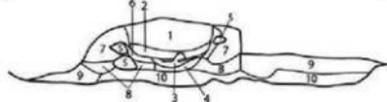
SK5  
a 黒褐色土 ブロック状。  
b 暗黄褐色土 黄色土ブロックを含む。  
c 暗黄褐色土 黄色土粒を含む。S14の1層に似る。

S14  
1 暗褐色土 黄色土粒を含む。  
2 黒褐色土 黄色土粒を多く含む。  
3 黒褐色土 灰層。  
4 暗黄褐色土 灰層、ややかたい。  
5 暗黄褐色土 灰層、黄色土ブロックを含む。  
6 暗褐色土 灰層、砂質暗褐色土ブロックを含む。  
7 黄褐色土  
0 (1:400) 2m

S14 カマド

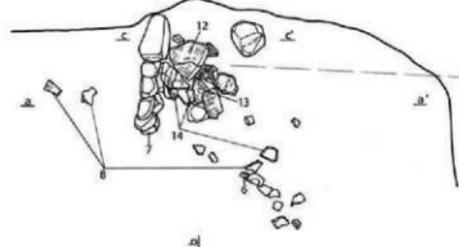


A A' Δ 361.8m



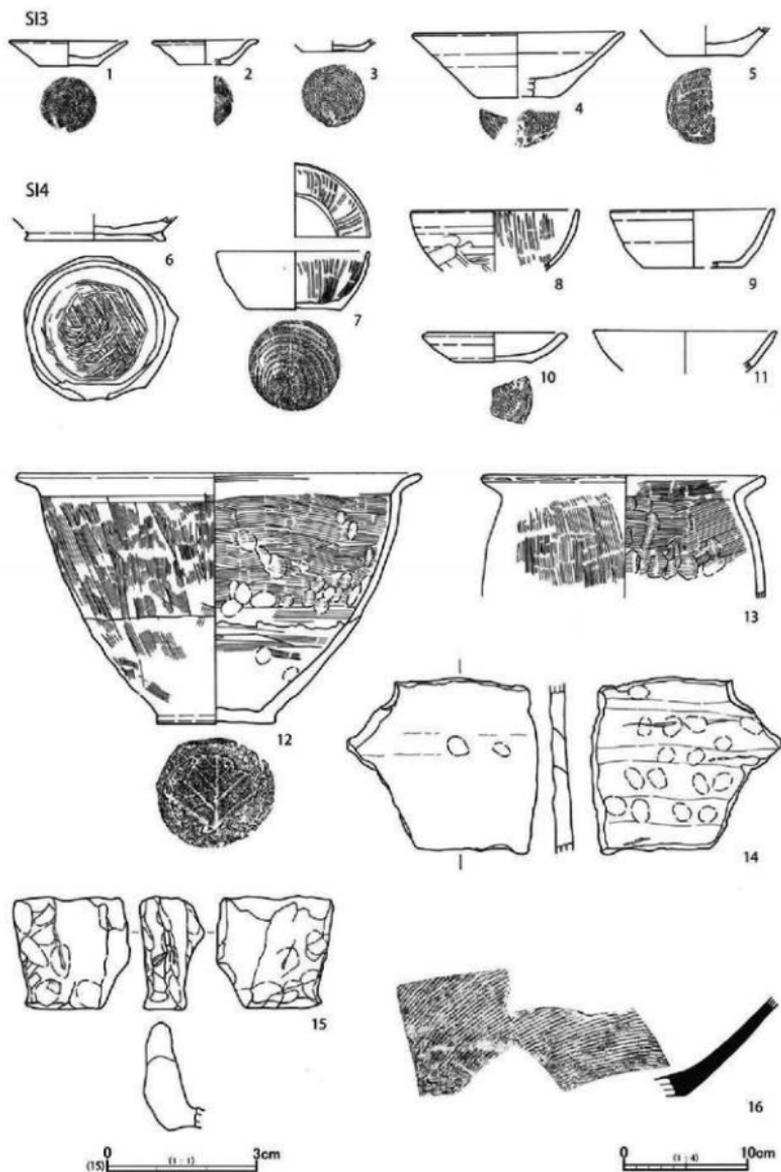
1 暗褐色土 灰層、天井構架土。  
2 赤褐色土 灰化地層、天井構架土。  
3 黒色土 灰化地層、上面灰化。  
4 黒色土 黄色土粒を含む。  
5 赤色土 灰土層、7層が灰土化。  
6 灰褐色土 粘土質、横ソツ構架土。  
7 暗褐色土 黄色土ブロックを含む。  
8 暗褐色土 灰土粒を少量含む。  
9 暗褐色土  
10 暗褐色土 灰土粒を少量含む。

361.8m C C'



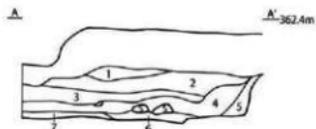
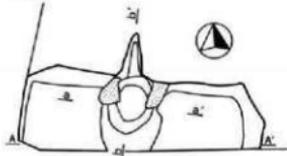
0 (1:200) m

第64図 S14(1), SK5

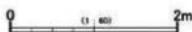


第65圖 SI3(2)-SI4(2)

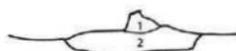
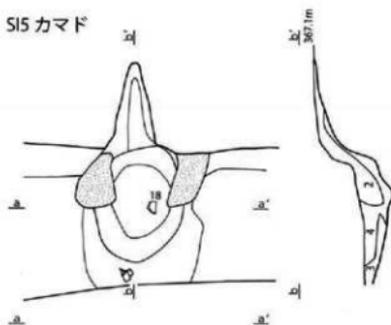
S15



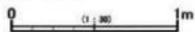
- 1 暗黄褐色土 黄色土粒を多く含む。
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土 炭化物、焼土粒を含む。
- 4 黄褐色土 中や軽炭素入り。
- 5 暗褐色土 黄色土粒を含む。
- 6 黒色土 焼土粒を含む。
- 7 暗黄褐色土 黄色土を多く含む。隠跡。



S15 カマド



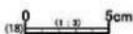
- 1 褐色土
- 2 褐色土 炭化物、焼土粒。
- 3 褐色土 2層より明るい褐色土。
- 4 褐色土 3層より明るい褐色土、焼土粒。



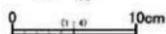
17



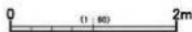
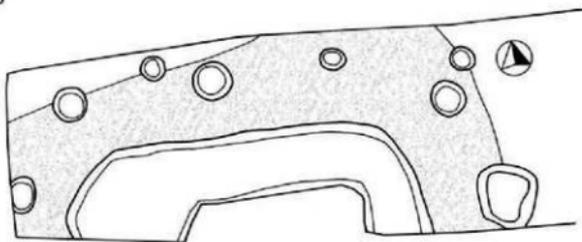
18



19



S16



第66図 S15・6

## ・SI6 [第66図]

**位置と検出状況** I-3グリッド、8Tr西端に位置する。調査範囲では重複はなく、北壁・西壁・東壁を確認し、東西約4.2mを測った。**遺構の特徴** 検出した範囲ではカマド施設等はなかったが、壁外周で幅約70～140cmの硬化面と大小8基のピットを確認した。**遺構の時期** 出土遺物がなく不明である。

## ・SI7 [第67図]

**位置と検出状況** G-II-3グリッド、9Trの中央からやや西に位置する。調査範囲では重複するSK7・7号集石・8号集石に壊されていた。西壁・東壁を確認し、東西の壁間は約4.6m、確認面から床面までの深さは、約50cmを測った。**遺構の特徴** カマド施設は別遺構の重複で明確ではないが、南東隅の壁際に炭化物と焼土が確認できた。他、幅約20cmの溝溝を西壁際に確認した。**出土遺物** 柱状高台杯(20)などが出土した。ただし、重複する8号集石でも同時期の遺物が出土しており、混ざり込みである可能性も考えられる。**遺構の時期** 出土遺物が少なく、明確ではないが、8号集石が12C代の集石墓と推定されるため、それ以前に廃棄されていたとしておく。

## ・SK1 [第76図]

**位置と検出状況** K-10グリッド、5Trのほぼ中央に位置する。SD1に上面を壊されており、遺存状況は悪かった。楕円形を呈すと推定され、検出した範囲では東西径約1.3m、南北1m、確認面からの深さ約48cmを測った。**遺構の特徴** 遺存部分が少なかったため、性格は不明である。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

## ・SK2 [第68図]

**位置と検出状況** J-15・16・K-15・16グリッド、1Tr・2Trの南端で確認した。調査範囲では重複する遺構はなかった。規模は明確ではないが不整形を呈すと推定され、検出した範囲では北東方向に約5.4m、確認面からの深さは約35cmを測った。**遺構の特徴** 2Trの確認範囲から獣骨が出土した。獣骨については附編3に掲載した分析報告から、ウシやウマを遺棄した場所と考えられる。**遺構の時期** 遺構構築の時期については明確ではないが、獣骨(馬・牛)の分析から、近代としておく。

## ・SK3 [第69図]

**位置と検出状況** K-12グリッド、1Trの北側に位置する。上面には3号集石が位置した。円形を呈す土坑と考えられ、検出した範囲では南北約1.4m、確認面からの深さ約1.6mを測った。覆土には40cm人の塵が混在した。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

## ・SK4 [第70図]

**位置と検出状況** J-K-11グリッド、13Trの南側に位置する。確認範囲では重複する遺構はなかった。不整形円形を呈し、長径約1.3m、確認面からの深さ約10cmを測った。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

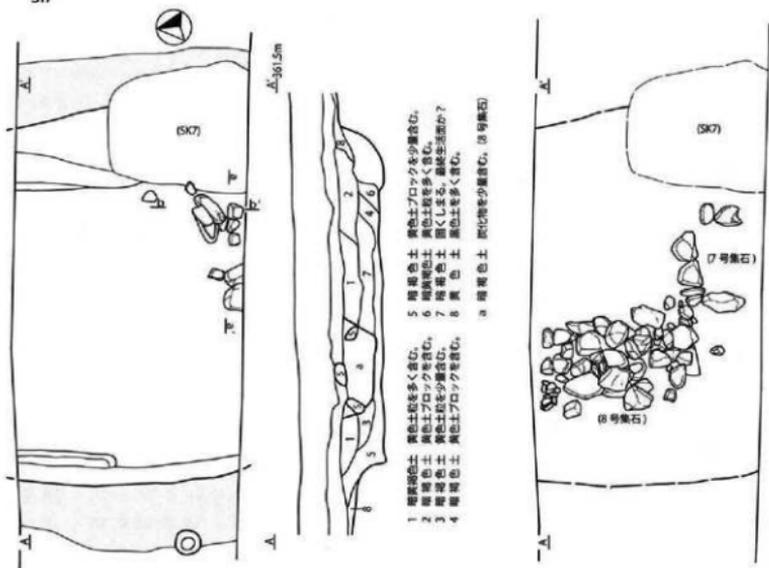
## ・SK5 [第64図]

**位置と検出状況** J-3グリッド、7Trの西側に位置する。重複するSI4の上面を壊していた。検出した範囲では、南北約90cm、東西約1.8m、確認面からの深さ約30cmを測った。**遺構の時期** 出土遺物はなく、不明である。

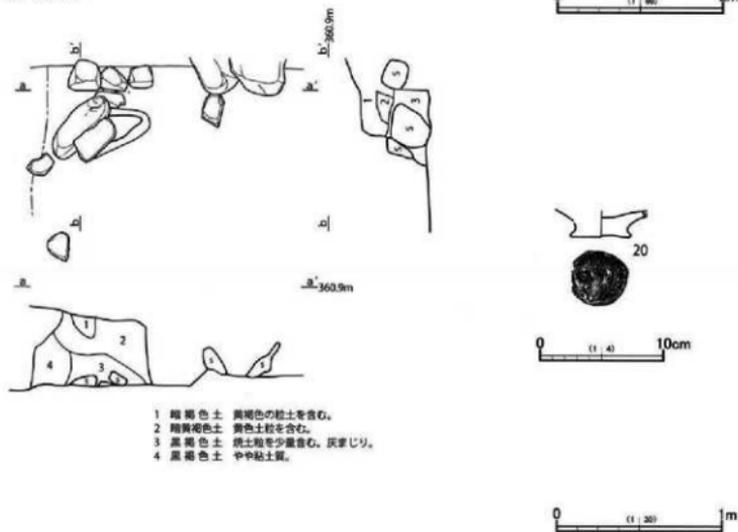
## ・SK6 [第70図]

**位置と検出状況** G-3グリッド、9Trの中央に位置する。重複する遺構はなく、

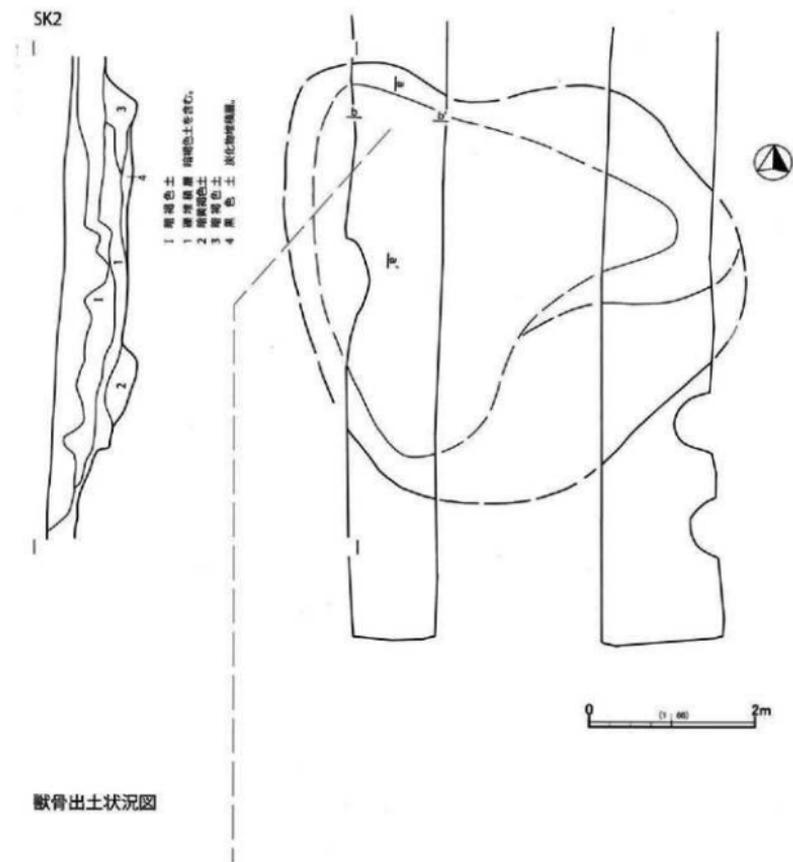
S17



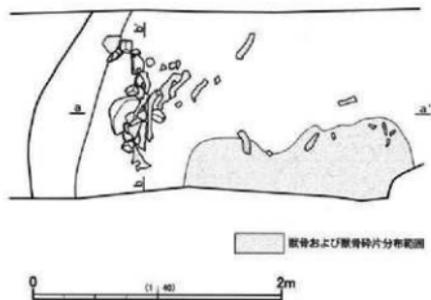
S17 カマド



第67図 S17



獣骨出土状況図



第68図 SK2



確認範囲では不整楕円形で東西約75cmを測った。遺構の時期 出土遺物がなく、不明である。

・SK7〔第70図〕

位置と検出状況 H-3グリッド、9Trの東側に位置する。重複する遺構はなかった。やや不整の長方形を呈し、約1.5×1.2mを測った。遺構の時期 出土遺物がなく、不明である。

・SK8〔第70図〕

位置と検出状況 B-1・2グリッド、11Trの中央に位置する。確認範囲では重複する遺構はなかった。不整楕円形を呈し、東西約1.3m、確認面からの深さ約10cmを測った。遺構の時期 出土遺物がなく、不明である。

・1号集石〔第71図〕

位置と検出状況 K-14グリッド、1Trのほぼ中央に位置する。確認範囲では長径約2mの楕円形状に礫が集積しており、確認面から掘り方までの深さは約28cmを測った。上層には20～30cm大、下層には40cm大の礫を充填していた。遺構の時期 出土遺物がなく、不明である。

・2号集石〔第71図〕

位置と検出状況 K-13グリッド、1Trの北側に位置する。確認範囲では径約1.8mの半円形状に礫が集積していた。確認面から掘り方までの深さは約30cmを測り、20～40cm大の礫が充填されていた。遺構の時期 出土遺物がなく、不明である。

・3号集石〔第69図〕

位置と検出状況 K-12グリッド、1Trの北側に位置する。確認範囲ではSK3の上部に位置し、径約1.7mの半円形状に礫が集積していた。確認面から掘り方までの深さは約30cmを測り、20～40cm大の礫が充填されていた。遺構の時期 出土遺物がなく、不明である。

・4号集石〔第72図〕

位置と検出状況 K-11・12グリッド、1Trの北端に位置する。重複するSD6を壊していた。規模は明確ではないが、調査範囲では南北約3mの範囲に礫が集積していた。確認面から掘り方までの深さは約40cmを測った。充填されていた礫は、上層では10～30cm大、下層では40～50cm大の礫が充填していた。出土遺物 土師器環(21)、焼成粘土塊(22)などが出土した。遺構の時期 明確ではないが、礫に混在していた出土遺物から、11C代としておく。

・5号集石〔第73図〕

位置と検出状況 K-6グリッド、6Tr(N)の中央に位置する。6号集石の南側に並び、径約80cmの円形状に礫が集積していた。掘り方は明確ではなかったが、5～30cm大の礫が集積していた。遺構の時期 出土遺物がなく、不明である。

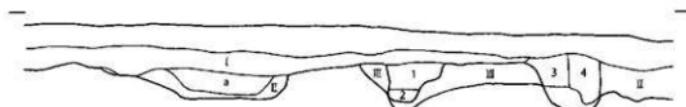
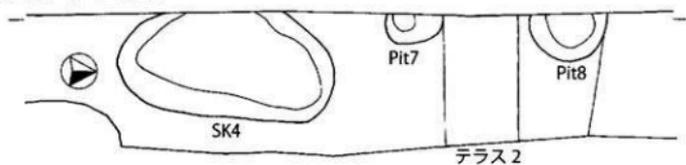
・6号集石〔第73図〕

位置と検出状況 K-6グリッド、6Tr(N)の中央に位置する。5号集石の北側に並び、不整形であるが南北約1mの範囲に礫が集積していた。掘り方は明確ではなかったが、30cm大の礫が集積していた。遺構の時期 出土遺物がなく、不明である。

・7号集石〔第73図〕

位置と検出状況 G・H-3グリッド、9Trに位置する。重複するSI7の上面に位

SK4, Pit7・8, テラス2



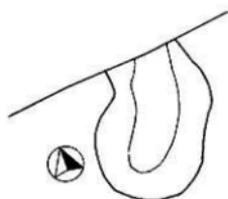
I 暗褐色土 藍色土混を少量含む。基砂層。  
 II 暗褐色土 藍色土はあまり含まない。

SK4  
 a 暗褐色土 藍色土粒を含む。  
 テラス2  
 ■ 黄色土 砂質。

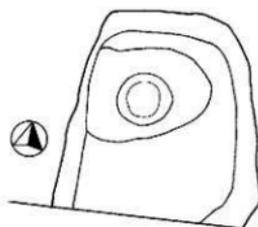
Pit7  
 1 暗褐色土 黄色土ブロックを含む。  
 2 暗褐色土

Pit8  
 3 暗褐色土 4層に似るが、しまがない。  
 4 暗褐色土 固くしまる。

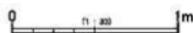
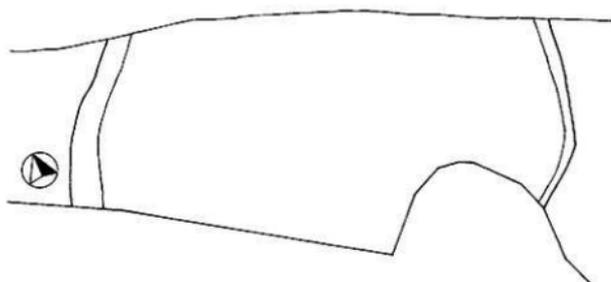
SK6



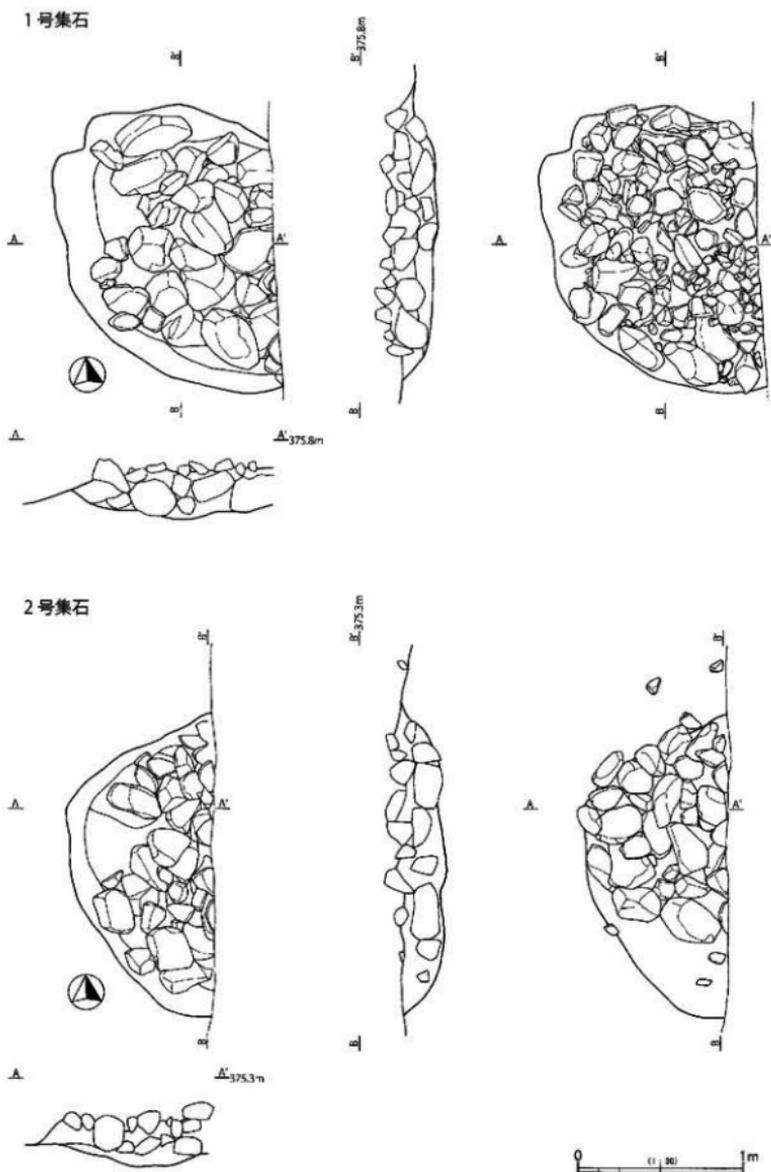
SK7



SK8

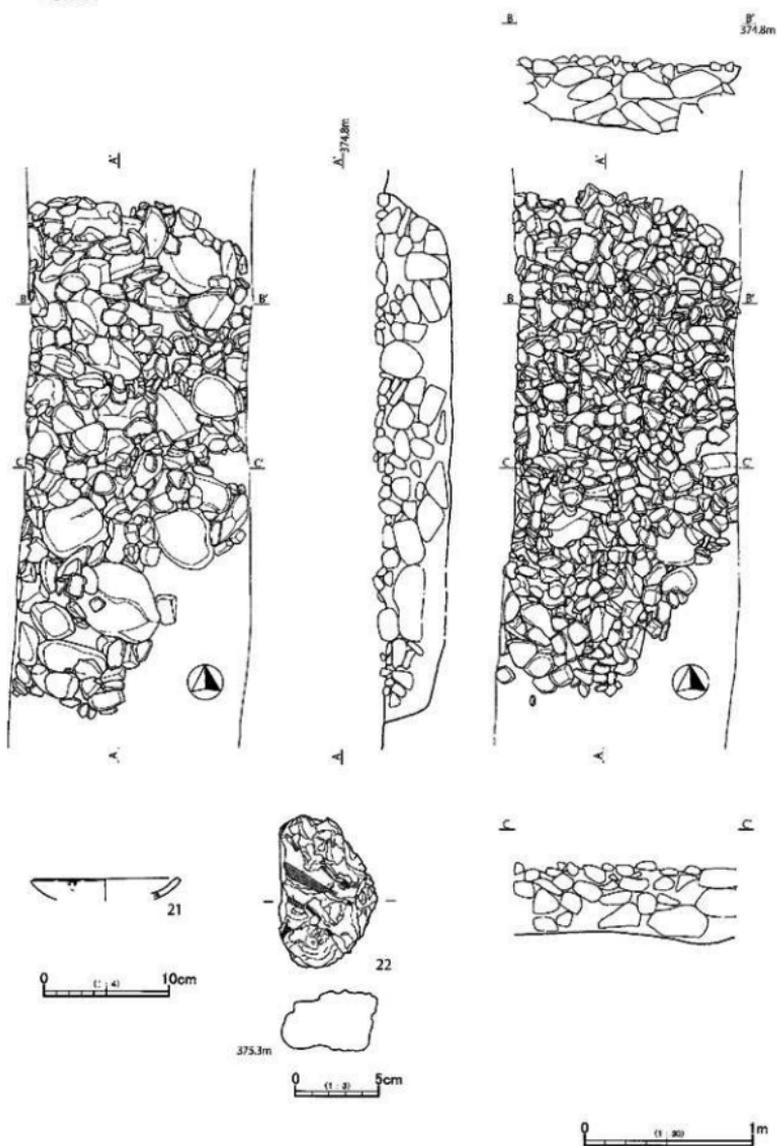


第70図 SK4・6～8, Pit7・8, テラス2



第71図 1・2号集石

4号集石



第72图 4号集石

置し、コの字状に配された礫を確認し、東西約1.4m、南北約0.9mを測った。掘り方は不明であるが、20～50cm大の礫が7個配置され、内部に黒褐色土が堆積していた。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

・8号集石〔第74図〕

**位置と検出状況** G-H3グリッド、9Trに位置する。重複するSI7を壊しており、確認範囲では長軸1.9m、短軸1.5mの方形に礫を配石し、その間を礫で充填していた。内部からは10C～11C代の遺物が出土しており、集石墓であった可能性が窺える。確認面から掘り方までは最深約35cmを掘り、20～50cm大の礫が充填されていた。**出土遺物** 土師器皿(23～30)・柱状高台皿が出土した。**遺構の時期** 出土遺物から、12C代としておく。

・9号集石〔第75図〕

**位置と検出状況** K-3グリッド、7Trに位置する。重複するSI3を壊していた。礫は東西約2.5mの範囲で列状に集積していた。確認面から掘り方までの深さは約50cmを掘り、15～50cm大の礫が集積していた。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

・10号集石

**位置と検出状況** K-15グリッド、1Trの南側に位置する。11号集石の南側の位置に並び、南北約1.8mの範囲に礫が集積していた。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

・11号集石

**位置と検出状況** K-15グリッド、1Trの南側に位置する。10号集石の北側の位置に並び、南北約1.9mの範囲に礫が集積していた。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

・12号集石〔第75図〕

**位置と検出状況** K-10グリッド、13Trの中央からやや南に位置する。重複するSD3を壊しており、南北約1.1m、東西1.4mの範囲に礫が集積していた。掘り方は明確ではなく、10～40cm大の礫が集積していた。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

・SD1〔第75図〕

**位置と検出状況** K-6～10グリッド、5・6Trで確認した。南北方向の溝であり、重複するSI2、SK1を壊していた。検出した範囲では長さ約41m、幅約1m、確認面からの深さは約25cmを測った。**遺構の特徴** 道路に沿って延びており、旧道路跡の側溝、または12Trで確認したSD7や13Trで確認したSD8と対応し、畑地に伴う溝であった可能性が窺える。**出土遺物** 威平元寶(61)が出土した。**遺構の時期** 出土遺物が少なく、明確ではないが、検出状況から近世・近代頃まで下る可能性がある。

・SD2〔第76図〕

**位置と検出状況** K-8グリッド、12Tr南側で確認する。東西方向の溝であり、調査範囲においては重複するSD3に壊されていた。規模は明確ではないが、検出した範囲では幅約1.9m、確認面からの深さは約30cmを測った。

**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

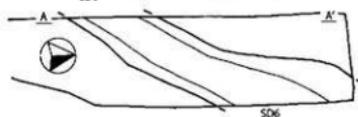
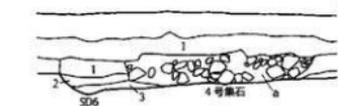
・SD3〔第76図〕

**位置と検出状況** K-6～13グリッド、4・12・13Trで確認した。重複するSI2、SD2・7・8を壊し、12号集石に壊されていた。南北方向に延びる溝で、規模

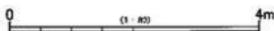
SD6



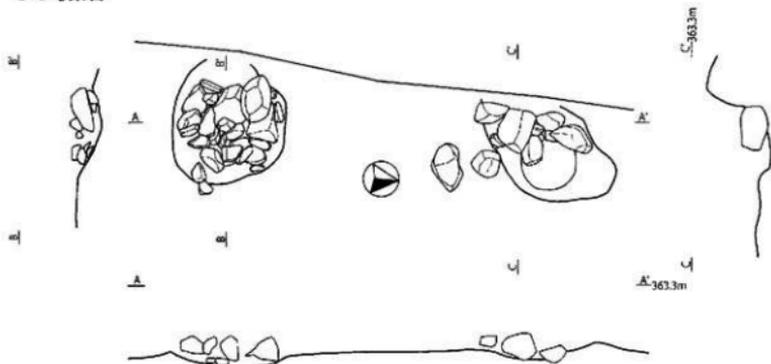
A A' 4号集石 Δ-365.4m



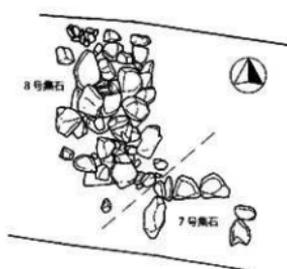
- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 黄色土粒を含む。
- SD6
- 1 黄褐色土 黄色土粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土 黄色土粒を多量に含む。
- 4号集石
- a 暗褐色土 人跡大の隙を多量に含む。



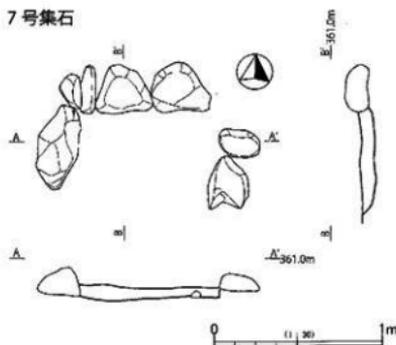
5・6号集石



7・8号集石 位置関係図

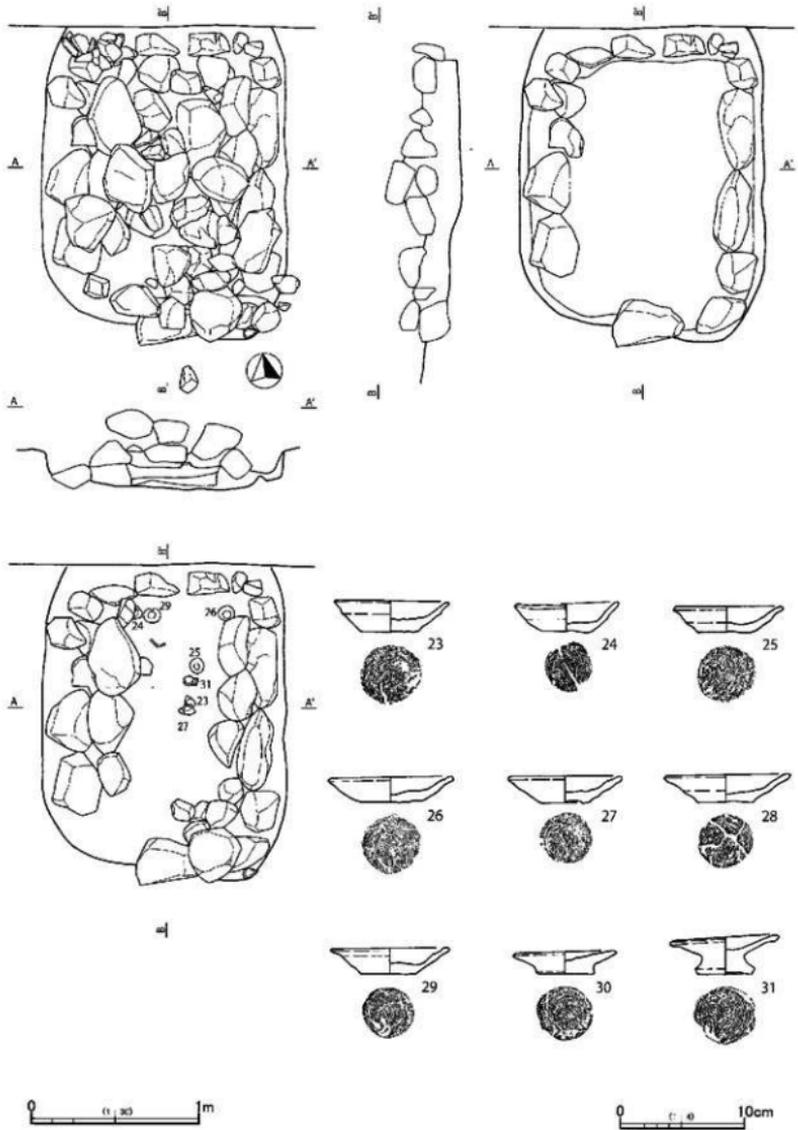


7号集石



第73図 SD6、5～7号集石

8号集石



第74図 8号集石

は明確ではないが、確認した長さは約71m、確認面からの深さは約70cmを測った。遺構の特徴 道路に沿って延びており、覆土中には黄色土を含んでいた。旧道路の側溝の可能性が考えられる。出土遺物 上師器皿(32)、須恵器小型甕(33)が出土した。遺構の時期 出土した遺物は11C頃のものとは比定されるが、旧道路の側溝であれば近世・近代頃まで下る可能性が考えられる。

#### SD4〔第76図〕

位置と検出状況 K4・5グリッド、6Tr(N)の北端で確認した。南北方向に延びる溝で、検出した範囲では長さ約4.2m、確認面からの深さは約40cmを測った。遺構の時期 出土遺物がなく、不明である。

#### SD5

位置と検出状況 F3グリッド、9Trの西端で確認した。南北方向の溝であり、調査範囲では重複はなかった。規模は明確ではないが、検出した範囲では幅約1.6m、確認面からの深さは約70cmを測った。遺構の時期 出土遺物がなく、不明である。

#### SD6〔第73図〕

位置と検出状況 K11グリッド、1Trの北端で確認した。北東方向に延びる溝で、重複する4号集石に壊されていた。検出した範囲では幅約90cm、確認面からの深さは約50cmを測った。遺構の時期 出土遺物がなく、不明である。

#### SD7〔第76図〕

位置と検出状況 K6グリッド、12Trの北側で確認した。東西方向の溝であり、調査範囲においては重複するSD3に壊されていた。規模は明確ではないが、検出した範囲では幅約70cmを測った。遺構の時期 出土遺物がなく、不明である。

#### SD8〔第76図〕

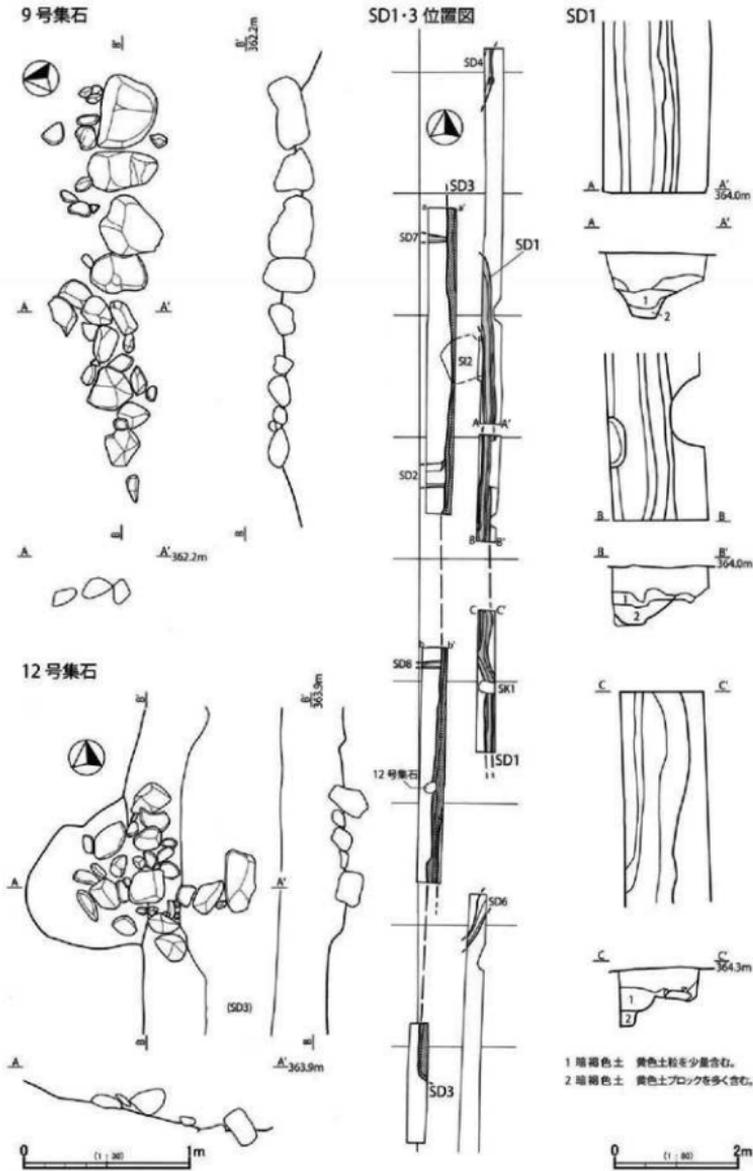
位置と検出状況 K9グリッド、13Trの北側で確認した。東西方向の溝であり、調査範囲においては重複するSD3に壊されていた。規模は明確ではないが、検出した範囲では幅約60cmを測った。遺構の時期 出土遺物がなく、不明である。

表24 石動遺跡支線3号地区 トレンチャー概

位置	遺 跡
1Tr	SK1・3、1-4・10・11号集石、SK0
2Tr	SK2
3Tr	溝跡なし
4Tr	SK3
5Tr	SK1・SD1
6Tr	SK1・2、5号集石、SD1・4、サラス1
7Tr	SK1・5、5号集石、PP19
8Tr	SK5、7a19
9Tr	SK7、SK5・7、8号集石、P05～7、SD5
10Tr	溝跡なし
11Tr	SK6
12Tr	SK2、SD2・3・7、P01～6
13Tr	SK4、SK3・8、P08～8、12号集石、サラス2

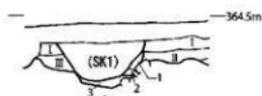
表25 石動遺跡支線3号地区 遺構一覧

遺構名	役 別	推定年代	5号集石	6Tr	4号
SK1	6Tr	不明	6号集石	6Tr	不明
SK2	6Tr・12Tr	不明	7号集石	9Tr	不明
SK3	7Tr	11C後半頃	8号集石	9Tr	11C代
SK1	7Tr	BC後半頃	9号集石	7Tr	不明
SK3	7Tr	BC中頃	10号集石	11Tr	不明
SK9	8Tr	不明	11号集石	11Tr	不明
SK7	8Tr	8号集石設置以前	12号集石	12Tr	不明
SK4	5Tr	近代	P01～4	10Tr	不明
SK7	1・7Tr	近代	P05～8	13Tr	不明
SK3	1Tr	不明	P09～17	9Tr	不明
SK4	13Tr	不明	PP18	9Tr	不明
SK5	7Tr	不明	PP19	7Tr	不明
SK8	9Tr	不明	SD1	3Tr・6Tr	近世・近代頃
SK7	9Tr	不明	SD2	12Tr	不明
SK4	11Tr	不明	SK3	4Tr・12Tr	11C頃
サラス1	6Tr	不明			13Tr
サラス2	13Tr	不明	SK4	6Tr	不明
1号集石	1Tr	不明	SK5	9Tr	不明
2号集石	1Tr	不明	SK6	1Tr	不明
3号集石	1Tr	不明	SK7	12Tr	不明
4号集石	1Tr	11C代	SK8	13Tr	不明



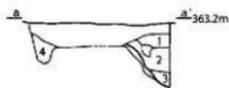
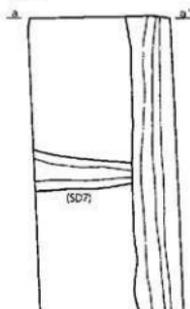
第75図 9・12号集石、SD1

SK1



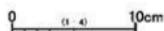
- I 暗褐色土 黄色土粒を少量含む。  
 II 暗褐色土 黄色土はあまり含まない。  
 III 紫褐色土 砂質土。
- 1 暗褐色土 黄色土粒を少量含む。  
 2 暗褐色土 黄色土粒から成る。  
 3 黒褐色土 粘土質、黄色土ブロックを含む。

SD3

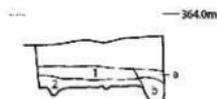
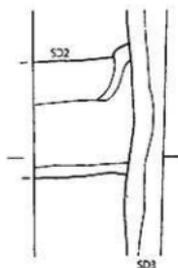


- 1 暗褐色土  
 2 暗褐色土 黄色土粒を含む。  
 3 暗褐色土 黄色土粒を含む。  
 4 黒褐色土 黄色土ブロックを含む。  
 カクランか？

SD3

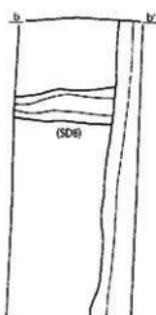


SD2



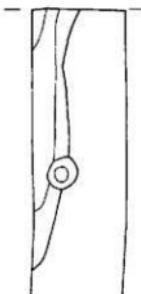
- SD2  
 1 黒褐色土 黄色土粒を含む。  
 2 暗褐色土 やや砂分を含む。

- SD3  
 a 暗褐色土 黄色土粒を含む。  
 b 暗褐色土 黄色土ブロックを多く含む。

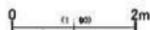


- 1 暗褐色土 しりなし。  
 2 暗褐色土 黄色土ブロックを含む。  
 暗褐色土 黄色土粒を多量に含む。  
 4 暗褐色土 2層より黄色土ブロックが少ない。

SD4

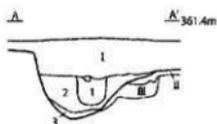
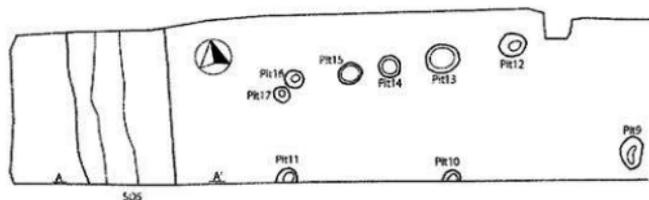


- 1 黒褐色土 黄色土ブロックを含む。



第76図 SK1、SD2~4

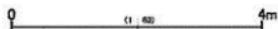
SD5-Pit(9 ~ 17)



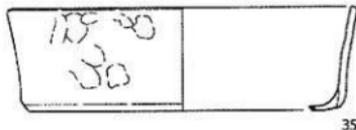
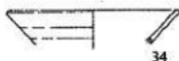
- I 暗褐色土 表土層。
- II 暗黄褐色土 砂層部。
- III 黄褐色土 砂層土。

SD5

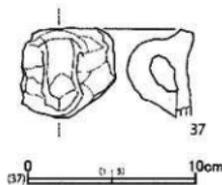
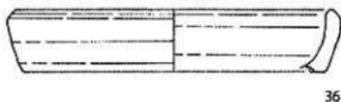
- 1 黄褐色土 溝壁土中につくられたピットか?
- 2 暗褐色土 黄褐色土を多く含む。
- 3 暗黄褐色土 黄褐色土を多く含む。



Pit8



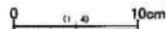
6Tr



7Tr



8Tr



第77図 SD5-Pit、遺構外(1)

9Tr



40



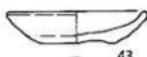
41

10Tr



42

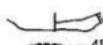
11Tr



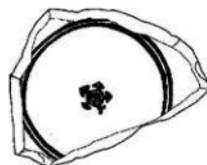
43



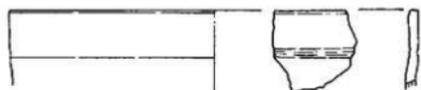
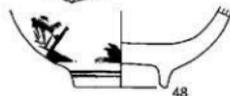
44



45



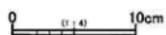
48



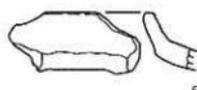
46



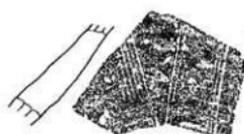
47



49



50



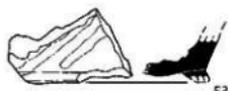
51



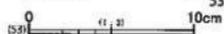
12Tr



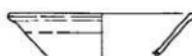
52



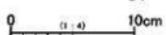
53



12Tr

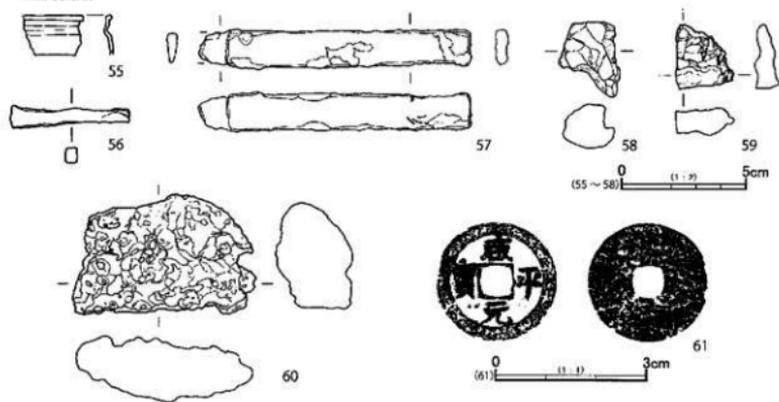


54

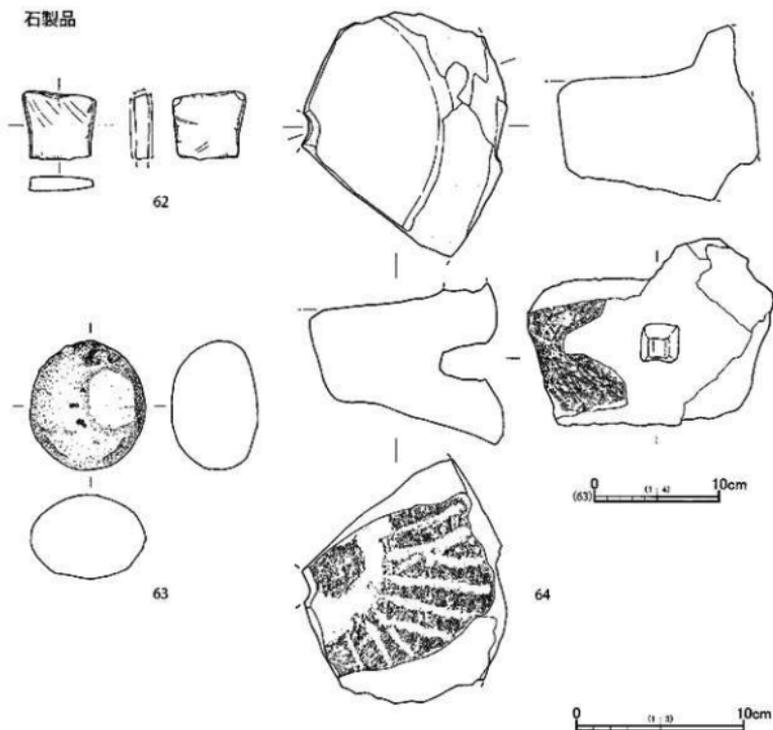


第78圖 遺構外

金属製品



石製品



第79圖 金属製品・石製品

表 26 石動遺跡支線3号地区 遺物調査表

測号	遺物	種類	遺跡	T層 (cm) 深高 (cm) 埋没 (cm)	状況	出土	重要技法	色調	備考
65 1	S13	土師器	皿	(0.6) (2.1) 1.5	良	中々腹、赤・白・黒	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (10) 回転糸物	褐色	内・外面の一部が中々腹 全体に赤色
65 2	S13	土師器	皿	(0.4) (2.0) (4.4)	良	赤、赤・白・黒	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (10) 回転糸物	褐色	全体に中々腹型 内面が赤色
65 3	S13	土師器	皿	- 5.0	良	赤、赤・白・黒	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (10) 回転糸物	褐色	
65 4	S13	土師器	鉢	(17.0) (5.3) (16.2)	良	赤、赤・白・黒	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (10) 回転糸物	褐色	内面黒色 転写及び内面黒色で埋まっている
65 5	S13	土師器	鉢	- 6.2	良	赤、赤・白	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (10) 回転糸物	褐色	全体的に中々腹型
65 6	S14	土師器	高台付鉢	- 11.3	良	黒、赤、赤・白・黒	(9) ヘウチリ (10) ロクロナデ、スズキ (10) 輪文、付台、三足	褐色	内面黒色
65 7	S14	土師器	鉢	12.3 4.8 (14.0)	良	赤、赤・白・黒	(9) ロクロナデ、ヘウチリ (10) ロクロナデ、輪文 (10) 回転糸物、付台	褐色	内面黒色に中々腹型 内面黒色付台、高脚2高・3高
65 8	S14	土師器	鉢	- 13.0	良	黒、赤、赤・白	(9) ロクロナデ、ヘウチリ、ミガキ (10) ロクロナデ、付台	褐色	
65 9	S14	土師器	鉢	(13.2) (4.7) (8.0)	良	赤、赤・白・黒	(9) ロクロナデ、ヘウチリ (10) ロクロナデ (10) ヘウチリ	褐色	内面が部分的に黒色
65 10	S14	土師器	皿	(11.6) (2.4) (14.0)	良	赤、白・黒・赤	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (10) 回転糸物	褐色	内・外面が赤色に染まっている
65 11	S14	土師器	鉢	- (14.0)	良	中々腹、白・黒	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ	灰白色	全体が黒色による劣化
65 12	S14	土師器	鉢	32.6 20.7 11.9	良	中々腹、白・赤	(9) 黒ハケメ、ナデ (10) 黒ハケメ、ナデ、掛物 (10) 木葉	褐色	黒色の縁 黒色、部分的に黒色
65 13	S14	土師器	鉢	(22.0) 2.5	良	赤、白・黒・赤	(9) 黒ハケメ、ナデ (10) 黒ハケメ、ナデ	褐色	
65 14	S14	土師器	甕形土器	-	良	赤、白・黒・赤	(9) 黒色、輪文 (10) ロクロナデ、付台	褐色	縁部 付台、黒色 内面黒色
65 15	S14	土師器	甕形土器	-	良	赤、白・黒・赤	(9) ナデ、黒色 (10) ナデ、黒色	褐色	縁部 内面黒色
65 16	S14	土師器	甕	-	良	赤、白・黒	(9) 平きり (10) ナデ	褐色	黒色か？
65 17	S15	土師器	土師器	(13.2)	良	赤、赤・白・黒	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ	褐色	内面黒色 15C後半 - 16C前半
65 18	S15	土師器	鉢	-	良	赤、赤・白・黒	(9) 黒ハケメ、ナデ (10) ナデ	褐色	
65 19	S15	土師器	甕	(25.0) -	良	中々腹、赤・白・黒・赤	(9) ナデ、ハケメ、ヘウチリ (10) ナデ	褐色	内面が部分的に黒色 縁部
65 20	S17	土師器	土師器	- 5.4	良	赤、赤・白・赤・赤	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (10) 回転糸物	褐色	内面黒色 内面黒色に染まっている
72 21	4号集石	土師器	鉢	(11.4) -	良	赤、赤・白・黒・赤	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ	褐色	内面黒色 付台
74 23	8号集石	土師器	小皿	9.7 2.6 6.7	良	赤、赤・白・黒・赤	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (10) 回転糸物	褐色	内・外面が部分的に黒色
74 24	8号集石	土師器	小皿	8.3 2.4 5.9	良	中々腹、白・黒	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (10) 回転糸物	褐色	全体的に赤色 内面黒色
74 25	8号集石	土師器	小皿	8.7 2.2 6.5	良	中々腹、赤・白・赤・赤	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (10) 回転糸物	褐色	全体的に赤色 内面黒色
74 26	8号集石	土師器	小皿	10.1 2.4 7.7	良	赤、赤・白・黒・赤	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (10) 回転糸物、スノコ付	褐色	黒色の縁 内面黒色の縁はあり 内面黒色に染まっている
74 27	8号集石	土師器	小皿	9.2 2.2 7.0	良	中々腹、赤・白・黒	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (10) 回転糸物	褐色	全体的に赤色
74 28	8号集石	土師器	小皿	(10.0) (2.9) 7.1	良	赤、赤・白・黒	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (10) 回転糸物	褐色	全体的に赤色 内面黒色
74 29	8号集石	土師器	小皿	9.4 2.5 6.7	良	赤、赤・白・黒・赤	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (10) 回転糸物	褐色	黒色あり 内面黒色の縁はあり 内面黒色に染まっている
74 30	8号集石	土師器	小皿	9.4 2.0 7.4	良	赤、赤・白・赤・赤	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (10) 回転糸物	褐色	黒色あり 内面黒色の縁はあり 内面黒色に染まっている
74 31	8号集石	土師器	土師器	8.6 2.3 6.3	良	赤、白・黒	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (10) 回転糸物	褐色	内面黒色 全体的に赤色
76 32	S03	土師器	皿	(11.8) (2.0) (9.2)	良	赤、白・赤	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (10) 回転糸物、スノコ付	褐色	赤色
76 33	S03	土師器	皿	(12.2) -	良	黒、赤	(9) ロクロナデ、黒色 (10) ロクロナデ	褐色	
77 34	D4 8	土師器	小皿	(14.0) -	良	赤、赤・白	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ	褐色	黒色あり

調査号	遺構	種類	用途	口幅 (cm) 底幅 (cm) 底厚 (cm)	構成	出土	形状技法	色調	備考
77-35	17F	十面型土器	灰皿器	(28.0) (9.1) (26.0)	灰	中平組、白・黒	(95) ナブ、内面輪 (96) ナブ (97) ナブ	黄褐色	表面及び外周部に 植物の比較的深い 付着
77-36	61L	土師器土器	磁器類	(26.4) (5.1) (24.2)	灰	赤、赤・白・金	(95) レシロナブ、細輪へつ折り (96) ロクロナブ (97) ロクロナブ	褐色	上面部が 外周部
77-37	67E	土師器土器	内面輪	-	灰	赤・黒・金	(95) ナブ、へう巻り (97) ナブ、内面輪	褐色	上面部が 外周部
77-38	77F	十面型	灰	(20.3)	灰	赤、白・金	(95) ハウス、ナブ (97) ハケメ、ナブ	灰褐色	内面及び外周の一部が片装
77-39	81F	土師器	小皿	(8.4) (2.9) (4.4)	灰	赤、白・黒・金	(95) レシロナブ (96) ロクロナブ (97) 同形輪切型	緑褐色	内・外周部分に片装
78-40	92A	土師器	杯	(10.9)	灰	赤、白	(95) ロクロナブ (96) ロクロナブ	暗灰褐色	
78-41	97F 57F	十面型	粒状器科	- 4.7	灰	中平組、赤・白	(95) ロクロナブ (96) 細輪非片装	褐色	全体が片装
78-42	109F	土師器	杯	片装	灰	赤、赤・白	(95) レシロナブ (96) ロクロナブ	暗褐色	内面・底面
78-43	117F	土師器	杯	(11.4) (2.6) (6.0)	灰	赤・黒・金	(95) ロクロナブ (96) ロクロナブ (97) 粒状非片装	暗褐色	全体が中平組装
78-44	117F	十面型	杯	(11.2) (2.6) (4.0)	灰	赤・白・黒	(95) ロクロナブ (96) レシロナブ (97) 粒状非片装	褐色	
78-45	117F	土師器	杯	- 片装	灰	赤、白・黒・金	(95) レシロナブ (96) ロクロナブ	褐色	内面が片装
78-46	117F	土師器土器	佛壇	33.0	灰	赤、白	(95) ロクロナブ、へう巻り (96) ロクロナブ	暗褐色	外周部が 片装
78-47	117F	土師器土器	佛壇	(32.0) (6.0) (19.2)	灰	赤・白・黒・金	(95) ロクロナブ (96) レシロナブ (97) ロクロナブ	褐色	内面が片装 外周部
78-48	117F	土師器	佛壇	5.6	灰	緑褐色	片装	灰褐色	表面が 片装
78-49	117F	土師器土器	佛壇	-	灰	赤・白	(95) ナブ (97) ナブ、内面輪	黄褐色	外周部が 片装
78-50	117F	土師器土器	佛壇	-	灰	赤、白・金	(95) レシロナブ (96) ロクロナブ	黄褐色	外周が片装 している 15C→近所部
78-51	117F	土師器土器	佛壇	-	灰	赤・白・金	(95) ナブ (97) ナブ、内面輪	黄褐色	外周が片装 している 15C 後半～16C 前半
78-52	121F	土師器土器	小皿	片装 -	灰	赤・白・黒・金	(95) レシロナブ (96) ロクロナブ	黄褐色	15C 後半～16C 前半 が片装
78-53	127F	土師器土器	佛壇	-	灰	赤、白・黒	(95) 細輪へつ折り、内面輪 (96) ナブ (97) ナブ、内面輪	灰褐色	
78-54	137F	十面型	杯	-	灰	赤・白・黒・金	(95) ロクロナブ (96) レシロナブ	褐色	片装あり

表 27 石動遺跡支線 3号地区 土製品観察表

調査号	遺構	種類	重量 (g)	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	材質	色調	備考
72-22	1号米石	稲刈土塊	160.8	9.3	5.9	4.5	中平組、白・金	黄褐色	スリ痕、夏耕跡

表 28 石動遺跡支線 3号地区 土製品観察表

調査号	遺構	種類	重量 (g)	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	材質	色調	備考
79-56	S17	銅器	1.1	1.5	2.5	0.2	鉄	黒褐色	口径 7.0cm
79-56	S17	刀7号	6.9	1.4	3.0	0.8	鉄		
79-57	S31	小刀	31.9	1.1	1.5	0.3	鉄		表面、底面に片装あり
79-58	-	斧	87.5	4.6	2.6	3.4	-		磁石によくつく(強)
79-59	S15	斧	31.7	3.9	1.6	3.5	-		磁石に少し反応する(弱)
79-60	117F	斧	470.0	7.1	4.5	10.8	-		磁石に少し反応する(弱)

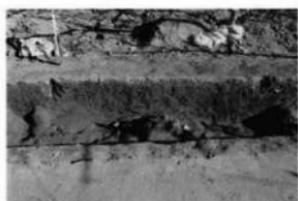
表 29 石動遺跡支線 3号地区 土製品観察表

調査号	遺構	種類	重量 (g)	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	材質	色調	備考
79-82	S30	銅刀	25.7	4.1	0.9	4.2	花崗岩質アブサライト	黄褐色	口径約
79-83	117F	鎌石	390.0	7.8	7.0	5.2	花崗岩地盤	黄褐色	口径約 3cm
79-84	117F	口	-	20.5	17.0	15.2	粘土質	灰褐色	上付 銅屑に片装あり

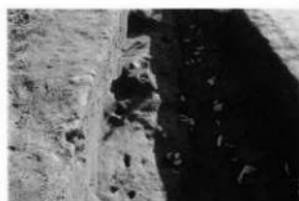
#### 4. まとめ

調査の結果、住居跡7軒、土坑8基、集石12箇所、溝8条、ピット20基、テラス2箇所を確認した。各遺構の時期については、本文と表25で示したが、本調査区では、出土遺物が少なく、時期不明の遺構が多かった。出土遺物から得た年代観の順に、遺構・遺物についてまとめると、古代ではS15が8C中頃、S14が8C後半頃、S13・4弓集石・SD3が11C代、8号集石が12C代であった。中世段階は明確ではないが、近世～近代ではSD1・SK2や鍍銀された小柄、古銭などを検出した。SD1については、調査時の所見から近世・近代頃に畑地の拡張により埋没したものと推察される。構築時期は明確ではなく、別遺構との重複関係より年代が遡る可能性も考えられ、調査区東側に所在する長円寺の寺域と関連する可能性が窺える。なお、近代の「ウシ・ウマ捨て場」であるSK2については、附編3で詳細を分析・報告しているので参照されたい。

(望月)



SI1 西から



SI1 北から



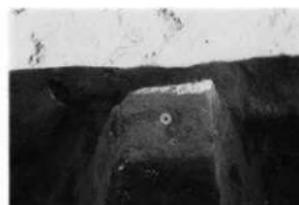
SI1 遺物出土状況 西から



SI2(12Tr) 北から



SI2(6Tr) 南から



SI2 古銭出土状況 西から



SI3 西から



SI3 カマド 西から



SI3-9号集石 西から



9号集石 南東から



SI4 東から



SI4 カマド 南から



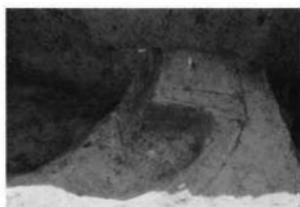
SI4 北から



SI4 カマド 南から



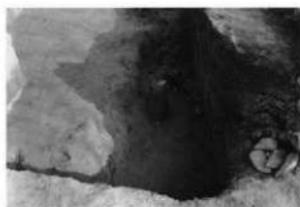
Pit19 北から



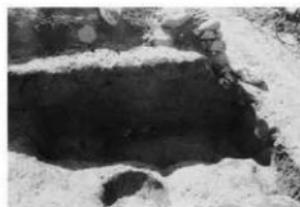
SK5 北から



SI5 東から



SI5 西から



SI5 北から



4-1Tr 西から



S16 東から



S16 西から



S17 西から



S17 東から



S17 カマド前庭部 北から



S17 カマド 北から



S17 金属製品 東から



S17 発掘状況 西から



S17 北から



SK7 北から



SK1 北から



SK1 西から



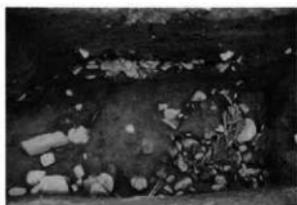
SK2(1Tr) 東から



SK2(1Tr) 北から



SK2(2Tr) 南から



SK2 獣骨出土状況 東から



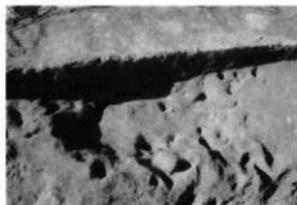
SK3 西から



3号集石・SK3 西から



SK3 西から



SK4 東から



SK6

南西から



SK6

西から



1号集石

西から



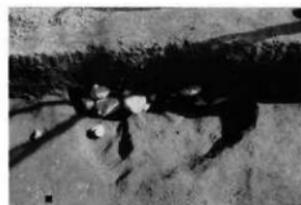
1号集石完掘状況

東から



2号集石

西から



2号集石完掘状況

西から



4号集石

北から



4号集石

北東から



SD6 (4号集石下)

北から



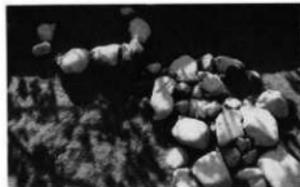
SD6 (4号集石下)

南から



5・6号集石

東から



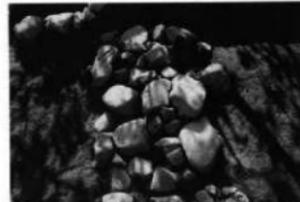
7・8号集石

南から



7号集石

南から



8号集石

南から



8号集石

東から



8号集石

南から



10・11号集石

東から



11号集石

東から



10号集石

東から



12号集石・SD3

北から



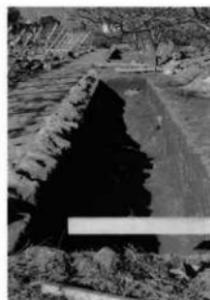
SD1(6Tr)

北から



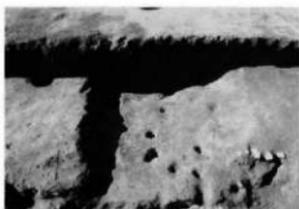
SD1(6Tr)

北から



SD1(5Tr)

南から



SD2

東から



SD3(4Tr)

南から



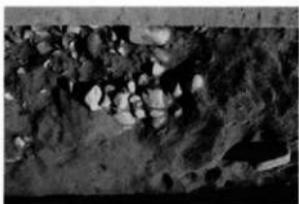
SD3(12Tr)

北から



SD3(13Tr)

北から



SD2(12Tr)

西から



SD4(6Tr)

北から



SD5

東から



SD5

北から



SD5・Pit9 ~ 17

西から



SD7

東から



SD8

東から



テラス1

西から



テラス2

東から



3Tr

南から



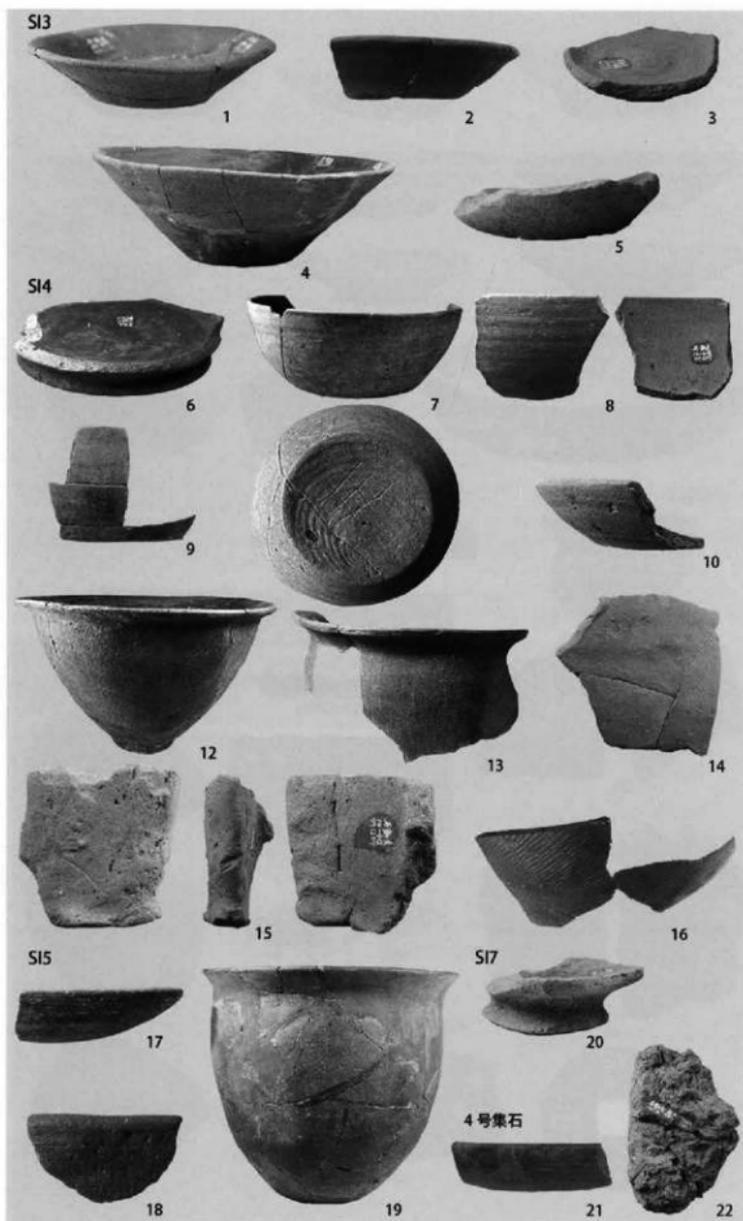
10Tr

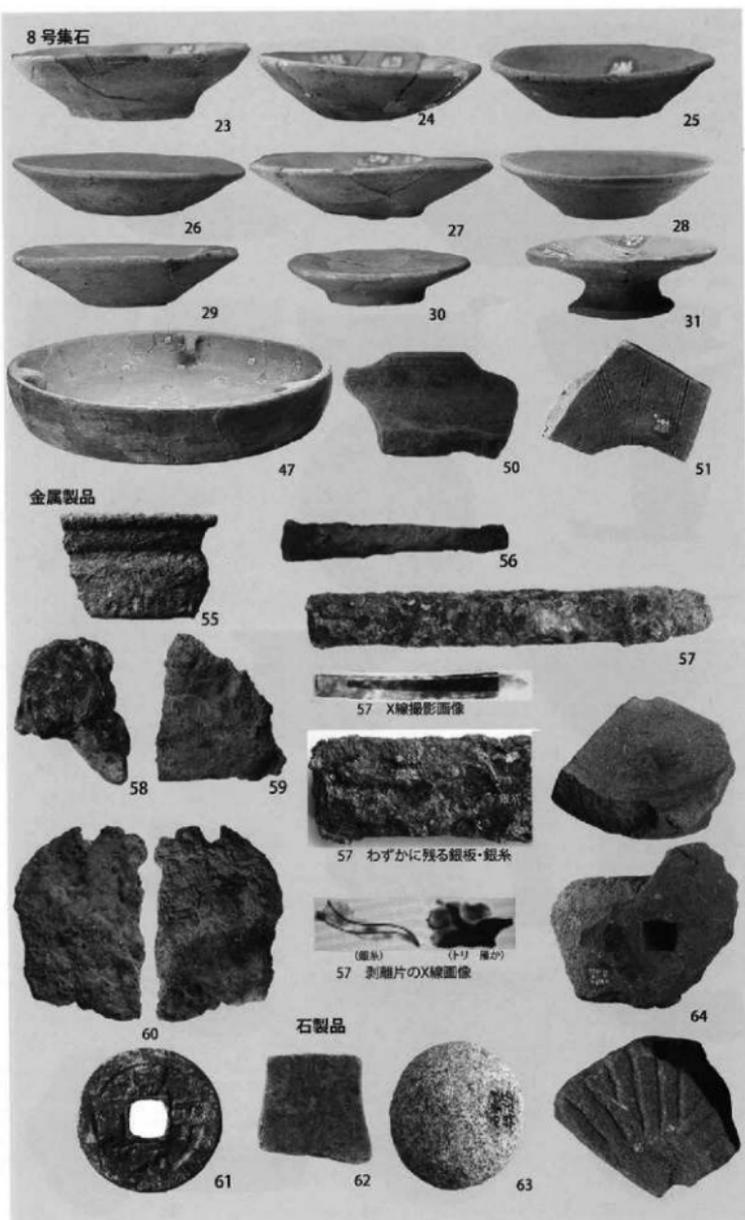
東から



SK8(11Tr)

東から





## 第五章 石動・中新居遺跡 支線13号地区 [2000年度調査]

### 1. 調査概要

本調査は、石動遺跡・中新居遺跡地内における畑地帯総合整備事業の一般農道支線13号建設に先立ち、平成12年(2000)10月～12月に一宮町教育委員会が実施した。既存道路沿いに東西方向約800mの間に8箇所のトレンチを設定し、計約310㎡を調査した。なお、支線13号線は石動遺跡・中新居遺跡の境界にあたり、道路南側に設定したトレンチ分は、中新居遺跡支線13号地区調査となる。そのため、遺構の報告については、各調査区名を付して示した。遺構一覧表(表31)・トレンチ一覧表(表32)を作成して整理したので、ご留意いただきたい。

### 2. 調査トレンチ

#### ～石動遺跡支線13号線地区～

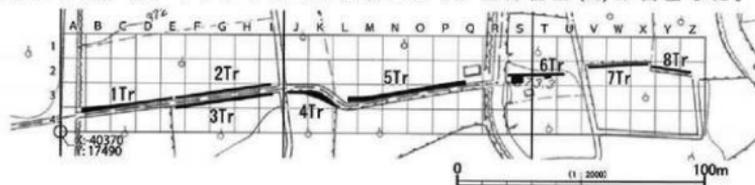
**1Tr** A-3・4・B-3・4・C-3・4・D-E-3 グリッドに位置する。既存道路に沿って東西約37.5m、幅約1m(拡張部2m)の範囲を調査し、地表面から最深74cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約25cmの深さであり、住居跡2軒(SI1・2)、溝2条(SD1・2)、ピット1基を検出した。他、トレンチ出土遺物として縄文土器片(61・62)が出土している。

**2Tr** E～I-3-I-2 グリッドに位置する。既存道路に沿って東西約39.5m、幅約1mの範囲を調査し、地表面から最深50cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約20cmの深さであり、土坑1基(SK1)、埋裏、ピット1基を検出した。他、トレンチ遺物として、墨書土器の土師器坏片(53)が出土している。

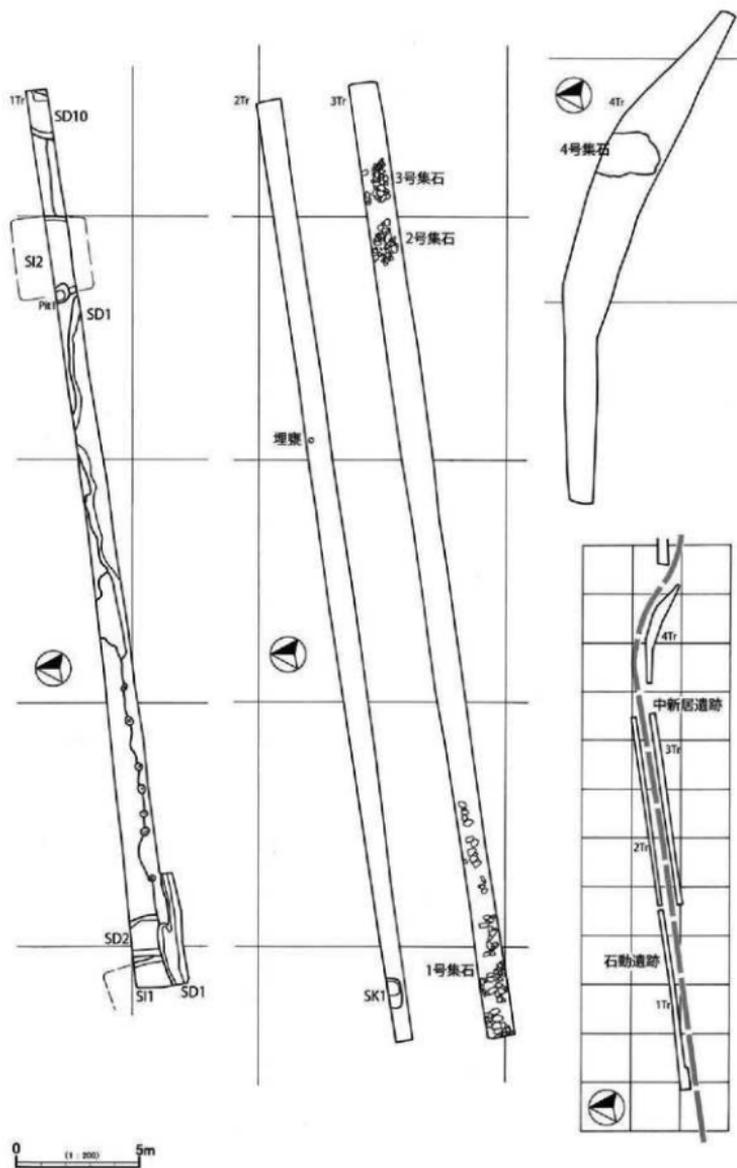
**5Tr** L～Q-3-P-Q-4 グリッドに位置する。既存道路に沿って東西約48m、幅約2mの範囲を調査し、地表面から最深60cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約25cmの深さで、住居跡2軒(SI3・4)、集石1箇所(5号集石)、溝1条(SD11)、ピット1基を検出した。

**6Tr** S～U-2 グリッドに位置する。道路新設部分にあたり、東西方向約23m、幅約1mの範囲を調査した。なお、遺構確認部分については拡張を行い、遺構範囲及びその性格の確認を行った。地表面から最深105cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約25cmの深さであり、住居跡1軒(SI6)、溝4条(SD3～6)を検出した。

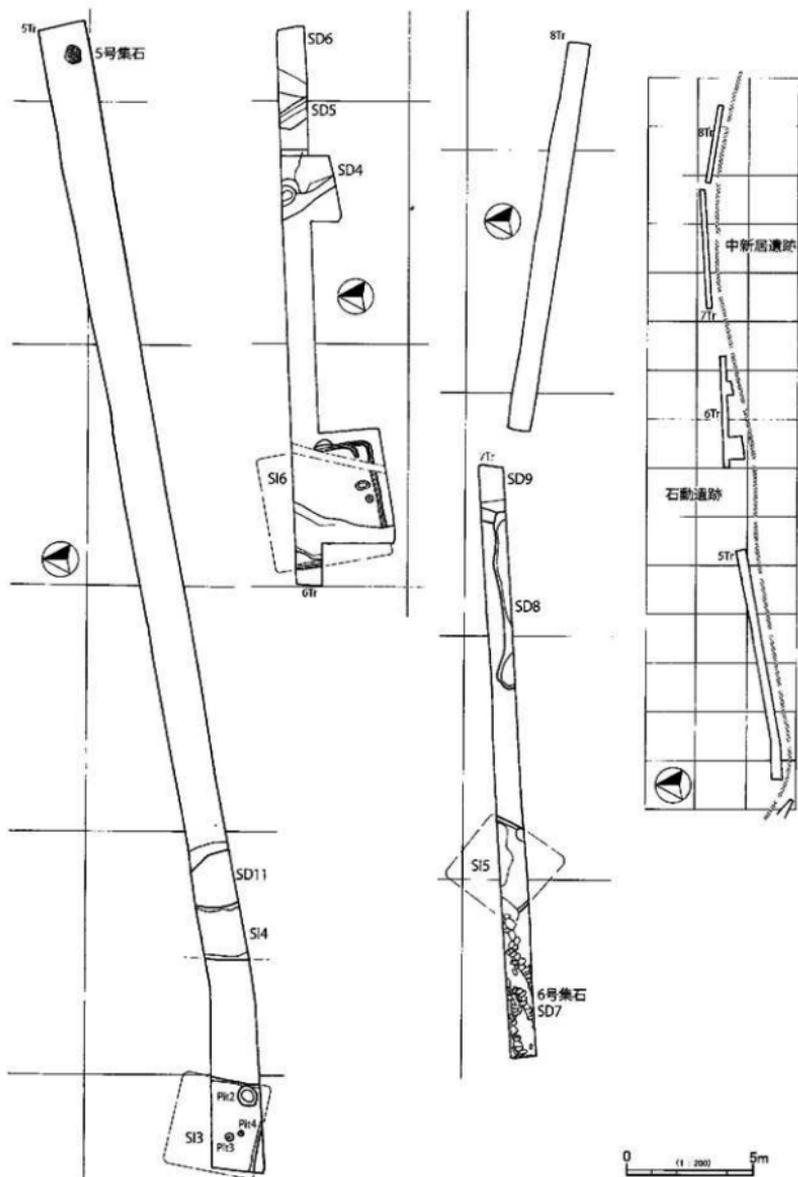
**7Tr** V～X-2 グリッドに位置する。道路新設部分にあたり、東西方向約24.5m、幅約1mの範囲を調査した。地表面から最深160cmまで掘削した。遺構確認面は地表面から約60cmの深さであり、住居跡1軒(SI5)、溝2条(SD8・9)を検出した。他、トレンチ出土の遺物として、土師器皿(56)が出土した。



第80図 トレンチ位置図



第81圖 遺構位置圖(1)



第82図 遺構位置圖(2)

8Tr X～Z2グリッドに位置する。道路新設部分あたり、東西方向約16m、幅約1mの範囲を調査したが、遺構・遺物は確認できなかった。

～中新居遺跡支線13号地区～

3Tr E3・4F～I3グリッドに位置する。既存道路に沿って東西約40m、幅約1.2mの範囲を調査した。掘削は、地表面から最深60cmまで掘削した。遺構確認面は明確ではなかったが、トレンチ東側の深さ約45cmのところ、集石2箇所(1号集石・2号集石)を検出した。他、トレンチ出土の遺物として、土師器小皿(54)、土錘(63)が出土した。

4Tr J～L3グリッドに位置する。既存道路に沿って約20m、幅約1～2mの範囲を調査した。遺構確認面は明確ではなかったが、トレンチ中央で集石1箇所(4号集石)を確認した。他、トレンチ出土の遺物として、土師器小皿(55)が出土した。

### 3. 発見した遺構・遺物

#### ・SI1〔第83図〕

**位置と検出状況** A-4グリッド、1Tr西端に位置する。調査範囲においては東壁を確認したが、重複するSD1、SD2に大半を壊されていた。確認範囲では東西約1.3m、確認面から床面までの深さは約35cmを測った。遺構の特徴 検出した範囲ではカマド施設等はなかった。覆土は焼土粒を含んでいた。**出土遺物** 土師器皿(1・2)・杯(3・4)・甕形土器(5)、灰釉陶器壺(6)などが出土した。遺構の時期 出土遺物の時期から、10世前半～中頃としておく。

#### ・SI2〔第83図〕

**位置と検出状況** D-4グリッド、1Tr東側に位置する。調査範囲においては東壁・西壁を確認し、重複するPit1に西壁を壊されていた。規模は明確ではないが、東西の壁間は約3.3m、確認面から床面までの深さは約30cmを測った。遺構の特徴 検出した範囲ではカマド施設等はなかった。遺構の時期 出土遺物はなく、不明である。

#### ・SI3〔第83図〕

**位置と検出状況** I-3グリッド、5Tr西端に位置する。調査範囲においては東壁・南壁を確認した。規模は明確ではないが、確認した範囲は東西約3.6m、南北約2m、確認面から床面までの深さは約10cmを測った。遺構の特徴 検出した範囲にカマド施設はなく、東壁際にPit2、中央にPit3・4を検出したが、性格・重複関係については不明である。**出土遺物** 土師器杯(7)が出土した。なお、少量であるが、覆土中に縄文土器片(57・58)が混在した。遺構の時期 遺物が少なく明確ではないが、11C頃としておく。

#### ・SI4〔第84・85図〕

**位置と検出状況** M-4グリッド、5Tr西側に位置する。調査範囲においては

表30 石橋・中新居遺跡支線13号地区 トレンチ一覧

探検	遺構	発掘名
1Tr	SD1・S2、Pit1、SD2・2・10	石橋
2Tr	SKC、埋溝	石橋
3Tr	1～3号集石	中新居
4Tr	4号集石	中新居
5Tr	SD3・4、5号集石、SD11	石橋
6Tr	SD8、SD9～8	石橋
7Tr	SD5、SD6・9	石橋
8Tr	遺構なし	石橋
9Tr	遺構なし	石橋

表31 石橋・中新居遺跡支線13号地区 遺構一覧

遺構名	位置	時期	遺跡名
4号集石	5Tr	10C後半～11C代	中新居
SD1	5Tr	10C前半頃	石橋
SD1	1Tr	10世前半～中頃	石橋
SD4	5Tr	11C後半	石橋
SD5	7Tr	11C後半頃	石橋
SD9	5Tr	11C頃	石橋
SD9	6Tr	8C後半	石橋
埋溝	2Tr	縄文時代後期	石橋
1号集石	3Tr	紀元前・古代頃	中新居
6号集石	7Tr	古川・古代頃	石橋
SD3	5Tr	縄文・古代頃	石橋
S2	1Tr	不明	石橋
SK1	2Tr	不明	石橋
2号集石	3Tr	不明	中新居
3号集石	3Tr	不明	中新居
5号集石	5Tr	不明	石橋
SD1	1Tr	不明	石橋
SD2	1Tr	不明	石橋
SD9～8	6Tr	不明	石橋
SD8・9	7Tr	不明	石橋
SD20	1Tr	不明	石橋

西壁を確認し、重複するSD11の上部を壊していた。規模は明確ではないが、東西約4.8m、確認面から床面までの深さは約20cmを測った。**遺構の特徴** 検出した範囲ではカマド施設等はなかったが、西壁際で遺物が集中して出土した。**出土遺物** 土師器坏(10～23・26)・皿(24・25)が出土した。10～23は11C代の坏や皿で、括廃棄されたものと考えられる。24～26は10C前半頃の坏や皿で、重複するSD11からの混入と考えられる。**遺構の時期** 出土遺物から、11C後半としておく。

・S15〔第84図〕

**位置と検出状況** V・W-2グリッド、7Tr中央からやや西側に位置する。調査範囲においては南辺・東辺を確認し、重複する6号集石・SD7に西側を壊されていた。規模は明確ではなく、確認面から床面までの深さは約35cmを測った。**遺構の特徴** 検出した範囲ではカマド施設等は確認できなかったが、覆土には焼土粒・炭化物を含んでいた。**出土遺物** 土師器坏(8・9)が出土した。**遺構の時期** 遺物が少なく明確ではないが、11C後半頃としておく。

・S16〔第86・87図〕

**位置と検出状況** S-2グリッド、6Tr西端に位置する。重複するSD3に西側を壊されており、また壁が明確ではなく、周溝によって遺構範囲を推定した。調査範囲では西辺・東辺・南辺を確認し、東西間は約5m、確認面から床面までの深さは約35cmを測った。**遺構の特徴** 東辺で焼土ブロック・粘土を確認し、カマド跡と推定した。また、南辺の中央付近でPit状の掘り込みを確認しており、袖石や入り口部の痕跡とも考えられたが、いずれも明確ではなかった。**出土遺物** 土師器坏(31～43)・甕(46・47)、須恵器坏(44)・甕(45)、鉄鎌(64)が出土した。47の甕は器面が若干磨耗していたが、胴部の内外面に指頭痕やハケメ調整の痕がなく、ロクロナデにより調整された可能性が窺える。**遺構の時期** 出土遺物から、8C中頃としておく。

・SK1〔第88図〕

**位置と検出状況** E-3グリッド、2Tr西側に位置する。調査範囲では重複はなく、東西約1.2m、確認面から床面までの深さは約50cmを測った。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

・1号集石〔第88図〕 中新居遺跡支線13号地区

**位置と検出状況** F-3・F-3・4グリッド、3Tr西側に位置する。調査範囲においては約9.7mの範囲で確認し、部分的に列状をなしていた。調査時の所見から、旧畑地の石垣の一部と推定した。**遺構の時期** 出土遺物がなく明確ではないが、検出状況から近世・近代頃と推定しておく。

・2号集石〔第88図〕 中新居遺跡支線13号地区

**位置と検出状況** H-3グリッド、3Tr西側に位置する。調査範囲においては東西約1.9mの範囲に礫が堆積していた。性格については不明である。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

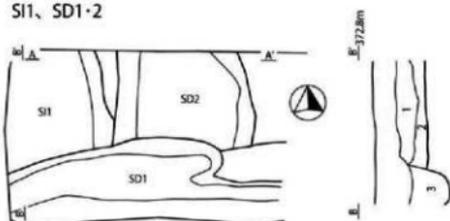
・3号集石〔第88図〕

**位置と検出状況** I-3グリッド、3Tr西側に位置する。調査範囲においては東西約1.8mの範囲に礫が堆積していた。性格については不明である。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

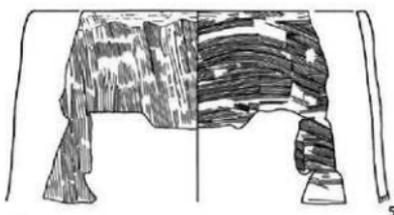
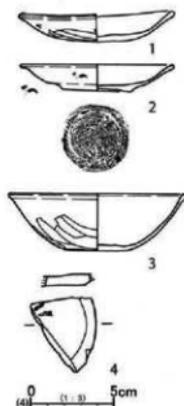
・4号集石〔第89図〕

**位置と検出状況** K-3グリッド、4Tr中央に位置する。規模は明確ではないが、

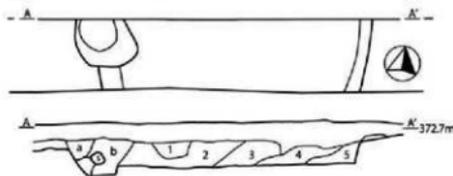
S11、SD1・2



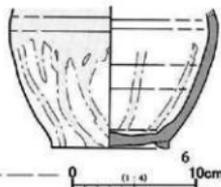
- 372.8m  
2m
- 1 黒褐色土 S11層土、黄土粒を少量含む。
  - 2 黒褐色土 S11層土、黄色土ブロックを含む。
  - 3 黒褐色土 SD1層土、黄土粒を多く含む。
  - 4 暗褐色土 SD2層土、人間大の礫を多く含む。
  - 5 暗褐色土 SD2層土、拳大の礫を少量含む。
- I 暗褐色土 しまり強い、表土の一部が。  
II 黄褐色土 地山、湖砂層。



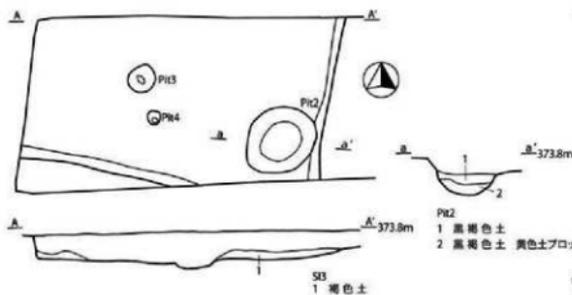
S12



- S12
- 1 黒褐色土 拳大の礫を多く含む。
  - 2 黒褐色土 黄色土粒を含む。
  - 3 黒褐色土 夾層が少ない。
  - 4 暗黄褐色土 黄色土粒を含む。
  - 5 暗黄褐色土 夾層が少ない。
- PH1
- a 黒褐色土 黄色土ブロックを含む。
  - b 黒褐色土 黄色土粒を少量含む。



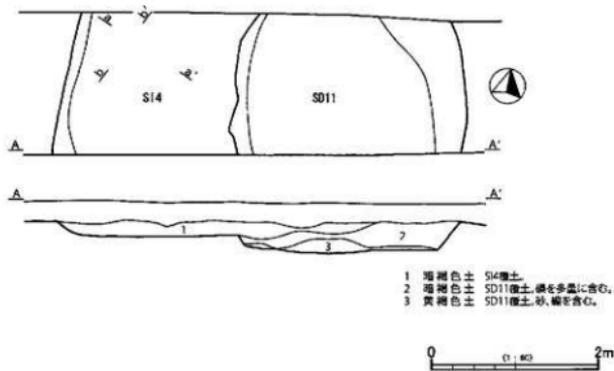
S13



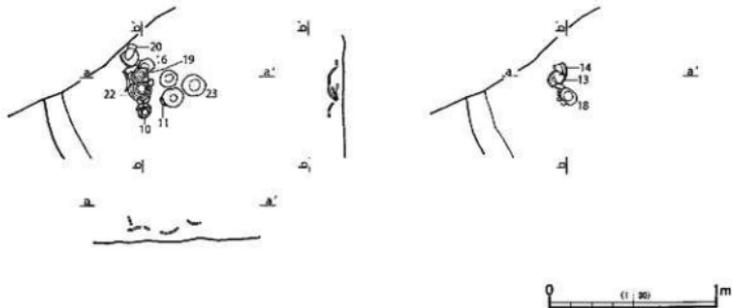
- PH2
- 1 黒褐色土
  - 2 黒褐色土 黄色土ブロックを含む。

第83図 S11~3、SD1・2

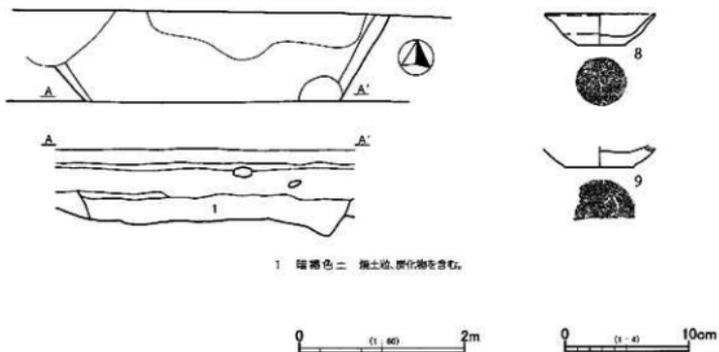
SI4、SD11



SI4 遺物出土状況図

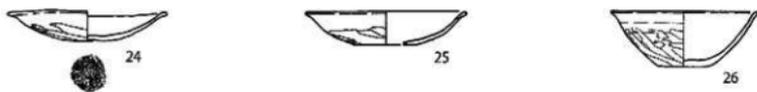
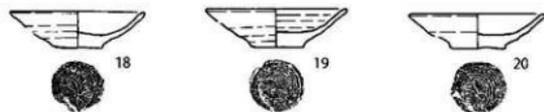
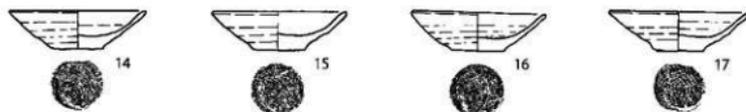
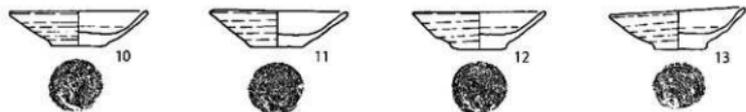


SI5



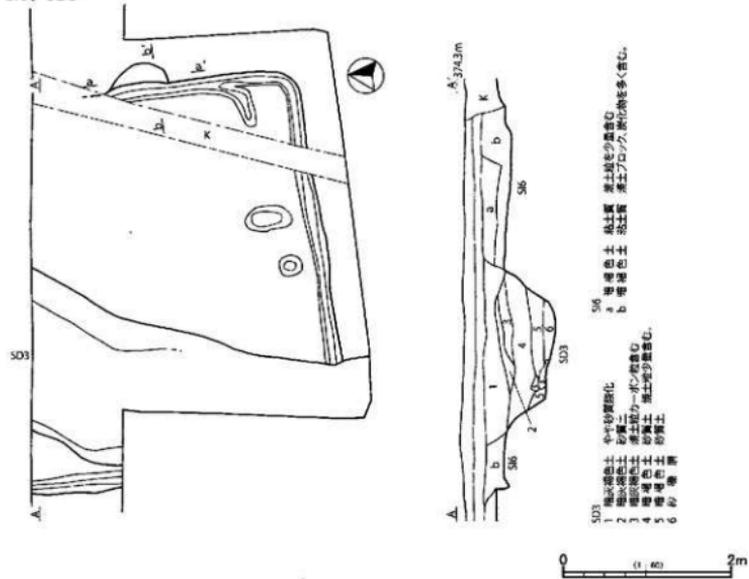
第84図 SI4(1)・SD11、SI5

S14

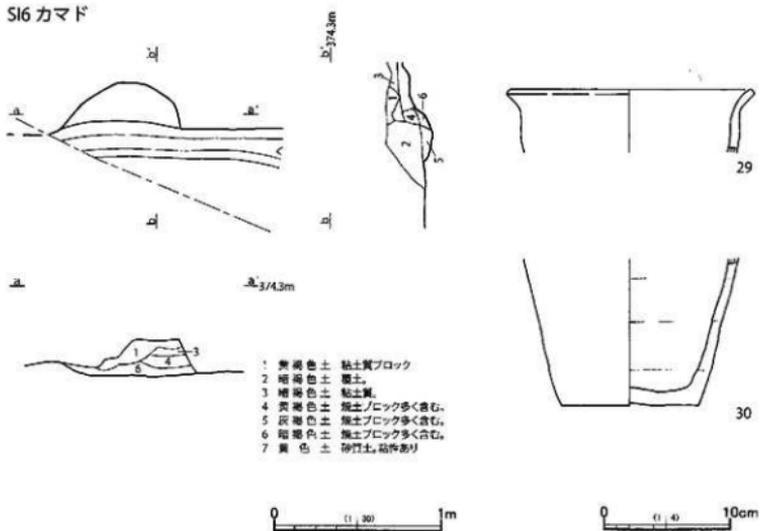


第85区 S14(2)

S16、SD3

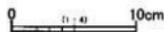
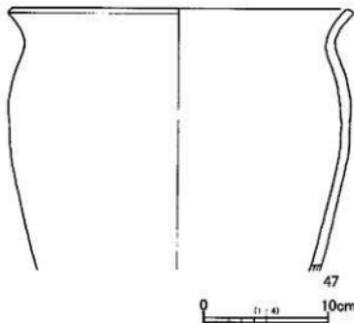
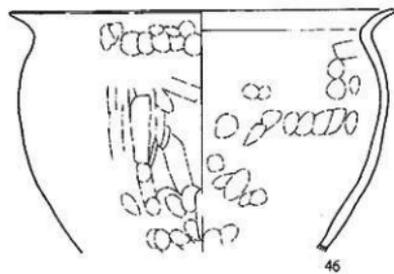
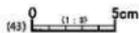
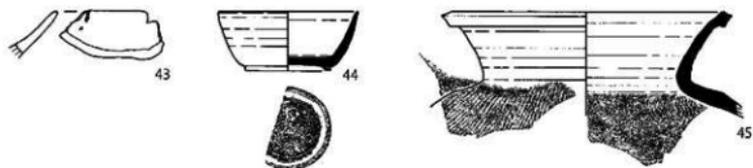
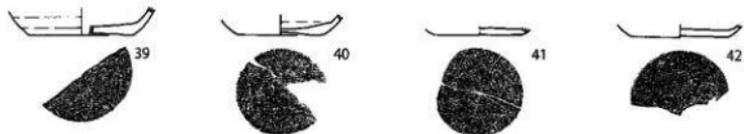
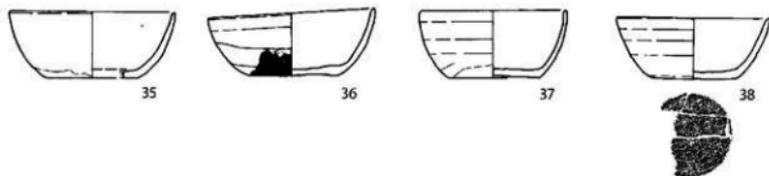
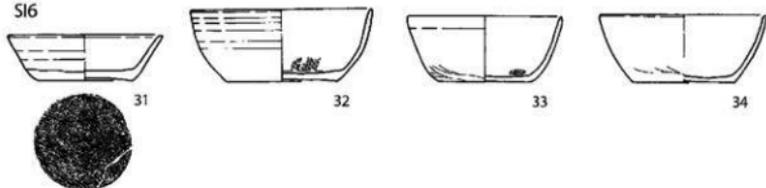


S16 カマド



第86図 S16(1)、SD3

S16



第87圖 S16(2)

東西約1.6m、南北2mを測った。**遺構の特徴** 方形状に約30cm掘り込んでから礫を据えており、内部も礫を並べて2区画にしていた。出土遺物は少なかったが、支線3号地区検出の8号集石と類似しており、集石墓である可能性が考えられる。**出土遺物** 灰釉陶器壺(49)が出土した。**遺構の時期** 出土遺物から、10C後半～11C代としておく。

・5号集石〔第89図〕

**位置と検出状況** Q-2グリッド、51r東側に位置する。重複はなく、長径80cm、短径60cmの楕円形を呈し、確認面から床面までの深さは約25cmを測った。**遺構の特徴** 内部には径15cmほどの礫が充填されていたが、性格は不明である。**出土遺物** 出土遺物がなく、不明である。

・6号集石〔第89図〕 中新居遺跡支線13号地区

**位置と検出状況** V-2グリッド、71r西側に位置する。約南北6mの間に3条の石列を検出し、下層にはSD7が位置するが、重複関係については不明である。調査時の所見から、1号集石同様に旧畑地の石垣の一部と推定した。**遺構の時期** 出土遺物がなく明確ではないが、検出状況から近世・近代頃と推定しておく。

・埋喪〔第88図〕

**位置と検出状況** H-3グリッド、2Tr中央からやや東側に位置する。縄文時代中期の曾利V式期の深鉢(48)が正位で据え置かれており、上部は掘削を受けて欠損していた。この他に、1Trで縄文土器の小片が出土したものの、調査範囲においては明確な遺構はなかった。

・SD1〔第83-90-91図〕

**位置と検出状況** A-B-4-C-D-3グリッド、1Trで確認した。東西方向の溝で、約35mの範囲で確認し、確認面からの深さは約45cmを測った。重複するSI1、SD2を壊していた。SD10との重複関係は不明である。**遺構の特徴** 溝縁部に小ピットが伴う部分を確認したが、性格は不明である。旧道路跡または耕地に伴う側溝と推定した。**出土遺物** 土師器高台付環(50)・小型甕(51)が出土した。なお、少量であるが覆土中に縄文土器片(60)などが混在していた。**遺構の時期** 出土遺物がなく明確ではないが、検出状況から近世・近代頃と推定しておく。

・SD2〔第83-90図〕

**位置と検出状況** A-3-4グリッド、1Tr西側で確認した。南北方向の溝であり、調査範囲においては重複するSI1を壊し、SD1に壊されていた。規模は明確ではないが、検出した範囲では幅約1.2m、確認面からの深さは約40cmを測った。**遺構の時期** 出土遺物がなく、明確な時期は不明であるが、段階的にSI1廃絶以降からSD1構築以前と位置付けておく。

・SD3〔第86図〕

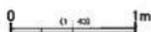
**位置と検出状況** S-2グリッド、6Tr西端出確認した。南北方向に延びる溝で、重複するSI6を壊していた。調査範囲では幅約2.4m、確認面から床面までの深さは約85cmを測った。**遺構の特徴** 覆土上面に焼土粒・炭化物を含んだが、重複するSI6からの混入と推定される。**出土遺物** 土師器甕(29・30)が出土したが、SI6からの流れ込みと推定する。**遺構の時期** 重複関係からSI6廃絶以降としておく。

・SD4〔第90図〕

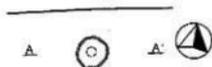
SK1



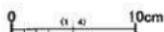
- 1 黄褐色土
- 2 暗褐色土 炭化物を多量に含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色土を多く含む。
- 4 暗褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む。
- 5 黄褐色土 黄褐色土塊を少量含む。



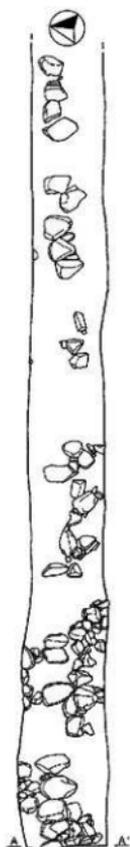
埋裏



- 1 黄褐色土 やや細かい。
- 2 黄褐色土 黒色土を含む。
- 3 黄褐色土 地山。

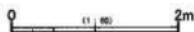
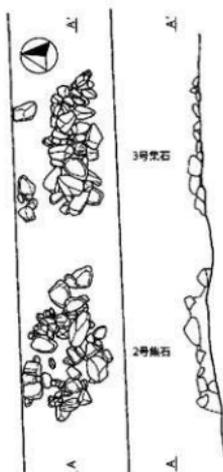


1号集石



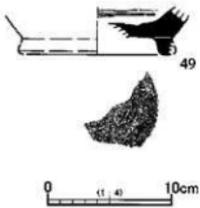
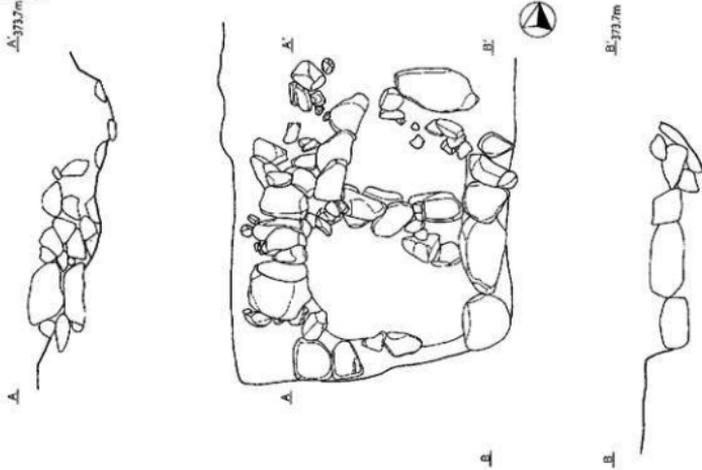
- 1 暗褐色土 炭土。
- 1' 暗褐色土 炭化物少ない。

2-3号集石

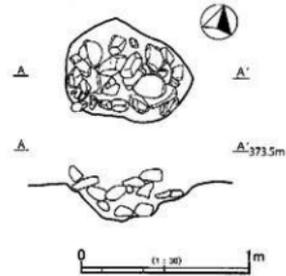


第88図 SK1、埋裏、1~3号集石

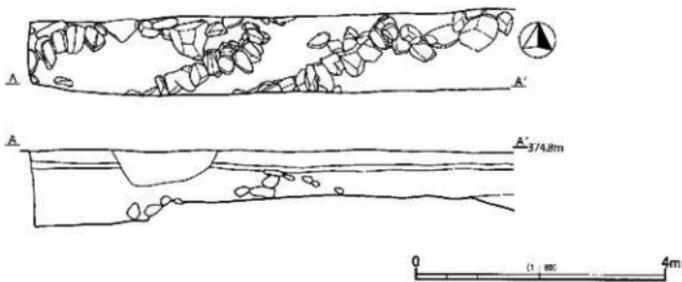
4号集石



5号集石



6号集石・SD7



第89図 4~6号集石

**位置と検出状況** T-2グリッド、6Tr東側で確認した。北西方向に軸をもつ溝で、根柢の影響で明確ではなかったが、検出した範囲では確認面からの深さは約60cmを測った。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

・SD5〔第90図〕

**位置と検出状況** T-2グリッド、6Tr東側出確認した。北西方向に軸をもつ溝で、検出した範囲では幅約80cm、確認面からの深さは約15cmを測った。性格は不明である。**遺構の時期** 出土遺物がなく明確ではないが、上層観察からはSD6と同時に埋没したと考えられる。

・SD6〔第90-91図〕

**位置と検出状況** U-2グリッド、6Trで確認した。南北方向に延びる溝で、調査範囲においては幅約2.8m、確認面から床面までの深さは約50cmを測った。**出土遺物** 土師器環(52)が出土した。**遺構の時期** 出土遺物は8C中頃に比定されるが、遺構時期については不明である。

・SD8〔第90図〕

**位置と検出状況** W-X-2グリッド、7Tr東側で確認した。東西方向の溝で、重複関係は明確ではないが、SD9の上層に位置する。検出した範囲では東西約6.9m、確認面からの深さは約35cmを測った。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

・SD9〔第90図〕

**位置と検出状況** X-2グリッド、7Tr東側で確認した。南北方向の溝で、重複関係は明確ではないが、SD8が上層に位置する。検出した範囲では東西約1.8m、確認面からの深さは約25cmを測った。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

・SD10〔第90図〕

**位置と検出状況** E-3グリッド、1Tr東端で確認した。SD1との重複関係は不明である。南北方向の溝と推定したが、出土遺物もなく、規模や時期については不明である。

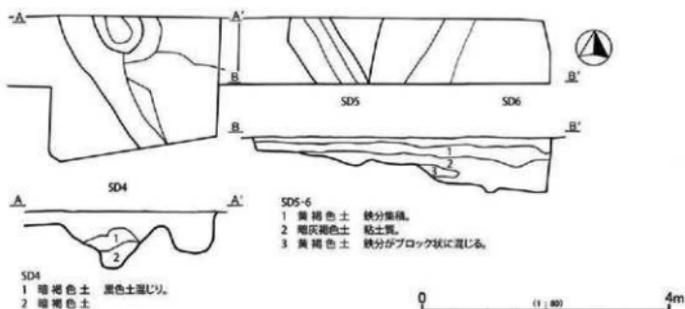
・SD11〔第84図〕

**位置と検出状況** M-3グリッド、5Tr西側で確認した。南北方向に延びる溝で、調査範囲においては重複するSI4に上部を壊されていたものの、幅約2.8m、確認面から床面までの深さは約40cmを測った。**出土遺物** 土師器環(27・28)が出土した。**遺構の時期** 出土遺物から、10C前半頃としておく。

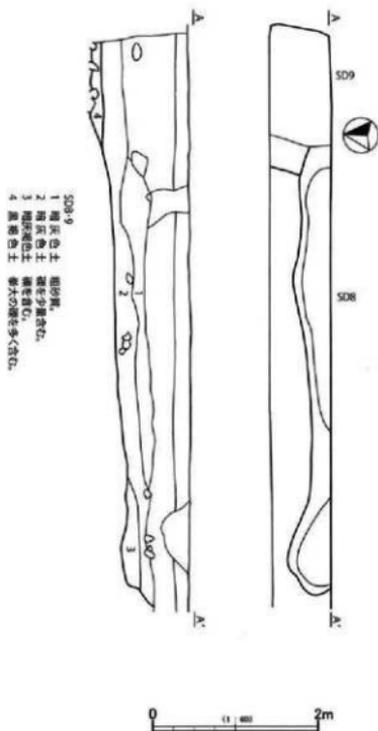
#### 4. まとめ

調査の結果、住居跡6軒、集石6箇所、溝11条、土坑、埋裏、Pitを発見した。各遺構の年代については、表31で示した。出土遺物から得た年代観の順に遺構をまとめると、古代ではSI6が8C中頃、SD11が10C前半頃、SI1が10C前半～中頃、4号集石が10C後半～11C代、SI4・5が11C後半頃、SI2が11C頃であった。中世段階は明確ではないが、近世・近代では1・6号集石、SD1などを検出した。また、明確な遺構確認はできなかったが、縄文時代の遺物が出土しており、埋裏は中期後葉曾利V式期に比定される。その他、住居跡や溝の埋土に混在して前期後半・諸磯B式(60)、諸磯C式期(61)、前期末・十三替提式期(57)、中期後葉・曾利IV A期(59)、加曾利E3式期(62)、後期中葉・加曾利B式期(58)に比定される土器片が出土した。(望月)

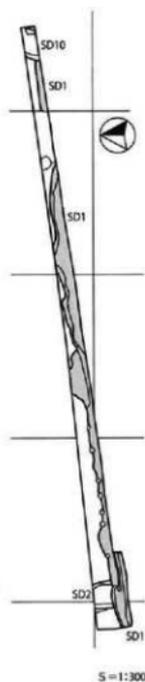
SD4・5・6



SD8-9

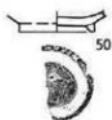


SD1・2・10



第90図 SD8~9

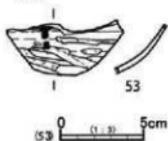
SD1



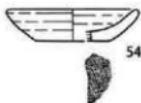
SD6



2Tr



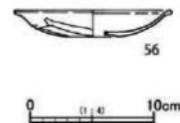
3Tr



4Tr



7Tr



縄文土器

SI3



SI4



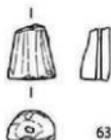
SD1



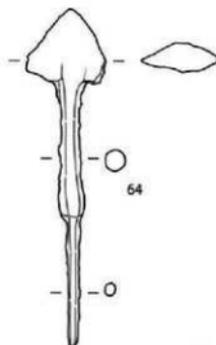
1Tr



土製品



金属製品



0 (57-63) (1:20) 10cm

0 (1:20) 5cm

第91図 SD1(2)、遺構外・土製品・金属製品



図番	道筋	種別	基盤	1区 (600mm <sup>2</sup> 以内)	状況	地上	製法	色調	備考
98	37	S6	土留壁	円	(12.09) (5.5) (7.4)	良	赤、赤・白・黒	純褐色	全体的に赤化
98	38	S6	土留壁	円	(12.43) (5.0)	良	赤、赤・白・黒	褐色	全体的に赤化 部分に赤黄化
98	39	S6	土留壁	円	- (26.4)	良	赤、赤・白・黒	褐色	全体的に赤化 表面に赤黄化
98	40	S6	土留壁	円	- (7.1)	良	赤、赤・白・黒	褐色	全体的に赤化 内面及び外縁の 部分に赤黄化
98	41	S6	土留壁	円	- (7.2)	良	赤、赤・白・黒	褐色	全体的に赤化
98	42	S6	土留壁	円	- (8.08)	良	赤、赤・白・黒	褐色	全体的に赤化
98	43	S6	土留壁	円	-	良	赤、赤・白・黒	褐色	内面が硝子に打割
98	44	S6	掘込塀	円	(11.2) (4.9) (6.7)	良	赤、白・黒	灰白色	灰白色
98	45	S6	掘込塀	角	(23.2)	中～不良	黒、白・黒	灰白色	ひよくれあり
98	46	S6	土留壁	角	31.0	良	赤、赤・白	褐色	外縁が部分に黒化
98	47	S6	土留壁	角	(27.8)	中～不良	黒、赤・白・黒・赤	褐色	硝子打割、 半壁に赤化
98	48	4号東土	掘込塀	角	(12.8)	良	赤、白・黒	灰白色	赤・外縁に赤黄化
98	50	SD1	土留壁	高台坪	(8.2)	良	赤、赤・白・黒・赤	褐色	内面赤化
98	51	SD1	土留壁	小中壁	4.7	中～不良	赤、赤・白・黒・赤	褐色	表面に硝子打割
98	52	SD6	土留壁	平	(10.9)	中～不良	赤、赤・白・黒・赤	褐色	全体的に赤化 表面に硝子打割 半壁に赤黄化
98	53	2T	土留壁	円	-	良	赤、赤・白・黒	褐色	硝子打割、 硝子打割
98	54	3T	土留壁	4角	(19.6) (7.6)	良	赤、赤・白・黒	褐色	硝子打割
98	55	4T	土留壁	小角	(8.4) (5.0)	良	赤、赤・白・黒	褐色	硝子打割
98	56	7T	土留壁	角	(12.4) (7.1) (4.8)	良	赤、赤・白・黒	褐色	全体的に赤化 内・外縁の一部に赤黄化

表 33 縄文土器 観察表

図番	道筋	種別	形状	胎土	胎土	成形・装式	地上	色調	備考
98	48	2T	深鉢	良	2区の胎土で胎土を区分し、平削り による胎土を区別	中輪装式・帯形式	赤・白・黒・赤	褐色	直径5.6cm、内面赤化、 縁部、部分に赤化
98	57	S13	深鉢	良	土質等による胎土	胎土・十区式	赤・白・黒	褐色	胎土赤化
98	58	S13	深鉢	良	胎土等による胎土	胎土・十区式	赤・白・黒	褐色	胎土赤化
98	59	S14	深鉢	良	胎土等による胎土	胎土・十区式	赤・白・黒	褐色	胎土赤化
98	32	SD1	深鉢	良	胎土等による胎土	胎土・十区式	赤・白・黒	褐色	胎土赤化
98	61	1T	深鉢	良	胎土等による胎土	胎土・十区式	赤・白・黒	褐色	胎土赤化
98	62	1T	深鉢	良	胎土等による胎土	胎土・十区式	赤・白・黒	褐色	胎土赤化

表 34 石巻・中新居道路支線 13号地区 土製品観察表

図番	道筋	種別	重量 (g)	最大径 (cm)	最大輪 (cm)	最大厚 (cm)	地上	色調	備考
98	63	2T	土 胎	14.91	3.3	2.6	1.8	中～赤、白・赤	褐色 縁りの 部分に 中心に孔あり

表 35 石巻・中新居道路支線 13号地区 金属製品観察表

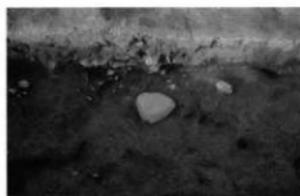
図番	道筋	種別	重量 (g)	最大径 (cm)	最大輪 (cm)	最大厚 (cm)	材質	備考
98	64	S6	鉄 蓋	22.43	13.7	3.1	0.9	



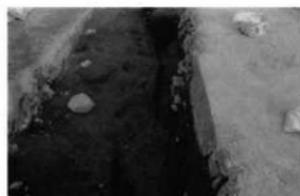
SI1、SD1・2 西から



SI1 南から



SD2 南から



SD1・2 西から



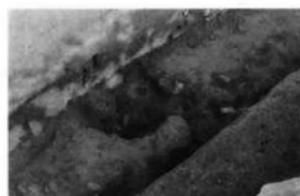
SI1 遺物出土状況 南から



SI1 遺物出土状況 南から



SI2 東から



SI2 南西から



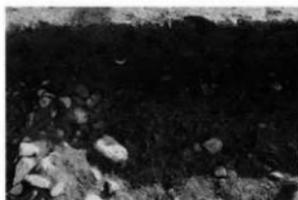
1Tr 東から



SI3 西から



SI4, SD11 西から



SI4, SD11 重複部 北から



SI4 遺物出土状況 北から



SI5 西から



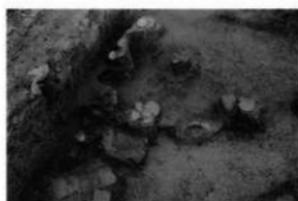
SI6, SD3 西から



SI6, SD3 西から



SI6 カマド 北から



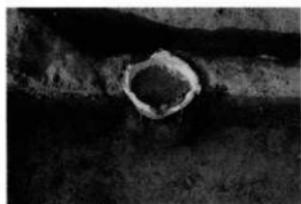
SI6 遺物出土状況 西から



SI6 鉄鏝出土状況 北から



SD3 南から



埋窆 南から



埋窆 南から



SK1 西から



SK1 北から



4号集石 北から



4号集石 西から



4号集石 北から



4号集石 西から



4号集石完掘状況 北から



6号集石 西から



SD4

東から



SD5・6

東から



SD8・9

東から



SD5

北東から



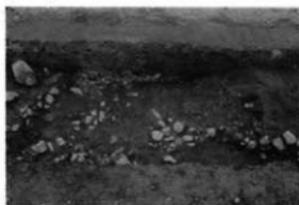
SD9

南から



SD10

東から



SD11

北から



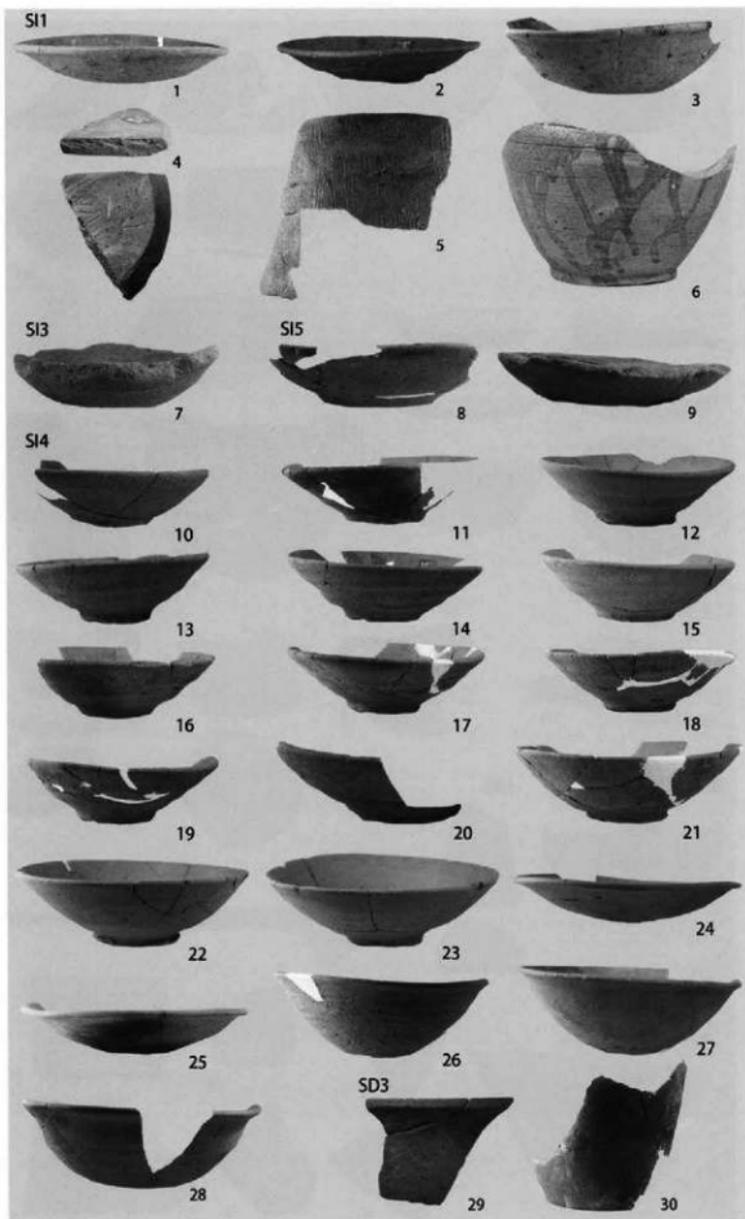
4Tr Pit・硬化面

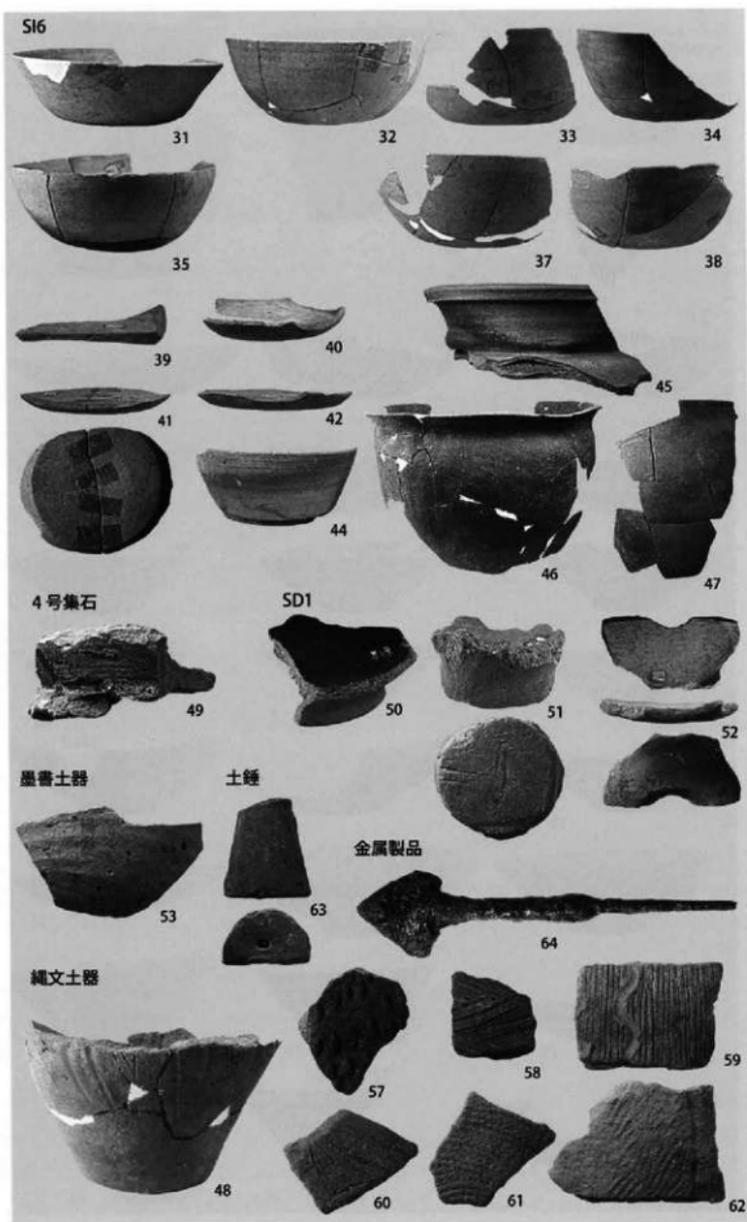
西から



硬化面

北から





## 第六章 北中原遺跡（第4次）支線14号地区〔2005年度調査分〕

## 1. 2005年度調査について

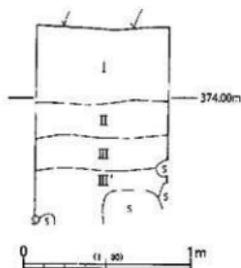
これまで報告した事業に関しては旧一宮町時代に調査に着手したが、支線道路第14号の建設箇所である本調査地点の試掘調査に着手したのは、6町村が合併し笛吹市が誕生してからである。今回の調査地点は県が実施した1・2次調査地点と、一宮町が実施した3次調査の中間地点であるため、本調査の可能性を想定しながら、平成17年1月17日から試掘調査に入った。遺構が確認された地点は随時拡張し、そのまま本調査に移行した。3月3日まで調査を実施し、一部の葡萄畑を残し、一旦調査を中断した。ところが、その後葡萄畑の杭や小張などの撤去が急ぎよ実施されたため、3月15日～3月31日、4月7日～4月27日にかけて追加調査を実施し、調査を完了した。調査面積は454㎡で、住居跡7軒、溝状遺構2、地下式坑1、土坑24、Pt15、道路状遺構1、抜根痕2を確認した。

尚、支線道路14号は道路幅がほぼ10mであるが、南側は簡易舗装の道路が使用中であったため、その道路箇所は掘削していない。

また、住居跡のカマドの焼土はすべて洗浄し、微細遺物の検出に努めた。その成果は、附編1・2に纏めてある。今回の調査地点に関しては、10×10mのグリッドで設定しており、注意されたい。

## 2. 基本層序

基本層序は、第1・2次調査の報告書で提示されているが、基本的には同様であるが、B-8グリッドで基本層序を確認したので、報告しておく。なお、IV・V層に関しては、D-4グリッドの地下式坑の土層による。Ⅲ'層は1・2次の報告書で述べているように地点により厚さが異なり、IV層の礫が上方で確認される場合もある。



第92図 基本層序

- I 表土
- II 暗黄褐色土
- III 明黄褐色土（ローム質の上）
- III' 明黄褐色砂質土
- IV 礫層
- V 砂礫層

## 3. 遺構

今回調査した遺構は住居跡7軒、土坑24基などである。調査区の制約から、内容が明確になった住居跡はSI6・7のみであった。また、SI7の南側における土地の地境は、1m近くの段差があることから、畑に整備された段階で大きく削り取られており、遺構が削平されてしまった可能性がある。なお、竪穴の部分的な調査にとどまった住居でも、SI2・5のカマド周りからの遺物出土状態がよく、良好な知見を得られた。

## ・SI1（第94・95図、PL43）

C-12グリッド。道路の東側で確認するが、西壁については既存道路の下に存在するものと思われ、東壁は調査区外に展開する。本住居跡は床面が3面、

カマドが2基確認されており、3軒分の住居跡の重複である。土層観察から新しい住居跡から番号を付した。SI1Aは主軸が4.5m程度で、確認面からの深さは最大で25cmである。SI1BはAの住居跡の下層で確認されたもので、Cはこれら2軒より大半が壊されるが、南壁付近をわずかに残すものである。SI1Aのカマドは北壁に付設され、確認時に石が散乱して原型をほとんど留めていない。このカマドの硬化面の下からさらに1基カマドを確認しており、これがSI1Bのカマドと思われる。

遺物はあまり多く出土せず、3軒分で土器189点、2,378gである。出土状態を記録した土器で、住居跡の所屬を明らかにできたものは、明示した。

出土遺物から平安時代VI期(10C前半)と想定しておきたい。

#### ・SI2 (第96-97図、PL43)

B-8グリッドで確認。住居跡の西半分は調査区外に展開する。南北は3.4mで、ほぼ方形を呈すると想像され、確認面から床面までの深さは約50cmである。貼床が2面、カマドが2基確認されたことから、建替えがなされたものと想定しておきたい。カマドは東壁に付設され、中央よりやや南壁に寄っている。床面はほぼ平坦で堅緻であり、腐溝は全周していない。カマドの右の北東隅に、浅い土坑状の掘り込みを確認した。旧カマドには両袖に袖石が埋設されていたと思われる、その掘り込みを確認したが、新カマドには袖石の痕跡は認められなかった。土器は589点、3,445gがカマドの周辺に集中して出土し、特に右袖(南壁)寄りに集中して見られた。

出土遺物から平安時代VI期(10C前半)と想定しておきたい。

#### ・SI3 (第98-99図、PL43-44)

C-11グリッドで確認。東・西壁は調査区外に展開し、結果的に住居跡をトレンチ調査した形となり、形状・規模は不明である。当初、地境付近で確認されたため、地境溝かと思われた遺構である。南北3.3m程の住居跡で、北壁に周溝を確認したが、床面は所々堅緻な貼床が施されているが、全面には及んでいない。カマドは一部調査し、東壁に付設されていることを確認した。袖石や天井石を確認したが、原位置を維持していない。カマド前面で確認した石は被熱しているが、これらの被熱箇所がバラバラの方向に散乱しており、石の下から完形の坏(59)が出土していることから、廃棄時にカマドが破壊された可能性がある。土器は291点、2,614gが出土し、カマド周辺に集中していた。覆土から、縄文時代中期前葉のイ須ヶ台式の土器片が出土している。

出土遺物から平安時代VI期(10C前半)と想定しておきたい。

#### ・SI4 (第100図、PL44)

C-9グリッドで確認。住居跡の大半は東側の調査区外に展開する。深さ35cm程で、南北3.3mを測り、方形を呈するものと思われる。床面は貼床が施され、平坦で堅緻であった。床面下で径60cm程の楕円形の土坑を1基確認した。土坑の中央に巨石があり、この上面が平坦で、ほぼ床面の高さであることから、人為的に床面に高さを揃えるように設置されたものと思われる。坏(68)はこの上坑の石の下から出土している。南壁よりに比較的石が集中していたが、カマドの残骸なのかは不明である。土器は110点、949gとあまり多くない。

出土遺物から平安時代VI期(10C前半)と想定しておきたい。

## ・S15 (第 101・102・103 図、PL44)

B-7 グリッドに位置する。住居跡のほぼ東半分を調査したのみで、西側は調査区外に展開する。北側に遺構が重複しており、この遺構は床面を確認したことから住居跡と思われる。覆土はⅢ層のブロックを含む土で、埋め戻したかのような印象を受けたため、住居跡の建替えを想定しておきたい。床下から北側に土坑、カマド前面に焼土が入った Pit を確認した。これらはいずれも旧住居(B)に伴うものと考えられる。カマドは東壁に付設され、大きな立石を一つずつ袖石に使用した両袖と支脚が原位置を維持していた。カマドの袖石は燃焼部側が熱を受けているが、構築財に使用された石には不自然な被熱が認められ、別のカマドに使用されたものを転用した可能性が高い。カマドの両脇には、棚状の浅い掘り込みが確認された。78・88 は右袖の構築財に使用されていた。特に 88 は右袖内、右袖燃焼部側、覆土とバラバラに出土している。特に口縁部は袖の構築財に使用されていた。87 は B(旧住居跡)から出土している。カマドの燃焼部から磨石が熱を受けた状態で出土している。土器は 386 点、8,361 g が出土し、カマド周辺に集中している。

出土遺物から平安時代Ⅵ期(10C前半)と想定しておきたい。

## ・S16 (第 104・105 図、PL44)

C-7 グリッド。東西 2.45 m、南北 2.4 m のほぼ方形を呈し、主軸方向は N-100°-E である。南東、南西隅で土坑(SK10、SK11)でそれぞれ重複するが、住居跡の方が新しい。床面はほぼ平坦で、ほぼ全面に貼床が施されていた。確認面から床面までの深さは約 30cm であった。カマドは東壁に付設され、袖(特に右袖)には構築財として礎や土器が使われていた。燃焼部から炭化物の層は認められたが、焼上はない。左袖の下から炭化物の層が確認され、カマドの割り型から、袖石を設置したと思われる小 Pit を確認したことから、カマドの作り替えが行われたと思われる。また、カマドの中央に巨石が置かれていたことから、カマド封じの祭祀が行われた可能性がある。土器は 180 点、2,007 g が出土している。

出土遺物から平安時代Ⅵ期(10C前半)と想定しておきたい。

## ・S17 (第 106・107 図、PL44)

D-E-5 グリッド。南北 3.4 m、東西 4.3 m の長方形を呈し、主軸方向は真北である。5 基の土坑によって壊され、段々畑の耕作により削平されているため、覆土も概ね 10cm 程度しか残っていない。当初西側で周溝が確認されたが、他の壁際に周溝が巡っていることから、よく精査したところ、西壁から 50cm 程内側で周溝が確認できた。覆土が薄いため土層をよく観察できなかったが、最初に周溝が巡る小さな住居跡が構築され、西側に拡張された可能性が高い。床面は北側に向かって傾斜し、部分的に貼床が施されている。カマドは北壁に付設されている。カマドは土坑により左袖を壊されており、残存状態は悪い。土器は 37 点、655 g が出土し、遺構の遺存状態も悪いこともあって、出土量は少ない。

出土遺物から平安Ⅳ期(9C前半)と想定しておきたい。

## ・地下式坑(第 109 図、PL45)

D-4 グリッド。ブドウ畑の支柱が撤去できなかったため、完掘できなかった。1.7 m × 1.4 m の洋ナシ形の入口部は、地表面から深さ 40cm 程である。方形部は東西 1.6m で、地表面から 1.4 m の深さである。地主からこの辺りが以

前陥没し、ゴミを埋めたと聞いたが、この地下式坑は自然堆積であることから、別の遺構と考えられる。側壁は被熱により、赤色硬化していた。

・SD1 (第108図、PL45)

B・C-12グリッドで確認された。確認された範囲で規模は、巾40cm、深さ5cmであった。土器は143点、1,735gが出土した。

・SD2

C-1、D-2グリッドで確認したが、道路の拡張幅が狭く、溝状遺構が存在することだけを確認したに過ぎない。

SKとピットについては、表36・37にまとめてある。

4. 遺物 (第110～118図、表38～40、PL46～49)

今回の調査で出土した土器は、2,264点、約26kgである。その大半は土師器であるが、須恵器、灰胎陶器、青磁、陶器、縄文土器も僅かながら出土している。その他、瓦、土製品、石製品も少量出土している。SI4からは、図示できなかったが須恵器の坏の底部片の内面に、ベンガラが付着しており、転用されたものと思われる。

土器・瓦については、表38～40表にまとめてある。

・石製品

3点を報告する。1はSI5のカマドの支脚で、花崗岩製の自然石である。尖った方を地中に埋めており、上部は熱を受け黒変している。長さ19.4cm、最大幅9.4cm、厚さ6.2cm、重量1450gである。2は花崗閃緑岩製である。当初砥石かと思定したが、砥石にあまり使用しない石材であるため、磨石としておきたい。長さ12.3cm、最大幅8.4cm、厚さ7.7cm、重量973gで、被熱により黒変している。SI5のカマド内から出土しており、カマドの右袖の構築材に転用されていた。3は打製石斧で粘板岩製である。長さ(5.2)cm、幅5.4cm、厚さ1.2cm、重量は37.4gである。

(野崎)

表 36 北中原遺跡(第4次)支線14号地区 上坑一覽表

遺跡	グリッド	平前期	面積		遺跡関係	備考
			最大長さ(m)	幅(m)		
SK1	C-13	不明	84	—	17	
SK2	C-13	掘り跡	130	—	18	
SK3	C-13	不明	112	—	33	SK4
SK4	C-12	不明	—	—	28	SK3, 5
SK5	C-12	不明	142	—	38	
SK6	C-10	掘り跡	82	80	22	SK1, SK17
SK7	C-10	掘り跡	110	82	27	
SK8	B-4	掘り跡	92	—	37	
SK9	C-8	不明	—	—	50	
SK10	C-7	掘り跡	80	76	30	SK6
SK11	B-7	掘り跡	85	85	45	SK6
SK12	C-7	掘り跡	128	76	69	
SK13	C-7	掘り跡	85	103	22	
SK14	B-6	掘り跡(中央部は土)	158	110	37	SK7
SK15	B-6	掘り跡	100	118	18	SK7
SK16	D-5	掘り跡	169	112	31	SK17, SK18, SK19, SK21
SK17	D-5	不明	—	—	14	SK17, SK18, SK19
SK18	D-5	掘り跡	(224)	180	48	SK17, SK18, SK19
SK19	D-5	不明	—	—	143	SK17, SK18, SK19
SK20	D-5	不明	(180)	—	156	SK21, SK24
SK21	D-5	不明	—	—	111	SK22
SK22	D-5	不明	(120)	—	154	SK21, SK23
SK23	D-5	不明	(96)	—	113	SK18, SK22
SK24	D-5	掘り跡	100	—	44	SK7, SK20

表 37 北中原遺跡支線14号地区 ビット一覽表

遺跡	グリッド	平前期	面積		備考
			最大長さ(m)	幅(m)	
P1	C-15	不明	28	—	30
P2	C-15	不明	50	—	不明
P3	C-13	不明(内)	40	—	35
P4	C-10	掘り跡	66	48	23
P5	C-10	不明	44	—	15
P6	C-10	不明	54	—	25
P7	C-10	掘り跡	12	34	34
P8	C-8	不明	46	—	22
P9	B-8	不明	43	43	20
P10	D-8	掘り跡	54	32	43
P11	B-8	掘り跡	32	44	21
P12	B-8	掘り跡	68	45	11
P13	B-8	掘り跡	45	40	17
P14	B-8	掘り跡	68	62	46
P15	C-7	不明	37	36	45

表 38 北中原遺跡(第4次)支線14号地区 遺物観察表

例	番号	遺跡	期	土層	口径(cm)	底径(cm)	残高(cm)	形状	胎土	器形・技法	色表	備考
110	1	SK1	上前期	灰	12.8	3.6	5.7	鉢	赤・灰・黒・金	(内) ココロナデ (外) ココロナデ (底) 黒色土・スノコシ土層	(内) 黒褐色 (外) 黒褐色	打ち欠き後削削(1)・縁部
110	2	SK1	上前期	灰	(12.0)	—	—	鉢	赤・灰・黒	(内) ナデ (外) ナデ+ヘラクスズリ	(内) 黒褐色 (外) 黒褐色	
110	3	SK1	土前期	赤土層	—	—	6.0	鉢	赤・灰・黒・金	(内) ココロナデ (外) ココロナデ (底) 黒色土+黒土層(内)ナデ	(内) 黒褐色 (外) 黒褐色	打ち欠き後削削(1)・縁部
110	4	SK1	土前期	灰	—	—	—	鉢	赤・灰・黒・金	(内) ココロナデ (外) ココロナデ (底) 黒色土・赤土層	(内) 黒褐色 (外) 黒褐色	
110	5	SK1	土前期	灰	6.4	—	—	鉢	赤・灰・黒・金	(内) ココロナデ (外) ココロナデ+ヘラクスズリ	(内) 黒褐色 (外) 黒褐色	
110	6	SK1	上前期	灰	(9.0)	—	—	鉢	赤・灰・黒・金	(内) ココロナデ・ヘラクスズリ・黒色土層 (外) ココロナデ・タンハケナデ・黒色土層 黒色土層+黒色土層	(内) 黒褐色 (外) 黒褐色	(内) 上縁へ削削(1)・全縁上縁による削削?
110	7	SK1	上前期	灰	60.0	—	—	鉢	赤・灰・黒・金	(内) ココロナデ(口縁)・黒色土層(口縁) (外) ココロナデ+赤土層・黒土層(口縁) 黒色土層	(内) 黒褐色 (外) 黒褐色	
110	8	SK1	上前期	灰	(22.0)	—	—	鉢	赤・灰・黒・金	(内) ナデ+ココロナデ (外) ナデ+黒色土(ヒゲ)・ココロナデ・黒色土層	(内) 黒褐色 (外) 黒褐色	
110	9	SK1	上前期	灰	—	—	12.8	鉢	赤・灰・黒・金	(内) タンビ (外) ナデ・黒色土 (底) ナデ	(内) 黒褐色 (外) 黒褐色	縁部? 字盤?
110	10	SK1	上前期	赤土層	—	—	—	鉢	赤・灰	(内) ナデ (外) ナデ	(内) 黒褐色 (外) 黒褐色	
110	11	SK1	上前期	赤土層	—	—	—	鉢	赤・灰・金	(内) ココロナデ・黒色土層 (外) ココロナデ・タンハケ+黒土層	(内) 黒褐色 (外) 黒褐色	
110	12	SK2	上前期	灰	12.8	3.5	3.7	鉢	赤・灰・黒・金	(内) ココロナデ (外) ココロナデ+ヘラクスズリ(内)黒色土層 黒色土層+ヘラクスズリ	(内) 黒褐色・黒褐色 (外) 黒褐色・黒褐色	(底) 赤色土層(一定方向のヘラクスズリ)・縁部による削削(1)・黒色土層(一定方向の削削(1)による削削)
110	13	SK2	上前期	灰	(13.0)	2.8	—	鉢	赤・灰・黒・金	(内) ココロナデ (外) ココロナデ+ヘラクスズリ(内)ククスズリ	(内) 黒褐色 (外) 黒褐色・黒褐色	打ち欠き後削削
110	14	SK2	上前期	灰	13.0	2.7	3.4	鉢	赤・灰・黒・金	(内) ココロナデ (外) ココロナデ+ヘラクスズリ(内)ククスズリ	(内) 黒褐色・黒褐色 (外) 黒褐色・黒褐色	打ち欠き後削削

110	15	SZ	土曜	日	13.0 2.5 4.2	新編	鹿 内・黒・赤	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ (裏)ヘラクズリ	(内)暗褐色、暗褐色 (外)暗褐色+黒褐色	
110	16	SZ	土曜	日	(13.4) (2.9) 3.6	真	鹿 内・黒・赤・金 【真】	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ (裏)ヘラクズリ、垂れり、短尾	(内)暗褐色 (外)暗褐色	ある方向のヘラクズリ後側方向のヘラクズリ、短尾側に垂れり
110	17	SZ	土曜	日	12.8 2.5 4.1	真	鹿 内・黒・赤・金	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ (裏)ヘラクズリ(一定方向)	(内)暗褐色+暗褐色 (外)暗褐色	垂れ一長久、背の中間部作中の茶寄り後側方向に、かつ、この上側の中間部に垂れりかつ背中にこの垂れや茶寄り後側方向で短尾、ヘラクズリしている
110	18	SZ	土曜	日	13.0 2.4 4.0	汽流	半中鹿 白・黒・赤	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ (裏)ヘラクズリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	
110	19	SZ	土曜	日	(13.6) 2.1 (3.0)	真	鹿 内・黒・赤・金 【真】	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ (裏)ヘラクズリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	
110	20	SZ	土曜	日	12.4 2.6 3.0	新編	鹿 内・黒・赤・金	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ (裏)ヘラクズリ	(内)暗褐色+暗褐色 (外)暗褐色+暗褐色	内面に黒い
110	21	SZ	土曜	日	(13.0) 2.0 3.0	新編	鹿 内・黒・赤・金 【真】	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ (裏)ヘラクズリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	
110	22	SZ	土曜	日	13.0 2.8 3.8	新編	鹿 内・黒・赤・金 【真】	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ (裏)ヘラクズリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	尻尾に茶の垂れあり、短尾に竹筒の上に黒い丸の毛?
110	23	SZ	土曜	日	(14.2) (2.0) (4.0)	新編	鹿 内・黒・赤・金	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	
110	24	SZ	土曜	日	13.1 2.9 6.3	半中鹿	鹿 内・黒・赤・金 【真】	(内)11クハナダ (外)11クハナダ (裏)暗褐色垂れ	(内)暗褐色、暗褐色 (外)暗褐色+暗褐色	入付、底面に茶色斑(黒斑)に付している
110	25	SZ	土曜	日	(14.0) — —	新編	鹿 内・黒・赤・金	(内)11クハナダ (外)11クハナダ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	
110	26	SZ	土曜	日	(12.0) — —	半中鹿	鹿 内・黒・赤・金	(内)11クハナダ (外)11クハナダ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	
110	27	SZ	土曜	日	(12.0) (2.1) 3.0	新編	鹿 内・黒・赤・金 【真】	(内)11クハナダ+ヘラクズリ (外)11クハナダ+ヘラクズリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	
111	28	SZ	土曜	日	16.7 5.7 15.8	真	鹿 内・黒・赤・金 【真】	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ (裏)ヘラクズリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	
111	29	SZ	土曜	日	(10.9) 5.3 9.3	新編	鹿 内・黒・赤・赤・金 【真】	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ (裏)暗褐色垂れ(短尾より後側)→ヘラクズリ	(内)暗褐色+暗褐色 (外)暗褐色+暗褐色	肩に黒い、茶色斑
111	30	SZ	土曜	日	12.0 4.0 5.0	新編	鹿 内・黒・赤・金	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ (裏)暗褐色垂れ+ヘラクズリ(一定方向)短尾	(内)暗褐色+暗褐色 (外)暗褐色+暗褐色	短尾に茶色斑あり
111	31	SZ	土曜	日	12.8 (5.7) 3.1	新編	鹿 内・黒・赤・金	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ (裏)ヘラクズリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	(内)ある方向に黒い斑、黒化するようになり、短尾の両面に茶色斑あり、短尾
111	32	SZ	土曜	日	12.6 4.1 3.9	真	鹿 内・黒・赤・金	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ (裏)暗褐色垂れ+ヘラクズリ	(内)暗褐色、入付 (外)暗褐色、入付	短尾に茶色斑あり、短尾
111	33	SZ	土曜	日	(11.0) 4.4 9.0	真	鹿 内・黒・赤・金 【真】	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ (裏)暗褐色垂れ+ヘラクズリ(最も茶色に寄って茶色斑あり)	(内)暗褐色+暗褐色 (外)暗褐色+暗褐色	
111	34	SZ	土曜	日	(12.0) 2.6 4.2	真	鹿 内・黒・赤・赤・金 【真】	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ (裏)暗褐色垂れ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	
111	35	SZ	土曜	日	(12.0) — —	新編	鹿 内・黒・赤・赤・金 【真】	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	
111	36	SZ	土曜	日	13.2 3.7 3.0	新編	鹿 内・黒・赤・赤・金 【真】	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	
111	37	SZ	土曜	日	13.4 — —	新編	鹿 内・黒・赤・赤・金 【真】	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	
111	38	SZ	土曜	日	(13.0) — —	新編	鹿 内・黒・赤・赤・金 【真】	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	
111	39	SZ	土曜	日	— — 5.5	新編	鹿 内・黒・赤・赤・金 【真】	(内)11クハナダ (外)11クハナダ+ヘラクズリ (裏)暗褐色垂れ+暗褐色垂れ	(内)暗褐色 (外)暗褐色、入付	打ち足? 内面入付、茶色斑

## 第六章 北中原遺跡(4次)

111	40	522	十勝郡	外	— — 5.9	普通	赤・白・黒・赤	(内)ロクロナデ (外)ヘラナデリ(黒瓦) (瓦)黒瓦リ→ヘラナデリ(蓮交する ように交互に)	(内)暗緑色 (外)暗緑褐色	磁器より成りぬ
111	41	522	十勝郡	外	— — 5.2	良	赤・白・赤	(内)ロクロナデ (外)ヘラナデリ (瓦)黒瓦リ→ヘラナデリ(蓮交する ように交互に)	(内)黒褐色 (外)暗緑褐色	片取、赤瓦の破損部による瓦、片 取にも破損部
111	42	522	十勝郡	外	— — 5.8	良	赤・白	(内)ロクロナデ (外)ヘラナデリ (瓦)黒瓦リ→ヘラナデリ(蓮交する ように交互に)	(内)暗褐色→緑褐色 (外)暗褐色→緑褐色	赤瓦の破損部による瓦
111	43	522	十勝郡	外	(18.0) — —	良	赤・白・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ	(内)黒内白 (外)黒内白	内瓦破損
111	44	522	十勝郡	外?	— — —	良	赤・白・赤・黒	(内)瓦文	(内)暗緑褐色 (外)暗緑褐色	磁器土器
111	45	522	十勝郡	外	(1.2) — —	普通	赤・白・赤	(内)ヘラナデ (外)黒コナデ・タテハツ	(内)茶褐色→暗褐色 (外)黒褐色→暗褐色	内瓦破損
111	46	522	十勝郡	外	— — —	普通	赤・白・赤・黒	(内)黒コナデ(瓦)、磁器類 (外)タテハツ(瓦)、磁器類	(内)茶褐色 (外)黒褐色	磁器土器
111	47	522	十勝郡	外	— — —	普通	赤・白・赤・黒	(内)黒コナデ(瓦)、磁器類 (外)タテハツ(瓦)、磁器類	(内)茶褐色 (外)黒褐色	
111	48	523	十勝郡	外・中	12.8 2.5 4.2	普通	赤・白・黒	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラナデリ (瓦)黒瓦リ→ヘラナデリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	スス穴
111	49	523	十勝郡	外	(15.0) 12.0 5.5	良	赤・黒・赤(少)	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラナデリ (瓦)ヘラナデリ	(内)暗褐色→茶褐色 (外)暗褐色→茶褐色	瓦の破り方より判断
111	50	523	十勝郡	外	(18.0) 5.0 10.0	普通	赤・黒・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラナデリ (瓦)黒瓦リ→ヘラナデリ	(内)暗褐色→暗褐色 (外)暗褐色→暗褐色	
111	51	523	十勝郡	外	(17.0) 5.4 (1.0)	良	赤・白・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラナデリ (瓦)黒瓦リ→ヘラナデリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	52と同一磁器か? 磁器による 土器か
112	52	523	十勝郡	外	(17.0) — —	良	赤・白・赤・黒	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラナデリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	51と同一磁器か?
112	53	523	十勝郡	外	(1.4) 4.2 4.8	普通	赤・白・黒・赤・黒	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラナデリ (瓦)ヘラナデリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	
112	54	523	十勝郡	外	12.6 4.0 5.2	良	赤・白・黒・赤・黒	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラナデリ (瓦)黒瓦リ→ヘラナデリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	磁器により赤瓦の破損
112	55	523	十勝郡	外	(12.0) (1.0) 10.0	良	赤・白・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラナデリ (瓦)黒瓦リ→ヘラナデリ	(内)暗褐色→暗褐色 (外)暗褐色→暗褐色	内瓦破損による認め
112	56	523	十勝郡	外	12.0 4.1 4.3	普通	赤・白・黒・赤・黒	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラナデリ (瓦)黒瓦リ→ヘラナデリ	(内)茶褐色→暗褐色 (外)茶褐色→暗褐色	
112	57	523	十勝郡	外	(12.0) — —	普通	赤・白・黒・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラナデリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	
112	58	523	十勝郡	外	(12.0) — —	普通	赤・白・黒・赤・黒	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラナデリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	内瓦 赤瓦?
112	59	523	十勝郡	外	(12.0) — —	普通	赤・白・黒・赤・黒	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラナデリ	(内)暗褐色→暗褐色 (外)暗褐色→暗褐色	
112	60	523	十勝郡	外	13.0 — —	普通	赤・白・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ→ヘラナデリ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	土器 スス穴(磁器か?)
112	61	523	十勝郡	外	— — —	良	赤・白・黒	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ	(内)暗褐色 (外)暗褐色	内瓦 赤瓦(ヘラナデ)・黒瓦 として判別
112	62	523	十勝郡	外	(10.0) — —	普通	赤・白・黒・赤・黒	(内)黒コナデ・磁器類 (外)タテハツ・タテハツ・磁器類	(内)茶褐色→暗褐色 (外)茶褐色→暗褐色	
112	63	523	十勝郡	外	(18.0) — —	普通	赤・白・黒・赤・黒	(内)黒コナデ・磁器類 (外)タテハツ・タテハツ・磁器類	(内)茶褐色→暗褐色 (外)茶褐色→暗褐色	
112	64	523	十勝郡	外	(10.0) — —	普通	赤・白・黒・赤	(内)黒コナデ・タテハツ (外)タテハツ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	内瓦破損のため不明



113	81	595	上海原	瓦	—	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク(新しい)・御願山 (内)タテハク・御願山 (外)本館山・神子山・御願山	(内)石緑色 (外)石緑褐色	
113	82	595	十勝原	瓦	—	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イデ・御願山 (外)タテハク・御願山 (註)御願山	(内)茶褐色～暗褐色 (外)茶褐色～黒褐色	(註)本館山 露が乾いているのが、二層になっている
113	93	595	十勝原	瓦	—	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・御願山 (外)タテハク・御願山	(内)茶褐色～暗褐色 (外)茶褐色～黒褐色	
114	84	595	十勝原	瓦	—	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・御願山 (外)タテハク・御願山	(内)茶褐色～暗褐色 (外)茶褐色～暗褐色	
114	95	595	土師原	瓦	02.0	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・石巻原 (外)タテハク・ハケーンダ・御願山	(内)茶褐色～暗褐色 (外)茶褐色～暗褐色	(註)以下同様 遺跡
114	96	595	土師原	瓦	03.0	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イナダ (外)タテハク	(内)茶褐色 (外)茶褐色	
114	97	595	上海原	瓦	03.0	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イナダ (外)タテハク	(内)茶褐色 (外)茶褐色～暗褐色	
114	98	595	上海原	瓦	02.0 02 02	—	—	—	—	—	—	(内)イナダ (外)シロハク・イナダ (註)御願山・イナダ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	(註)本館山 露が乾いているのが、ヘラケズリによる凹凸作り
114	99	595	土師原	瓦	03.0	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イナダ (外)シロハク・イナダ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	
114	100	595	土師原	瓦	03.4	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イナダ (外)シロハク・イナダ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	
114	101	595	十勝原	瓦	14.0 4.4 4.8	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イナダ (外)シロハク・イナダ (註)御願山・イナダ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	本館山・石巻原 内蔵的遺跡
114	102	595	十勝原	瓦	02.0 03.0 04.0	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イナダ (外)シロハク・イナダ (註)御願山・イナダ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	御願山・イナダ
114	103	595	十勝原	瓦	03.0	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イナダ (外)シロハク・イナダ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	
114	104	595	十勝原	瓦	05.0 04.0	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イナダ (外)シロハク・イナダ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	本館山(御願山)より残る1枚 及び石巻原のヘラケズリ
114	105	595	上海原	瓦	04.0 04.0 05.0	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イナダ (外)シロハク・イナダ (註)ヘラケズリ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	
114	106	595	十勝原	瓦	04.0	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イナダ (外)シロハク・イナダ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	
114	107	595	十勝原	瓦	05.0	—	—	—	—	—	—	(内)イナダ (外)ヘラケズリ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	
114	108	595	十勝原	瓦	07.0	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イナダ (外)シロハク・イナダ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	
115	109	595	十勝原	瓦	04.0	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イナダ (外)シロハク・イナダ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	(内)本館山 露が乾いているのが、ヘラケズリ
115	110	595	十勝原	瓦	05.0	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イナダ (外)シロハク・イナダ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	
115	111	595	土師原	瓦	—	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イナダ (外)シロハク・イナダ (註)御願山・イナダ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	御願山・イナダ 露が乾いているのが、ヘラケズリ
115	112	595	土師原	瓦	—	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イナダ (外)シロハク・イナダ (註)御願山・イナダ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	(註)本館山 露が乾いているのが、ヘラケズリ
115	113	595	土師原	瓦	—	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イナダ (外)シロハク・イナダ (註)ヘラケズリ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	
115	114	595	土師原	瓦	—	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イナダ (外)ヘラケズリ (註)ヘラケズリ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	露が乾いているのが、ヘラケズリ
115	115	595	土師原	瓦	06.0 03.0 06.0	—	—	—	—	—	—	(内)シロハク・イナダ (外)シロハク・イナダ (註)御願山・イナダ	(内)茶褐色 (外)茶褐色	(内)30cm以上の厚さの露が乾いているのが、一定厚のヘラケズリ(註)御願山・イナダ

115	116	596	上野町	高口付坪	— 100	—	丘	赤・黒・水・金 (赤)	(内)ロクロナダ (外)ロクロナダ	(内)無地内色 (外)無地色	(内)赤黒?有 (10ヶ所以上)脚 内品構成、打ち木も、赤黒? (内) ヘラ道具のおて盛有
115	117	596	上野町	高口付坪	— 8.7	—	丘	赤・黒	(内)ロクロナダ (外)ロクロナダ (赤)脚板取付→外板取付ヘラケズリ	(内)無地内色 (外)無地内色	船形脚か 窓脚取付済も 漆も あり
115	118	596	十勝町	小笠原	7.0 — —	—	普通	赤・白・金(赤)	(内)コクハツ→ヘラケ 漆工器具によるナ デ、脚取付 (外)ナデ(口取付)、脚取付→タナハ ケ、脚取付	(内)白黒内色 (外)茶褐色	
115	119	596	十勝町	沢	— — 10.0	—	普通	赤・白・金	(内)黒→コクハツ、脚取付 (外)コクハツ→黒→脚取付→タナハ ケズリ、脚取付→ナデ (赤)漆取付、脚取付あり	(内)黒色→白黒色 (外)黒色→白黒色	
115	120	596	十勝町	野	0.4.0 — —	—	良	赤・白・黒	(内)ロクロナダ (外)脚板ヘラケズリ、ロクロナダ	(内)脚板内 (外)脚板内	
115	121	596	十勝町	野	00.0 — —	—	普通	赤・白・金(赤)	(内)コクハツ (外)コクハツ→タナハケ、脚取付	(内)黒脚板→黒脚板 (外)黒脚板→黒脚板	
115	122	596	十勝町	野	— — 10.0	—	良	赤・白・金(赤)	(内)タナハケ、脚取付済 (外)コクハツ→黒→タナハケ、脚取 付済 (赤)漆取付	(内)茶褐色→黒脚板 色 (外)茶褐色→黒脚板 色	
115	123	597	十勝町	野	11.4 4.4 6.2	—	良	赤・白・黒・金 (赤)	(内)既文 (外)ロクロナダ→ヘラケズリ (赤)脚板取付済→ヘラケズリ、脚取 付済	(内)脚板内 (外)茶褐色→黒脚板 色	
115	124	597	十勝町	野	11.0 4.3 6.8	—	良	赤・白・黒・赤・金	(内)既文 (外)ロクロナダ→ヘラケズリ (赤)脚板取付済→ヘラケズリ、脚取 付済	(内)既内色 (外)茶褐色→黒脚板 色	
115	125	597	十勝町	野	04.0	—	普通	赤・白・金(赤)	(内)ナデ (外)ナデ	(内)無地内色 (外)無地内色	漆もあり
115	126	597	十勝町	野	— — 17.0	—	普通	赤・白	(内)ロクロナダ→赤のみ漆取付済 有 (外)脚板取付済→外板ヘラケズリ (赤)漆取付済	(内)既内色 (外)既内色	漆もあり
115	127	597	十勝町	野	00.0 — —	—	普通	赤・白・金(赤)	(内)コクハツ、脚取付 (外)コクハツ→タナハケ、脚取付 (赤)漆取付	(内)茶褐色→黒脚板 色 (外)脚板内	
115	128	597	十勝町	野	— — 11.0	—	普通	赤・白・金(赤)	(内)コクハツ、脚取付済 (外)タナハケ、脚取付済 (赤)ナデ	(内)茶褐色 (外)脚板内	
115	129	597	十勝町	野	00.0 — —	—	普通	赤・白・金(赤)	(内)コクハツ、脚取付 (外)コクハツ→タナハケ、脚取付 (赤)漆取付	(内)茶褐色 (外)脚板内	
115	130	597	十勝町	野	14.2 2.9 5.8	—	良	赤・白・黒・赤・金	(内)ナデ (外)ロクロナダ (赤)脚板取付済	(内)無地内色→脚取 付内色 (外)無地内色→脚取 付内色	
115	131	597	十勝町	野	12.0	—	良	赤・白・黒・金	(内)既文 (外)ロクロナダ→ヘラケズリ	(内)脚板内色 (外)脚板内色	
115	132	597	十勝町	野	— — 16.0	—	普通	赤・白・黒・赤	(内)ロクロナダ (赤)脚板取付済	(内)脚板内色 (外)脚板内色→脚取 付内色	
115	133	597	十勝町	野	13.0 — —	—	良	赤・白	(内)ロクロナダ (外)ロクロナダ	(内)脚板内色→脚取 付内色 (外)脚板内色→脚取 付内色	
115	134	597	十勝町	野	12.0 — —	—	普通	赤・白・黒・赤・金	(内)ロクロナダ→ヘラケズリ (外)ロクロナダ→脚取付、タナハ ケ	(内)脚取付内色 (外)脚取付内色	
115	135	597	十勝町	野	— — 10.0	—	普通	赤・白・黒・赤	(内)ナデ (外)脚取付、タナハ ケ (赤)漆取付	(内)脚取付内色 (外)脚取付内色	
115	136	597	十勝町	野	— — 10.0	—	良	赤・白	(内)脚取付 (外)脚取付	(内)脚取付内色 (外)脚取付内色	
115	137	597	十勝町	野	10.0 — —	—	普通	赤・白・黒・赤(赤)	(内)コクハツ、脚取付 (外)タナハケ、脚取付	(内)茶褐色 (外)茶褐色→黒脚板 色	
115	138	597	十勝町	野	— — 6.0	—	良	赤・白・黒	(内)ロクロナダ (赤)脚板取付済→スノコ取付済	(内)脚取付内色 (外)脚取付内色	
115	139	597	十勝町	野	16.0 — —	—	良	赤・白	(内)ロクロナダ (外)脚板ヘラケズリ、ロクロナダ	(内)脚取付内色 (外)脚取付内色	

116	140	長瀬遺	氏持館跡	赤	—	長	新 白・黒・赤・金	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ	(内)灰白色 (外)灰白色	
116	141	SK3	上層部	赤	(11.4)	長	新 白・黒・赤・金	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ+ヘラケズリ	(内)黒緑褐色 (外)黒緑褐色	
116	142	SK3	上層部	赤	—	長	新 白・黒・赤・金	(内)ロクロナデ (外)赤褐色+ヘラケズリ、ヘラケズリ	(内)黒褐色 (外)黒褐色	
116	143	SK2	表土部	赤	—	長	新 白・赤	(内)赤褐色 (外)黒褐色	(内)赤褐色 (外)黒褐色	(内)赤褐色あり、(外)赤褐色
116	144	SK8	中層部	赤	—	長	新 白・赤	(内)赤褐色 (外)黒褐色	(内)赤褐色 (外)黒褐色	(内)赤褐色あり、(外)赤褐色
116	145	SK9	中層部	赤	—	長	新 白・赤・金	(内)赤褐色 (外)黒褐色	(内)赤褐色 (外)黒褐色	(内)赤褐色あり、(外)赤褐色
116	146	SK16-17	中層部	赤	—	長	新 白・赤・金	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ	(内)黒褐色 (外)黒褐色	
116	147	SK18-19	上層部	赤	—	長	新 白・赤・金	(内)ロクロナデ (外)黒褐色	(内)黒褐色 (外)黒褐色	
116	148	SK20	上層部	赤	(11.9)	長	新 白・黒・赤・金	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ	(内)黒褐色 (外)黒褐色	
116	149	SK22	中層部	赤	(11.4)	長	新 白・黒	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ	(内)黒褐色～灰褐色 (外)黒褐色～灰褐色	
116	150	遺構跡	上層部	赤	(11.4)	長	新 白・黒・赤・金	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ	(内)黒褐色 (外)黒褐色	
116	151	遺構跡	中層部	赤	(13.4)	長	新 白・黒・赤・金	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ+ヘラケズリ	(内)灰褐色 (外)黒褐色	
116	152	遺構跡	中層部	赤	(12.4)	長	新 白・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ+ヘラケズリ	(内)黒褐色 (外)黒褐色	
116	153	遺構跡	中層部	赤	—	長	新 白・赤・金	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ+ヘラケズリ (表)ヘラケズリ	(内)黒褐色 (外)黒褐色 (表)黒褐色	
116	154	遺構跡	中層部	赤	—	長	新 白・黒・赤・金	(内)ロクロナデ (外)ヘラケズリ (表)ヘラケズリ (裏)ヘラケズリ	(内)黒褐色 (外)黒褐色 (表)黒褐色 (裏)黒褐色	
116	155	遺構跡	上層部	赤	—	長	新 白・赤	(内)赤褐色 (表)黒褐色+ヘラケズリ	(内)黒褐色 (表)黒褐色	黒褐色あり
116	156	遺構跡	中層部	赤	—	長	新 白・黒・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ、白磁瓦 (表)黒褐色+ヘラケズリ、白磁瓦	(内)黒褐色 (外)黒褐色 (表)黒褐色	
116	157	遺構跡	中層部	赤	—	長	新 白・黒・赤・金	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ+ヘラケズリ (表)黒褐色+ヘラケズリ	(内)黒褐色 (外)黒褐色 (表)黒褐色	
116	158	遺構跡	中層部	赤	—	長	新 白・赤	(内)ロクロナデ (表)黒褐色+黒磁瓦、白磁瓦、ヘラケズリ	(内)黒褐色～黒褐色 (外)黒褐色～黒褐色	
116	159	遺構跡	表土部	赤	—	長	新 白・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ+ヘラケズリ (表)黒褐色+ヘラケズリ	(内)灰褐色 (外)黒褐色 (表)黒褐色	
116	160	遺構跡	表土部	赤	(18.0)	長	新 白・黒	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ	(内)黒褐色 (外)黒褐色	
116	161	遺構跡	表土部	赤	(16.0)	長	新 白・黒	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ	(内)黒褐色 (外)黒褐色	
116	162	遺構跡	中層部	赤	—	長	新 白・赤・赤・金	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ (表)黒褐色+ヘラケズリ	(内)黒褐色 (外)黒褐色 (表)黒褐色	
116	163	遺構跡	中層部	赤	—	長	新 白・赤	(内)ロクロナデ (外)ロクロナデ (表)黒褐色+黒磁瓦	(内)黒褐色 (外)黒褐色 (表)黒褐色	
116	164	遺構跡	中層部	赤	—	長	新 白	(内)ロクロナデ (外)黒褐色+ヘラケズリ (表)黒褐色	(内)黒褐色～黒褐色 (外)黒褐色～黒褐色 (表)黒褐色	
116	165	遺構跡	内層部	赤	—	長	新 白・赤	(内)ロクロナデ (表)黒褐色+黒磁瓦、黒磁瓦	(内)黒褐色 (表)黒褐色	
116	166	遺構跡	中層部	赤	—	長	新 白・赤・金	(内)ロクロナデ (外)黒褐色	(内)黒褐色 (外)黒褐色	

117	167	道徳科	道徳科	道	一	月	前・内・全	(内)へうケズリ (外)内巻	(内)和蘭色 (外)和蘭色	
117	168	道徳科	道徳科	道	一	月	前・内・全	(内)ナブ (外)ナナキ	(内)和蘭色 (外)和蘭色	

表 39 北中原道跡(第4次)支線14号地区 縄文土器観察表

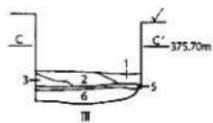
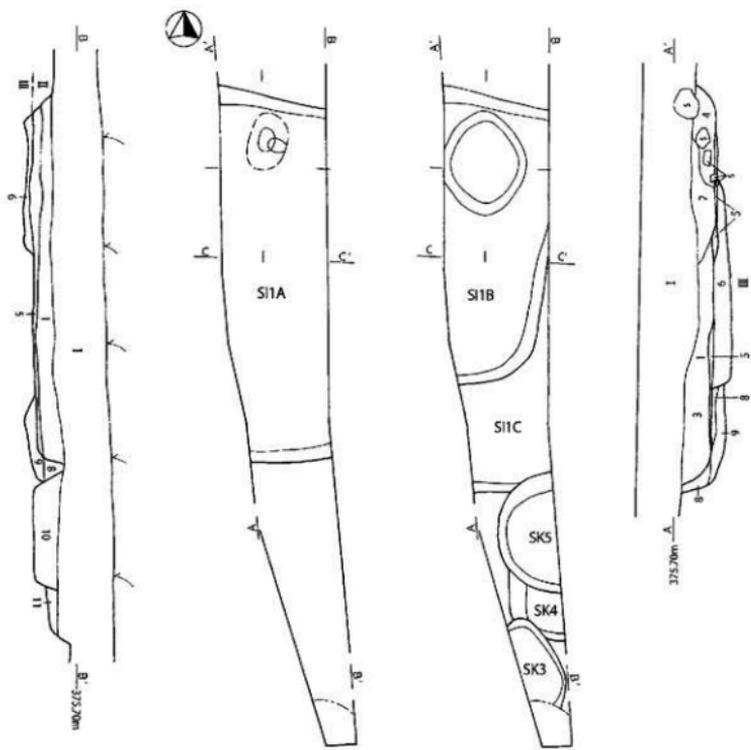
回	番号	道 跡	遺 跡	遺 物	遺 物	備 考
117	169	道徳科	縄文土器	土器		五輪ケカ1・5・5(2) 常会記録
117	170	道徳科	縄文土器	土器		泉之内2式

表 40 北中原道跡(第4次)支線14号地区 瓦観察表

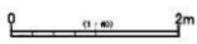
回	番号	道 跡	遺 跡	大 小	遺 物	遺 物	備 考	
117	1	第1	瓦・丸瓦	タテ 5.4	(内)石目 (外)ナブ	中・中級 前・真・全	瓦	
117	2	第4	瓦・丸瓦	タテ 10.0	(内)石目 (外)へうケズリ	前 前・真・全	瓦	
117	3	第5	瓦・丸瓦	—	(内)石目 (外)ナブ ケズリ	前 前・真	〃 (内)(外)和蘭色	
117	4	ワ	瓦・丸瓦	— — 6.2	(内)赤目・和蘭色 (外)ナブ	前 前・真・全(前)	和蘭 (内) 和蘭色～和蘭色	
117	5	第5	瓦・平瓦	—	(内)赤目 (外)ナブ ケズリ	前 前・真	〃 (内)(外)和蘭色	
117	6	第5	瓦・丸瓦	タテ 4.2	(内)赤目	前 前・出・前・全	瓦	(内)(外) 和蘭色
117	7	第5	瓦・平瓦	タテ 4.9	(内)ナナキ (外)ナナキ	前 前	〃	(内)(外) 和蘭色
117	8	第5	瓦・平瓦	タテ 4.2	(内)和蘭 (外)和蘭	前 前・前・全(前)	〃	(内)(外) 和蘭色
117	9	第5	瓦・平瓦	タテ—	(内)和蘭 (外)和蘭	前 前	和蘭	和蘭色
117	10	第5	瓦・平瓦	タテ—	(内)和蘭 (外)ナナキ	前 前	〃	和蘭色



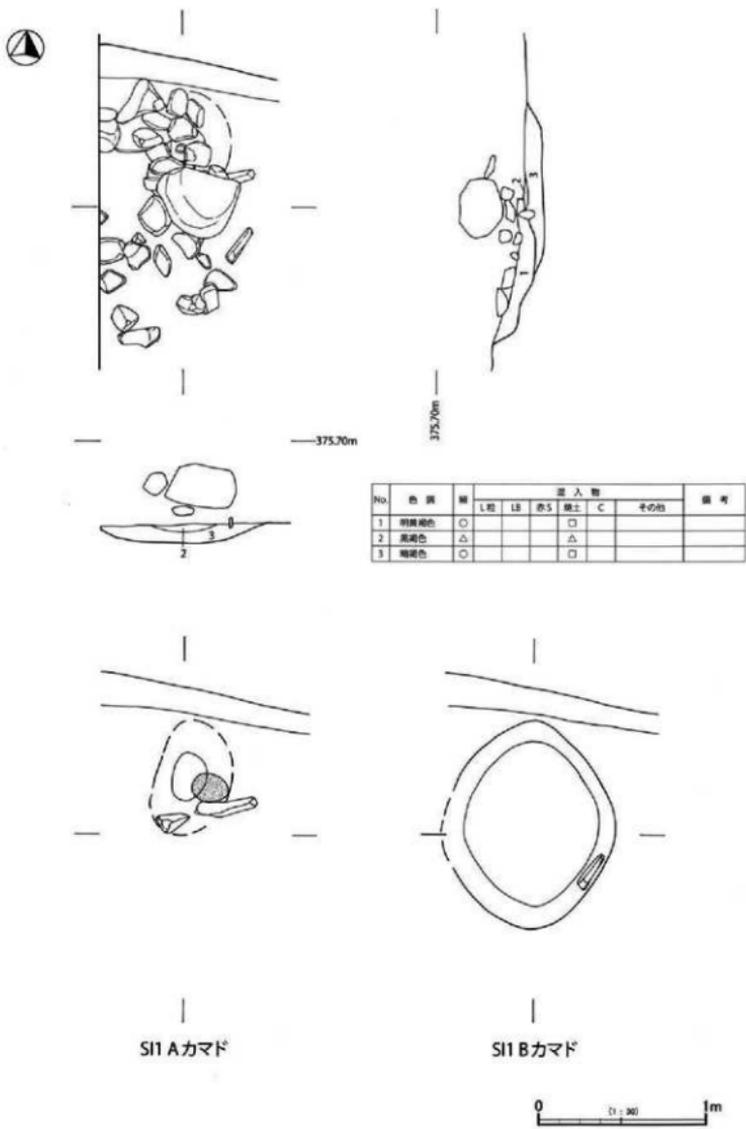
第93図 第4次調査区と遺構分布図



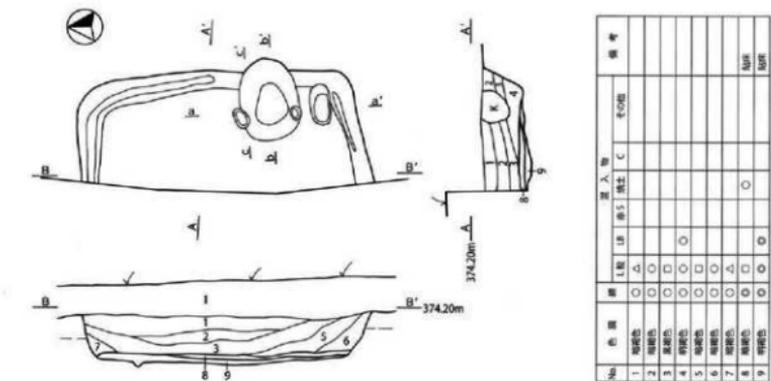
No.	○ 跡	研	採入物					備考
			土粒	土	土	C	その他	
1	灰褐色	○ △	△					△
2	黒褐色	○ △		△	△			△
3	灰赤褐色	○ □	□		△	△		△
4	黒赤褐色	○ □	□		△			△
5	黒赤褐色	○ □					採入土 B 砂	A の地層
6	白褐色	○ □	□					△
7	黒赤褐色	○ □	□					△
8	灰褐色	○ □	□					△
9	土褐色	○ □	□					△
10	土褐色	○ □	□					△



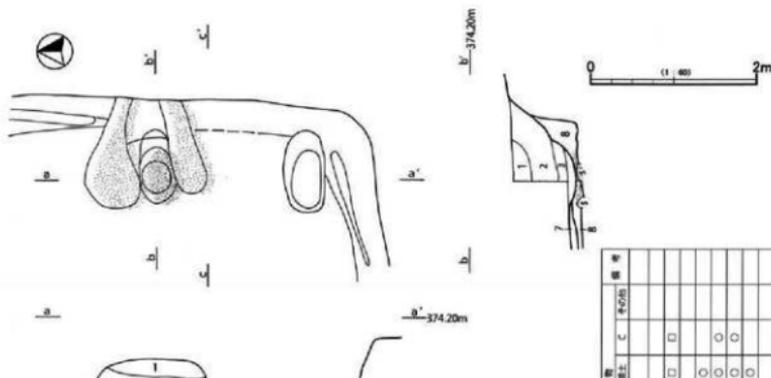
第94図 SI1、SK3～5実測図



第95図 S11カマド実測図

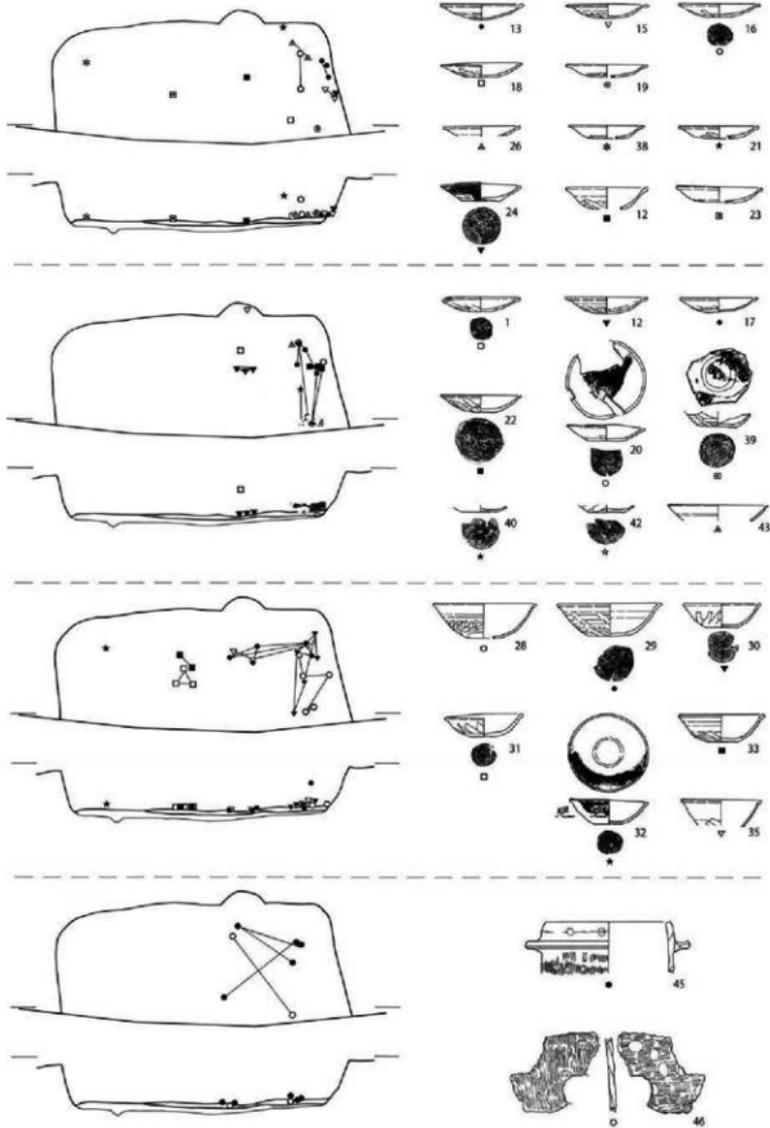


No	色調	層	埋入物			備考
			土	瓦	C	
1	暗褐色	○	△			
2	暗褐色	○	△			
3	黒褐色	○	△			
4	暗褐色	○	△			
5	暗褐色	○	△			
6	暗褐色	○	△			
7	暗褐色	○	△			
8	暗褐色	○	△			瓦
9	暗褐色	○	△			瓦

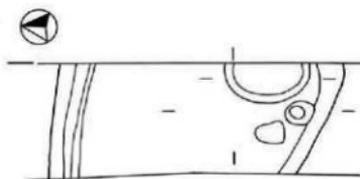


No	色調	層	埋入物			備考
			土	瓦	C	
1	暗褐色	○	○			
2	暗褐色	○	○			
3	暗褐色	○	○			
4	暗褐色	○	○			
5	暗褐色	○	○			
6	暗褐色	○	○			
7	暗褐色	○	○			
8	暗褐色	○	○			
9	暗褐色	○	○			
10	暗褐色	○	○			瓦
11	暗褐色	○	○			瓦
12	暗褐色	○	○			

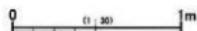
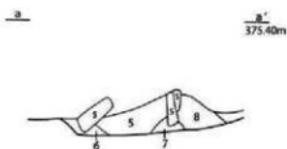
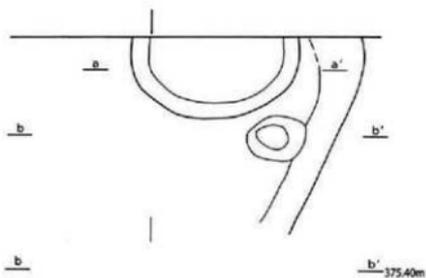
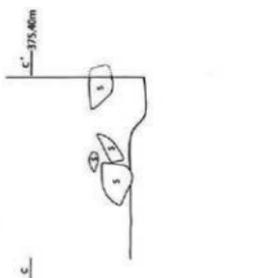
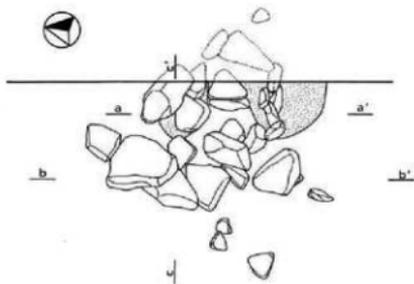
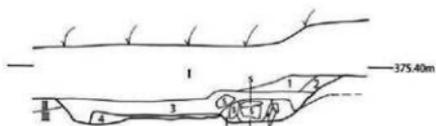
第96図 S12実測図、同カマド実測図



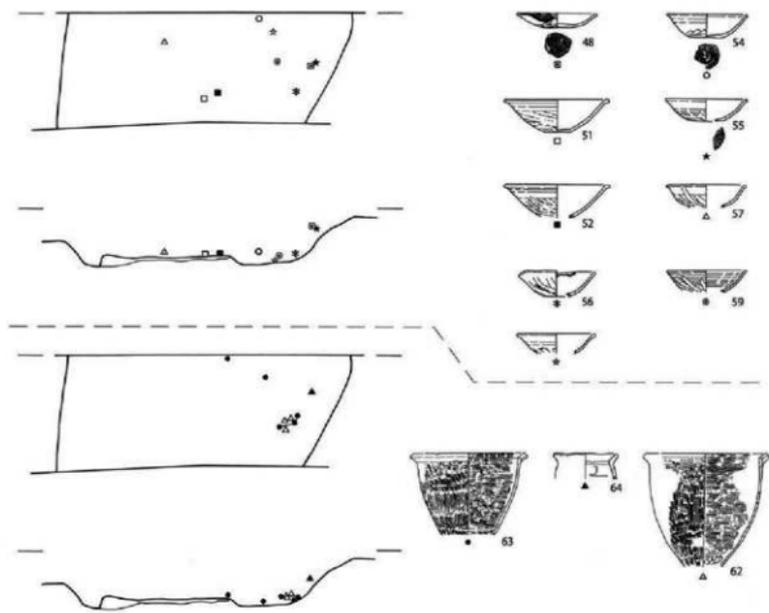
第97圖 SI2個体別分布圖



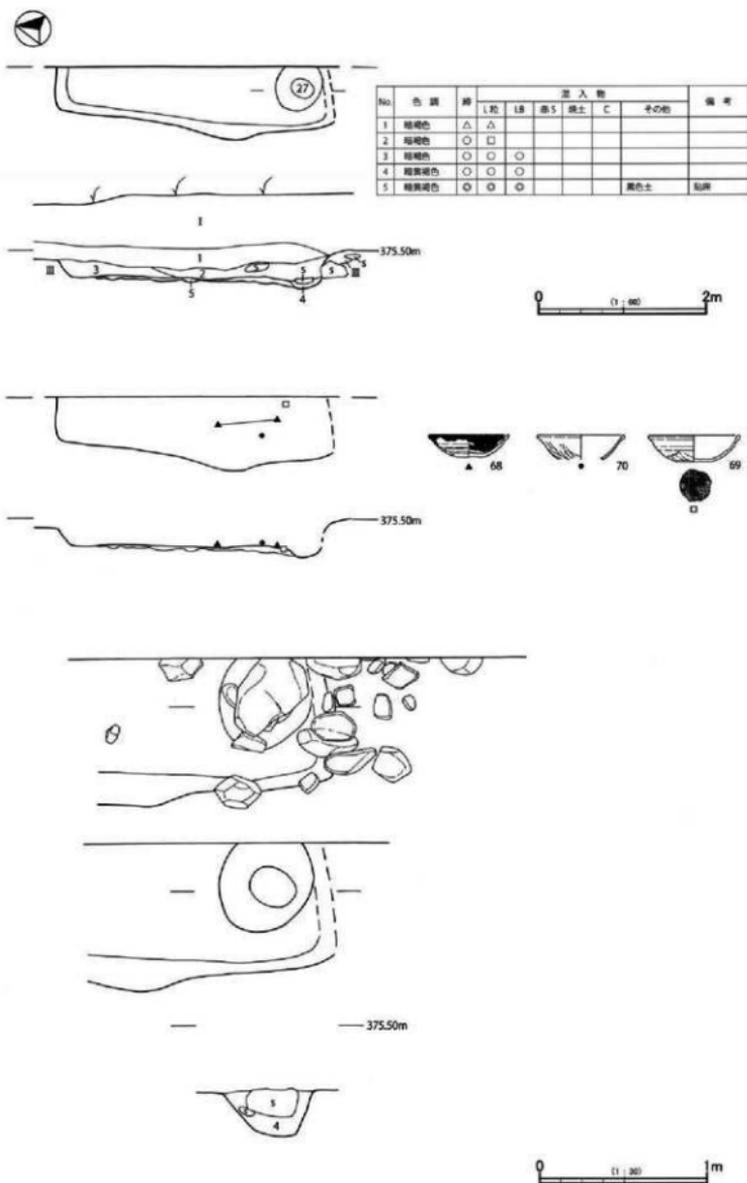
No.	色 質	線	埋 入 物					備 考	
			L 柱	LB	赤S	旗土	C		その他
1	埋褐色	○	□						
2	埋褐色	○	□						
3	埋褐色	○	□						
4	埋黄褐色	○	○					※埋土○	
5	埋黄褐色			○	□				
6	埋褐色	○						※埋土□	
7	埋褐色	○						※埋土○	
8	埋黄褐色	○						※埋土○	
9	埋褐色	○			△	△			
10	埋黄褐色	○				○			



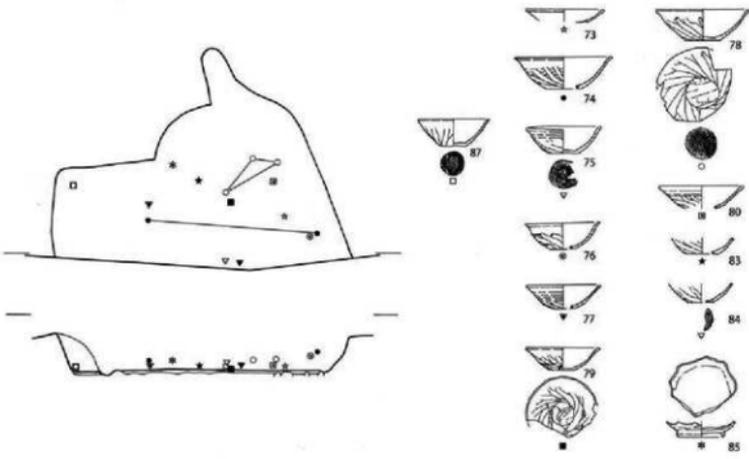
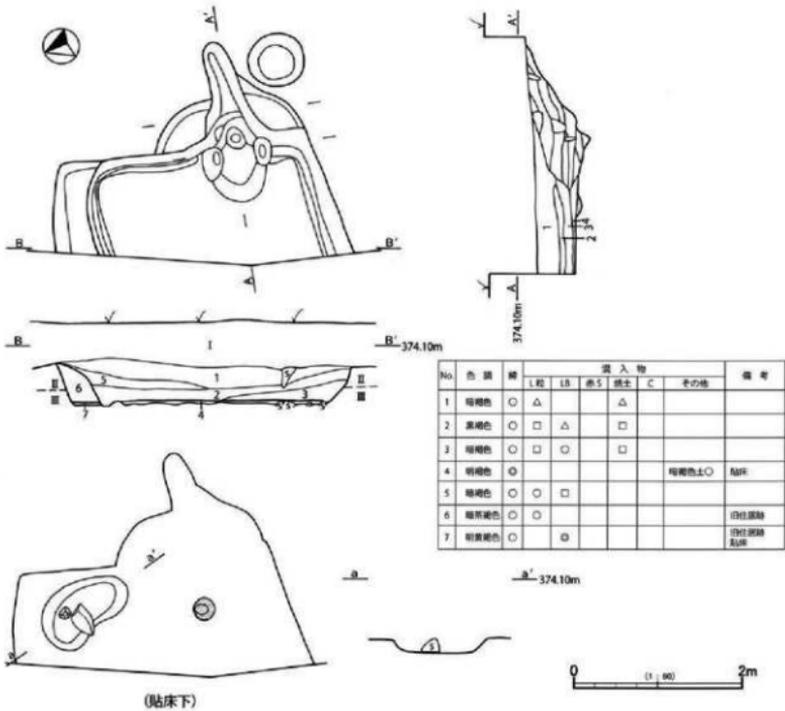
第98図 S13実測図、両方マド実測図



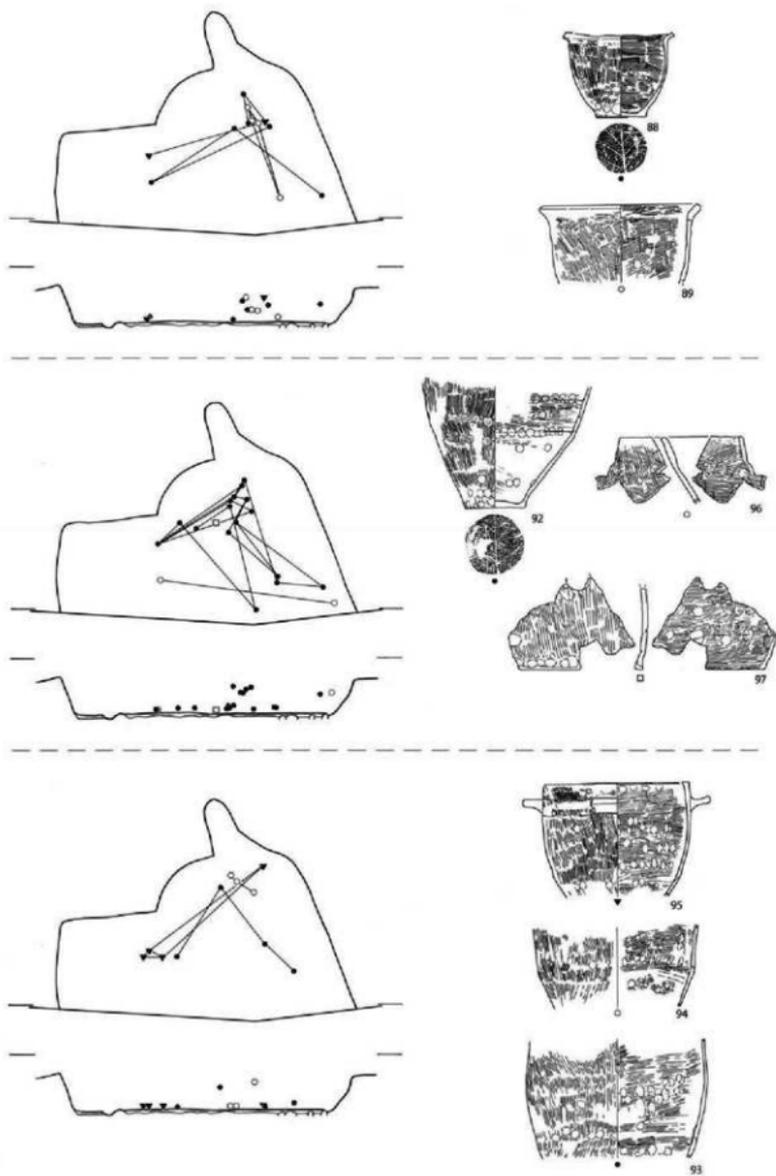
第99図 S13個体別分布図



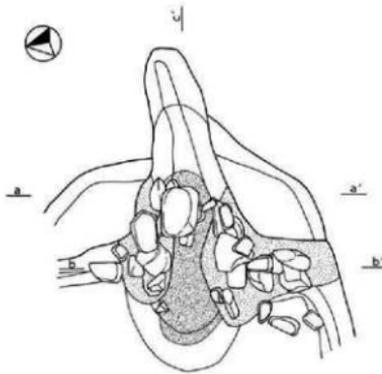
第100図 S14実測図



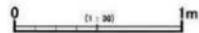
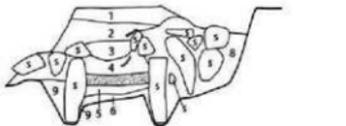
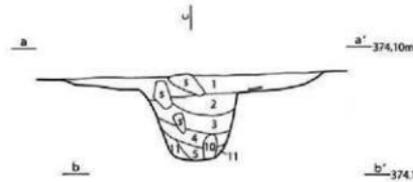
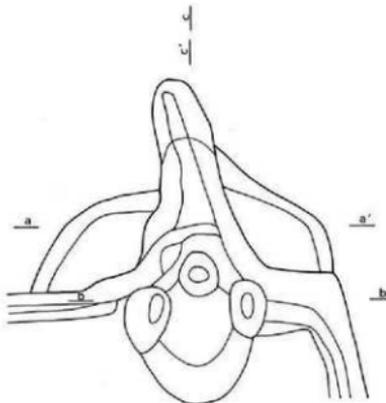
第101図 SIS、P14実測図、同個体別分布図①



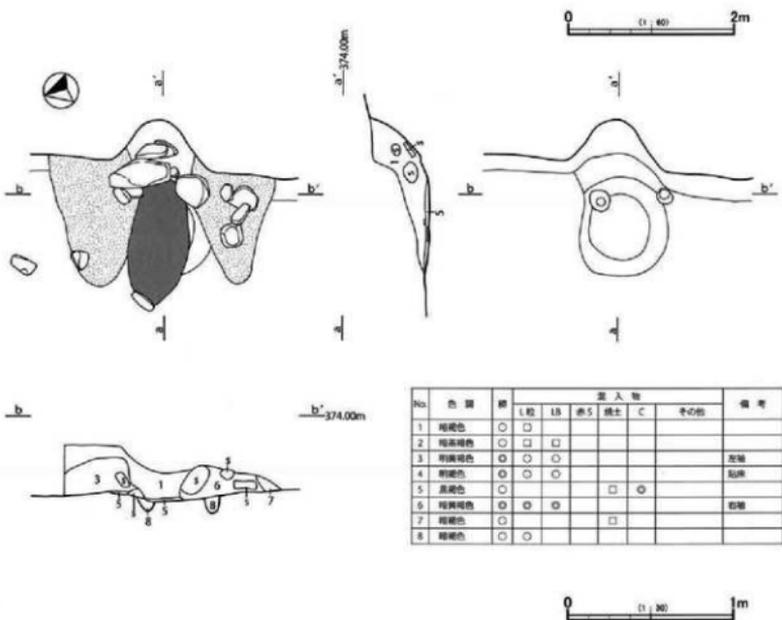
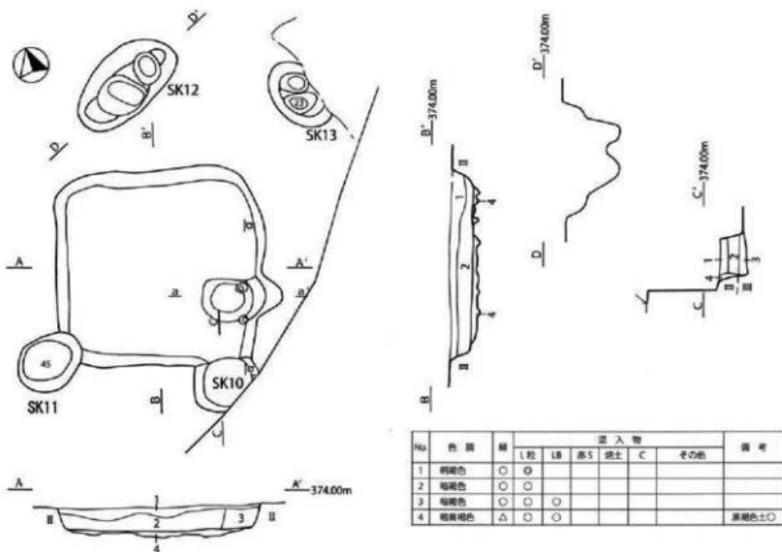
第102圖 S15個體別分布圖②



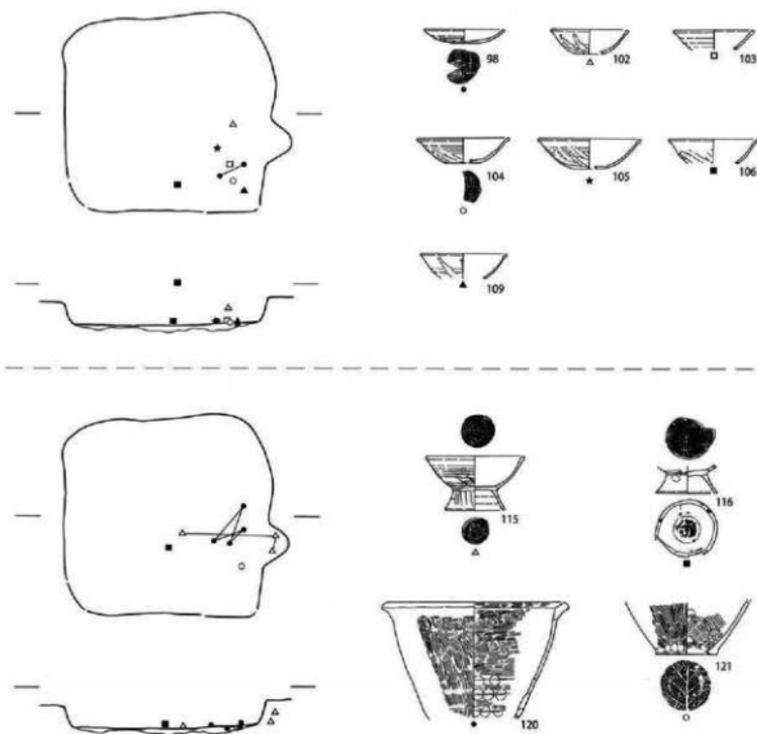
No.	色調	棟	遺入物				備考	
			L程	LB	赤S	期上		C
1	暗褐色	○				△		
2	暗褐色	○				○		
3	暗褐色	○				○		
4	暗褐色	○				○		
5	基褐色	○					◎	
6	暗褐色	○						
7	基褐色	△						
8	明褐色	○		◎		○	△	袖
9	暗褐色	○				○		明褐色土○
10	暗褐色	△				△	○	
11	明褐色	○						



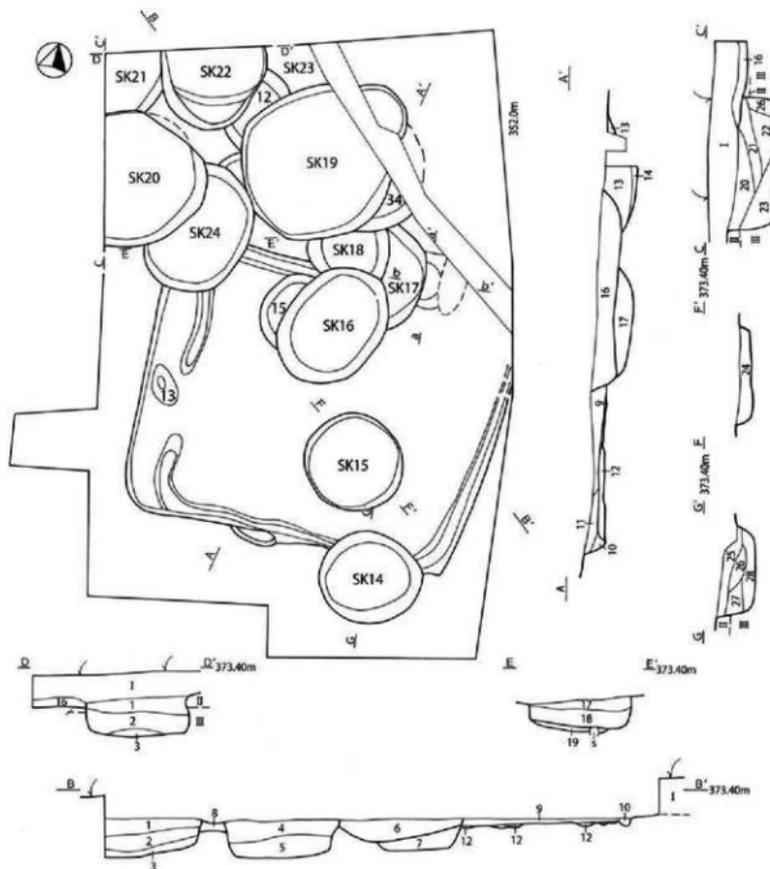
第103図 S15カマド実測図



第104図 S16-SK10~13実測図、同カマド実測図



第105圖 S16個体別分布圖

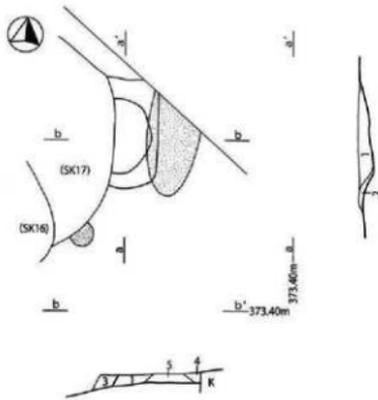


No.	色調	柄	混入物					備考
			L物	LR	赤S	焼土	C	
1	暗黄褐色	○ △						SK22
2	暗褐色	○ □ △						SK22
3	暗褐色	○ □						SK22
4	暗褐色	○ □						SK18
5	暗褐色	○ □ □						SK18
6	暗褐色	○ △						SK17
7	暗褐色	○ △						SK16
8	暗黄褐色	○ △						SK23
9	暗褐色	○ □ ○						S7
10	暗褐色	○ ○ ○						S7
11	混褐色	○ △						S7
12	暗褐色	○					※層9○	S7 仏床
13	暗褐色	○ □ □						SK19
14	暗褐色	○ ○ ○						SK19

No.	色調	柄	混入物					備考
			L物	LR	赤S	焼土	C	
15	暗黄褐色	○ ○ ○						SK21
16	暗褐色	○ ○ ○						SK21
17	暗褐色	○ ○ ○						SK24
18	暗黄褐色	○ ○ ○						SK24
19	暗褐色	○ ○ △						SK20
20	暗褐色	○ □ □						SK20
21	暗褐色	○ ○ △						SK20
22	暗褐色	○ ○ △						SK20
23	暗褐色	△ ○ ○						SK15
24	暗褐色	○ ○ □						SK14
25	暗褐色	○ ○ ○						SK14
26	暗褐色	○ □ □						SK14
27	暗褐色	○ ○ □						SK14

0 1m 2m

第106図 S17、SK14~24実測図

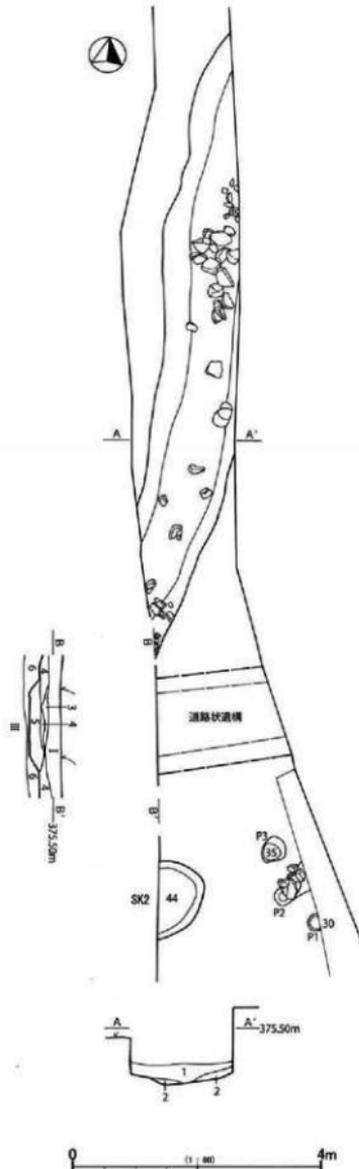


No.	色調	跡	遺入物					備考	
			L粒	LB	赤S	焼土	C		その他
1	暗褐色	○	□				○	□	SK17
2	暗褐色	○							
3	暗褐色	○	□						
4	暗褐色	○	□				□		
5	暗褐色	○	○	○					石種

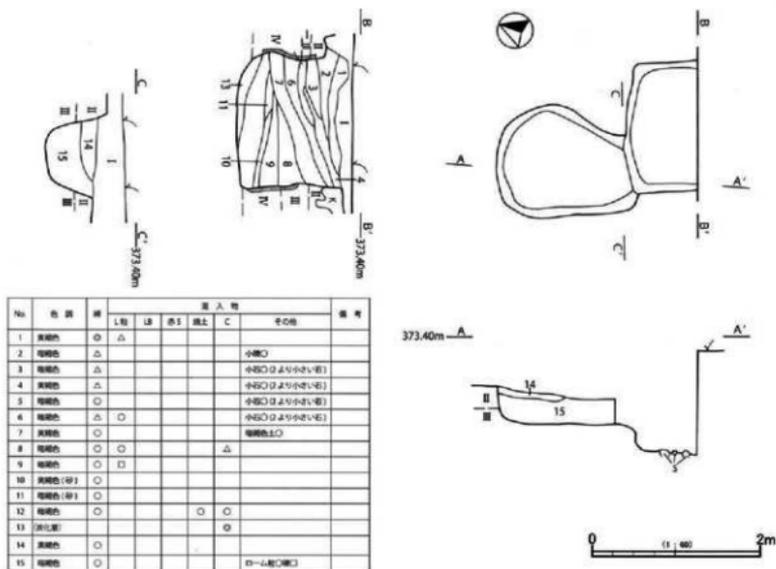


第107図 SK17カマド実測図

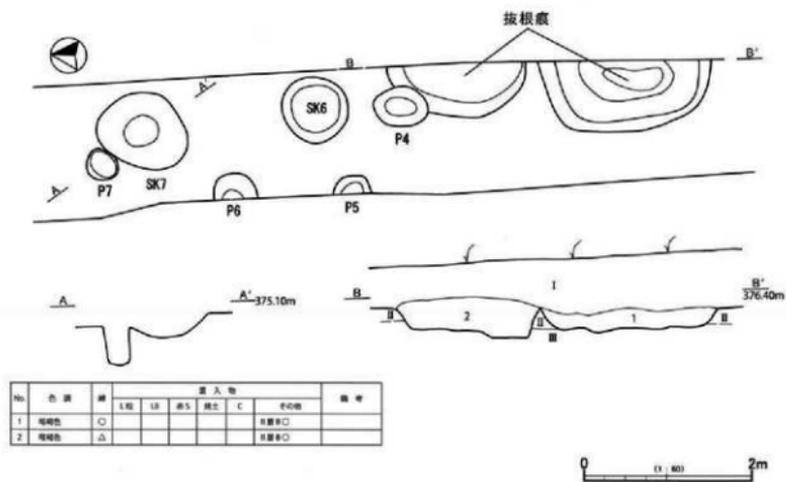
No.	色調	跡	遺入物					備考	
			L粒	LB	赤S	焼土	C		その他
1	暗褐色	△	△		□		焼土	C	その他
2	暗褐色	○	○	○					SD1
3	暗褐色	◎	◎	◎					焼土 ◎—ムラ
4	暗褐色	○	△						焼土
5	暗褐色	◎	◎						焼土
6	暗褐色	△	□	□					



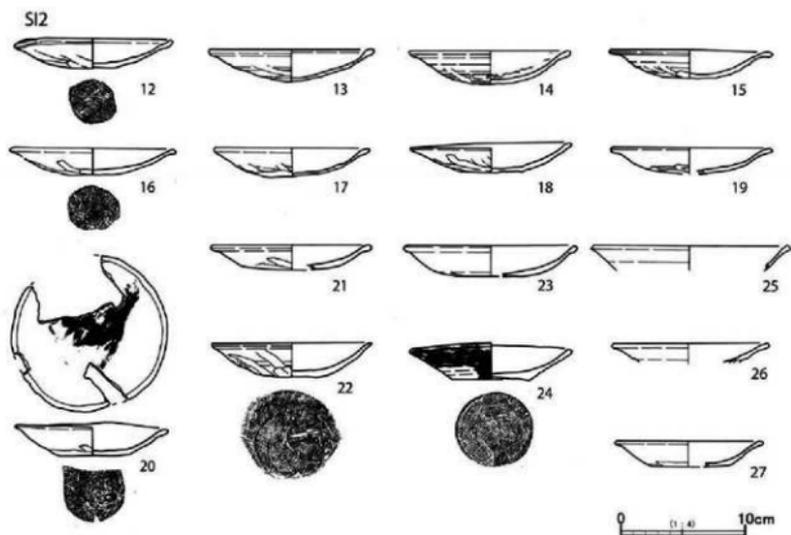
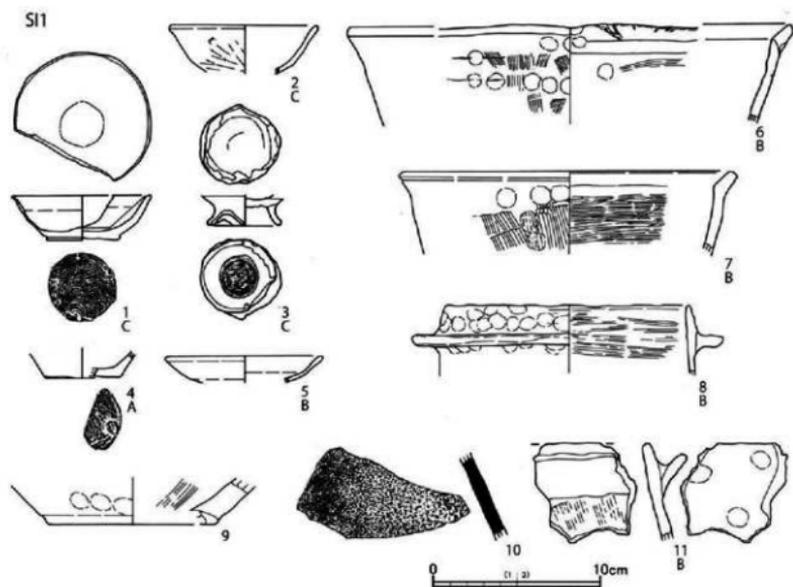
第108図 SD1、SK2、P1～P3実測図



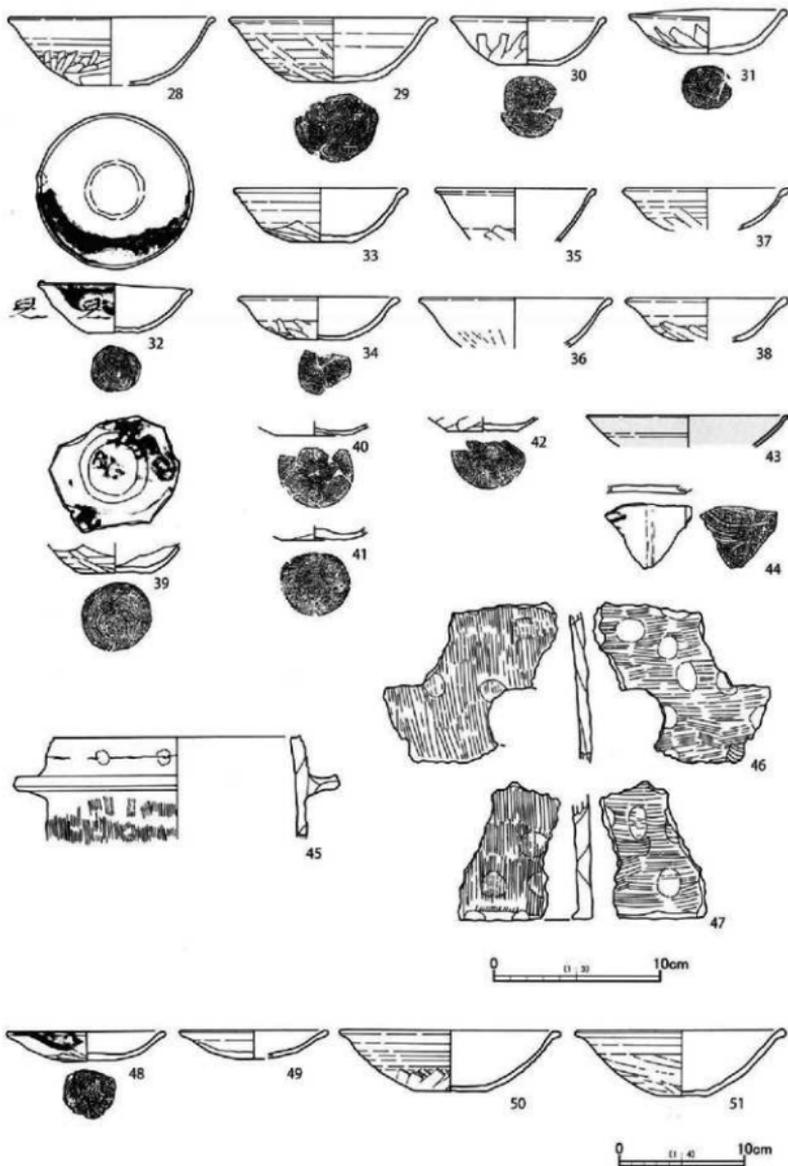
第109図 地下式坑実測図



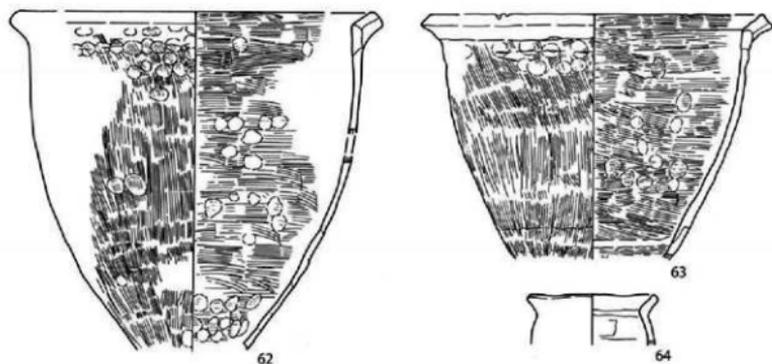
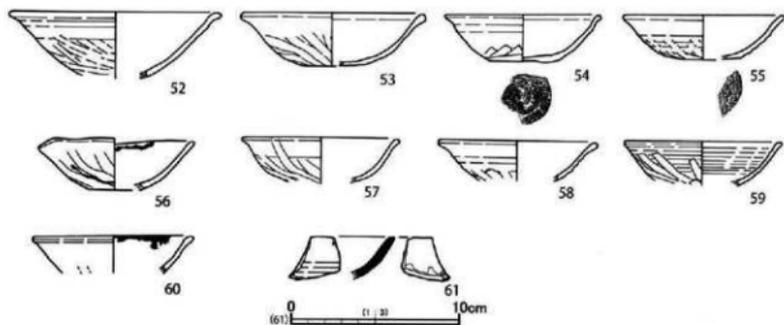
第110図 抜根痕、SK6-7、P4~7実測図



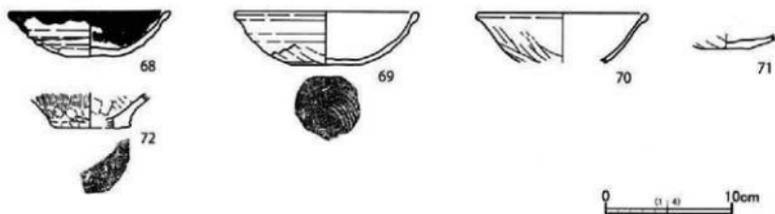
第110圖 土器(1) S11-2①



第111圖 土器(2)SI2②・3①

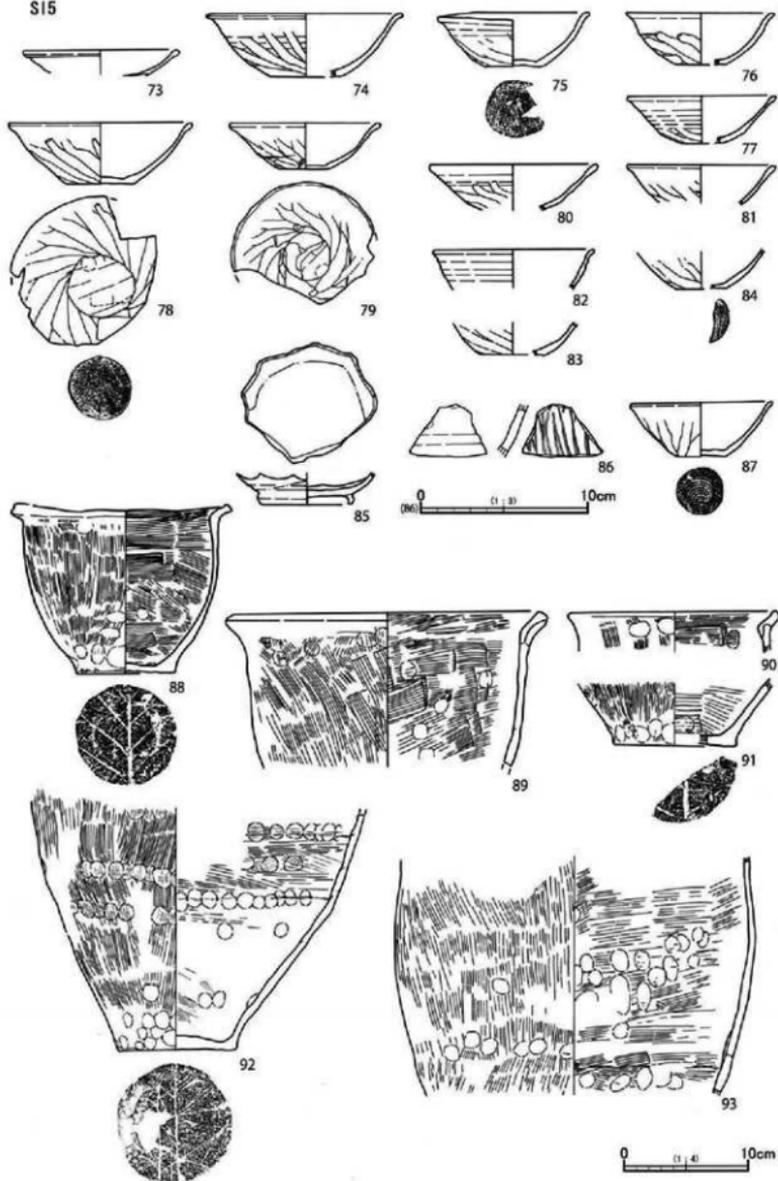


SI4

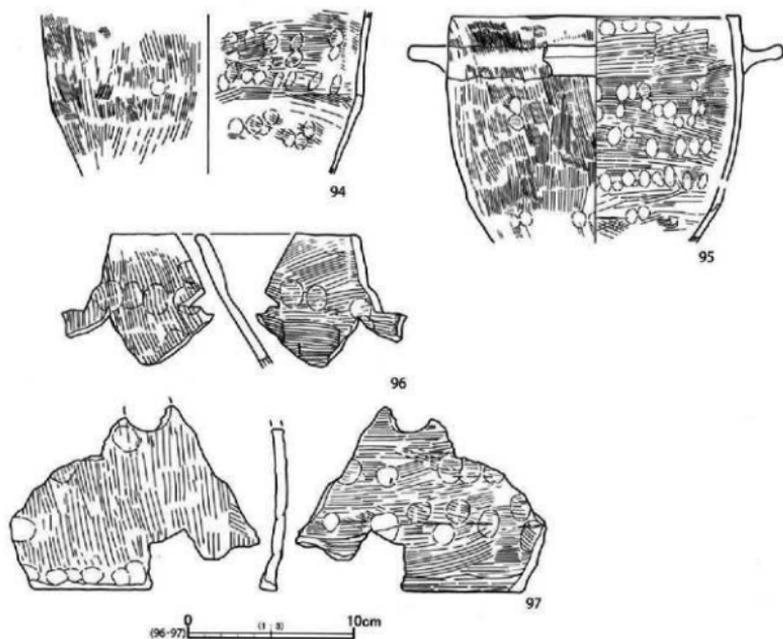


第112圖 土器(3) SI3③・4

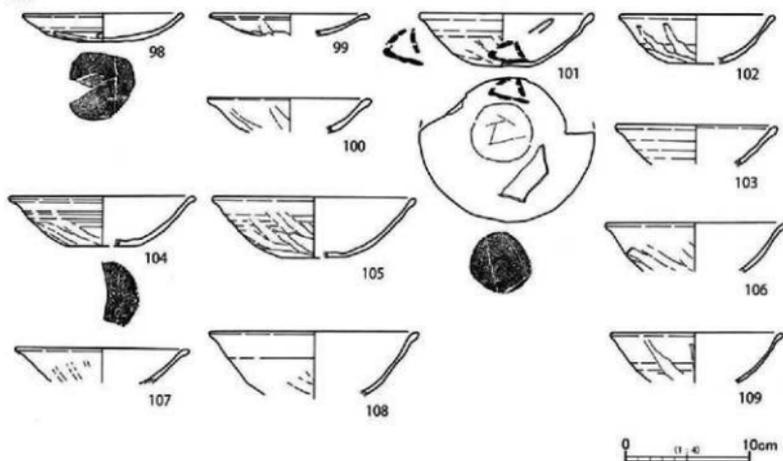
S15



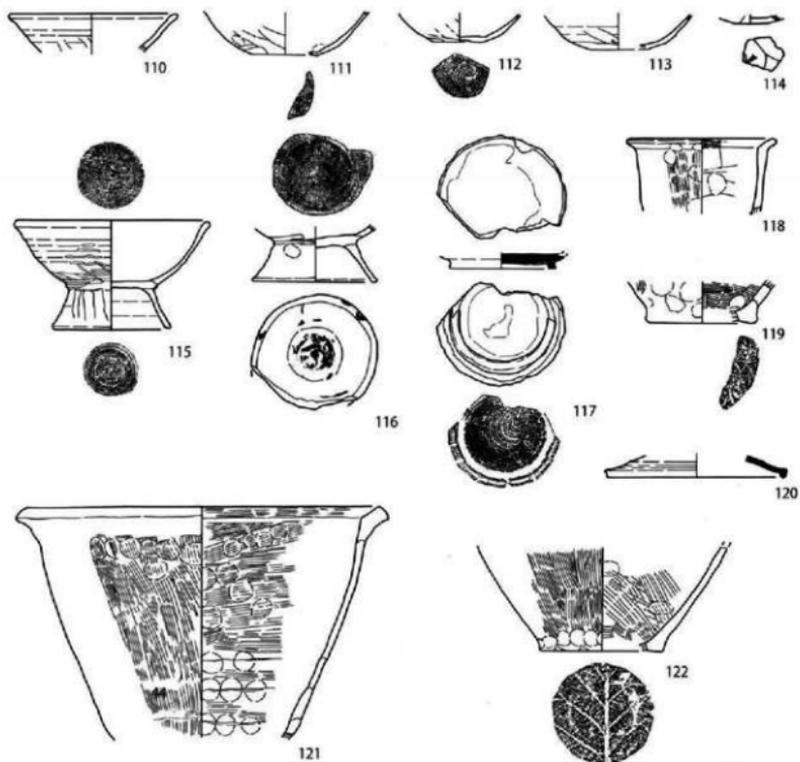
第113圖 土器(4)S15①



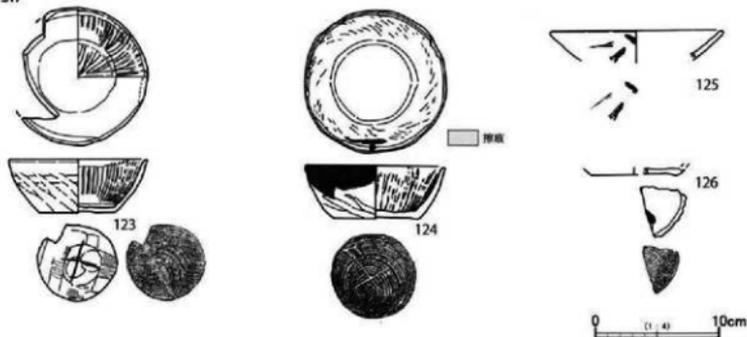
S16



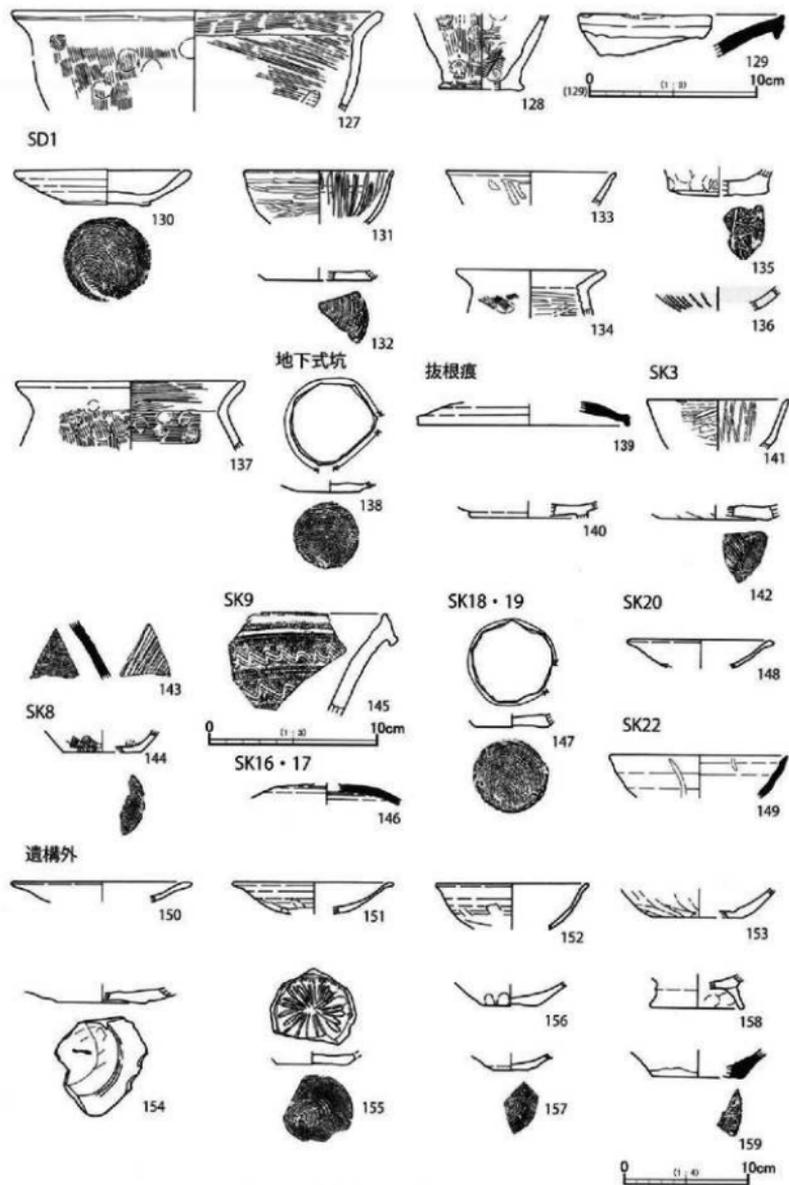
第114圖 土器(5) S15㉔-6㉕



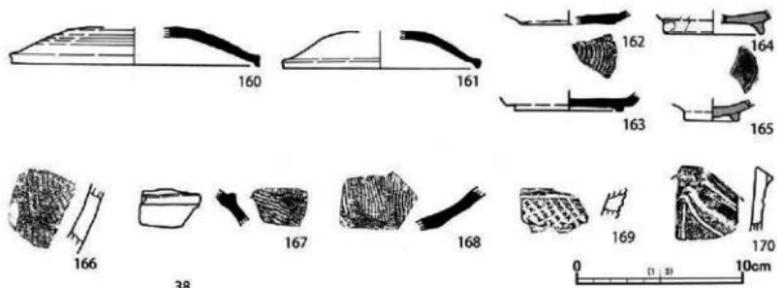
S17



第115圖 土器(6)S16②・7①

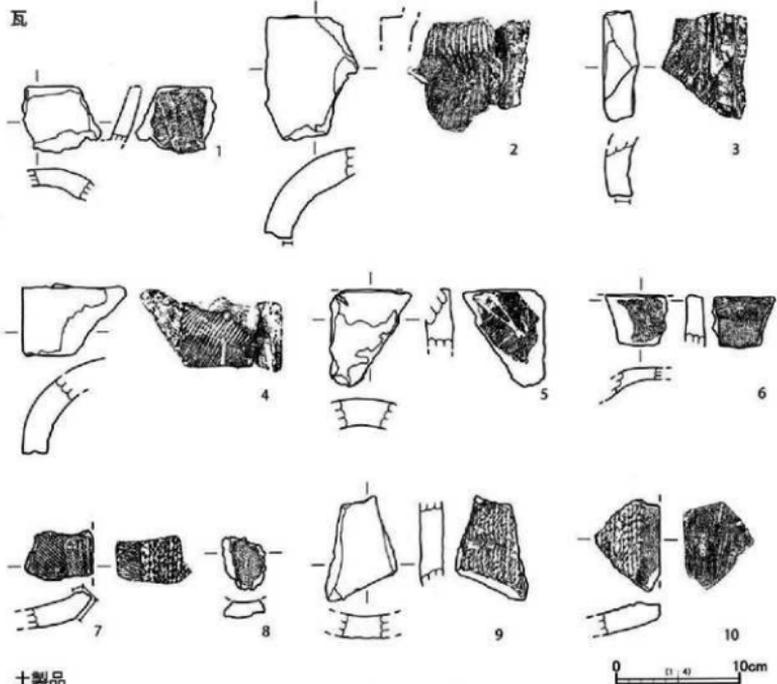


第116図 土器(7)SI7②、SD1、SK、遺構外①

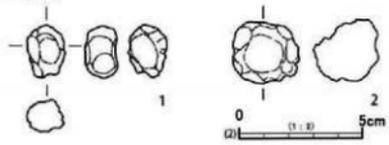


38

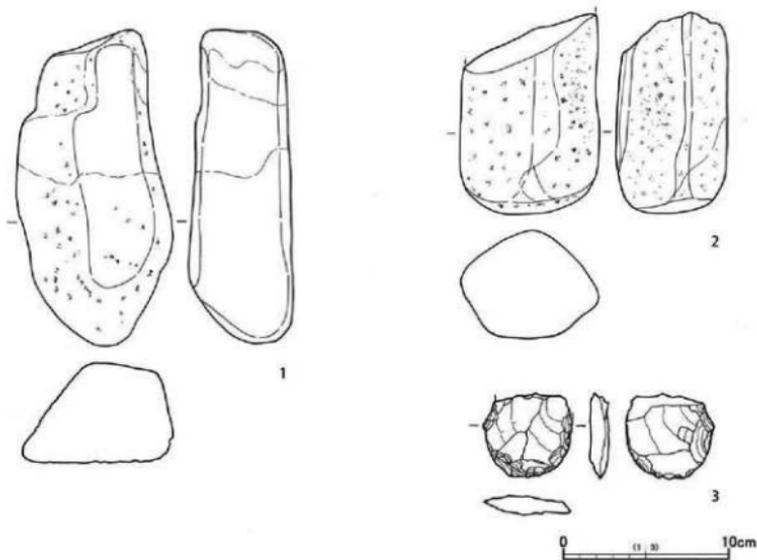
瓦



土製品



第117図 土器(8)遺構外②、瓦、土製品



第118圖 石製品

PL43  
北中原遺跡(第4次)



調査着手前

南から



調査区全景

南から



調査区全景

北から



SI1

北から



SI1 カマド

東から



SI1 掘り型

北から



SI2

西から



SI2 掘り型

西から



SI3 遺物出土状況

北から



SI3

北から



S13 カマド 南から



S13 カマド 西から



S14 西から



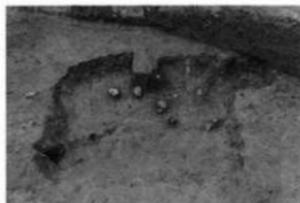
S14 掘り型 北から



S15 遺物出土状況 西から



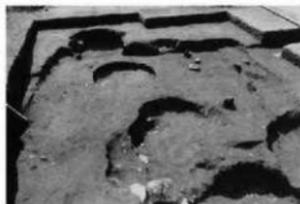
S15 西から



S16 遺物出土状況 西から



S16 北から



S17 北から



S17 遺物出土状況 北から



SD1

北から



地下式坑

北から

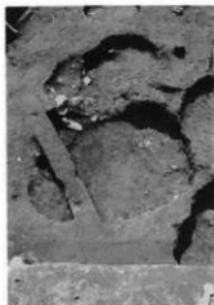


SK16~19



SK19~24

東から



SK16~19

北から



C-1・2グリッド

北から



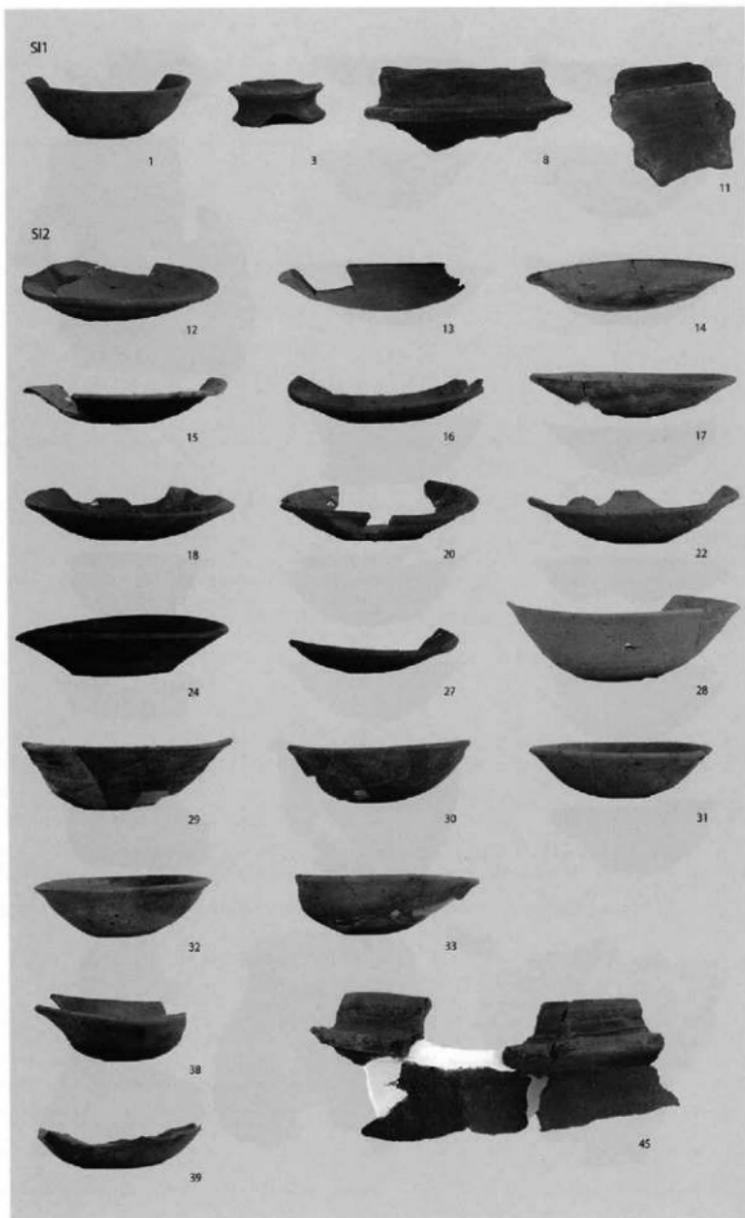
SD2

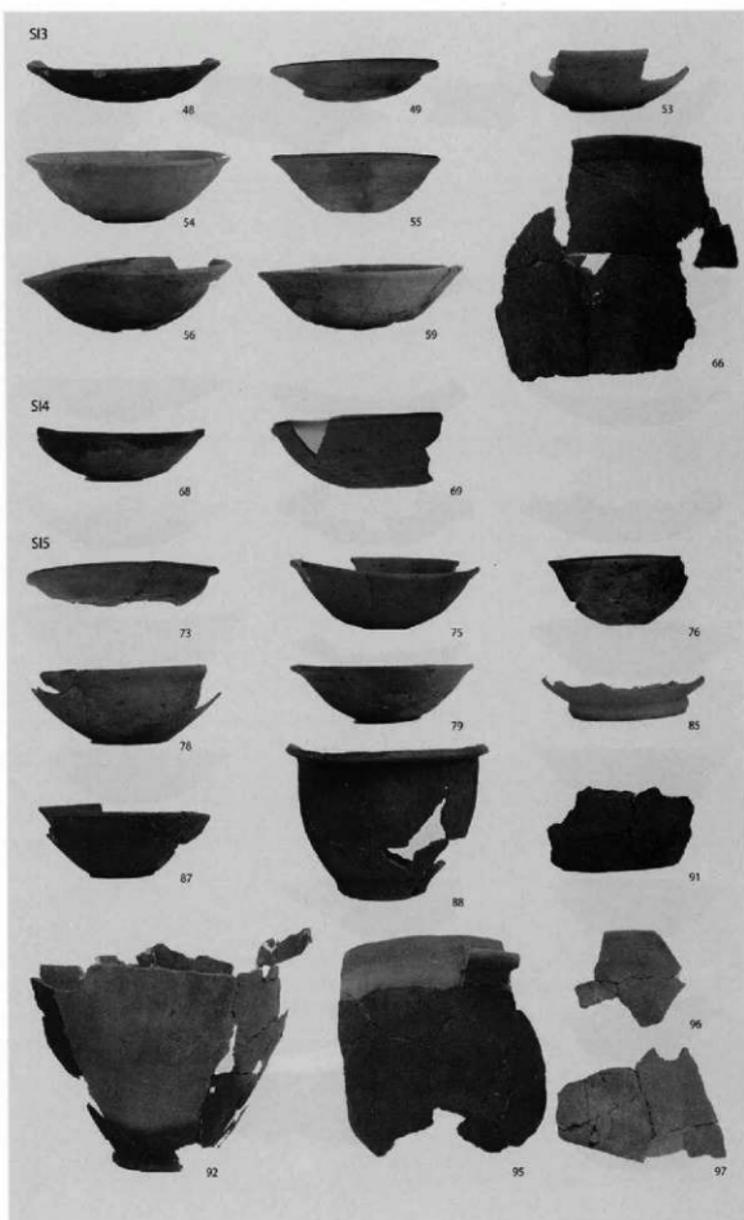
北から

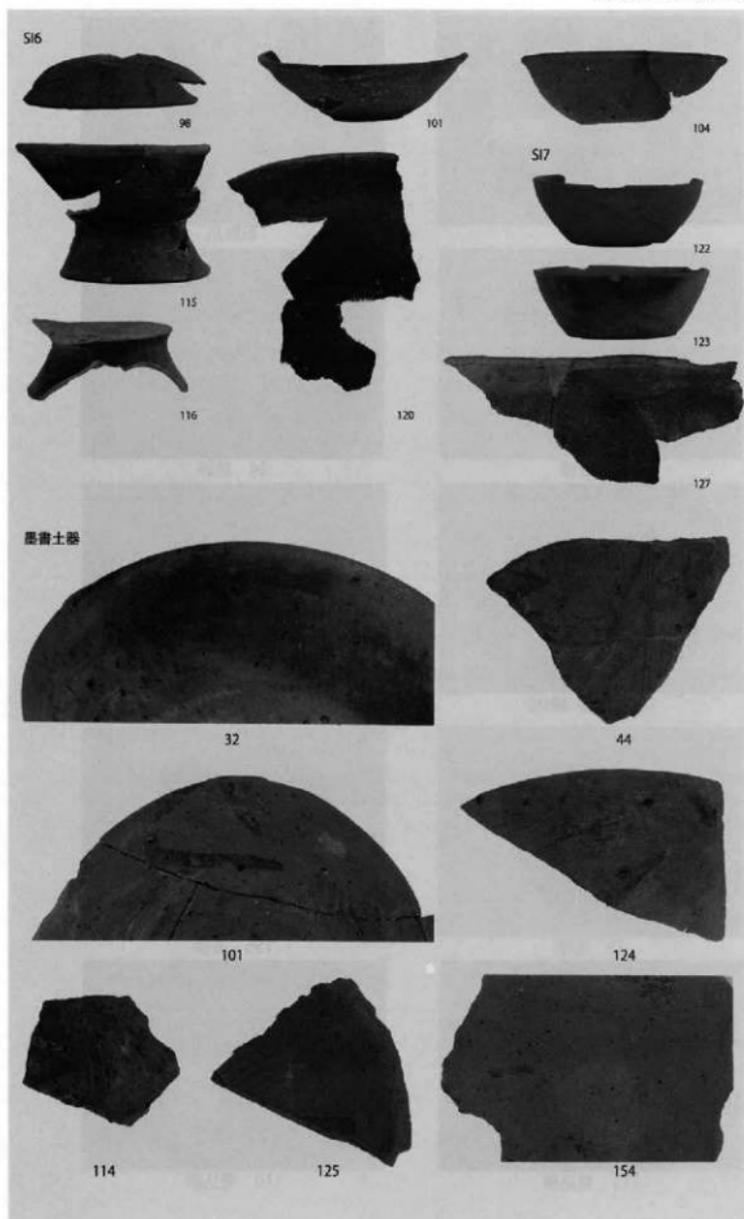


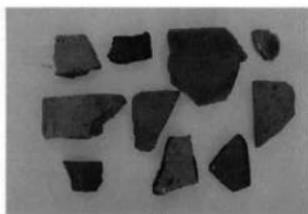
D-2・3グリッド

北から





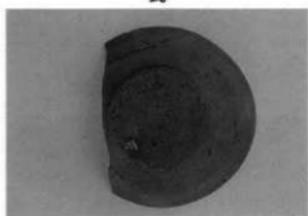




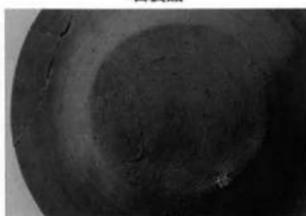
瓦



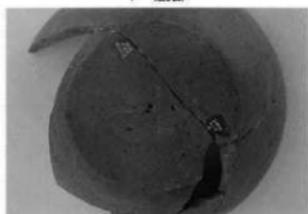
石製品



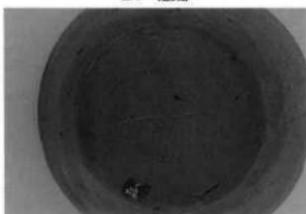
1 底部



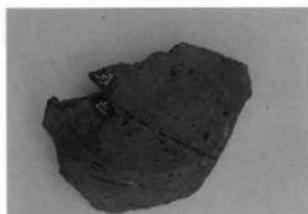
24 底部



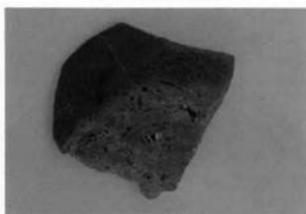
122 底部(線刻)



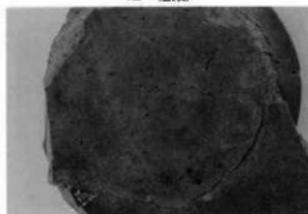
123 底部(線刻)



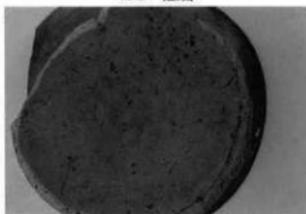
42 底部



156 底部



115 見込部



116 見込部

# 附編 1 笛吹市一宮畑総末木地区金属分析調査

JFE テクノリサーチ株式会社

分析・評価事業部 埋蔵文化財調査研究室

## 1. はじめに

山梨県笛吹市教育委員会から笛吹市一宮畑総末木地区に所在する石動遺跡、北中原4次遺跡から出土した鉄関連遺物について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析を含む自然科学的観点での調査を依頼された。調査の観点として、出土鉄滓の化学成分分析、外観観察、ミクロ組織観察、X線回折、耐火度に基づき、資料の製造工程上の位置づけおよび始発原料などを中心に調査した。その結果について報告する。

## 2. 調査項目および試験・観察方法

### (1) 調査項目

調査資料の記号、出土遺構・注記および調査項目を表1に示す。

### (2) 調査方法

#### (i) 重量計測、外観観察および金属探知調査

資料重量の計量は電子天秤を使用して行い、少数点2位で四捨五入した。各種試験用試料を採取する前に、資料の外観をmm単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。資料の出上位置や資料の種類等は提供された資料に準拠した。

着磁力調査については、直径30mmのリング状フェライト磁石を使用し、6mmを1単位として35cmの高さから吊した磁石が動きは始める位置を着磁度として数値で示した。遺物内の残存金属の有無は金属探知機(MC: metal checker)を用いて調査した。金属検知にあたっては参照標準として直径と高さを等しくした金属鉄円柱(1.5mmφ x 1.5mmH、2.0mmφ x 2.0mmH、3.8mmφ x 3.8mmH、5mmφ x 5mmH、10mmφ x 10mmH、16mmφ x 16mmH、20mmφ x 20mmH、30mmφ x 30mmH)を使用し、これとの対比で金属鉄の大きさを判断した。

#### (ii) 化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するJIS分析法に準じて行っている。

- ・全鉄(TFe)：三塩化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法。
- ・金属鉄(MFe)：炭素メタノール分解-EDTA滴定法。
- ・酸化第一鉄(FeO)：ニクロム酸カリウム滴定法。
- ・酸化第二鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)：計算。・化合物(C.W)：カールフィッシャー法。
- ・炭素(C)、イオウ(S)：燃焼-赤外線吸収法。
- ・ライム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化マンガン(MnO)、酸化ナトリウム(Na<sub>2</sub>O)、珪素(Si)、マンガン(Mn)、リン(P)、銅(Cu)、ニッケル(Ni)、コバルト(Co)、アルミニウム(Al)、ヴァナジウム(V)、チタン(Ti)：ICP発光分光分析法。
- ・シリカ(SiO<sub>2</sub>)、アルミナ(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)、酸化リン(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)、酸化カリウム(K<sub>2</sub>O)：ガラスビード蛍光X線分析法。但しCaO、MgO、MnOは含有量に応じてICP分析法またはガラスビード蛍光X線分析法を選択。
- ・酸化ナトリウム(Na<sub>2</sub>O)：原子吸光法。なお、鉄滓中成分は、18成分(全鉄TFe、金属鉄MFe、酸化第一鉄FeO、酸化第二鉄Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、シリカSiO<sub>2</sub>、アルミナ

Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、ライムCaO、マグネシアMgO、酸化ナトリウムNa<sub>2</sub>O、酸化カリウムK<sub>2</sub>O、二酸化チタンTiO<sub>2</sub>、酸化マンガマンMnO、酸化リンP<sub>2</sub>O<sub>5</sub>、コバルトCo、化合物C.W.、炭素C、ヴァナジウムV、銅Cu)を化学分析している。分析は各元素について分析し、酸化物に換算して表示している。

羽口・胎上成分は、13成分(全鉄TFe、酸化鉄FeO、シリカSiO<sub>2</sub>、アルミナAl<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、ライムCaO、マグネシアMgO、化合物C.W.、灼熱減量Ig.Loss、二酸化チタンTiO<sub>2</sub>、酸化マンガマンMnO、酸化ナトリウムNa<sub>2</sub>O、酸化カリウムK<sub>2</sub>O、炭素C)を化学分析している。なお、粘土については産地検討のためルビジュウムRbとストロンチウムSrについても分析した。

鉄製品中成分の化学分析は、13成分(炭素C、シリコンSi、マンガマンMn、リンP、イオウS、銅Cu、ニッケルNi、コバルトCo、アルミニウムAl、ヴァナジウムV、チタンTi、カルシウムCa、マグネシウムMg)を化学分析している。

### (Ⅲ)顕微鏡組織観察

資料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨(鏡面仕上げ)する。炉壁・羽口・粘土などの鉱物性資料については顕微鏡で観察しながら代表的な鉱物組織などを観察し、その特徴から材質、用途、熱履歴などを判断する。浮関連資料も炉壁・羽口などと同様の観察を行うが特徴的鉱物組織から成分的特徴に結びつけ製・精錬・鍛造工程の判別、使用原料なども検討する。金属鉄はナイタール(5%硝酸アルコール液)で腐食後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、顕微鏡組織および介在物(不純物、非金属鉱物)の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。原則として100倍および400倍で撮影を行う。必要に応じて実体顕微鏡(5倍~20倍)による観察もする。

### (Ⅳ)X線回折測定

試料を粉砕して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれに固有な反射(回折)された特性X線を検出(回折)できることを利用して、試料中の未知の化合物を同定することができる。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定される。

測定装置 理学電気株式会社製 ロータフレックス(RU-300型)

測定条件

①	使用X線	Cu-K $\alpha$ (波長=1.54178Å)
②	K $\beta$ 線の除去	グラファイト単結晶モノクロメーター
③	管電圧・管電流	55kV・250mA
④	スキャンング・スピード	4.0°/min
⑤	サンプリング・インターバル	0.020°
⑥	D.S.スリット	1°
⑦	R.S.スリット	0.15mm
⑧	S.S.スリット	1°
⑨	検出器	シンチレーション・カウンター

## (v) 耐火度試験

耐火物及び耐火物原料の耐火度試験は、JIS R 2204（耐火物及び耐火物原料の耐火度試験方法）及び JIS R 8101（耐火度試験用標準コーン）に準拠して測定する。

遺物資料を粉砕し、規定（量的に少量であるから寸法は第2種の小型：幅7mm、高さ27mm）のゼーゲルコーンを成型する。このゼーゲルコーンを傾斜80°で受台に装着し、毎分5℃で加熱する。コーンの先端が曲がり始め、受台に接触したときの温度を耐火度とする。

なお、耐火度を測定していない資料については146資料の耐火度（ゼーゲルコーン溶倒温度）の試験結果をについて整理した下記の式により推算した。耐火度は、 $y = 110.98 f(x) + 927.82$  の関係が得られた。ここで、 $f(x) = (25.8Al_2O_3 + 5.2SiO_2) / (146MgO + 448MnO + 12.5TFe + 10.4TiO_2 + 78.6CaO)$

## 3. 調査結果および考察

分析調査結果を図表にまとめて240頁～242頁に示す。表1に調査資料と調査項目をまとめた。表2～表4に資料の化学成分分析結果を、表5にX線回折結果、表6に耐火度測定結果をそれぞれ示す。

全資料の外観写真を237頁～238頁に、鉱物組織の英文、化学式は一括して5. 参考に示した。

各資料の調査結果をまとめ、最も確からしい推定結果を最後にまとめる。以下、資料の番号順に述べる。

資料番号 No.1 炉壁付着滓、着磁度：0、メタル反応：無し

外観：外観を外観写真1に示す。重量12.7g、長さ46.5mm、幅25.7mm、厚さ17.3mm。流動の先端が、2又に分かれたガラス質の流動滓である。滓そのものは黒色のガラス質で、表面に暗褐色の泥上が薄く付着している。下面は床の形状を映し直径25mm位に湾曲し、その表面には小さな気泡が見られる。割欠面は3ヶ所あり断面で見ると0.5mm以下の気泡が多く見られる。また断面には微細な乳白色の長石類と思われる粒子が多く巻き込まれている。着磁はなくメタル反応もない。調査試料は試料採取位置1に示すように中央付近から切断し、採取した。

顕微鏡組織：顕微鏡組織を滓組織写真1に示した。写真に見られるように大小の気泡が多く観察される発泡したガラス質である。非常によく融けたことは明らかである。白く輝く微細な金属鉄粒が無数に分散している。金属鉄はほぼ完全な球形になっていることから鉄の融点1500℃近くまで温度が上がっていたと推察される。

化学成分：化学成分分析結果を表2に示す。全鉄分は7.17%と鉄滓としては少ない。金属鉄は1.11%と少ないがTFeが7.17%に対する比率は大きい。FeOは5.49%、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は2.56%である。ガラス質滓であることを反映し、SiO<sub>2</sub>は60.8%と多く、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>も18.6%と多く含まれる。CaO、MgOも3.03%、2.71%で比較的多い。造滓成分（SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O）は88.76%である。TiO<sub>2</sub>は0.87%含まれている。TFeに対するTiO<sub>2</sub>の高さからは始発原料は砂鉄の可能性はあるが、表3の胎土類の成分でもTFeとTiO<sub>2</sub>が滓と同程度に含まれており、胎土成分そのものに起因する可能性もある。このため、始発原料を砂鉄と判断できない。

図1、2、3はTiO<sub>2</sub>とT.Feの関係、造滓成分とT.Feの関係、MnO/TiO<sub>2</sub>とTiO<sub>2</sub>/T.Feの関係を示し、鉄滓の成分的特徴から製造工程を検討する図である。本資料は図1、図2では炉壁付着滓のグループにある。図3では精錬鋸冶滓群のデータとは外れたMnO/TiO<sub>2</sub>が高い領域にあり、精錬鋸冶滓とは別なグループの滓と思われる。

以上の結果を総合すると本資料は1500℃位まで温度が上昇しが驟と反応してガラス質化した炉壁付着滓と推察される。資料の生成した製鉄・鋸冶工程は判断できない。

資料番号 No.2 炉壁付着滓、着磁度：2、メタル反応：無し

外観：外観を外観写真2に示す。重量40.8g、長さ58.7mm、幅44.8mm、厚さ33.5mm。激しく発泡した流動滓で基地は黒色のガラス質である。上面には流動の痕跡が見られる。下面には写真に見られるようなへら状の工具で突いたような痕もある。小さな木炭痕も3ヶ所ある。破断面で見ると小さな気泡が非常に多くカルメラ状である。このため大きさの割りに軽量である。上の写真の左側には着磁度2の磁着があるが右側にはない。メタル反応はない。着磁のある側を調査する。

顕微鏡組織：顕微鏡組織を滓組織写真2-1、2-2に示す。資料全面が発泡したガラス質である。写真2-1に見られるようにガラス質の中に部分的に珪石と思われる溶融しかけた耐火材が見られる。資料1と異なり金属鉄粒は観察されない。また、写真2-2のような鉱物粒が観察されるところがあるがほとんど反応しておらず相当高融点の鉱物と思われる。

化学成分：化学成分分析結果を表2に示す。全鉄は12.4%と鉄滓としては少ない。金属鉄は0.36%である。FeOは8.43%、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は7.85%である。ガラス質滓であることを反映し、SiO<sub>2</sub>は56.0%と多く、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>も17.2%と多く含まれる。CaO、MgOも3.20%、1.91%で比較的多い。造滓成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O)は80.98%である。TiO<sub>2</sub>は0.77%含まれている。T.Feに対するTiO<sub>2</sub>は高いが、資料1と同様に胎土類の成分による可能性があり、T.Feに対するTiO<sub>2</sub>の高さから始発原料を砂鉄と判断する事ができない。

図1、2、3はTiO<sub>2</sub>とT.Feの関係、造滓成分とT.Feの関係、MnO/TiO<sub>2</sub>とTiO<sub>2</sub>/T.Feの関係を示し、鉄滓の成分的特徴から製造工程上の分類を検討する図である。なお、図1、図2では炉壁付着滓のグループにある。図3では精錬鋸冶滓のデータに比べMnO/TiO<sub>2</sub>が高い領域に外れており、精錬鋸冶滓とは判断できない。

以上の結果を総合すると本資料は炉壁と反応して激しく発泡・ガラス質化した炉壁付着滓と推察される。資料の生成した製鉄・鋸冶工程は判断できない。

資料番号 No.3 炉壁、着磁度：0、メタル反応：無し

外観：外観を外観写真3に示す。重量89.7g、長さ70.8mm、幅56.8mm、厚さ38.2mm。厚さが約35mmの炉壁片で、厚み方向の中央付近まで熱影響を強く受けている。胎土には筋痕が多く見られる。内面側はやや灰白色を帯び小さく発泡している。(下側の写真)全体にやや焼き締まっており、長石類と思われる白濁した0.5mm以下の粒子が散見される。試料採取位置3に示す被熱を受けてない側から試料を採取する。

顕微鏡組織：顕微鏡組織を浮組織写真3-1、3-2に示す。溶融しかけた炉壁胎上である。基地は気孔の多い粘上質で長石類などの粒子が混合されている。熱影響の少ない部分を観察したが3-1の写真のように溶融を開始した部分も存在している。顕微鏡観察では珪石よりも長石類が多く混合されているように思われる。

X線回折：結果を表5とX線回折チャート1(資料No.3)に示す。石英(Quartz:  $\text{SiO}_2$ )が強い回折線を示し、ハーシナイト(Hercynite:  $\text{FeO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$ )の弱い回折線が認められる。そのほかには、アノーサイト(Anorthite:  $(\text{Ca},\text{Na})(\text{Si},\text{Al})_2\text{O}_7$ )、ムライト(Mullite:  $3\text{Al}_2\text{O}_3\cdot 2\text{SiO}_2$ )、金属鉄、コージェライト(Cordierite:  $2\text{MgO}\cdot 2\text{Al}_2\text{O}_3\cdot 5\text{SiO}_2$ )の微弱な回折線が見られる。いずれも一般的な胎上の鉱物相である。

化学成分：化学成分分析結果を表3に示す。 $\text{SiO}_2$ は62.4%で炉壁胎上としてはやや低い。耐火度に有利に働く $\text{Al}_2\text{O}_3$ は19.0%とやや多く含まれる。耐火度に不利な軟化性成分である $\text{CaO}$ 、 $\text{MgO}$ も1.55%、1.32%で $\text{CaO}+\text{MgO}$ は2.87%でやや多い。また、融点を下げるアルカリ金属である $\text{K}_2\text{O}$ 、 $\text{Na}_2\text{O}$ は1.94%、1.02%含まれ、 $\text{K}_2\text{O}+\text{Na}_2\text{O}$ は2.96%で通常の耐火材の範囲にある。耐火度に不利な全鉄は7.64と相当多く含まれている。金属鉄がふくまれているのは鉄滓が少量反応しているためとおもわれる。造洋成分( $\text{SiO}_2+\text{Al}_2\text{O}_3+\text{CaO}+\text{MgO}-\text{K}_2\text{O}-\text{Na}_2\text{O}$ )は87.23%である。

耐火度：耐火度は表6に示すように約1110℃である。 $\text{Al}_2\text{O}_3$ が高い割には耐火度が十分高くないのは全鉄分やアルカリ土類成分などの軟化性成分が多いためであろう。推算耐火度は1108℃で実測値とほぼ一致している。

以上の結果を総合すると本資料は $\text{SiO}_2$ を62.4%、 $\text{Al}_2\text{O}_3$ を19.0%含み、鉄分とアルカリ土類成分が多い特徴を持つ耐火度が1110℃の炉壁胎上である。

#### 資料番号 No. 4 鑄型、着磁度：0、メタル反応：無し

外観：外観を外観写真4に示す。内面ににぶい銀色の微粒子が1.5～2mmの厚さに塗布されている厚さ約15mmの鑄型片である。胎土は茶褐色の粘土で跡痕が多く見られる。内面の塗布材表面には掃目も見られる。塗布材を剥して鑄型材と別々に調査する。耐火度は茶褐色の鑄型材についてのみ行う。

顕微鏡組織：顕微鏡組織を組織写真4-1、4-2に示した。4-1は鑄型の外側の褐色の胎上部分で、4-2は銀色の塗布材部分である。鑄型の茶褐色をしている胎上部分は写真に見られるように非常によく溶融しており半透明なガラス質になっている。この中に未溶融の石英や長石の粒子が散見される。ほとんど気泡は観察されない。塗布材の部分である写真4-2ではわずかに溶融しかけている部分もあるが基本的には固体状態を維持しており大小の粒子が弱く固結している状態である。溶融状態の観点からは塗布材の方が明らかに融点は高く、融けにくいと判断される。

X線回折：結果を表5とX線回折チャート2、3(資料No.4-1、4-2)に示す。胎上部分の試料4-1と塗布材と見られる試料4-2ではX線回折結果はほぼ同一であり、鉱物相はほぼ同一と判断される。石英(Quartz:  $\text{SiO}_2$ )とアノーサイト(Anorthite:  $(\text{Ca},\text{Na})(\text{Si},\text{Al})_2\text{O}_7$ )が強い回折線を示し、ヘマタイト(Hematite:  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )、金属鉄、コージェライト(Cordierite:  $2\text{MgO}\cdot 2\text{Al}_2\text{O}_3\cdot 5\text{SiO}_2$ )の微弱な回折線が見られる。

化学成分：化学成分分析結果を表2に示す。試料4-1と4-2で基本的な差は見られない。SiO<sub>2</sub>は試料4-1で62.7%、試料4-2では60.1%で通常の炉壁胎土に比べ低い。耐火度に有利に働くAl<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は試料4-1で16.0%、試料4-2では17.4%でやや試料4-2の方がやや多く含まれる。耐火度に不利な軟化性成分であるCaO、MgOも試料4-1で2.89%と1.97%で試料4-2では3.02%と2.18%で両者に差があるとはいえない。CaO+MgOは4.86%と5.20%でいずれも高く、軟化性の点では不利な成分である。融点を下げるアルカリ金属であるK<sub>2</sub>O、Na<sub>2</sub>Oは試料4-1で1.26%と1.77%で試料4-2では1.41%と1.73%で差はない。K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>Oは3.03%と3.14で通常の耐火材の範囲にある。耐火度に不利な全鉄は7.39と7.97と多く含まれている。造滓成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O)は86.59%と85.84%である。化学成分的には鑄型材と塗布材の間に大きな差はない。化学分析用に粉末にした試料も4-1は茶褐色で、4-2は白を帯びた薄褐色で、明瞭な差がある。念のため、蛍光X線分析にて成分を分析チェックしたが大きな差はなかった。

耐火度：試料4-1の耐火度は表6に示すように約1070℃である。耐火材としてはやや低いと思われる。推算耐火度は1047℃で実測値と30℃以内で一致している。

外観観察と顕微鏡観察では鑄型の母材と塗布材とでは色、溶融性に差が認められたが化学成分的には顕著な差は認められない。この理由はあきらかでない。

以上の結果を総合すると本資料は溶融性に勝る塗布材を塗布した鑄型で鑄型の母材の耐火度は1070℃で耐火材料としてはやや耐火度が低い。塗布材と耐火材の成分的な大きな差は認められない。

資料番号 No. 5 炉壁(洋付着)、着磁度：3、メタル反応：5mm大

外観：外観を写真5に示す。重量314.9g、長さ136.0mm、幅74.2mm、厚さ49.1mm。黒色の滓が厚さ10mm～15mmに付着して発泡している炉壁片である。滓部分には所々に鉄錆の暗い茶褐色(いわゆる黒錆)部が観察される。その1ヶ所に5mm大のメタル反応がある(試料採取位置5を参照)。炉壁胎土は灰色で、筋痕も認められる。メタルは小さいため顕微鏡観察のみ行う。胎土部分、滓部分それぞれ調査し、胎土については耐火度も測定する。試料は採取位置5に示す位置から採取した。

顕微鏡組織：顕微鏡組織を組織写真5-1、5-2に示す。写真5-1は炉壁胎土部分である。多孔質で粘土に長石類が混合している一般的な炉壁に良く見られる胎土組織である。一部に溶融しかけてところも見られるがその割合はあまり多くない。写真5-2は滓の部分で写真に見られるように発泡したガラス質になっている。この中に半透明な珪石と思われる溶融しかけの粒子が観察される。また、写真のような海绵鉄が錆化鉄になってい部分も見られる。

5mm大の金属鉄の顕微鏡組織を金属鉄組織写真1に示す。パーライト基(炭素が0.02%以下のフェライト(α鉄)とセメントタイト(Cementite: Fe<sub>3</sub>C)の層状組織)と針状の初析セメントタイトからなる過共析鋼(C:0.8%～2.1%)の組織である。組織からはC濃度は1%よりもやや高いと推察される。

化学成分：滓の部分と炉壁胎土部分について成分分析を行った。滓の化学成分分析結果を表2に示す。全鉄は6.88%と鉄滓としては少ない。金属鉄は0.42%である。FeOは2.07%、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は6.94%である。ガラス質滓であることを反映し、SiO<sub>2</sub>は59.3%と多く、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>も17.4%と多く含まれる。CaO、MgOも3.86%、2.21%

で比較的多い。造滓成分 ( $\text{SiO}_2+\text{Al}_2\text{O}_3+\text{CaO}+\text{MgO}+\text{K}_2\text{O}+\text{Na}_2\text{O}$ ) は 87.87% である。 $\text{TiO}_2/\text{T.Fe}$  は 0.91% 含まれている。 $\text{TiO}_2/\text{T.Fe}$  は高いが、資料 1、2 と同様な理由で始発原料が砂鉄か否かは判断できない。

鉄滓の成分的特徴から製造工程上の分類を検討する図である図 1、2、3 で見ると、図 1、図 2 では炉喉付着滓のグループにある。図 3 では精錬銀治滓のデータに比べ  $\text{MnO}/\text{TiO}_2$  が高い領域に外れており、精錬銀治滓とは判断できない。

炉壁胎土部分の分析結果を表 3 に示す。 $\text{SiO}_2$  は 61.3% で通常の炉壁胎土に比べ低く、耐火度に有利に働く  $\text{Al}_2\text{O}_3$  は 18.7% とやや多く含まれる。耐火度に不利な軟化性成分である  $\text{CaO}$ 、 $\text{MgO}$  も 1.94%、2.30% で  $\text{CaO}+\text{MgO}$  は 4.21% と多い。また、融点を下げるアルカリ金属である  $\text{K}_2\text{O}$ 、 $\text{Na}_2\text{O}$  は 1.13%、1.16% で  $\text{K}_2\text{O}+\text{Na}_2\text{O}$  は 2.29% で通常の耐火材の範囲にある。耐火度に不利な全鉄は 8.38 と相当多く含まれている。金属鉄がふくまれているのは鉄滓が少量反応しているためとおもわれる。造滓成分 ( $\text{SiO}_2+\text{Al}_2\text{O}_3+\text{CaO}+\text{MgO}+\text{K}_2\text{O}+\text{Na}_2\text{O}$ ) は 87.23% である。耐火度：耐火度は表 6 に示すように約 1100℃ である。耐火材としてはやや低いと思われる。推算耐火度は 1056℃ で測定値と 50℃ くらい範囲で一致している。

以上の結果を総合すると本資料は  $\text{SiO}_2$  を 61.3%、 $\text{Al}_2\text{O}_3$  を 18.7% 含み、鉄分とアルカリ土類成分が多い特徴を持つ耐火度が 1100℃ の炉壁胎土である。

#### 資料番号 No. 6 鑄型、着磁度：2、メタル反応：無

外観：外観を外観写真 6 に示す。重量 147.9g、長さ 113.4mm、幅 83.6mm、厚さ 34.7mm。厚さ約 20mm のゆるやかに湾曲した鑄型片に鉄滓が付着している資料である。内面の 3mm ~ 5mm は滓との反応層で発泡しており表面は鉄酸化物の暗褐色を呈している。内面の一部には 10 ~ 15mm 位にわたって滓と炉喉の反応物が付着している。外面の胎土には萌痕が多くみられ、茶褐色を呈している。滓と胎土についてそれぞれ検鏡・分析する。試料は試料採取位置 6 に示す位置から採取した。

顕微鏡組織：鑄型胎土部分の顕微鏡組織を組織写真 6-1 に示す。溶融がかなり進んでおりガラス化した基地の中に石英粒やおそらく鉄分を多く含むと思われる赤褐色の粒子が分散している。粘土や粒子の混合物が融けかけている状態である。滓部分の顕微鏡組織を組織写真 6-2、6-3 に示す。滓そのものは写真 6-2 に見られるように発泡したガラス質滓である。基地中には乳白色の薄いファイヤライトと思われる微細な組織が観察される。試料の端部には写真 6-3 の組織が観察される。乳白色のウスタイト ( $\text{Wustite: FeO}$ ) と思われる組織とこれよりもやや灰色がかった多角形が崩れたようなウルボスピネル ( $\text{Ulvospinel: FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ) とが観察される。高  $\text{TiO}_2$  含有鉱物であるウルボスピネルが観察されることは始発原料が砂鉄であったことを示唆する。

化学成分：滓の部分と鑄型胎土部分について成分分析を行った。滓の化学成分分析結果を表 2 に示す。全鉄は 9.97% と鉄滓としては少ない。金属鉄は 0.45% 含まれている。 $\text{FeO}$  は 3.22%、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$  は 10.0% である。ガラス質滓であることを反映し、 $\text{SiO}_2$  は 55.8% と多く、 $\text{Al}_2\text{O}_3$  も 19.2% と多く含まれる。 $\text{CaO}$ 、 $\text{MgO}$  も 3.36%、2.05% で比較的多い。造滓成分 ( $\text{SiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3+\text{CaO}+\text{MgO}+\text{K}_2\text{O}+\text{Na}_2\text{O}$ ) は 83.76% である。 $\text{TiO}_2$  は 0.92% 含まれている。 $\text{TiO}_2/\text{T.Fe}$  の比は約 0.1 で鉄に対する  $\text{TiO}_2$  は高いが、資料 1、2、5 と同様な理由により始発原料が砂鉄か否かは判断できない。

鉄滓の成分的特徴から製造工程上の分類を検討する図 1、2、3 で見ると、図 1、

図2では炉壁附着滓のグループにある。図3では精錬鍛冶滓のデータに比べMnO/TiO<sub>2</sub>が高い領域に外れており、精錬鍛冶滓とは判断できない。

炉壁胎土部分の分析結果を表3に示す。SiO<sub>2</sub>は61.0%で通常の炉壁胎土に比べ低く、耐火度に有利に働くAl<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は18.5%とやや多く含まれる。耐火度に不利な軟化性成分であるCaO、MgOは1.95%、2.24%でCaO+MgOは4.19%が多い。また、融点を下げるアルカリ金属であるK<sub>2</sub>O、Na<sub>2</sub>Oは1.11%、1.22%でK<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>Oは2.33%で通常の耐火材の範囲にある。耐火度に不利な全鉄は8.21と相当多く含まれている。金属鉄がふくまれているのは鉄滓が少量反応しているためとおもわれる。造滓成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+ MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O)は86.02%である。

耐火度：推算耐火度は1058℃で資料4の鋳型と同程度である。耐火材としてはやや低いと思われる。

以上の結果を総合すると本資料はSiO<sub>2</sub>を61.0%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>を18.5%含み、鉄分とアルカリ土類成分が多い特徴を持つ耐火度が1058℃と推算される鋳型である。附着滓中にTiO<sub>2</sub>含有鉱物相が観察されることから砂鉄を始発原料とする鉄を鋳込んだ可能性がある。

資料番号 No. 7 鋳型、着磁度：0、メタル反応：無し

外観：外観を外観写真7に示す。重量82.5g、長さ66.9mm、幅63.2mm、厚さ32.3mm。厚さ約35mmの鋳型片で、内面は平面で湾曲しているようには見えない。資料6に比べると胎土の粒子は粗く暗い。研痕も多く見られる。内面側15mm位は熱影響を受けており、内面側3～5mm位は小さく発泡している。内面は滓と反応して黒色を呈している部分もあるが、大部分は鉄錆の褐色で、なめられたように滑らかである。試料は資料採取位置7に示す位置から胎土を採取し調査した。

顕微鏡組織：顕微鏡組織を組織写真7に示す。溶融が進行しており溶融した滓の中に珪石やその他の粒子が混在している状態になっている。

化学成分：胎土部分の分析結果を表3に示す。SiO<sub>2</sub>は59.6%で通常の炉壁胎土に比べ低く、耐火度に有利に働くAl<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は19.1%とやや多く含まれる。耐火度に不利な軟化性成分であるCaO、MgOは2.13%、2.51%でCaO+MgOは4.64%と多い。また、融点を下げるアルカリ金属であるK<sub>2</sub>O、Na<sub>2</sub>Oは1.00%、0.93%でK<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>Oは1.93%で通常の耐火材の範囲にある。耐火度に不利な全鉄は8.42と相当多く含まれている。金属鉄がふくまれているのは鉄滓が少量反応しているためとおもわれる。造滓成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+ MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O)は85.27%である。

耐火度：耐火度は1070℃である。耐火材としてはやや低いと思われる。推算耐火度は1048℃で実測値と比較的良く一致している。

以上の結果を総合すると本資料はSiO<sub>2</sub>を約60%、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>を約19%含み、鉄分とアルカリ土類成分が多い特徴を持つ耐火度が1070℃の鋳型である。

資料番号 No. 8 鉄塊(鋳型が付着した鉄塊)、着磁度：5、メタル反応：5～10mm大  
外観：外観を外観写真8に示す。重量62.6g、長さ78.5mm、幅53.7mm、厚さ18.3mm。鋳型が付着した鉄塊である。背面には僅かに赤褐色の鋳型粘土が付着している。資料そのものは厚さ10mm前後の湾曲した板状の鉄が錆化している状態

である。内面は暗褐色の鉄錆そのもので、小さな錆化瘤が多く見られる。資料全体に5mm大相当のメタル反応があり上側の外観写真の右より約1/4に10mm大くらいのメタル反応がある。この部分から試料を採取する。着磁度は4である。顕微鏡組織：金属鉄の顕微鏡組織を金属鉄組織写真8に示す。炭素をほとんど含まないフェライト(C<0.02%)組織となっており、結晶粒のなかには小さな欠陥が多数見られる。ほとんど純鉄に近い鉄である。資料全体としては錆化が進行している。写真には示していないが周囲はゲーサイトなどの錆化鉄である。化学成分：化学成分分析結果を表4に示す。Cは0.02%で、顕微鏡観察と一致する。その他の成分としてはSiが0.058%含まれているがおそらく介在物によるものと思われる。

以上の結果を総合すると本資料は鋳型に鋳込まれた0.02% Cの低炭素の鉄とその錆化物と推察される。

資料番号 No. 9 ガラス質滓、着磁度：0、メタル反応：無

外観：外観を外観写真9に示す。重量27.6g、長さ51.2mm、幅31.4mm、厚さ27.6mm。黒色に輝くガラス質滓で、炉壁片が隣接している。著しく発泡しており、断面には長石類などの小さな粒子が多く巻き込まれている。滓部分について調査する。着磁、メタル反応ともない。

顕微鏡組織：顕微鏡組織を滓組織写真9-1、9-2に示す。全面がガラス質になっている。外観状ほど気泡は多くない。一部に写真のような未溶解部分が見られる。未溶解部には珪石と思われる半透明な粒子が多い。

化学成分：滓の化学成分分析結果を表2に示す。全鉄は8.85%と鉄滓としては少ない。金属鉄は0.28%含まれている。FeOは6.35%、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は5.20%である。SiO<sub>2</sub>は60.5%と非常に多く、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>も15.6%と多く含まれガラス質滓であることを示している。CaO、MgOも3.88%、2.03%と比較的多い。造滓成分(SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O)は85.92%である。TiO<sub>2</sub>は0.73%含まれている。TiO<sub>2</sub>/TFeの比は約0.1で鉄に対するTiO<sub>2</sub>は高いが、前記の鉄滓同様に始発原料が砂鉄か否かは判断できない。

鉄滓の成分的特徴から製造工程上の分類を検討する図1、2、3で見ると、図1、図2では炉壁付着滓のグループにある。図3では精錬鍛冶滓のデータに比べMnO/TiO<sub>2</sub>が高い領域に外れており、精錬鍛冶滓とは判断できない。

以上の結果を総合すると本資料は炉壁と反応してガラス質化した炉壁付着滓と推察される。資料の生成した製鉄・鍛冶工程は判断できない。

資料番号 No.11 椀型鍛冶滓、着磁度：2、メタル反応：無し

外観：外観を外観写真10に示す。重量226.3g、長さ97.6mm、幅50.1mm、厚さ37.1mm。典型的な2段の椀型滓である。破面は1である。上面はなめられたように滑らかで、底面は炉床の砂を映し湾曲している。また上面の2ヶ所には、鉄が錆化している。資料全体は着磁度2であるがこの部分は3程度の着磁がある。メタル反応はない。破面で見ると大きな空隙が多くみられる。

顕微鏡組織：顕微鏡組織を組織写真11に示した。視野の大部分は乳白色の崩玉状のウスタイトに覆われ、その背後に沈むようにうす褐色を帯びた灰色のファイヤライトが観察される。典型的な鍛冶系の滓組織で、ウスタイトの多さからは鍛錬鍛冶滓のように思われる。

化学成分：化学成分分析結果を表2に示す。全鉄は63.8%と高く、金属鉄は1.98%

含まれている。結合水は0.75%と少なく、ゲーサイトなどの錆化鉄はあまり多くないと見られる。FeOは67.3%、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は13.6%、SiO<sub>2</sub>は9.76%、TiO<sub>2</sub>は0.16%とわずかである。FeO、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の比は83.2:16.8でFeO-Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub>の3成分系に換算するとFeOは74.2%、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は15.0%、SiO<sub>2</sub>は10.8%となり参考のFeO-Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub>系の平衡状態図ではウスタイ領域にある。ウスタイト、ファイヤライトが鉱物相として現れると考えられる。平衡状態図上の位置は顕微鏡観察と一致する。造滓成分は14.39%と少ない。原料に含まれていたと思われるTiO<sub>2</sub>は0.16%と少なく始発原料が砂鉄であるかは判断できない。成分的特徴から製造工程上の分類を検討する図1、2、3における位置づけでは、いずれも鍛錬鍛冶滓に分類される位置づけにある。

以上の結果を総合すると本資料は鍛冶工程で生成した鍛錬鍛冶滓と推察される。始発原料は明らかでない。

資料番号 No.12 梃型鍛冶滓、着磁度：2、メタル反応：無し

外観：外観を外観写真11に示す。重量76.4g、長さ58.4mm、幅40.1mm、厚さ32.3mm。酸化土砂がやや厚く付着した小さな梃型滓で上面は窪みが深い。下面は炉内の推積状態を写し、木炭痕や砂塵痕が多く、深い窪みも多い。大きさの割りには重量感がある。酸化土砂をよく落とし、試料を採取する。

顕微鏡組織：顕微鏡組織を滓組織写真12に示す。資料11よりもさらにウスタイトの多い組織で凝集ウスタイトになっている。ウスタイトの背後にファイヤライトが観察される。鍛錬鍛冶滓と思われる組織である。

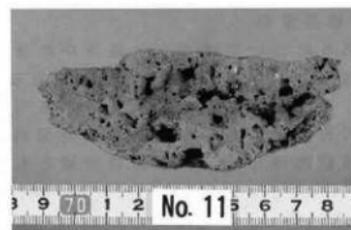
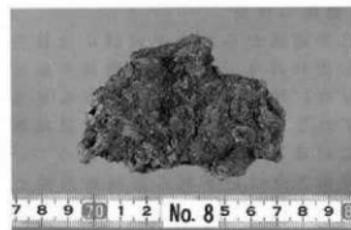
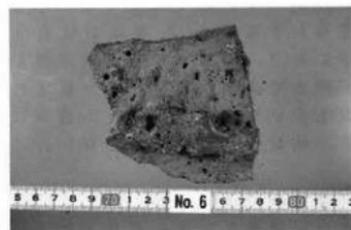
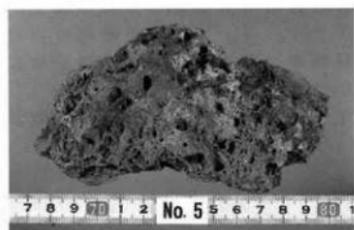
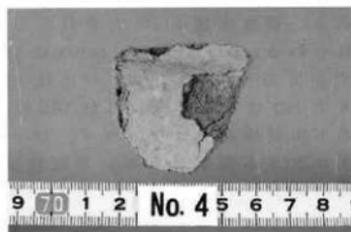
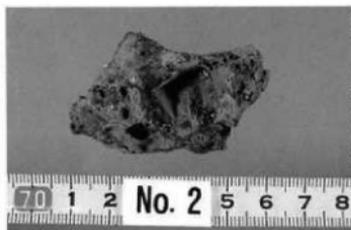
化学成分：化学成分分析結果を表2に示す。全鉄は64.8%と高く、金属鉄は0.25%とわずかである。結合水は0.69%と少なく、ゲーサイトなどの錆化鉄はあまり多くないと見られる。FeOは72.0%、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は12.3%、SiO<sub>2</sub>は8.78%、TiO<sub>2</sub>は0.16%とわずかである。FeO、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の比は85.4:14.6でFeO-Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub>の3成分系に換算するとFeOは77.3%、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は13.2%、SiO<sub>2</sub>は9.4%となり参考のFeO-Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub>系の平衡状態図ではウスタイ領域の資料11とほとんど同じ位置にある。ウスタイト、ファイヤライトが鉱物相として現れると考えられる。平衡状態図上の位置は顕微鏡観察と一致する。造滓成分は13.21%と少ない。原料に含まれていたと思われるTiO<sub>2</sub>は0.16%と少なく始発原料が砂鉄であるかは判断できない。成分的特徴から製造工程上の分類を検討する図1、2、3における位置づけでは、いずれも鍛錬鍛冶滓に分類される位置づけにある。

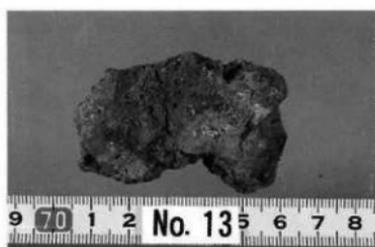
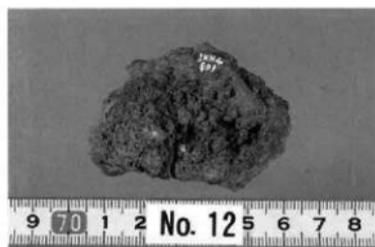
以上の結果を総合すると本資料は鍛冶工程で生成した鍛錬鍛冶滓と推察される。始発原料は明らかでない。

資料番号 No. 13 鍛冶滓、着磁度：2、メタル反応：3mm大

外観：外観を外観写真12に示す。重量55.6g、長さ58.0mm、幅35.7mm、厚さ20.3mm。重量感のある扁平な鍛冶滓である。精錬後期のもので鉄分が多いと思われる。全体に凹みが多く、酸化土砂が浸入している。下面は推積状態を写して砂塵による凹凸が多い。一部に弱いメタル反応があり、着磁度は2である。顕微鏡組織：顕微鏡組織を滓組織写真13に示す。資料11、12に比べ蕨玉状のウスタイトは少なく、相対的にファイヤライトが多くなっている。ウスタイトの形態ではやや樹枝状のものも観察される。

化学成分：化学成分分析結果を表2に示す。全鉄は52.3%と高く、金属鉄は0.78%





である。結合水は1.13%含まれており、ゲーサイトなどの錆化鉄も存在すると見られる。FeOは52.1%、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は15.8%、SiO<sub>2</sub>は19.4%と多く、TiO<sub>2</sub>は0.27%とわずかである。FeO、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>の比は76.8:23.2でFeO-Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub>の3成分系に換算するとFeOは59.6%、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>は18.0%、SiO<sub>2</sub>は22.2%となり参考のFeO-Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub>系の平衡状態図ではウスタイト、ファイヤライト、マグネタイトの境界に近いマグネタイト領域にある。平衡状態図的にはこの3相が現れると見られる。顕微鏡観察でのウスタイトはマグネタイトとの混品の可能性がある。渣滓成分は27.66%とやや多い。原料に含まれていたと思われるTiO<sub>2</sub>は0.27%と少なく始発原料が砂鉄であるかは判断できない。成分的特徴から製造工程上の分類を検討する図1、2、3における位置づけでは、図1では鍛錬鍛冶滓の位置づけにあり、図2では渣滓成分が多く精錬鍛冶滓と思われる位置づけにある。図3では鍛錬鍛冶滓に分類される位置づけにある。

以上の結果を総合すると本資料は鍛冶工程で生成した鍛錬鍛冶滓と推察される。始発原料は明らかでない。

#### 4. まとめ

本分析調査を以下にまとめた。

##### 1) 遺跡の性格

石動遺跡からの出土資料には鋳型が検出され鋳造が行われていたことは確かと思われる。しかし、製錬や精錬を示唆するTiO<sub>2</sub>が高い資料は検出されなかった。鍛錬を示唆する資料も見当たらないが隣接する北中原遺跡の資料はいずれも鍛錬鍛冶滓であり、鍛錬鍛冶が行われた可能性はある。正確にはさらに鍛造薄片の検出などに務めていく必要がある。北中原4次から出土した資料3点はいずれも鍛錬鍛冶滓と判断され、鍛錬鍛冶が行われていたものと推察される。

##### 2) 始発原料

資料6についてはガラス質滓中含TiO<sub>2</sub>鉱物相のウルボスピネル(2FeO·TiO<sub>2</sub>)が観察され、始発原料が砂鉄であると推察された。炉壁附着滓はTiO<sub>2</sub>/TFeの比が高く、砂鉄が始発原料である可能性があるが、炉壁、鋳型などもこれらと同程度の含有量があり、始発原料は判断できなかった。資料No.11~13の鍛錬鍛冶滓は成分、顕微鏡組織とも始発原料を推察するものが検出できていない。

##### 3) 胎土類

胎土類には平均的な炉壁胎土に比べアルカリ土類成分、鉄分が多い傾向が顕

著に認められ、耐火度に有利な  $Al_2O_3$  が多いにもかかわらず耐火度は  $1070^{\circ}C$  ~  $1110^{\circ}C$  と低い。

#### 4) 個別資料

(1) 資料1：炉壁と反応してガラス質化した炉壁付着滓と推察される。資料の生成した製鉄・鍛冶工程は不明である。

(2) 資料2：炉壁と反応して激しく発泡・ガラス質化した炉壁付着滓と推察される。資料の生成した製鉄・鍛冶工程は不明である。

(3) 資料3： $SiO_2$  を 62.4%、 $Al_2O_3$  を 19.0% 含み、鉄分とアルカリ土類成分が多い特徴を持つ耐火度が  $1110^{\circ}C$  の炉壁胎土である。

(4) 資料4：溶解性に勝る塗布材が塗布されている耐火度  $1070^{\circ}C$  の胎土で作られた鋳型である。しかし、塗布材と耐火材の成分的な大きな差は認められない。 $SiO_2$  を 62.4%、 $Al_2O_3$  を 19.0% 含み、鉄分とアルカリ土類成分が多い耐火度が  $1110^{\circ}C$  の炉壁胎土である。

(5) 資料5： $SiO_2$  を 61.3%、 $Al_2O_3$  を 18.7% 含み、鉄分とアルカリ土類成分が多い特徴を持つ耐火度が  $1100^{\circ}C$  の炉壁胎土である。

(6) 資料6： $SiO_2$  を 61.0%、 $Al_2O_3$  を 18.5% 含み、鉄分とアルカリ土類成分が多い特徴を持つ耐火度が  $1058^{\circ}C$  と推算される鋳型である。付着滓中に  $TiO_2$  含有鉱物相が観察され、砂鉄を始発原料とする鉄を鋳込んだ可能性がある。

(7) 資料7： $SiO_2$  を 59.6%、 $Al_2O_3$  を約 19.1% 含み、鉄分とアルカリ土類成分が多い特徴を持つ耐火度が  $1070^{\circ}C$  の鋳型である。

(8) 資料8：0.02% C の低炭素の鉄とその錆化物と推察される。

(9) 資料9：炉壁と反応してガラス質化した炉壁付着滓と推察される。資料の生成した製鉄・鍛冶工程は不明である。

(10) 資料11：鍛冶工程で生成した鍛錬鍛冶滓と推察される。始発原料は明らかでない。

(11) 資料12：鍛冶工程で生成した鍛錬鍛冶滓と推察される。始発原料は明らかでない。

(12) 資料13：鍛冶工程で生成した鍛錬鍛冶滓と推察される。始発原料は明らかでない。

#### 5. 参考

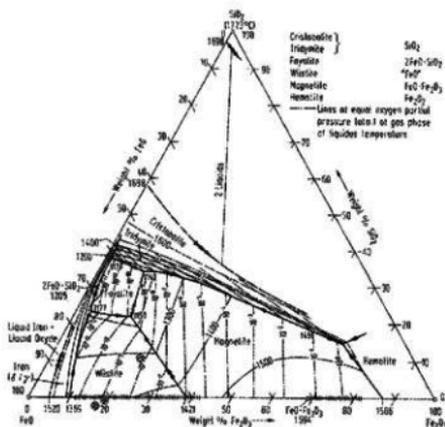
(1) 鉄滓の顕微鏡組織について：鉄滓を構成する化合物結晶には、一般的

に表 A1 のような鉱物組織がある。酸化鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>, FeO)、二酸化ケイ素 (シリカ: SiO<sub>2</sub>)、アルミナ (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) および二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) を組み合わせた化合物 (固溶体) が多く、これら鉱物結晶は含有量にも依存するが、X線回折により検出され確認できる。鉄滓中の低融点化合物がガラス相 (非晶質) を形成することがあり、X線回折では検出されない。

表 A1 鉄滓の顕微鏡鉱物組織とその観察状況

鉱物組織名(和)	鉱物名(英)	化学式	偏光顕微鏡観察状況
ヘマタイト	Hematite	$\alpha$ -Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	赤褐色～赤紫色
マग्ネタイト	Magnetite	$\gamma$ -Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	赤紫色～黒紫色
マグネタイト	Magnetite	Fe <sub>3</sub> O <sub>4</sub>	□青色、四角または多角盤状
ウスタイト	Wustite	FeO	灰白色、扇玉状または樹枝状
ファイヤライト	Fayalite	2FeO·SiO <sub>2</sub>	薄い青灰色、短冊状の長い結晶
シデライト	Siderite	FeCO <sub>3</sub>	
ウルボスピネル	Ulvospinel	2FeO·TiO <sub>2</sub>	白色、四角～角形板状結晶
イルメンナイト	Ilmenite	FeO·TiO <sub>2</sub>	白色、針状・棒状の長い結晶
シュードブルツカイト	Pseudobrookite	FeO·2TiO <sub>2</sub>	白色、針状の結晶
ハロイサイト	Halloysite	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> ·2SiO <sub>2</sub> ·2H <sub>2</sub> O	組織は不明
ハーシナイト	Hercynite	FeO·Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	ウスタイト中に析出、ごま粒状。
リュウサイト	Leucite	K <sub>2</sub> O·Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> ·4SiO <sub>2</sub>	
アカゲナイト	Akagenite	$\beta$ -FeOOH	組織は不明
ゲーサイト	Goethite	$\alpha$ -FeOOH	白～黄色、リング状が多い。
アノーサイト	Anorthite	CaO·Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> ·SiO <sub>2</sub>	
石英 (シリカ)	Silica	$\alpha$ -SiO <sub>2</sub>	白色～半透明
クリストバライト	Cristobalite	$\beta$ -SiO <sub>2</sub>	白色
コーエナイト (セメントイト)	Cahnite(Cementite)	Fe <sub>3</sub> C	

(2) FeO-Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub> 平衡状態図



FeO-Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub>系状態図 (by Osborn and Muan) :Slag Atlas  
 [ドイツ鉄鋼協会(1981) [Verlag Stahlisen] Düsseldorf, Fig. 106, p.76]

(3) ゼーゲルコーン溶倒温度比較表

温度 (°C)	コーン 番号	温度 (°C)	コーン 番号	温度 (°C)	コーン 番号	温度 (°C)	コーン 番号
600	022	960	07a	1,280	9	1,650	29
650	021	980	06a	1,300	10	1,670	30
670	020	1,000	05a	1,320	11	1,690	31
690	019	1,020	04a	1,350	12	1,710	32
710	018	1,040	03a	1,380	13	1,730	33
730	017	1,060	02a	1,410	14	1,750	34
750	016	1,080	01a	1,435	15	1,770	35
790	015a	1,100	1a	1,460	16	1,790	36
815	014a	1,120	2a	1,480	17	1,825	37
835	013a	1,140	3a	1,500	18	1,850	38
855	012a	1,160	4a	1,520	19	1,880	39
880	011a	1,180	5a	1,530	20	1,920	40
900	010a	1,200	6a	1,580	26	1,960	41
920	09a	1,230	7	1,610	27	2,000	42
940	08a	1,250	8	1,630	28		

6. 図表・写真

表1 調査資料と調査項目

資料 No.	選勝名 選勝名	資料 種別	着 磁 度	M C 反 応	外 観 写 真	化 学 成 分	細 鏡 写 真	X 線 回 折	耐 火 度
1	石衝 (いずるぎ) 9-13T9-1#	ガラス質滓	○	○	○	○	○		
2	石衝 (いずるぎ) 9-13T9-1#	ガラス質滓	○	○	○	○	○		
3	石衝 (いずるぎ) 9-2#付	砂	○	○	○	○	○	○	○
4	石衝 (いずるぎ) 9-13T9-1#	鋳型	○	○	○	○	○	2	○
5	石衝 (いずるぎ) 麻薬場	加型付着滓	○	○	○	○	○		○
6	石衝 (いずるぎ) 麻薬場	鋳型	○	○	○	○	○		
7	石衝 (いずるぎ) 麻薬場	鋳型	○	○	○	○	○	○	○
8	石衝 (いずるぎ) 麻薬場	錆化鉄	○	○	○	○	○		
9	石衝 (いずるぎ) 麻薬場	ガラス質滓	○	○	○	○	○		
11	北中原4次 SC	模型滓	○	○	○	○	○		
12	北中原4次 SD1	模型滓	○	○	○	○	○		
13	北中原4次 SD1	鋼渣滓	○	○	○	○	○		

種別は外観観察した結果で、提供されたものではない

表2 鉄滓の化学成分分析結果 (%)

資料 No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O	比率 (%)	
											FeO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>
1	7.17	1.11	5.49	2.56	60.8	18.6	3.03	2.71	2.55	1.07	68.2	31.8
2	12.4	0.36	8.43	7.85	56.0	17.2	3.20	1.91	1.65	1.02	51.8	48.2
5	6.88	0.42	2.07	6.94	59.3	17.4	3.86	2.21	3.61	1.49	23.0	77.0
6	9.97	0.45	3.22	10.0	55.8	19.2	3.36	2.05	2.25	1.10	24.3	75.7
9	8.85	0.28	6.35	5.20	60.5	15.6	3.88	2.03	2.00	1.91	55.0	45.0
11	63.8	1.98	67.3	13.6	9.76	2.19	0.88	0.51	0.88	0.17	83.2	16.8
12	64.8	0.25	72.0	12.3	8.78	2.36	1.07	0.33	0.52	0.15	85.4	14.6
13	52.3	0.78	52.1	15.8	19.4	4.46	1.53	0.90	0.96	0.41	76.8	23.2

資料 No.	TiO <sub>2</sub>	MnO	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	Co	C.W.	C	V	Cu	TiO <sub>2</sub> / T.Fe	MnO/ TiO <sub>2</sub>	造洋 成分%
1	0.87	0.19	0.094	0.039	0.38	0.21	0.027	0.005	0.121	0.218	88.76
2	0.77	0.17	0.176	0.017	0.30	0.10	0.036	0.022	0.062	0.221	80.98
5	0.91	0.18	0.121	0.004	0.74	0.09	0.025	0.007	0.132	0.198	87.87
6	0.92	0.18	0.179	0.005	0.43	0.07	0.025	0.009	0.092	0.196	83.76
9	0.73	0.15	0.086	0.006	0.37	0.06	0.020	0.006	0.082	0.205	85.92
11	0.16	0.04	0.148	0.016	0.75	0.05	0.004	0.012	0.003	0.250	14.39
12	0.16	0.04	0.106	0.004	0.69	0.08	0.004	0.004	0.002	0.250	13.21
13	0.27	0.08	0.139	0.013	1.13	0.10	0.008	0.009	0.005	0.296	27.66

C.W.= 化合水、造洋成分 = SiO<sub>2</sub>+ Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+ CaO+ MgO+ Na<sub>2</sub>O+ K<sub>2</sub>O

表3 珪酸・鋳型の化学成分分析結果 (%)

資料 No.	T.Fe	M.Fe	FeO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O	TiO <sub>2</sub>	MnO	C.W.	C	強熱 減量
3	7.64	0.11	1.61	8.98	62.4	19.0	1.55	1.32	1.94	1.02	0.94	0.18	0.64	0.09	-0.33
4-1	7.39	0.33	1.29	8.66	62.7	16.0	2.89	1.97	1.26	1.77	0.93	0.16	1.34	0.15	1.61
4-2	7.97	0.22	2.43	8.38	60.1	17.4	3.02	2.18	1.41	1.73	0.99	0.16	1.39	0.21	0.87
5	8.38	0.17	1.90	9.63	61.3	18.7	1.94	2.30	1.13	1.16	1.03	0.20	0.84	0.15	0.29
6	8.21	0.17	0.72	10.7	61.0	18.5	1.95	2.24	1.11	1.22	1.02	0.19	1.03	0.13	0.74
7	8.42	0.11	1.18	10.6	59.6	19.1	2.13	2.51	1.00	0.93	0.93	0.20	1.35	0.22	1.93

C.W.= 化合水

表4 金属鉄の化学成分

資料 No.	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ni	Co	Al	V	Ti	Ca	Mg
8	0.02	0.058	0.001	0.40	0.031	0.071	0.020	0.026	0.057	0.003	0.003	0.047	0.012

#### X線回折

表5 鉄滓のX線回折鉱物と製造工程の分類

No	種別	X線回折結果
3	ガラス質滓?	Q強、Hc弱、An微、Ml微、Fe微、Cor微
4-1	鋳型胎土	Q強、An強、Cor弱、Fe微、H微
4-2	鋳型塗布材	Q強、An強、Cor微、Fe微、H微
7	鋳型	Q強、An弱、Ml弱、H微、Fe微、Cor微

Q: 石英、An: アノーサイト、Hc: ハーシナイト、Ml: ムライト、Fe: 金属鉄、H: ヘマタイト、Cor: コージェライト

最強、強、中、弱、微は回折強度を示し、微は鉱物相が同定できる程度の回折強度であることを示す。

表6 耐火度試験結果

資料番号	耐火度 (SK) *	色調	膨脹・収縮	試験後の状況
No. 3	2a-	1,110℃	茶 普通	アバタ状
No. 4	02a+	1,070℃	茶 普通	アバタ状
No. 5	1a	1,100℃	茶 普通	アバタ状
No. 7	01a-	1,070℃	茶 普通	アバタ状

【備考】試験方法: 耐火煉瓦の耐火度の試験方法 (JIS R2204) に準拠  
 試験条件: 酸素プロパン炉  
 \*耐火温度: 下記のゼーゲルコーン溶倒温度比較表を参照

## 附編2 北中原遺跡出土の鋳型に混入された植物遺体について

山梨県立博物館 中山誠二

### 1 分析試料

本分析試料は、北中原遺跡第3次調査において発見されたもので、試料00～05はS12(2号住居跡)から出土した炉壁(溶解炉)、試料35は鋳造関連遺構から出土した鉄製鍋の鋳型である。

炉壁とされる試料00～05は、S12覆土中の床面よりやや浮いた位置から出土している。伴出遺物はほとんどなく、古代末(11世紀頃)の土師器皿1点が出上したのみである。調査時所見から住居跡として報告するが、トレンチ調査であったこともあり、鋳造に関連する「鋳込み場」の一部に当たる可能性も考えられる。

試料35は、鋳造関連遺構(鋳型廃棄場)から発見されているが、最下面で確認したビット内から11世紀頃の土師器小皿が出土している。その他、同時期頃の土師器が覆土中から検出しているが、明確な時期決定は困難である。最下面には溝状の落ち込み、先述のビット等を確認しており、作業場(鋳込み場)であった可能性も窺えるが、いずれにせよ鋳造関連遺物の捨て場となったことが想定される。なお、廃棄された鋳型は、鍋や茶釜などがあり、中世段階まで下ることも考えられている。

鋳型、炉壁は高い熱を受け硬く窯変しているが、型となる内面は丁寧に表面が仕上げられている。鋳型および炉壁の外側には、糊殻と思われる植物が混ざられており、肉眼観察でその痕跡が認められる試料について、さらに顕微鏡およびレプリカ・セム法による観察を行った。

### 2 分析手法

鋳型6点について、まず実体顕微鏡での観察を行い、その一部の試料についてレプリカ・セム法による分析を行った。レプリカ・セム法とは、土器などの表面に残る圧痕の凹部にシリコン樹脂を流し込んでレプリカを作成し、その表面を電子顕微鏡で観察するものである(注1)。

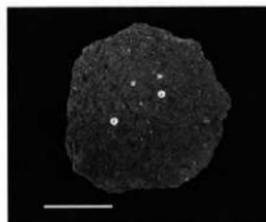
作業は、まず鋳型に残る圧痕を写真撮影した後、実体顕微鏡で観察した。さらに、各圧痕部分に離型剤を塗布し、シリコン樹脂の充填を行った。離型剤にはアクリル樹脂(パラロイドB・72)をアセトンで薄めた5%溶液を用い、印象剤には東芝シリコンTSE350を使用した。印象剤の初期充填の後、シリコンに増粘剤を加え、走査電子顕微鏡用の試料台に載せ、初期充填した圧痕部分にかぶせレプリカ転写作業を行った。これを乾燥させ、圧痕レプリカを離脱させた(注2)。

転写したレプリカ試料は、ニコン製環境制御型電子顕微鏡Quanta600を用い、表面観察を実施した。

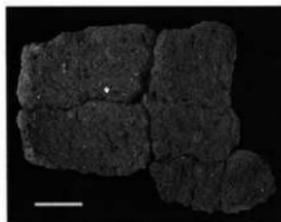
### 3 分析結果

(1) 試料00 00-1は長さ6.8mm、幅3.1mm、00-2は長さ5.5mm、幅3.3mmのイネ糊痕である。いずれも内外顔を明瞭に残す。

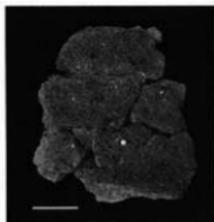
(2) 試料01 長さ7.2mm、幅3.0mmのイネ糊痕である。糊の先端部、基部を欠損しているが、内外顔および表皮の顆粒状(乳房状)突起列が観察される。SEM観察レベルでは突起列の先端がやや摩耗している。



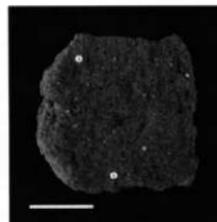
試料00



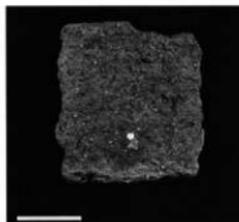
試料01



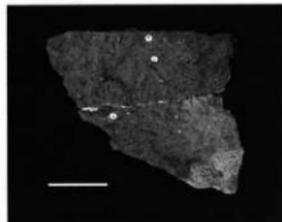
試料02



試料04



試料05



試料35

(3) **試料 02** 長さ7.0mm、幅3.0mmのイネ籾痕である。籾の先端部を欠損しているが、内外穎および表皮の顆粒状（乳房状）突起列が観察される。SEMレベルでは突起列の先端は摩耗が著しい。

(4) **試料 04** 04-1は長さ5.8mm、幅2.8mm、04-2は長さ7.3mm、幅2.6mmのイネ籾痕である。いずれも内外穎を明瞭に残す。

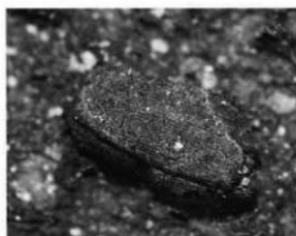
(5) **試料 05** 05-1は長さ7.4mm、幅3.9mmのイネ籾痕である。SEM観察した試料の中でもっとも籾の痕跡が明瞭で、顆粒状突起列の摩耗はほとんど見られない新鮮な状態でつけられた圧痕であることがわかる。内外穎および基部の小穂軸が確認される。

(6) **試料 35** 35-1は長さ6.4mm、幅3.0mm、35-2は長さ7.3mm、幅2.4mm、35-3は長さ7.9mm、幅3.5mmのイネ籾痕である。いずれも内外穎が明瞭に確認できるが、電子顕微鏡観察では顆粒状突起の摩耗が著しく、剛毛（稈毛）は認められない。

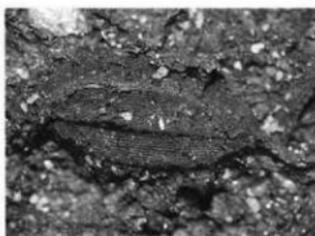
#### 4 小結

本調査を通して、鋳型には粘土の混和材として多量のイネ籾を使用していることが判明した。この理由として、鋳型となる粘土が高温のために急激に収縮し破損することを防ぐ目的があると推定され、珪酸分を多く含むイネ籾が混和材として選択されている点は、技術史的な側面から興味深い。

これらのイネ籾は、粘土と混ぜ合わせる段階で破損したものが非常に多い



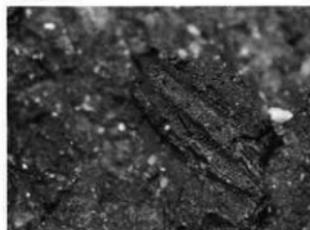
試料00-1



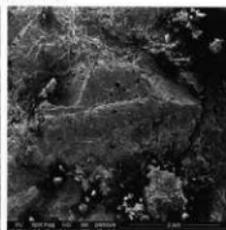
試料00-2



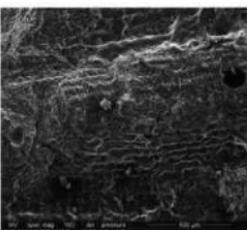
試料00



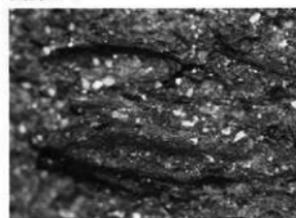
試料01-1



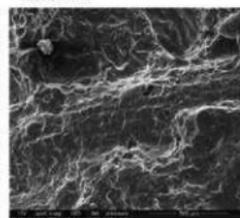
試料01-1



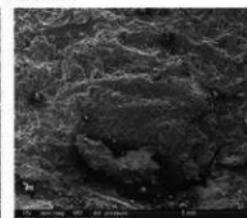
試料01-1



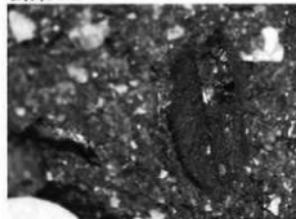
試料02-1



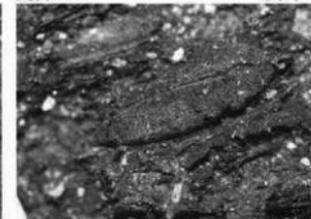
試料02-1



試料02-1



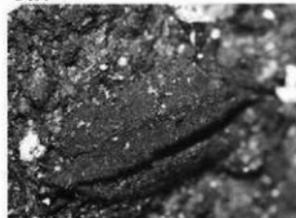
試料04-1



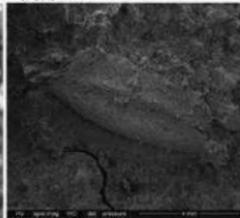
試料04-2



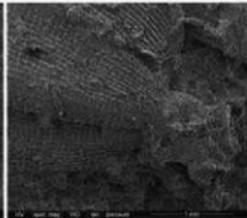
試料04



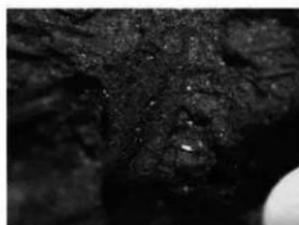
試料05-1



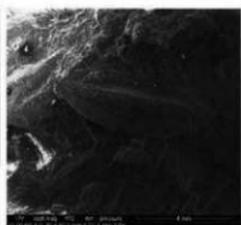
試料05-1



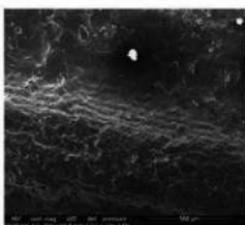
試料05-1



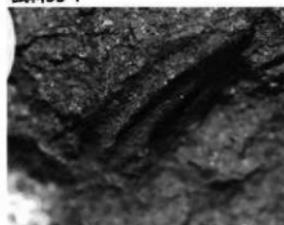
試料35-1



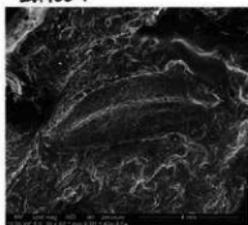
試料35-1



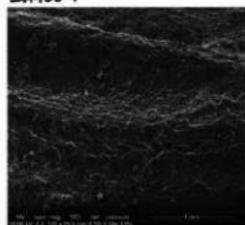
試料35-1



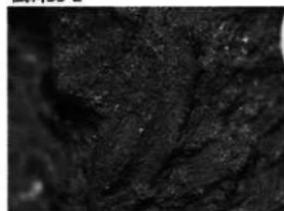
試料35-2



試料35-2



試料35-2



試料35-3



試料35

が、内外顔および小穂軸を残すほぼ完全な形の糊圧痕も認められる。走査型電子顕微鏡を用いたレプリカ観察では、鋳型である試料35で摩耗が著しい状況が看取され、炉壁の試料05では非常に新鮮な糊の状況を外面に残している。圧痕の磨耗が著しい試料は、鋳型そのものが廃棄状態で表面が露出していた時期が比較的長期間に及んだことが原因と考えられると同時に、炉壁の場合はより高温を受けたために表面が硬く窯変し磨耗しにくいことに起因する。

検出された糊は、形状からいずれもジャポニカタイプの栽培イネ (*Oryza sativa*) と判断される。糊痕試料は、弥生時代ものが比較的多く報告されているが、古代から中世の観察例はむしろ少例である。これらのイネがどのような品種に属するかを含め、今後同時代の糊などとの比較研究によって明らかになる情報をこれらの試料は潜在的に有している。

#### 注

- 1 中山誠二 2007 「レプリカ・SEM法による植物圧痕土器の分析－山梨県油田遺跡出土土器の圧痕－」『山梨県立博物館研究紀要』1 pp.35 - 47
- 2 比佐隔一郎、片田雅樹 2006 『土器圧痕のレプリカ法による転写作業の手引き（試作版）』福岡市埋蔵文化財センター

## 附編3 笛吹市石動遺跡より出土した動物遺体

植月 学 (山梨県立博物館)

石動遺跡では長径約5.4 mと推定される深さ約35cmの不整形の上坑内から、ウマとウシの骨が集中して出土した。トレンチ内の限られた調査であったため、遺構の詳細な形態や規模については明確でない。時代についても確実な遺物を伴っていないため不明だが、周辺の状況により近世以降に属すと推測されている。以下では動物遺体の分析により遺構の性格に関する若干の検討をおこなう。

### 1. 分析結果

資料はいずれも風化が進み、かなり脆くなっている。同定できたのはウマ23点、ウシ6点、ウシもしくはウマ2点である(表)。

**最小個体数** ウマでは右寛骨が2点、左橈骨が2点ある。これに推定体高を加味すると、橈骨で118cm前後(009)、121cm前後(003)が各1体あり、寛骨では121cm前後(008)の他に124cm前後(022)の個体が存在するので、最低3個体となる。ウシでは重複する部位はないが、推定体高では約98cm(大腿骨001)と約110cm(橈骨011)の個体が存在するので、最低2個体と推測される。

**年齢・性別** ウマは臼歯の歯根中心部からの高さを用いた年齢推定によれば(西中川編1991)、12歳程度と、16～19歳程度の少なくとも2個体が存在する。雌雄については、上顎犬歯が1点あることから雄が最低1個体含まれる。ウシは歯がなく、詳細は不明だが、体高約98cmと推定された大腿骨は比較的若い個体のものと推測される。

**分布** 同定結果を遺物分布図と照合したが、解剖学的位置を保ち、連結した状態であった可能性のあるのは、ウマの009、010(左上腕骨と橈尺骨)、018、022、023(左右の寛骨と仙骨)のみであった。残りは同一個体の可能性がある部位でも散在しており、かつ一部の部位が検出されているに過ぎない。

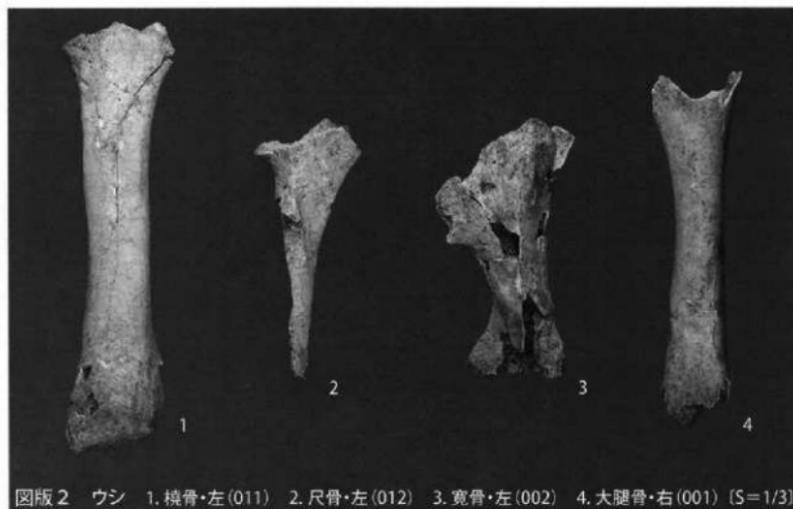
その他、特筆すべき点として、資料029のウマ中足骨の遠位端に、水平(前後)方向および垂直(上下)方向に擦切ろうとしたような痕跡が認められた。いずれも断面はU字形を呈し、鋭利な刃物によるものではない。水平方向は内側面の滑車より上の部分で上下に分割しようとしたようである。幅・深さ共に3mm前後、長さ13mmにわたる。垂直方向は縦線付近の中心部より左右に分割しようとしたようである。長さ20mmで、幅・深さは破損により不明だが、ほぼ水平方向と同規模である。

### 2. 考察

出土したのはウマとウシの複数の個体で、しかも細かい部位単位に分かれていた。切痕の存在により、埋葬ではなく、ウシやウマが解体された後に廃棄される場であった可能性が高い。ウマは中型の在来種であり、推定3個体中、2個体は老齢であったことから、駄馬として用いられていたと推測される。

本遺構は県内における弊牛馬処理を考える上で、興味深い遺構である。た





図版2 ウシ 1. 橈骨・左(011) 2. 尺骨・左(012) 3. 寛骨・左(002) 4. 大腿骨・右(001) [S=1/3]

表 ウシ・ウマ遺体一覧

整理番号	現場No.	種	部位	左右	位置	計測値(mm)	推定骨長(cm)	推定体高(cm)	推定年齢	個体識別	備考
001	7	ウシ	大腸骨	右	近位部一遠位部	SD:28.3		98.2		ウシB	
002	9	ウシ	寛骨	左	腸骨						
003	10	ウマ	桡尺骨	左	近位部一遠位端	SD:32.6	30.4	120.9		ウマA	
004	11	ウマ	距骨	左	完存	GH:53.5 GB:54.0					
005	12	ウマ	上腕骨	右	[M1]	H:15.9 ± L:21.6 B:26.5			17.3	ウマ②	
006	12	ウマ	膝蓋骨	左	完存						
007	12	ウシ?	腰椎								
008	14	ウマ	寛骨	右	完存	LAR:54.4	36.6	121.1		ウマA	
009	15	ウマ	桡尺骨	左	近位端一遠位部	SD:31.2	29.6	118.0		ウマB	
010	16	ウマ	上腕骨	左	近位端一遠位部	SD:28.3	25.7	118.0		ウマB	2分割
011	17	ウシ	橈骨	左	完存	GL:256		109.7		ウシA	012と同一
012	17	ウシ	尺骨	左	完存						011と同一
013	17	ウマ	上顎M1	右		H:29.2 L:22.0 B:25.3			12.0	ウマ①	
014	18	ウマ	大腸骨	左	近位端一遠位部	Bd:76.5+	34.5	117.5		ウマB	
015	18	ウシ/ウマ	腰椎								

整理番号	現場No.	種	部位	左右	位置	計測値(mm)	推定骨長(cm)	推定体高(cm)	推定年齢	個体識別	備考
016	19	ウマ	肩甲骨	右	近位端	GLP:81.9 BG:39.5	65.4	172.2			
017	19	ウシ	腰椎								
018	20	ウマ	脊椎	右	完存					ウマC	022と同一か
019	20	ウマ	下顎 P3/P4	右		H:13.8 L:25.5 B:16.2			17.7/ 19.0	ウマ②	
020	20	ウマ	大腸骨	右	近位端						人跡奇面。014と同一か?
021	21	ウマ	上腕骨	右	完存	GLE:261+ GLC:236 Bp:75.3+	26.1	120.3		ウマA	
022	22	ウマ	肩骨	左	完存	LAR:55.2	37.3	123.9		ウマC	018と同一か
023	22	ウマ	仙骨								
024	24	ウマ	腰椎								
025	25	ウマ	下顎 P2	右		H:13.4 L:30.1 B:15.0			16.1	ウマ②	
026	25	ウマ	腰椎								
027	25	ウシ	腰椎								
028	一括	ウマ	上腕骨	右	完存	SD:30.2	25.6	117.5		ウマB	3分割
029	一括	ウマ	中足骨	左	近位端一遠位端	Rd:38.2+					擦り切り痕?
030	1	ウマ	中足骨	?	近位端						
031	一括	ウマ	上顎 C	左							♂

計測方法は Orsini(1976)による。

ウマの体高は尾根高・肩高(1997)による。

ウマの骨長測定は、本報告のウマの体高測定は西中川編(1991)による。

個体識別は体高(アルファベット)、もしくは年齢(数字)による人たがな区分である。

個体番号は区分が あたってより直したし。

だ、年代が確定できないのが難点である。調査地点は近世においては末木村に属していた。村明細帳を見る限り、天保11年(1840)、安政2年(1855)ともに馬捨場の存在は確認できない。したがって、江戸時代後期に属する可能性は低くなる。なお、隣接する塩田村では天保8年、天保13年ともに「狛馬置場」の記載が確認できる(上野・中川1967、山梨県教育委員会学術文化財課県史編さん室編1996)。

さらに、本遺構が近代以降に属する可能性を示唆するのがウシの存在である。今福(2004・2005)は江戸時代後期に編纂された『甲斐国志』の分析をもとに、近世甲斐国においてウシが西部地方などの一部を除いてほとんど飼われていなかったことを明らかにした。『甲斐国志』によれば、末木村で飼われていたのはウマ3頭で、ウシは皆無である。また、旧一宮町にあたる村々でもウシは皆無である。旧一宮町においては、ウシ飼育の記録は明治に入って一部(御代咲村)で見られ、本地点が属する一宮村では大正7年の町村取調抜書でようやく確認できる(中村他1967)。したがって、本遺構は江戸時代以降に属する可能性もある。

注目されるのは加工痕のある馬骨が確認されたことである。江戸や大阪などの近世都市遺跡では牛馬の長骨を用いた製品の加工工程が多く確認されているが、県内においては未確認である。また、近世においては斃牛馬を処理する集団が存在し、特定の土地内で死んだ牛馬を取得する権利を持っていたことが知られるが、明治4年の解放令とともに、そうした権利は消滅する（喜田1924、山本1989）。近世～近代の県内農村において、牛馬が死後どのように処理、あるいは利用されていたのか検討する材料を持ち合わせていないが、本遺構はその手がかりとなる可能性もあるため、時代は不確実ながらあえて報告をおこなった。骨の分布は調査区外にも続くと考えられ、今後周辺部分の調査により年代が明らかになることを期待したい。

**謝辞** 望月秀和氏（帝京大学山梨文化財研究所）には分析にあたり便宜をはかっていただくとともに、調査に関してご教示をいただいた。高橋修氏（山梨県立博物館）には関連文献についてご教示いただいた。記して感謝申し上げる次第である。

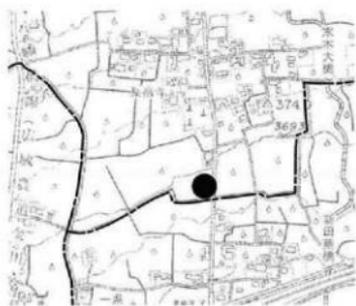
#### 引用文献

- 今福理恵 2004 「甲斐国巨摩郡における古代牧についての一視点」『研究紀要』20 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 今福理恵 2005 「甲斐国山梨郡・八代郡・都留郡における古代牧についての一視点」『研究紀要』21 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 上野晴朗・中川金策 1967 「町の歴史」『一宮町誌』一宮町
- 喜田貞吉 1924 「牛捨場馬捨馬」『歴史地理』43 - 5
- 林田重幸・山内忠平 1957 「馬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』第6号
- 中村広行 他 1967 「産業と経済」『一宮町誌』一宮町
- 西中川駿 編 1991 『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書
- 山梨県教育委員会学術文化財課県史編さん室 編 1996 『山梨県史資料叢書 村明細帳 八代郡編』山梨県
- 山本尚友 1989 「斃牛馬処理」『近世の民衆と芸能』
- Driesch, A. A guide to the measurements of animal bones from archaeological sites. Pub. Peabody Museum, Harvard Univ.

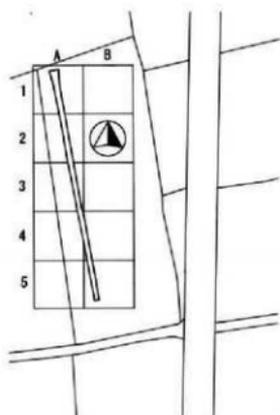
# 附編 4 石動遺跡 南西興業地区発掘調査報告

## 1. 調査概要

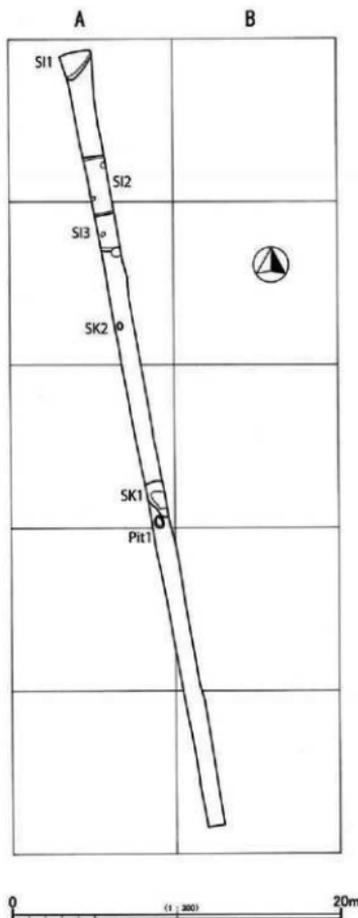
本調査は、石動遺跡地内における南西興業建設に先立ち、平成10(1998)年9月8日～9月15日に一宮町教育委員会が実施した。調査は南北約100m、幅約2mのトレンチを設定し、遺構確認面は地表面から約70cmの深さであり、住居跡3軒、土坑2基、ピット1基など、平安時代の遺構・遺物を発見した。



第1図 調査区位置図



第2図 トレンチ位置図



第3図 遺構位置図

## 2. 遺構・遺物

## ・SI1〔第4図〕

**位置と検出状況** A-1グリッド、トレンチの北端に位置する。調査範囲では床・周溝・壁の一部を確認した。確認面からの深さは約80cmを測った。検出した範囲ではカマド施設はなかった。**出土遺物** 土師器(1・2)、埴(3～5)が出土した。**遺構の時期** 明確ではないが、出土遺物から8C前半ごろとしておきたい。

## ・SI2〔第4図〕

**位置と検出状況** A-1～2グリッド、トレンチの北側に位置する。調査範囲では北壁・南壁を確認し、重複するSI3の北側を壊していた。南北の壁間は約3.6m、確認面からの深さは約80cmを測った。検出した範囲ではカマド施設はなく、遺構内でピット2基を検出したが性格は不明である。他、北側は床面が12cmほど高く、段状になっていた。**遺構の時期** 遺物が少なく明確ではないが、SI3との重複関係から、10C後半以降としておく。

## ・SI3〔第4図〕

**位置と検出状況** A-2グリッド、トレンチの北側に位置する。調査範囲では南壁を確認したが、重複するSI2に北側を壊されていた。規模は不明であるが、南北約2.3m、確認面からの深さは約30cmを測った。検出した範囲ではカマド施設はなく、ピット1基を検出し、長径40cm、短径23cmを測った。**出土遺物** 土師器環(6～8)、金属製品(9)があり、7・8はPitから出土した。9は銅製の板状製品で、塗金が見られる。X線による分析では、鋳造物にしては素が少なく、鍛造された可能性も窺えるものの、明確ではなかった。**遺構の時期** 出土遺物から、10C後半頃としておく。

## ・SK1〔第5図〕

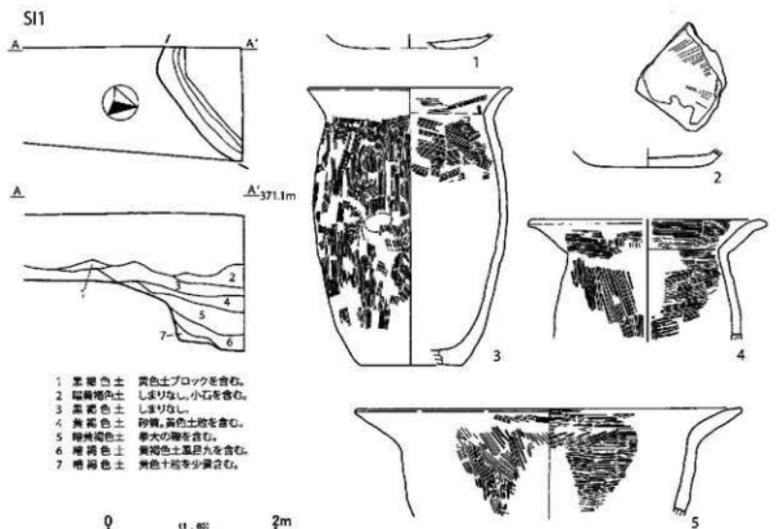
**位置と検出状況** A-3グリッド、トレンチ中央よりやや南に位置する。確認範囲では、南北約2.5m、確認面からの深さは約80cmを測る。遺物は少なく、金属製品・釘(10)が出土した。**遺構の時期** 出土遺物が少なく、については不明である。

## ・SK2〔第5図〕

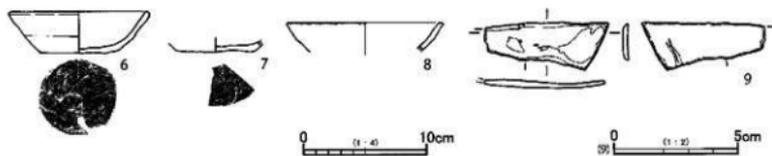
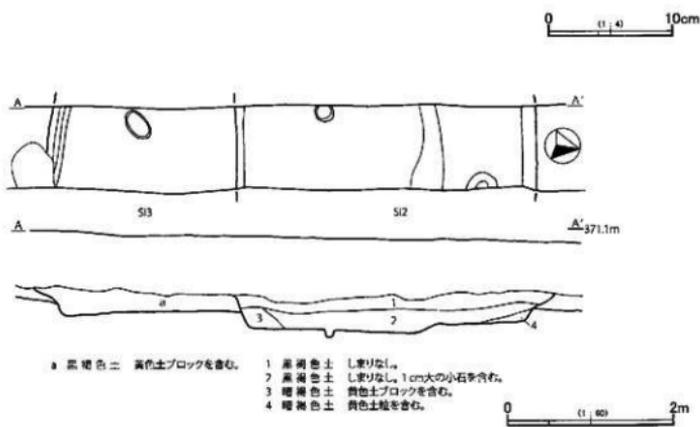
**位置と検出状況** A-2グリッド、トレンチ中央よりやや北に位置する。不整形で径は約1m、確認面からの掘り込みは明確ではなく、深さは約5cmであった。礫が集積していたが性格は不明である。**遺構の時期** 出土遺物がなく不明である。

## ・Pit1〔第5図〕

**位置と検出状況** A-3グリッド、SK1の南に位置する。平面形は長径80cm、短径70cmの楕円を呈している。確認面からの深さは、約40cmを測る。内部底には平台が据えてあり、なんらかの柱穴であった可能性が考えられる。**遺構の時期** 出土遺物がなく、不明である。

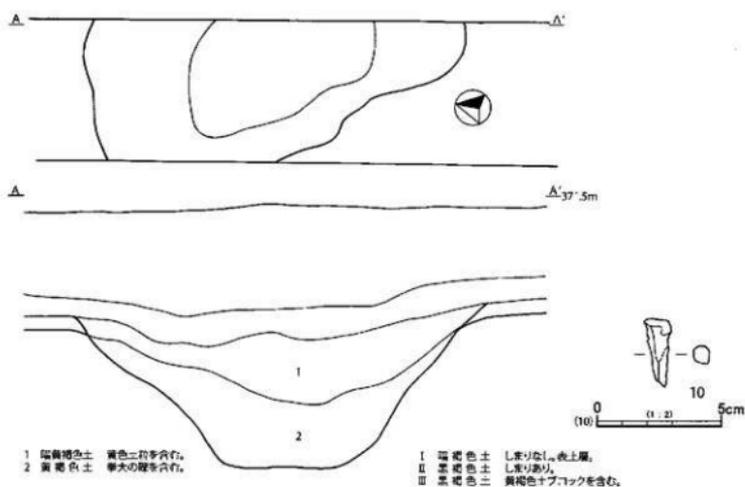


S12-3

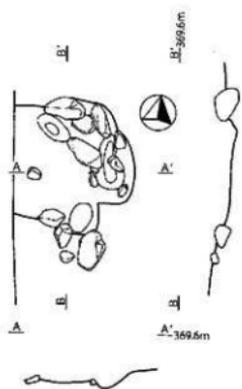


第4図 S11・2・3

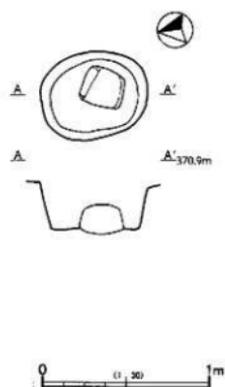
SK1



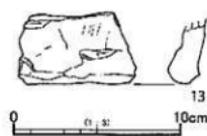
SK2



Pit1



遺構外



第5図 SK・Pitおよび遺構外出土遺物

表1 石動遺跡南西興業地区 遺物観察表

図番	図種	図例	図種	1層 (cm) 器高 (cm) 器径 (cm)	器底	胎土	意形技法	色調	備考
4-1	SK1	土師器	杯	(10.0)	良	黒・赤・白・黒・金	(9) ヘラ削り (10) ロクロナデ (8) ヘラ削り、磨止糸取り瓦	浅黄褐色	全体的に実化 内面磨利、磨痕少 底灰付
4-2	SK1	土師器	杯	(10.0)	良	黒・赤・白・黒・金	(9) ヘラ削り、ミガキ (10) ロクロナデ、砥文 (8) ヘラ削り、ミガキ	褐色	黒灰あり 底灰付
4-3	SK1	土師器	甕	(16.1)	良	黒・赤・白・金	(9) ハケム、ナデ (10) ハケム (8) 木器刷	にじみ赤褐色	内面及び内面口縁が やや黒化
4-4	SK1	土師器	甕	(19.2)	良	黒・赤・白・金	(9) ハケム (10) ハケム	赤色	
4-5	SK1	土師器	甕	(31.2)	良	黒・赤・白・金	(9) ハケム、磨利 (10) ハケム	赤褐色	
4-6	SK2-3	土師器	杯	11.5 3.4 6.3	良	黒・赤・白・金	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (8) 磨利糸取り、スノコ状瓦	褐色	蓋み入 磨利あり 内面が割けている
4-7	SK3 P1	土師器	杯	(16.2)	良	黒・赤・白・金	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (8) 磨利糸取り、磨利	褐色	
4-8	SK3 P1	土師器	杯	(12.8)	良	黒・赤・白・金	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ	褐色	黒灰あり
4-11	IT1	土師器	杯	(5.8)	良	黒・赤・白・金	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ (8) 磨利糸取り	褐色	内・外面がやや割けている
4-12	IT1	土師器	杯	-	良	黒・赤・白・黒	(9) ロクロナデ (10) ロクロナデ	灰白色	
4-13	IT1	土師器	扁形土器	-	良	黒・赤・白・金	(9) ナデ、磨利 (10) ナデ	赤褐色	

表2 石動遺跡南西興業地区 金属製品観察表

図番	図種	種類	重量 (g)	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	材質	備考
4-9	SK2	不詳	9.65	2.0	5.0	0.2	銅	φスネック 水筒の一部分
4-10	SK1	釘	2.47	2.0	1.0	0.7	鉄	

## 3. まとめ

遺物については、調査範囲が狭小であったこともあり、全体的に出土量が少なく、ほとんどが土師器・須恵器などの小片であった。

(望月)



SI1 北から



SI1 東から



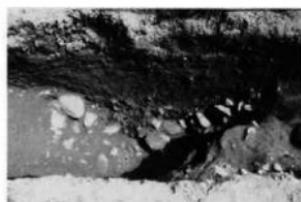
SI2-3 南から



SI2 南から



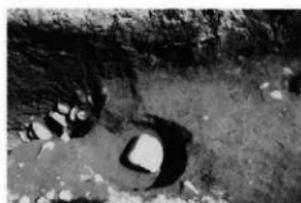
SK1 北から



SK1 西から



SK2 西から



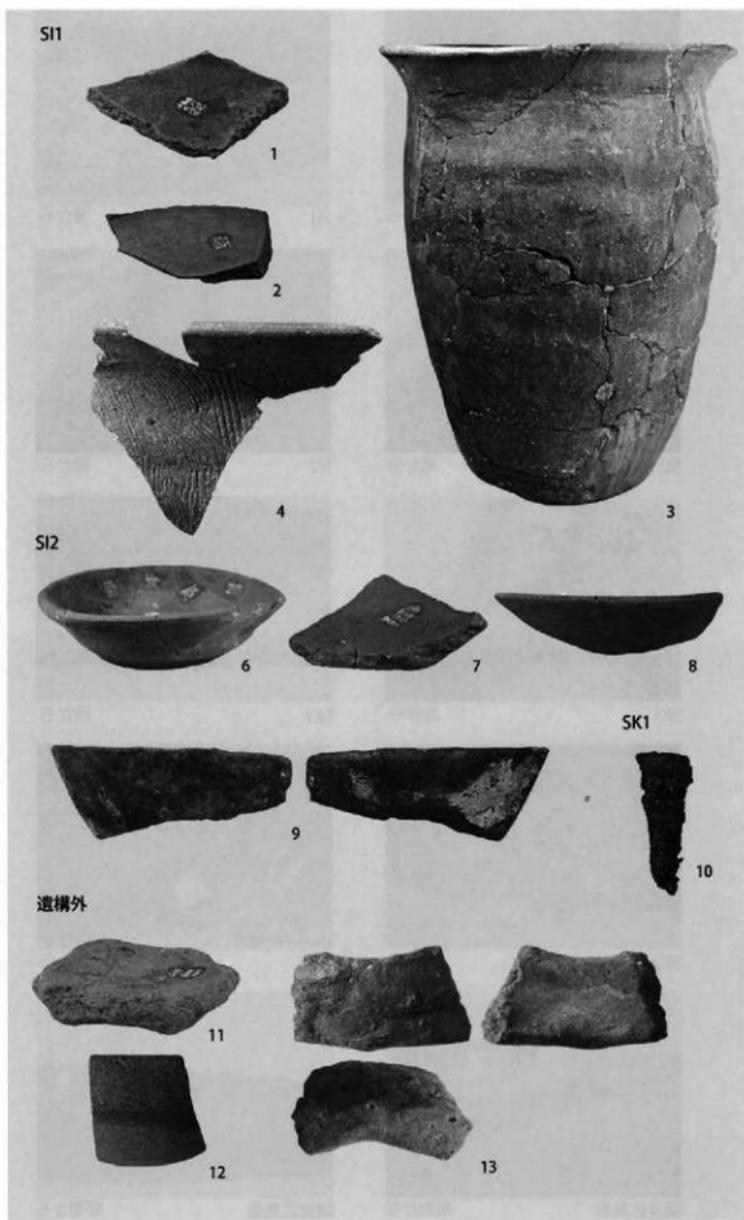
Pit1 西から



調査区風景 南西から



調査区風景 南東から



## 報告書抄録

ふりがな	くるまじどういせき・いするぎいせき・きたなかはらいせき・なかあらいいせき							
書名	車地蔵遺跡・石動遺跡・北中原遺跡・車地蔵遺跡・中新居遺跡							
副書名	一宮町末木地区畑総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名	笛吹市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 11 集							
編者名	瀬口正明・野崎進・望月秀和							
編集機関	笛吹市教育委員会							
所在地	〒 406 - 0031 山梨県笛吹市石和町市部 809 - 1 Tel. 055-261-3342							
発行年月日	2010 年 3 月 30 日							
所収遺跡名	所在地	コード		国家座標		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
石動遺跡	山梨県笛吹市 一宮町末木 字 石動	(19201)	一宮 47	35 度 38 分 53 秒	138 度 41 分 49 秒			農道建設 工事
北中原遺跡	山梨県笛吹市 一宮町塩田 字 北中原	(19201)	一宮 119	35 度 38 分 41 秒	138 度 41 分 48 秒			
車地蔵遺跡	山梨県笛吹市 一宮町末木 字 車地蔵	(19201)	一宮 48	35 度 38 分 41 秒				
中新居遺跡	山梨県笛吹市 一宮町末木 字 中新居	(19201)	一宮 52					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
車地蔵遺跡	集落跡	奈良～中世	住居跡・土坑・ 道路跡	土師器 灰釉陶器 瓦				
石動遺跡	集落跡	奈良～中世	住居跡・土坑・ 溝・道路跡	土師器 灰釉陶器				
北中原遺跡	集落跡・ 生産遺跡	平安時代～中世	住居跡・土坑・ 鋳造遺構・溝	土師器 如歌 銚型 輪羽口				
中新居遺跡	集落跡	平安時代	集石	土師器				

笛吹市文化財調査報告書 第11集

石動遺跡・北中原遺跡・車地藏遺跡・中新居遺跡

発行日 2010年3月30日

編集・発行 笛吹市教育委員会

印刷 相互印刷株式会社

**The Report of  
Archaeological Research of KURUMAJIZO,  
ISURUGI, KITANAKAHARA and NAKAARAI Sites**

Archaeological Surveys prior to the Prefecture-run Integrated Rural  
Improvement of SUEKI region Ichinomiya

March, 2010

Agricultural Department, Yamanashi Prefecture  
Development Office of Kyoto Area  
Fuefuki City Board Education